

# 2023年度（第72回）学生生活実態調査結果報告書

東京大学学生委員会

学生生活調査WG

## 目次

|              |   |
|--------------|---|
| 2023 年度調査の概要 | 1 |
| 実施状況一覧       | 2 |
| 回収状況一覧       | 4 |
| 留学生対象版調査概要   | 6 |

### 【学部学生】

|                              |    |
|------------------------------|----|
| I. 基本的事項（回答者の特性）             | 7  |
| 1. 性別                        | 7  |
| 2. 入学時の科類                    | 7  |
| 3. 現在の所属                     | 8  |
| 4. 現在の学年                     | 9  |
| 5. 出身校                       | 9  |
| 6. 入学時の同高校出身者                | 10 |
| 7. 現役・浪人等                    | 10 |
| II. 入学・進学・学業                 | 11 |
| 8. 東大受験時の入学希望度               | 11 |
| 9. 入学の動機                     | 12 |
| 10. 進学の決定（内定）                | 15 |
| 11. 卒業後の進路                   | 17 |
| 12. 大学院進学理由                  | 21 |
| 「II. 入学・進学・学業」の分析（まとめ）       | 23 |
| III. 就職                      | 24 |
| 13. 就職希望職種                   | 24 |
| 14. 就職希望職種選択理由               | 28 |
| 「III. 就職」の分析（まとめ）            | 30 |
| IV. 不安・悩み                    | 31 |
| 15. 不安・悩みの程度                 | 31 |
| 16. 悩みの相談相手                  | 33 |
| 17. メンタルヘルスの状態               | 35 |
| 「IV. 不安・悩み」の分析（まとめ）          | 37 |
| V. 新型コロナウイルス感染症の影響           | 38 |
| 18. 活動制限による影響                | 38 |
| 「V. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析（まとめ） | 41 |

|                       |    |
|-----------------------|----|
| VI. 大学への要望            | 42 |
| 19. 大学への要望・期待         | 42 |
| 「VI. 大学への要望」の分析（まとめ）  | 44 |
| VII. 生活費の状況           | 45 |
| 20. 収入・支出             | 45 |
| 21. 授業料負担             | 50 |
| 「VII. 生活費の状況」の分析（まとめ） | 51 |
| VIII. 通学・住居           | 52 |
| 22. 居住地               | 52 |
| 23. 居住形態（自宅／自宅外）      | 53 |
| 24. 居住形態（自宅外選択者への設問）  | 54 |
| 「VIII. 通学・住居」の分析（まとめ） | 55 |
| IX. 奨学金               | 56 |
| 25. 奨学金受給の有無          | 56 |
| 26. 奨学金の役立て方          | 57 |
| 27. 奨学金不受給理由          | 59 |
| 「IX. 奨学金」の分析（まとめ）     | 60 |
| X. アルバイト              | 61 |
| 28. 過去1年間のアルバイト実施状況   | 61 |
| 29. アルバイトの種類          | 63 |
| 30. アルバイトの時間          | 64 |
| 31. アルバイトの目的          | 65 |
| 32. 現在の暮らし向き          | 67 |
| 「X. アルバイト」の分析（まとめ）    | 69 |
| XI. 家庭の状況             | 70 |
| 33. 高校時代の居住地          | 70 |
| 34. 家族構成              | 72 |
| 35. 生計維持者             | 73 |
| 36. 父親の職業             | 74 |
| 37. 母親の職業             | 75 |
| 38. 父親の最終学歴           | 77 |
| 39. 母親の最終学歴           | 78 |
| 40. 世帯収入              | 80 |
| 「XI. 家庭の状況」の分析（まとめ）   | 83 |

## 【大学院学生】

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| I. 基本的事項（回答者の特性）         | 84  |
| 1. 課程                    | 84  |
| 2. 学年                    | 84  |
| 3. 所属研究科                 | 85  |
| 4. キャンパス                 | 86  |
| 5. 性別                    | 86  |
| 6. 年齢                    | 87  |
| 7. 社会人経験                 | 87  |
| II. 大学院入学の目的             | 89  |
| 8. 入学目的                  | 89  |
| 9. 入学理由                  | 91  |
| 「II. 大学院入学の目的」の分析（まとめ）   | 93  |
| III. 学会参加・研究活動           | 94  |
| 10. 所属学会                 | 94  |
| 11. 学会参加・発表              | 95  |
| 12. 研究成果満足度              | 97  |
| 13. 研究活動に関する不満等          | 98  |
| 14. 研究室満足度               | 100 |
| 15. 研究室スペース              | 104 |
| 16. 研究室机                 | 105 |
| 17. 研究費自己負担額             | 106 |
| 18. 研究平均時間               | 110 |
| 「III. 学会参加・研究活動」の分析（まとめ） | 111 |
| IV. 就職                   | 112 |
| 19. 課程                   | 112 |
| 20. 修了後の進路予定（修士課程）       | 113 |
| 21. 修了後の決定進路（修士課程）       | 114 |
| 22. 修了後の希望進路（修士課程）       | 115 |
| 23. 修了後の進路予定（専門職学位課程）    | 116 |
| 24. 修了後の決定進路（専門職学位課程）    | 117 |
| 25. 修了後の希望進路（専門職学位課程）    | 118 |
| 26. 修了後の進路予定（博士課程）       | 119 |
| 27. 修了後の決定進路（博士課程）       | 120 |
| 28. 修了後の希望進路（博士課程）       | 121 |
| 29. 教育職・研究職就職            | 122 |
| 30. 希望する就職先              | 123 |
| 31. 就職見通し                | 127 |

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| 3 2. 就職情報                      | 128 |
| 「IV. 就職」の分析 (まとめ)              | 129 |
| <b>V. 不安・悩み</b>                | 130 |
| 3 3. 不安・悩みの程度                  | 130 |
| 3 4. 悩みの相談相手                   | 132 |
| 3 5. メンタルヘルスの状態                | 134 |
| 「V. 不安・悩み」の分析 (まとめ)            | 136 |
| <b>VI. 新型コロナウイルス感染症の影響</b>     | 137 |
| 3 6. 研究への影響                    | 137 |
| 3 7. 生活への影響                    | 139 |
| 「VI. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析 (まとめ) | 141 |
| <b>VII. 大学への要望</b>             | 142 |
| 3 8. 要望や期待すること                 | 142 |
| 「VII. 大学への要望」の分析 (まとめ)         | 144 |
| <b>VIII. 家庭の状況</b>             | 145 |
| 3 9. 生計維持者                     | 145 |
| 4 0. 家族・本人の年間税込み収入             | 146 |
| 4 1. 親・本人の職業                   | 150 |
| 「VIII. 家庭の状況」の分析 (まとめ)         | 152 |
| <b>IX. 生活費の状況</b>              | 153 |
| 4 2. 収入・支出                     | 153 |
| 「IX. 生活費の状況」の分析 (まとめ)          | 157 |
| <b>X. 研究奨励金及び奨学金</b>           | 158 |
| 4 3. 学内外研究費等支援の受給状況            | 158 |
| 4 4. 奨学的資金 (学外) の受給状況          | 161 |
| 4 5. 経済的支援の状況                  | 162 |
| 「X. 研究奨励金及び奨学金」の分析 (まとめ)       | 164 |
| <b>XI. アルバイト・暮らし向き</b>         | 165 |
| 4 6. アルバイトの目的                  | 165 |
| 4 7. アルバイトと勉学の関係               | 166 |
| 4 8. 現在の暮らし向き                  | 168 |
| 「XI. アルバイト・暮らし向き」の分析 (まとめ)     | 169 |
| <b>総合分析</b>                    | 170 |

## 調査の概要

### 1. 調査票の作成

2023（令和5）年9月に学生委員会学生生活調査WGで調査内容の検討を行った。

### 2. 調査の期間

2023年11月24日～2024年1月8日

### 3. 調査の対象及び抽出率

学部学生及び大学院学生。基本調査、留学生を対象とする調査ともに悉皆調査。

### 4. 調査の方法

基本調査、留学生を対象とする調査ともにオンライン調査。

### 5. 調査の内容

（学部学生）

I. 基本的事項、II. 入学・進学・学業、III. 就職 IV. 不安・悩み、V. 新型コロナウイルス感染症の影響、VI. 大学への要望、VII. 生活費の状況、VIII. 通学・住居、IX. 奨学金、X. アルバイト、XI. 家庭の状況、XII. 具体的記述

（大学院学生）

I. 基本的事項、II. 大学院入学の目的、III. 学会参加・研究活動 IV. 就職、V. 不安・悩み、VI. 新型コロナウイルス感染症の影響、VII. 大学への要望、VIII. 家庭の状況、IX. 生活費の状況、X. 研究奨励金及び奨学金、XI. アルバイト・暮らし向き、XII. 具体的記述

## 報告について

1. 学部学生及び大学院学生を対象に調査を行った。基本調査と留学生調査は別に実施し、特に比較が意味を持つと思われる項目について、両者の比較分析を行った。集計結果の分析に当たっては、部局間・年度間・男女間などの相違に注目し、特異な数値傾向の把握に努めた。
2. 「学生生活実態調査結果報告書」については、調査票、単純集計表、及びクロス集計表を省略した。省略した集計表等については、ホームページに別ファイルとして掲載した。
3. 2009年度までは、2分の1程度の具体的記述を原文のまま報告書に記載していたが、個人が特定できる可能性があること、さらに、報告書掲載の基準が恣意的になりやすいこともあり、2009年調査より具体的記述は報告書に掲載しないこととした。ただ、このことは具体的記述の軽視を意味しているわけではなく、それぞれの具体的記述は学生委員会学生生活調査WGや全学会議において共有され、大学の施策の改善に役立てられている。
4. 複数回答の設問については、回答者数（非該当及び無回答を除く）を分母にして百分率（パーセント）を算出している。そのため、パーセントの合計は100%を超える場合がある。

## グラフと表について

1. 本文に掲載した経年変化のグラフと表については、1986年調査まで遡って取り上げた項目がいくつかあり、2ページに1986年以降の学部学生調査、3ページに1958年以降の大学院学生調査の実施状況を表示した。
2. 文中に掲げたグラフと表については、それぞれの年の比較を見やすくするため「無回答」及び「非該当」を除いた比率で作成している。ただし、学部学生調査の時系列の場合には、2007年までは無回答を含んでいる。また、個々の数値を四捨五入しているため、合計が100%に満たないものと100%を超えるものがある。
3. 複数回答の設問については、回答者数（非該当及び無回答を除く）を分母にして百分率（パーセント）を算出している。そのため、パーセントの合計は100%を超える場合がある。
4. 平均値の算出は、非該当及び無回答のものを除く該当者平均を求めた。
5. 作表の説明変数として用いた用語の定義は、次のとおりである。

「全体」……………回答者全員の比率を示す。

「文科系」「理科系」……………在籍する部局により二つの系に区分したものを示す。

「本郷」「駒場」「弥生」………学生が主に通学するキャンパスを示す。

## 学生生活実態調査実施状況一覧（学部学生）

| 回数   | 調査年月     | 対象学生    | 抽出率      | 対象者数   | 回収率  | 調査方法       |
|------|----------|---------|----------|--------|------|------------|
|      |          |         |          | 人      | %    |            |
| 第36回 | 1986年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,385  | 72.6 | 郵送自記式      |
| 第37回 | 1987年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,432  | 73.9 | 郵送自記式      |
| 第38回 | 1988年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,459  | 70.9 | 郵送自記式      |
| 第39回 | 1989年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,480  | 78.5 | 郵送自記式      |
| 第40回 | 1990年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,504  | 63.1 | 郵送自記式      |
| 第41回 | 1991年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,530  | 62.2 | 郵送自記式      |
| 第43回 | 1993年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／10 | 1,593  | 64.8 | 郵送自記式      |
| 第44回 | 1994年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 2,005  | 60.6 | 郵送自記式      |
| 第45回 | 1995年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 2,011  | 64.0 | 郵送自記式      |
| 第46回 | 1996年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 2,004  | 60.9 | 郵送自記式      |
| 第47回 | 1997年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 1,990  | 60.2 | 郵送自記式      |
| 第48回 | 1998年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 1,964  | 60.3 | 郵送自記式      |
| 第50回 | 2000年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 1,917  | 54.4 | 郵送自記式      |
| 第51回 | 2001年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／8  | 1,900  | 49.6 | 郵送自記式      |
| 第52回 | 2002年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,749  | 37.2 | 郵送自記式      |
| 第53回 | 2003年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,700  | 40.6 | 郵送自記式      |
| 第55回 | 2005年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,534  | 38.7 | 郵送自記式      |
| 第56回 | 2006年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,455  | 32.8 | 郵送自記式      |
| 第57回 | 2007年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,406  | 43.0 | 郵送自記式      |
| 第58回 | 2008年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,506  | 45.2 | 郵送自記式      |
| 第60回 | 2010年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,419  | 42.6 | 郵送自記式      |
| 第62回 | 2012年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,346  | 45.3 | 郵送自記式      |
| 第64回 | 2014年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,337  | 44.0 | 郵送自記式      |
| 第66回 | 2016年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,325  | 36.6 | 郵送自記式      |
| 第68回 | 2018年11月 | 学部男子・女子 | 男・女 1／4  | 3,359  | 35.9 | 郵送自記式      |
| 第70回 | 2021年 3月 | 学部男子・女子 | 悉皆（全数）調査 | 13,394 | 12.6 | Web(オンライン) |
| 第71回 | 2022年 1月 | 学部男子・女子 | 悉皆（全数）調査 | 13,295 | 11.4 | Web(オンライン) |
| 第72回 | 2023年11月 | 学部男子・女子 | 悉皆（全数）調査 | 13,247 | 10.8 | Web(オンライン) |

（注）「休学者」「外国人留学生」は、対象学生から除かれている。1992年調査は「外国人留学生」を含む

学生生活実態調査実施状況一覧（大学院学生）

| 回数   | 調査年月     | 対象学生             | 抽出率                               | 対象者数     | 回収率       | 調査方法              |
|------|----------|------------------|-----------------------------------|----------|-----------|-------------------|
| 第9回  | 1958年12月 | 課程在籍者            | 男子 1/5<br>女子 1/5                  | 人<br>248 | %<br>95.6 | 面接調査<br>(一部郵送)    |
| 第11回 | 1960年11月 | 課程在籍者<br>+ 留年者   | 男子 1/3<br>女子 全数<br>留年者 全数         | 785      | 85.2      | 面接調査<br>(一部郵送)    |
| 第17回 | 1966年12月 | 課程在籍者            | 全 数                               | 3,002    | 48.7      | 研究科窓口配布<br>(一部郵送) |
| 第28回 | 1978年12月 | 課程在籍者            | 男子 1/4<br>女子 全数                   | 1,177    | 66.2      | 郵送自記式             |
| 第35回 | 1985年11月 | 課程在籍者<br>+ OM、OD | 男子 1/2~1/4<br>女子 1/2<br>OM、OD 1/2 | 1,382    | 66.3      | 郵送自記式             |
| 第42回 | 1992年11月 | 課程在籍者            | 男子(文) 1/2<br>男子(理) 1/6<br>女子 1/2  | 1,496    | 59.8      | 郵送自記式             |
| 第49回 | 1999年11月 | 課程在籍者<br>+ OM、OD | 男子・女子 1/4                         | 2,099    | 49.5      | 郵送自記式             |
| 第54回 | 2004年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,539    | 40.6      | 郵送自記式             |
| 第59回 | 2009年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,675    | 49.9      | 郵送自記式             |
| 第61回 | 2011年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,621    | 45.3      | 郵送自記式             |
| 第63回 | 2013年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,295    | 40.2      | 郵送自記式             |
| 第65回 | 2015年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,508    | 43.9      | 郵送自記式             |
| 第67回 | 2017年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,450    | 37.8      | 郵送自記式             |
| 第69回 | 2019年11月 | 課程在籍者            | 男子・女子 1/4                         | 2,386    | 41.6      | 郵送自記式             |
| 第71回 | 2022年1月  | 課程在籍者            | 悉皆（全数）調査                          | 9,415    | 15.5      | Web（オンライン）        |
| 第72回 | 2023年11月 | 課程在籍者            | 悉皆（全数）調査                          | 9,173    | 18.3      | Web（オンライン）        |

注 1) 「OM」はオーバーマスター、「OD」はオーバードクターの略を示す。

2) 「休学者」「外国人留学生」は、対象学生から除かれている。但し、1992年調査は「OM、OD」を除き「外国人留学生」を含む。

## 学生生活実態調査回収状況一覧（学部学生）

| 学部名                 |          | 男子          |            |            | 女子          |            |            | 全体          |            |            |
|---------------------|----------|-------------|------------|------------|-------------|------------|------------|-------------|------------|------------|
|                     |          | 対象者数<br>(人) | 回収数<br>(人) | 回収率<br>(%) | 対象者数<br>(人) | 回収数<br>(人) | 回収率<br>(%) | 対象者数<br>(人) | 回収数<br>(人) | 回収率<br>(%) |
| 前期課程・教養学部           |          | 5,015       | 463        | 9.2%       | 1,358       | 237        | 17.5%      | 6,373       | 713        | 11.2%      |
| 後<br>期<br>課<br>程    | 法学部      | 676         | 42         | 6.2%       | 200         | 22         | 11.0%      | 876         | 64         | 7.3%       |
|                     | 医学部      | 393         | 31         | 7.9%       | 96          | 20         | 20.8%      | 489         | 52         | 10.6%      |
|                     | 工学部      | 1,805       | 163        | 9.0%       | 243         | 32         | 13.2%      | 2,048       | 196        | 9.6%       |
|                     | 文学部      | 498         | 31         | 6.2%       | 181         | 36         | 19.9%      | 679         | 69         | 10.2%      |
|                     | 理学部      | 559         | 63         | 11.3%      | 77          | 13         | 16.9%      | 636         | 81         | 12.7%      |
|                     | 農学部      | 435         | 39         | 9.0%       | 139         | 35         | 25.2%      | 574         | 76         | 13.2%      |
|                     | 経済学部     | 598         | 37         | 6.2%       | 140         | 18         | 12.9%      | 738         | 55         | 7.5%       |
|                     | 教養学部（後期） | 304         | 41         | 13.5%      | 145         | 22         | 15.2%      | 449         | 65         | 14.5%      |
|                     | 教育学部     | 108         | 12         | 11.1%      | 91          | 18         | 19.8%      | 199         | 33         | 16.6%      |
|                     | 薬学部      | 121         | 13         | 10.7%      | 65          | 11         | 16.9%      | 186         | 24         | 12.9%      |
|                     | 小 計      | 5,497       | 472        | 8.6%       | 1,377       | 227        | 16.5%      | 6,874       | 715        | 10.4%      |
| 合 計                 |          | 10,512      | 935        | 8.9%       | 2,735       | 464        | 17.0%      | 13,247      | 1,428      | 10.8%      |
| 2021年度（第71回）<br>調 査 |          | 10,736      | 1,017      | 11.1%      | 2,559       | 473        | 18.1%      | 13,295      | 1,510      | 11.4%      |

※性別に関して、「その他」の選択者及び無回答者は合わせて21名見られたが、全体の回収数（人）には含めた。

## 学生生活実態調査回収状況一覧（大学院学生）

| 研究科等名          | 修士課程及び専門職学位課程 |     |       |       |     |        | 博士課程  |     |       |      |     |        | 全 体   |       |       |
|----------------|---------------|-----|-------|-------|-----|--------|-------|-----|-------|------|-----|--------|-------|-------|-------|
|                | 男子            |     |       | 女子    |     |        | 男子    |     |       | 女子   |     |        |       |       |       |
|                | 対象者数          | 回収数 | 回収率   | 対象者数  | 回収数 | 回収率    | 対象者数  | 回収数 | 回収率   | 対象者数 | 回収数 | 回収率    | 対象者数  | 回収数   | 回収率   |
|                | 人             | 人   | %     | 人     | 人   | %      | 人     | 人   | %     | 人    | 人   | %      | 人     | 人     | %     |
| 人文社会系研究科       | 152           | 23  | 15.1% | 65    | 26  | 40.0%  | 132   | 24  | 18.2% | 62   | 20  | 32.3%  | 411   | 96    | 23.4% |
| 教育学研究科         | 69            | 17  | 24.6% | 83    | 27  | 32.5%  | 89    | 22  | 24.7% | 77   | 18  | 23.4%  | 318   | 87    | 27.4% |
| 法学政治学研究科       | 297           | 11  | 3.7%  | 154   | 17  | 11.0%  | 32    | 5   | 15.6% | 6    | 0   | 0.0%   | 489   | 34    | 7.0%  |
| 経済学研究科         | 94            | 10  | 10.6% | 19    | 5   | 26.3%  | 44    | 4   | 9.1%  | 5    | 1   | 20.0%  | 162   | 21    | 13.0% |
| 総合文化研究科        | 241           | 39  | 16.2% | 103   | 29  | 28.2%  | 242   | 50  | 20.7% | 100  | 26  | 26.0%  | 686   | 147   | 21.4% |
| 理学系研究科         | 555           | 90  | 16.2% | 101   | 23  | 22.8%  | 401   | 69  | 17.2% | 82   | 27  | 32.9%  | 1,139 | 213   | 18.7% |
| 工学系研究科         | 1,407         | 235 | 16.7% | 216   | 53  | 24.5%  | 513   | 114 | 22.2% | 65   | 32  | 49.2%  | 2,201 | 437   | 19.9% |
| 農学生命科学研究科      | 347           | 44  | 12.7% | 134   | 42  | 31.3%  | 162   | 41  | 25.3% | 60   | 29  | 48.3%  | 703   | 160   | 22.8% |
| 医学系研究科         | 38            | 5   | 13.2% | 63    | 17  | 27.0%  | 457   | 37  | 8.1%  | 229  | 39  | 17.0%  | 827   | 99    | 12.0% |
| 薬学系研究科         | 109           | 15  | 13.8% | 45    | 6   | 13.3%  | 100   | 20  | 20.0% | 33   | 8   | 24.2%  | 287   | 50    | 17.4% |
| 数理科学研究科        | 69            | 14  | 20.3% | 1     | 1   | 100.0% | 59    | 5   | 8.5%  | 2    | 2   | 100.0% | 131   | 24    | 18.3% |
| 新領域創成科学研究科     | 430           | 54  | 12.6% | 128   | 23  | 18.0%  | 224   | 43  | 19.2% | 79   | 20  | 25.3%  | 861   | 143   | 16.6% |
| 情報理工学系研究科      | 396           | 58  | 14.6% | 23    | 3   | 13.0%  | 147   | 18  | 12.2% | 6    | 1   | 16.7%  | 572   | 82    | 14.3% |
| 学際情報学府         | 93            | 14  | 15.1% | 60    | 14  | 23.3%  | 52    | 14  | 26.9% | 30   | 4   | 13.3%  | 235   | 48    | 20.4% |
| 公共政策学教育部       | 74            | 15  | 20.3% | 66    | 13  | 19.7%  | 10    | 2   | 20.0% | 1    | 1   | 100.0% | 151   | 31    | 20.5% |
| 所属不明           |               |     |       |       |     |        |       |     |       |      |     |        |       | 0     |       |
| 合 計            | 4,371         | 644 | 14.7% | 1,261 | 299 | 23.7%  | 2,704 | 468 | 17.3% | 837  | 228 | 27.2%  | 9,173 | 1,672 | 18.2% |
| 2021年度(第71回)調査 | 4,445         | 573 | 12.9% | 1,316 | 271 | 20.6%  | 2,779 | 396 | 14.2% | 875  | 183 | 20.9%  | 9,415 | 1,458 | 15.5% |

※性別に関して、「その他」の選択者及び無回答者は合わせて33名見られたが、全体の回収数（人）には含めた。

## 留学生対象版調査概要

### 調査概要

従来の学生生活実態調査の対象に含まれていなかった、留学生を含む全学生を対象とした調査を行うため、2018年度（第68回）調査から、留学生を対象とした調査を同時に実施している。2023年度（第72回）調査は、学部留学生対象としては4度目、大学院留学生対象としては3度目の実施となる。

質問項目は、基本調査との共通項目と、留学生を対象にした独自項目から構成されるが、本報告においては、共通項目部分について、留学生と国内出身学生との比較を中心に報告を行う。留学生版調査全体については、別途「留学生対象調査報告書」として、学生委員会学生生活調査WGにおいてとりまとめ、報告を行う。

### 実施方法・時期

調査は、日本語・英語併記の調査票を用いてオンライン調査（悉皆調査）として実施した。学生への周知は学務システム（UTAS）上での告知と学部・研究科などを通じて行った。なお、基本調査は、学部学生対象の2020年度（第70回）調査時に郵送調査からオンライン調査に移行しており、72回調査は基本調査と同時期に行った。

### 調査対象・有効回答数

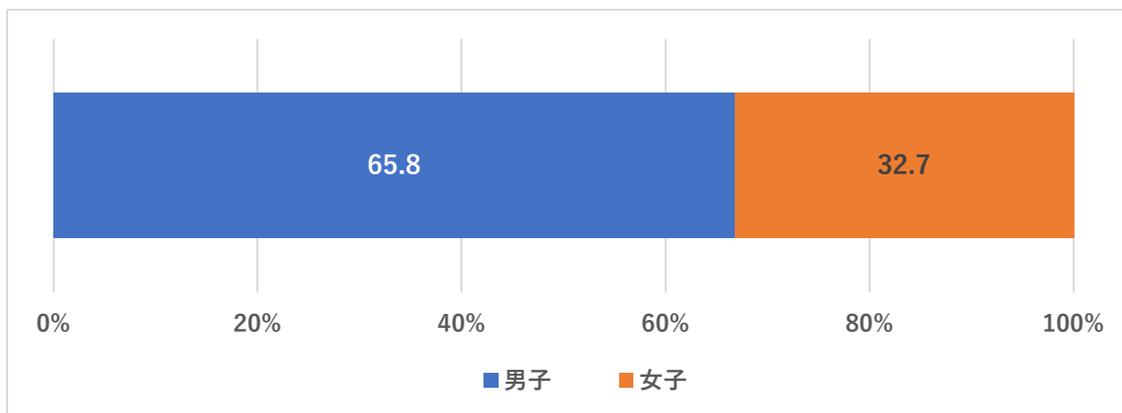
主に「留学」の在留資格を有する、正規課程在籍者（交換留学生・研究生・特別研究生・研究所研究生・特別聴講学生・休学者等を除く）。なお、在留資格「特別永住者」「永住者」「定住者」「日本人・永住者・特別永住者の配偶者」等は、基本調査の対象に含まれる。

調査を実施した2023年11月に在籍した、調査対象学生は学部留学生295名、大学院留学生4,381名であり、有効回答数は、学部留学生79名、大学院留学生1,148名であった。詳細については、「留学生対象調査報告書」を参照のこと。

## 【学部学生】

### I. 基本的事項（回答者の特性）

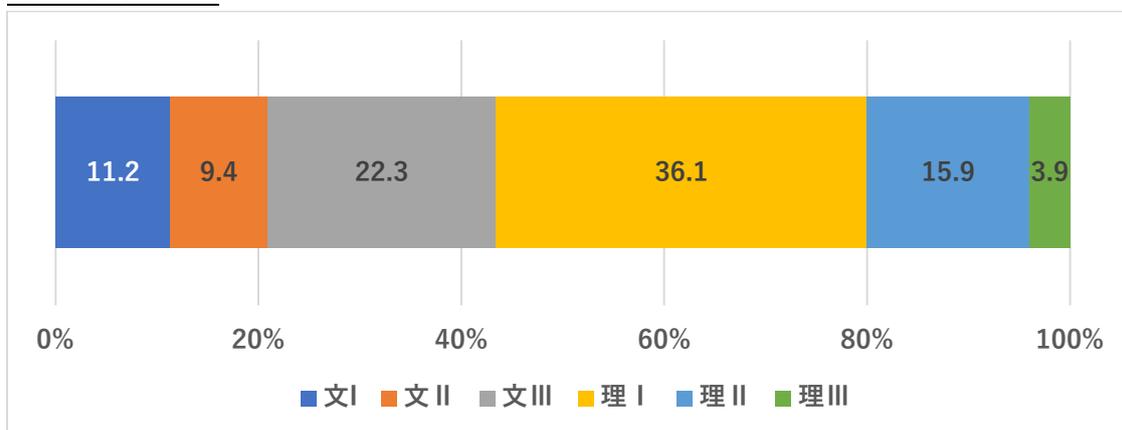
#### 1. 性別



回答者の性別は、男性が 65.8%、女性が 32.7% で在籍者比率（男性 79.0%、女性 21.0%）と比較して、女性回答率が高い。

留学生は、男性（55.7%）、女性（39.2%）、その他・回答しない（5.1%）であり、在籍者中の男女比率（男性 58.3%、女性 41.7%）と比較すると、在籍状況をほぼ反映している。

#### 2. 入学時の科類

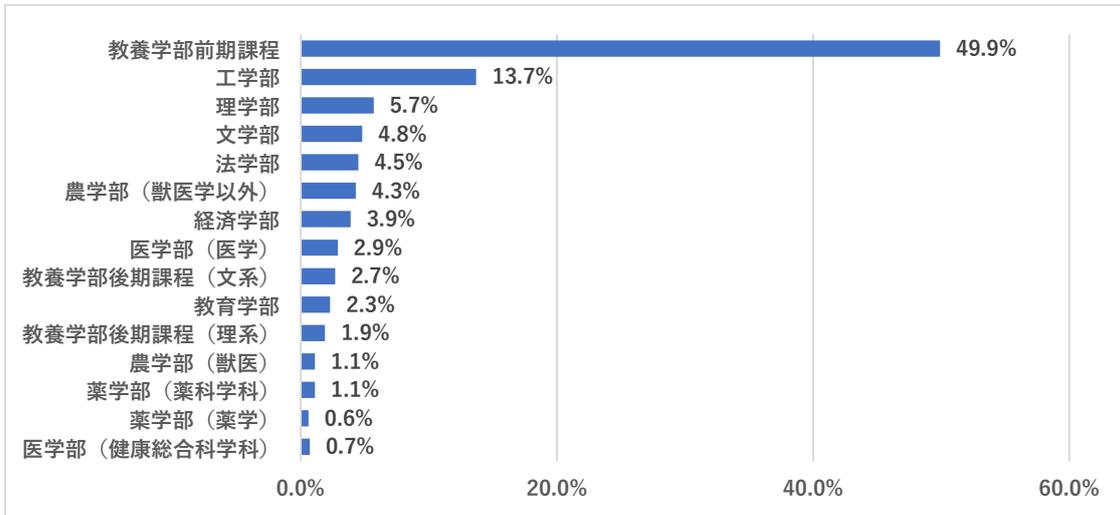


入学時の科類は理 I が最大であるものの、全学の構成比とほぼ等しい。

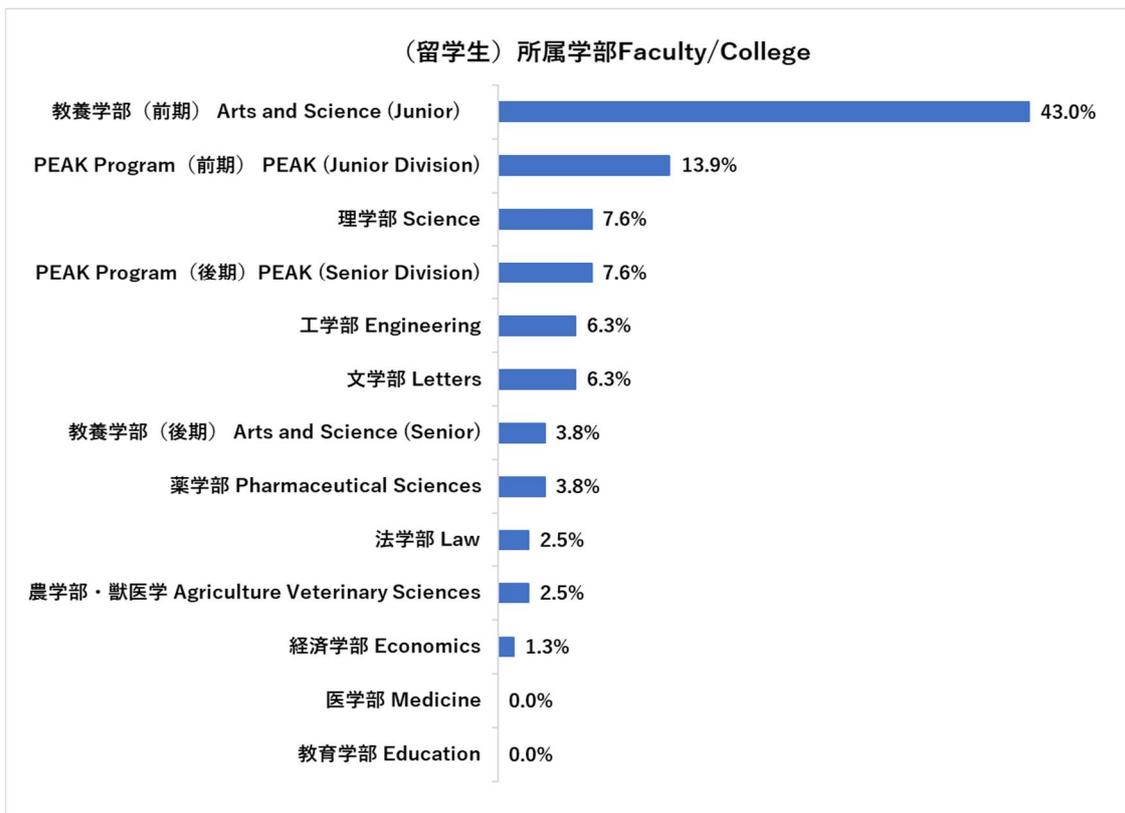
留学生の入学時の科類は、文 I（5.1%）、文 II（10.1%）、文 III（30.4%）、理 I（12.7%）、理 II（34.2%）、理 III（0.0%）であった。また 3 年時からの編入者（7.6%）を含む。

## 【学部学生】

### 3. 現在の所属



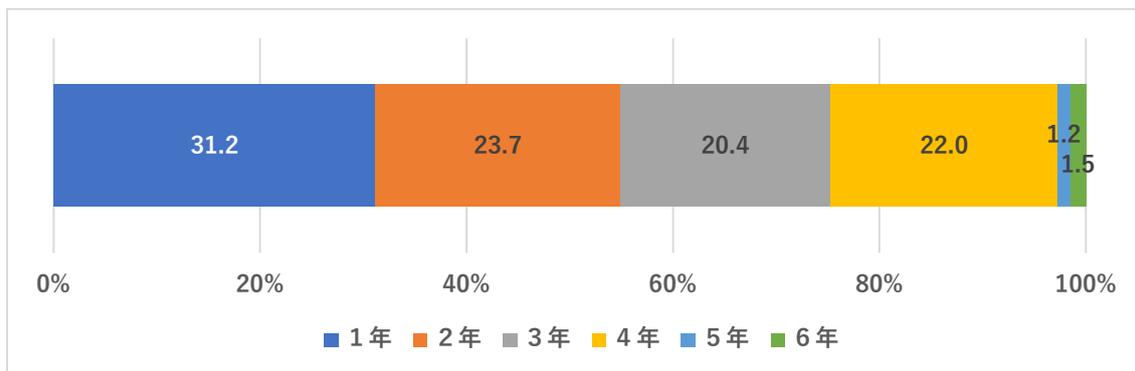
現在の所属は教養学部前期課程が 49.9%で最も多く、次いで、工学部が多い。は 13.7%で、全学構成比より 1.6%ポイント程度少ない。それ以外は全学構成比と概ね等しい。



留學生の現在の所属は、教養学部前期課程（前期課程 43.0%/PEAK 前期 13.9%）でおおよそ半数であった。後期課程在籍者は、理学部と PEAK 後期が 7.6%と最も多く、次いで工学部と文学部の 6.3%と続く。

## 【学部学生】

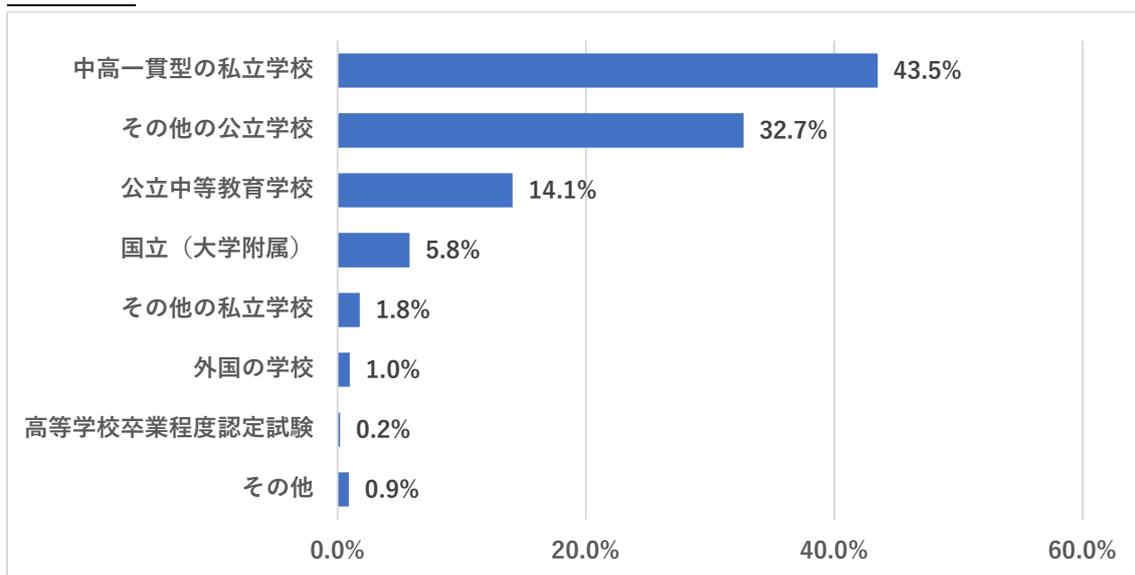
### 4. 現在の学年



1年生の割合は2021年度(第71回)調査(以下、「前回調査」という。)と比べて1.8%ポイント増加し、依然として割合が一番高い学年である。2年生、3年生、4年生の割合はそれぞれ1.2%ポイント減少、1.7%ポイント減少、1.2%ポイントの増加である。

留学生の学年は、1年生29.1%、2年生31.6%、3年生19.0%、4年生17.7%であり、3・4年生の回答が少ない。

### 5. 出身校

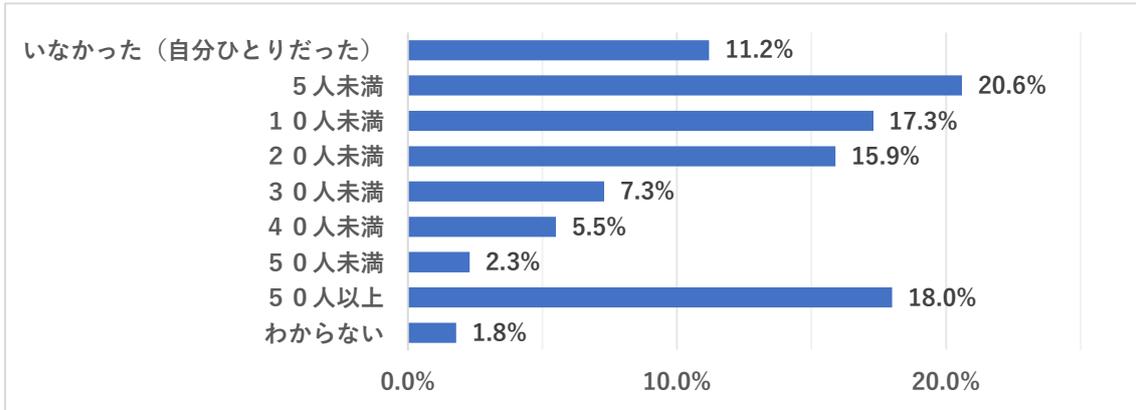


出身校は「中高一貫型の私立学校」が前回調査の44.1%と比べて0.6%ポイント減少した。「公立中等教育学校」は2.6%ポイント増加した。「外国の学校」は前回と同じ。それ以外は全体的に微減しているものの、前回調査と概ね等しい。

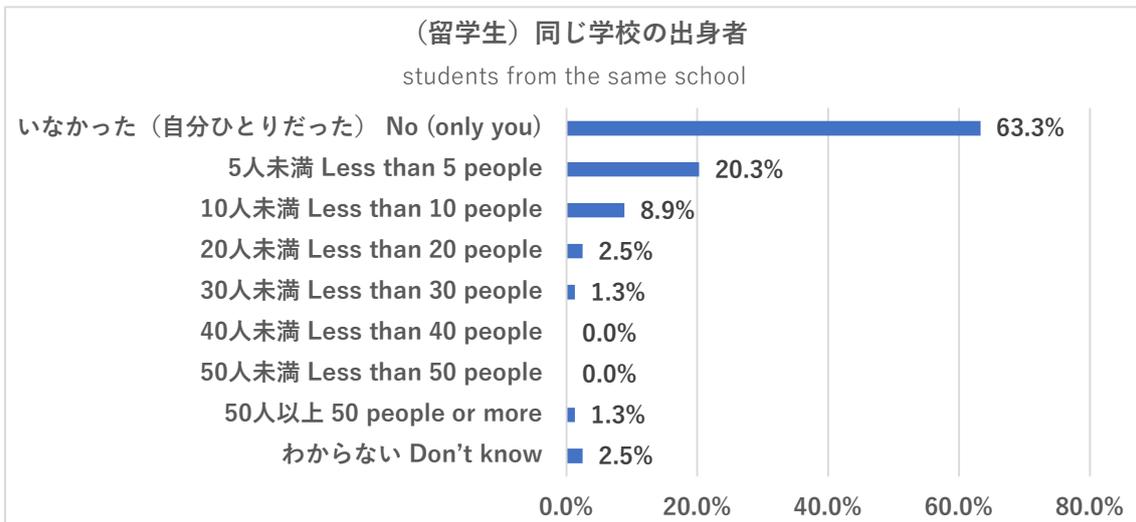
なお、学部留学生は、96.2%は日本国外の高校の出身者であるが、3.8%は日本国内の高校出身者であった。

## 【学部学生】

### 6. 入学時の同高校出身者

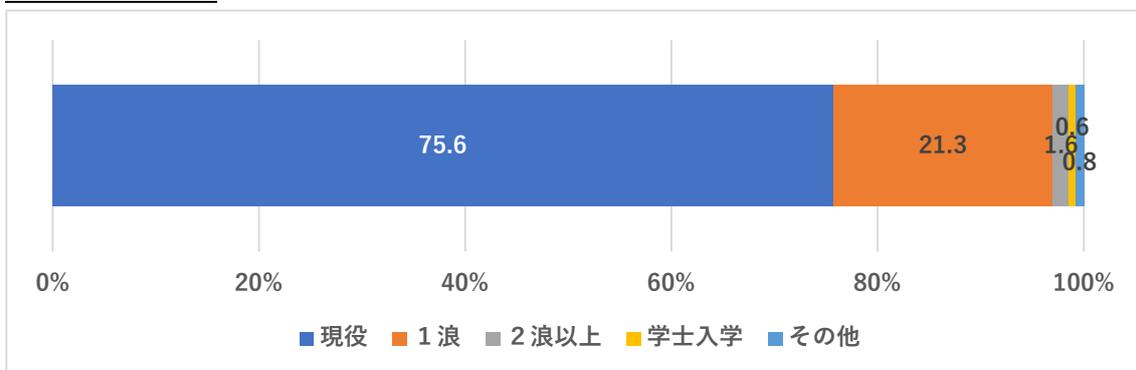


入学時における同じ高校の出身者数については、「5人未満」が20.6%で最も割合が多く、次いで「50人以上」が18.0%、「10人未満」17.3%と続く。



留学生は、「いなかった（自分ひとりだった）」が63.3%と大部分を占めた。

### 7. 現役・浪人等



現役は前回調査の73.3%より2.3%ポイント増加した。1浪は1.7%ポイントの減少である。

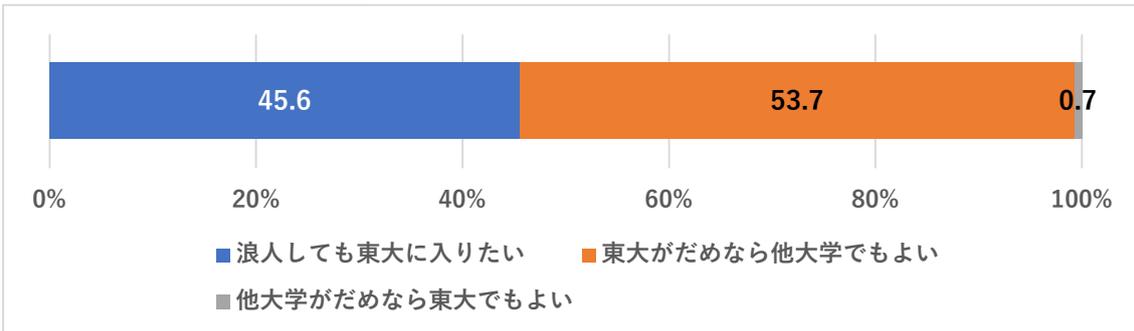
## 【学部学生】

### Ⅱ. 入学・進学・学業

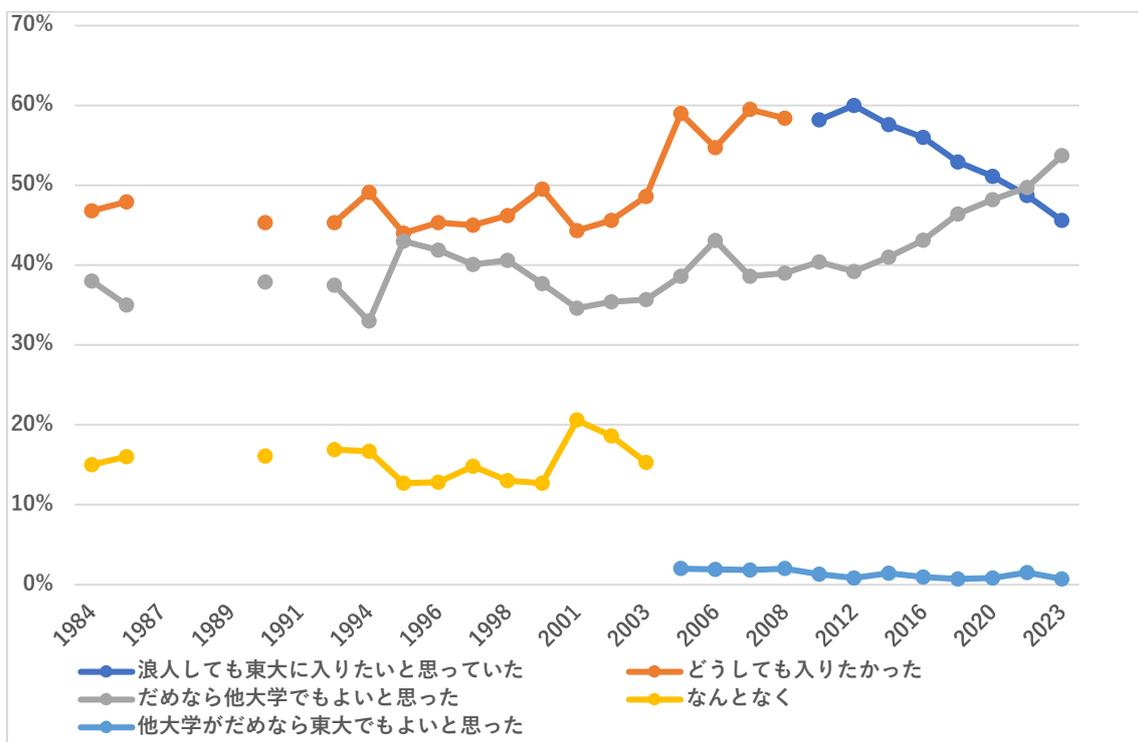
#### 8. 東大受験時の入学希望度

- 「浪人しても東大に入りたい」と「東大がダメなら他大学でもよい」の差が拡大

8. 東大を受験する際に東大に入学することをどの程度希望していましたか。あてはまるものを1つ選んでください。



「東大受験時の入学希望度」の経年変化



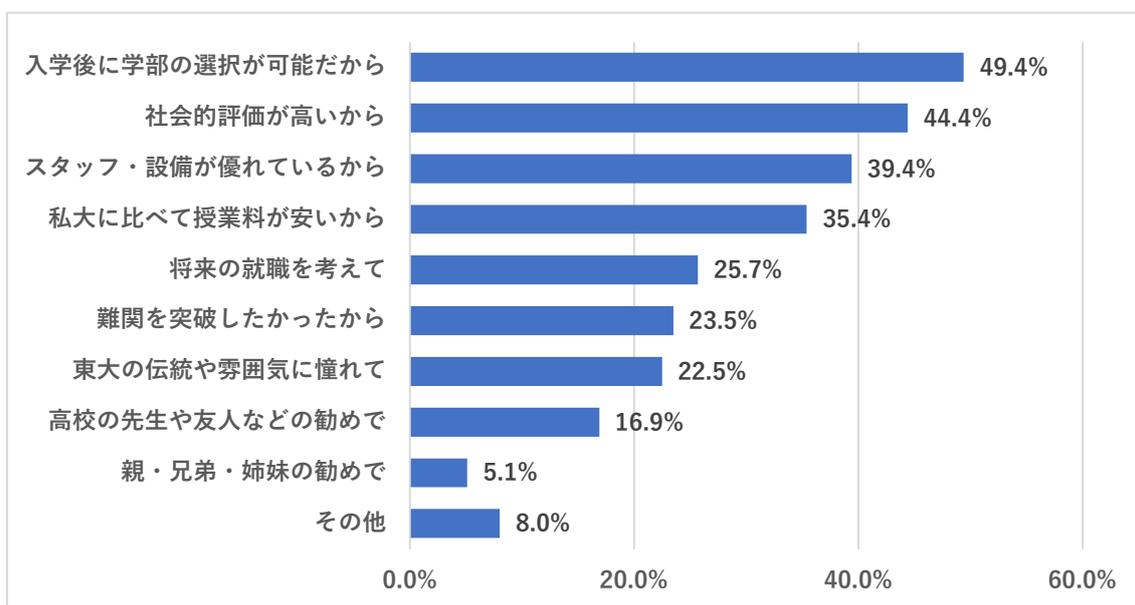
「浪人してでも東大に入りたい」と思っていた層は 45.6%に減少し、前回調査から 3.1%ポイント減少した。対して「東大がダメなら他大学でもよい」は前者を超える 53.7%で、2012年以降増加傾向にあり、今回調査で過半数を超えた。

## 【学部学生】

### 9. 入学の動機

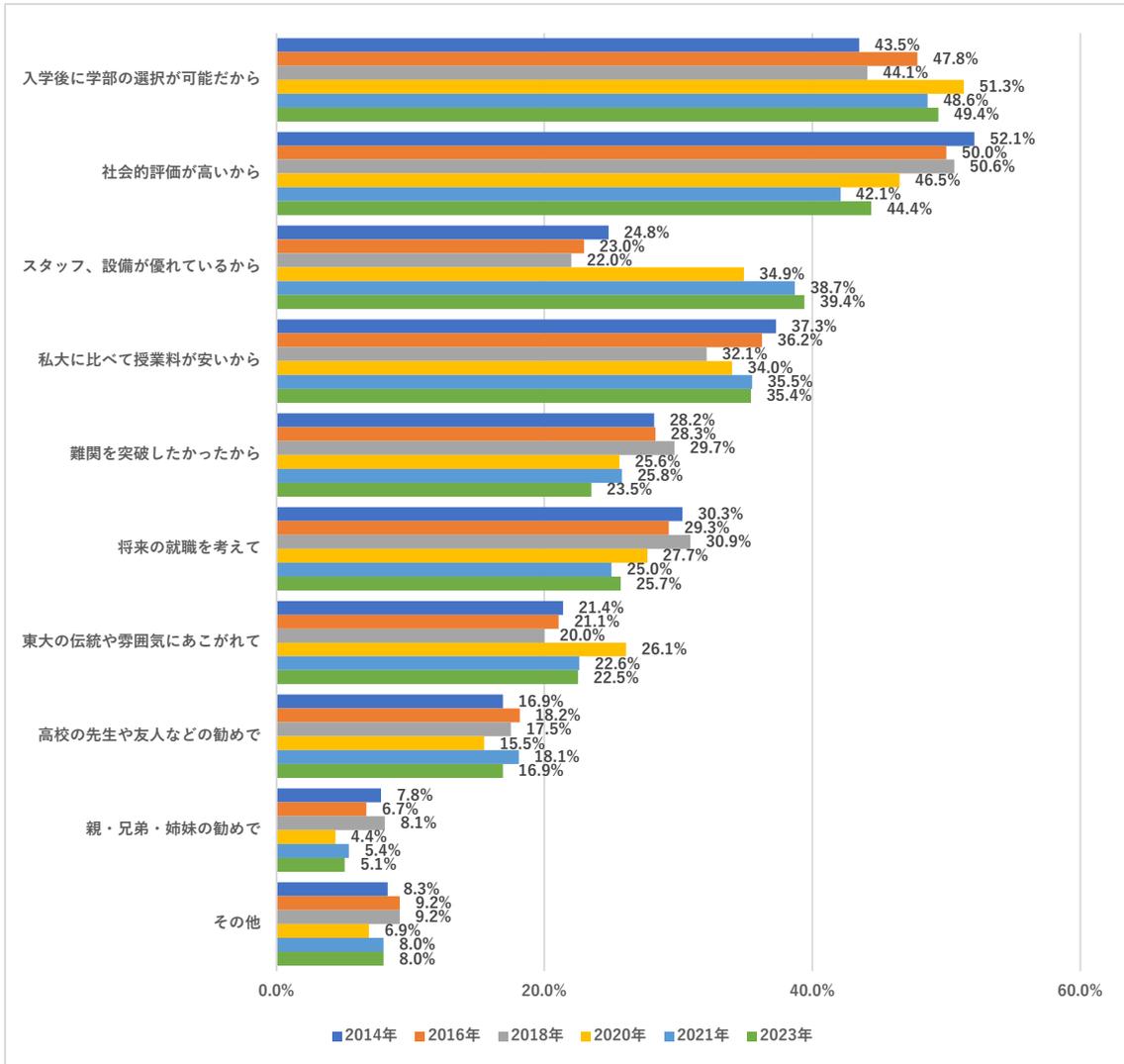
- 入学動機上位3項目「入学後に学部の選択が可能だから」、「社会的評価が高いから」「スタッフ・設備が優れているから」
- 「将来の就職を考えて」という理由は「難関を突破したかったから」と「東大の伝統や雰囲気憧れて」を超えて上位5項目に
- 「社会的評価が高いから」は前回調査と比較して2.3%ポイント程度の増加

9. 東大入学の動機は、どれにあたりますか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。



## 【学部学生】

### 東大入学の動機の経年変化



東大入学の動機は、前回調査の結果と比べて上位4項目の変動がない。「入学後に学部の選択が可能だから」は49.4%で前回調査より0.8%ポイント増加し、依然として最上位の項目である。「社会的評価が高いから」という理由は2014年以降減少傾向にあったものの、前回調査よりも2.3%ポイント増加した44.4%で2番目となる。3番目の「スタッフ・設備が優れているから」は2018年から大きく増えており、今回も前回調査と比較して0.7%ポイント程度の増加である。「私大に比べて授業料が安いから」という理由は2014年~2018年の間は年々減少であったが、2018年からは少しずつ増えて、今回は35.4%で4番目となる。なお、「将来の就職を考えて」という理由は「難関を突破したかったから」と「東大の伝統や雰囲気に憧れて」を超えて上位5項目に入った。

## 【学部学生】



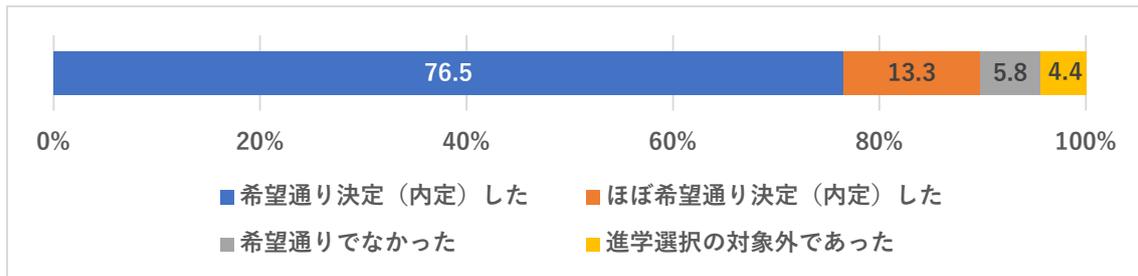
留学生版の選択項目は、国内生版と異なるが、約半数が「知名度の高さ」「世界大学ランキング上位」を選択した。知名度重視の傾向は、これまでの調査結果と重なっている。また13.0%は「入学前に奨学金支給が決定した」ことも、選択理由として挙げている。

## 【学部学生】

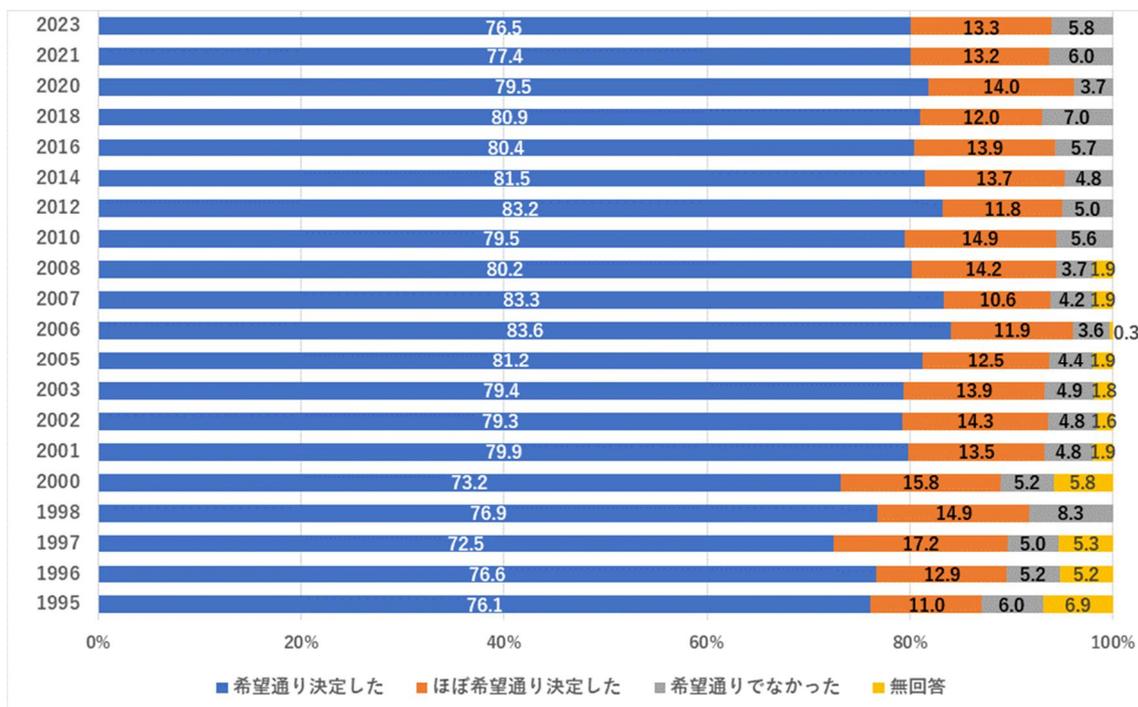
### 10. 進学の内定（内定）

- 「希望通り決定」ないし「ほぼ希望通り決定」は9割程度であるが、2018年以來減少傾向

10. 【進学内定者】及び【後期課程学生】にお伺いします。進学の内定（内定）は、希望通りでしたか。あてはまるものを1つ選んでください。



「進学の内定（内定）」の経年変化



進学の内定は76.5%が「希望通り決定した」で、「ほぼ希望通り決定した」も含めると89.8%となり、前回調査の90.6%より0.8%ポイント減少した。「希望通りでなかった」の回答は5.8%で、前回調査より0.2%ポイント減少した。「進学選択の対象外であった」の回答は4.4%で、前回調査と比べて1%ポイント増加した。目立った時間的変化や傾向はみられず、1995年以降大多数が進学先を「希望通り決定」ないし「ほぼ希望通り決定」している。

留学生は、進学選択の対象外であると回答した者を除いた45名のみについてみる。「希

## 【学部学生】

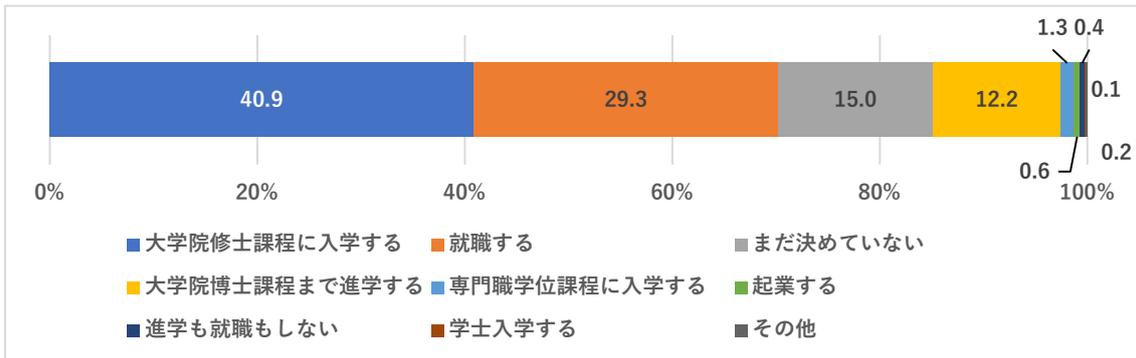
望通り決定（内定）」84.4%、「ほぼ希望通り決定（内定）」8.9%、「希望通りではなかった」6.7%であり、国内生よりも希望通りと回答した学生の割合が高い。

## 【学部学生】

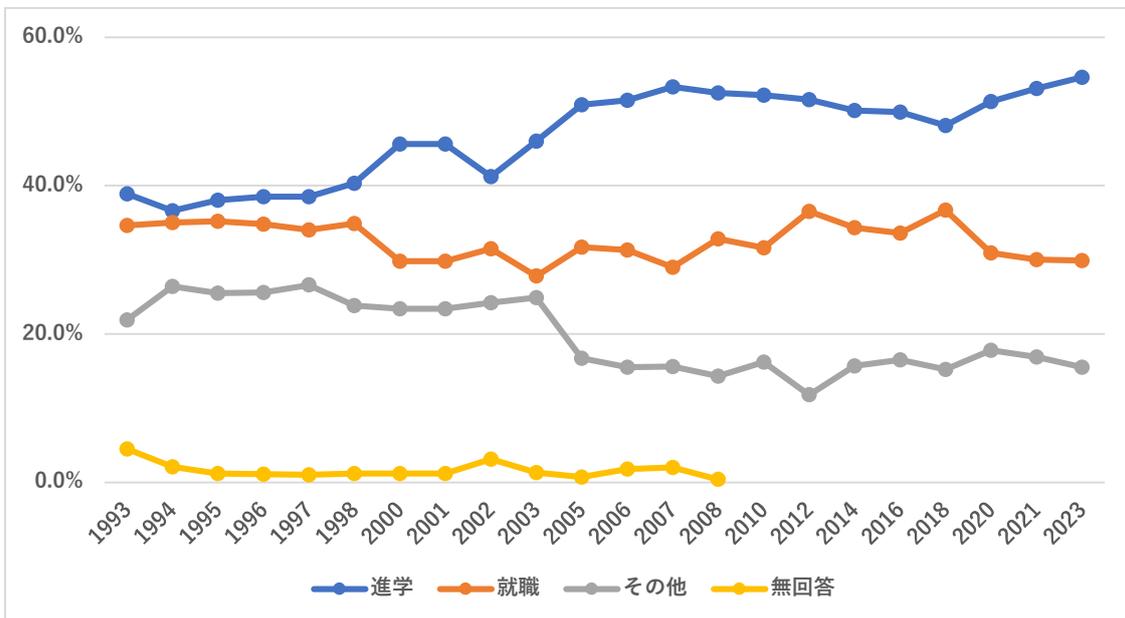
### 11. 卒業後の進路

- 進路上位3項目「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」
- 進学と就職の差が拡大
- 進学はピークであった2007年の数値を超過した

11. あなたは、学部卒業後は、どのような進路を予定していますか。あてはまるものを1つ選んでください。



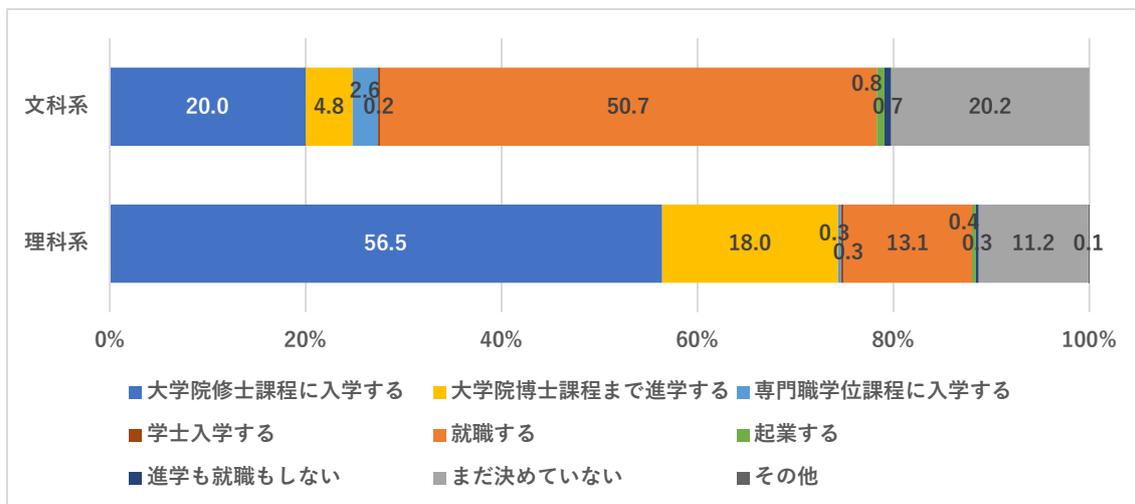
#### 進路予定の経年変化



卒業後の進路上位3項目は「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」で、前回と同様の順位である。時系列でみると今回調査でも進学（前回調査53.1%、今回調査54.6%）と就職（前回調査30.0%、今回調査29.9%）との差が拡大していることがわかる。微減傾向であった進学は2018年以来増加傾向となり、今回調査ではピークであった2007年の数値（53.3%）を初めて超過した。「就職する」は29.9%で、前回調査より0.1ポイントの減少である。

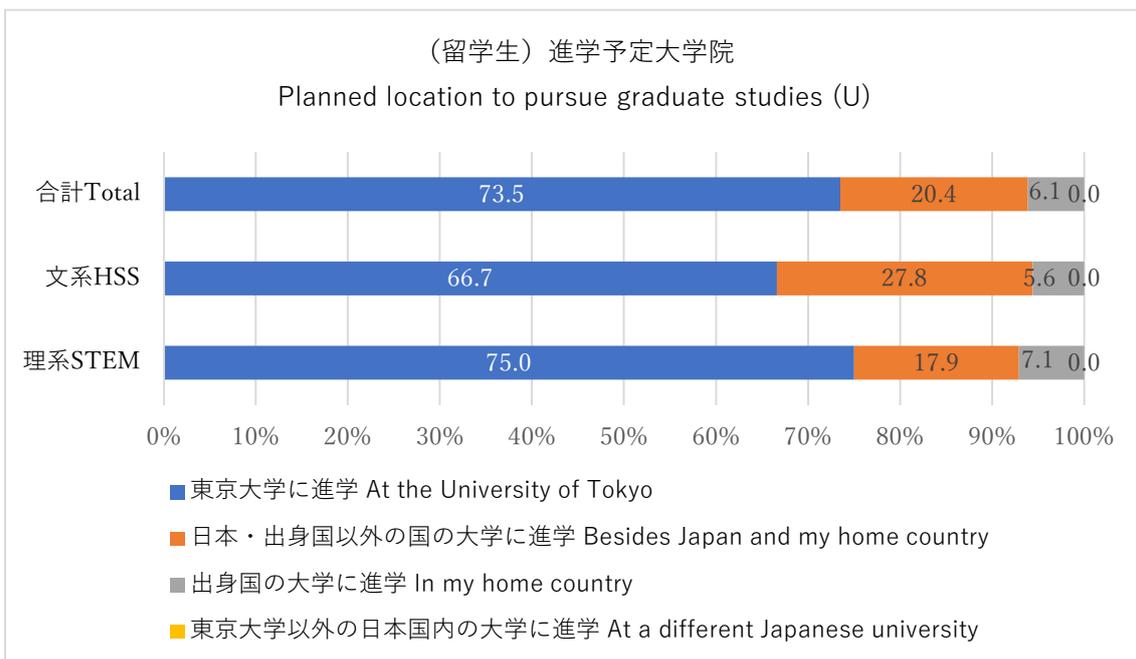
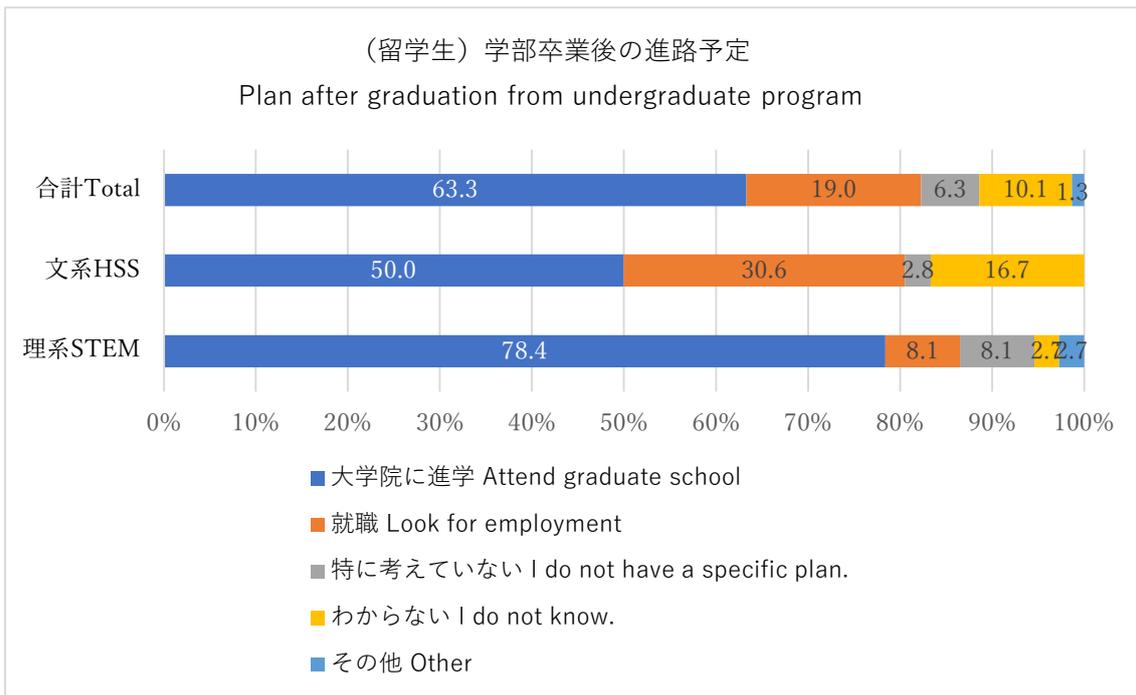
## 【学部学生】

### 進路予定（文理別）



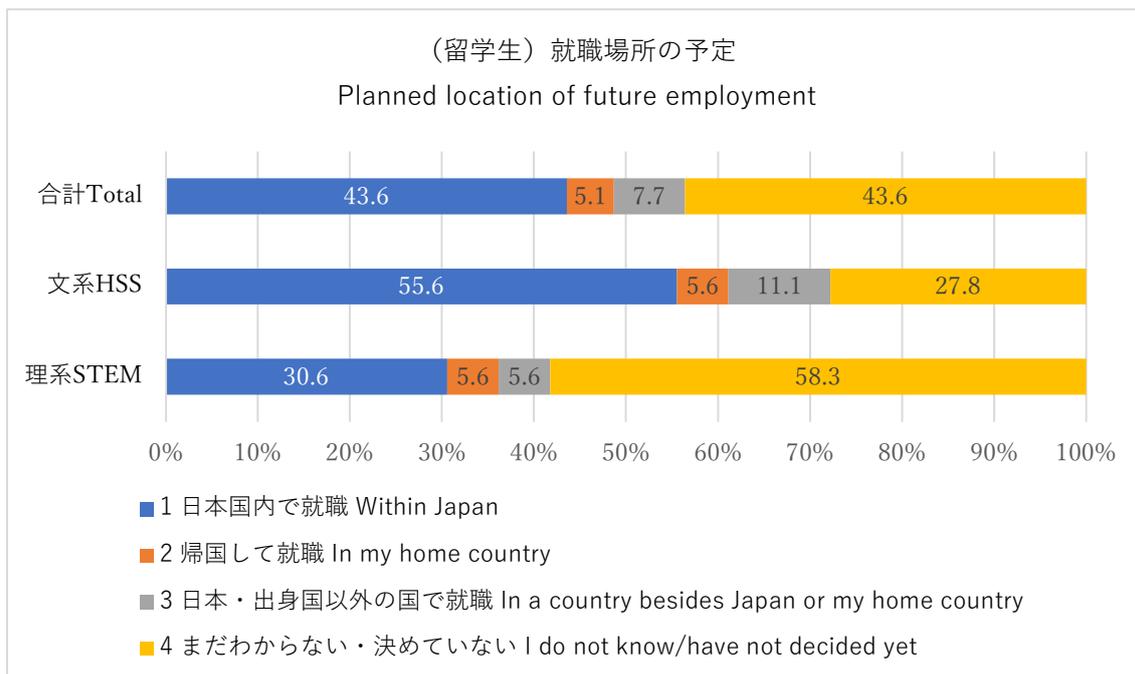
文理別で見ると、文科系の上位3項目は「就職する」「まだ決めていない」「大学院修士課程に入学する」であったが、理科系の学生は大学院への進学率が高いため、「大学院修士課程に入学する」「大学院博士課程まで進学する」「就職する」の順となった。前述のとおり、全体では進学と就職の差が拡大傾向であるが、文理別に変化の内訳をみると、「大学院修士課程に入学する」の割合は文科系（前回調査 18.6%、今回調査 20.0%）、理科系（前回調査 57.6%、今回調査 56.5%）であり、「就職する」の割合は文科系（前回調査 53.0%、今回調査 50.7%）、理科系（前回調査 13.0%、今回調査 13.1%）となっている。

## 【学部学生】



留学生の進路決定においては、進学か就職かを定めることと、日本で進学・就職をするかどうかを決めることが必要となる。日本人学生の回答と比べると、文系学生も大学院進学希望者が多いことが特徴であり、学部留学生の研究者志向の強さと、民間への就職に関する情報不足等が関係している可能性がある。前回調査との比較では、大学院進学希望者の内、東大での進学を希望する者の割合が 73.5%と 15.7%ポイント増加している一方で、日本・出身国以外の国の大学に進学する者の割合が 20.4%と 14.0%ポイント減少している。

## 【学部学生】



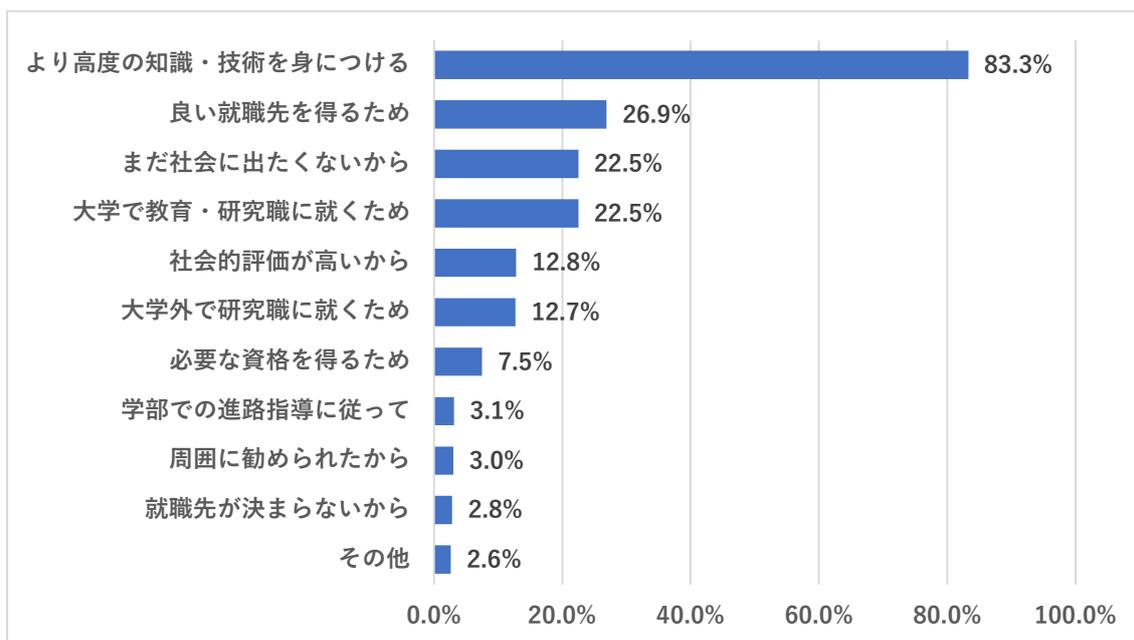
学部留学生の半数近くは、将来の就職先が未決定であるが、就職を決めている学生の中では、日本での就職希望者が多く、前回調査と比較しても 8.3%ポイント増加している。文理別にみると、文系の割合が高く、この傾向は過去の調査と変わらない。

## 【学部学生】

### 12. 大学院進学理由

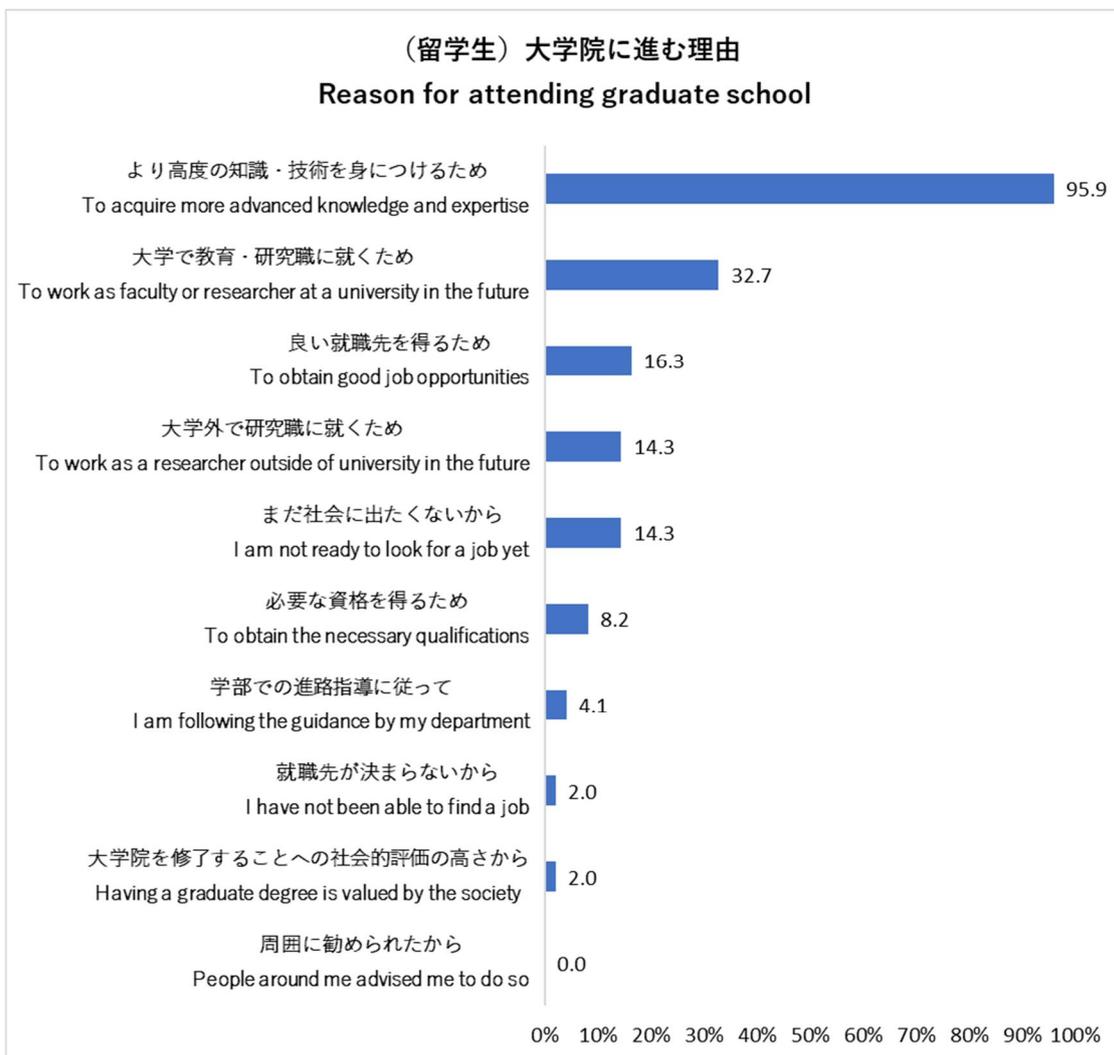
- 大学院に進む理由上位4項目「より高度の知識・技術を身につける」、「良い就職先を得るため」、「まだ社会に出たくないから」、「大学で教育・研究職に就くため」
- 「社会的評価が高いから」は前回調査と比較して2.4%ポイントの増加

12. 大学院に進む理由で、あてはまるものを2つ選んでください。



大学院に進む理由上位2項目は「より高度の知識・技術を身につける」（前回調査84.4%、今回調査83.3%）と「良い就職先を得るため」（前回調査25.6%、今回調査26.9%）である。前回調査で変化が大きかった「まだ社会に出たくないから」（22.5%）は、前回調査(23.9%)より1.4%ポイント減少し、「大学で教育・研究職に就くため」（前回調査21.4%、今回調査22.5%）と同率で上位4項目となった。「社会的評価が高いから」は前回調査と比較して2.4%ポイントの増加である。

## 【学部学生】



大学院に進む理由上位は「より高度の知識・技術を身につける」95.9%、「大学で教育・研究職に就くため」32.7%、「良い就職先を得るため」16.3%であった。「大学で教育・研究職に就くため」を選択した学生の割合が、国内生よりも留学生のほうが高い傾向がみられるが、全体的には概ね重なっている。

## 【学部学生】

### 「Ⅱ. 入学・進学・学業」の分析（まとめ）

入学、進学選択、進路等について調査を行った。浪人をしてでも東京大学への入学を希望する者の割合は近年減少傾向で、前回調査から引き続き50%未満となった。一方、「東大がダメなら他大学でもよい」と回答した者の割合の増加傾向であり、今回調査で初めて50%以上となった。また、入学理由として「入学後に学部の選択が可能だから」、「社会的評価が高いから」及び「スタッフ・設備が優れているから」は前回調査と同じく上位3項目である。特に、「スタッフ・設備が優れているから」という理由を選んだ学生の割合は2018年以降増加傾向であり、東京大学のソフト面とハード面双方の魅力が認められている。一方、進学先が希望通り、ほぼ希望通り決定としたのは大多数であるが、その割合は2018年以降減少傾向である。

卒業後の進路希望は「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」と回答した者が多い。2007年から減少傾向であった進学希望者は2018年から増加に転じて、今回調査でピークであった2007年の数値を超過した。逆に就職希望者は2018年以降減少しつつあり、両者の差が拡大している。また大学院進学理由として、前回調査では「まだ社会に出たくないから」の割合が大幅に増加していたが今回調査では微減し、「大学で教育・研究職に就くため」と同率であった。多様性が尊重される時勢が、学生の進路選択にどのように影響を与えていくのか注視していく必要がある。

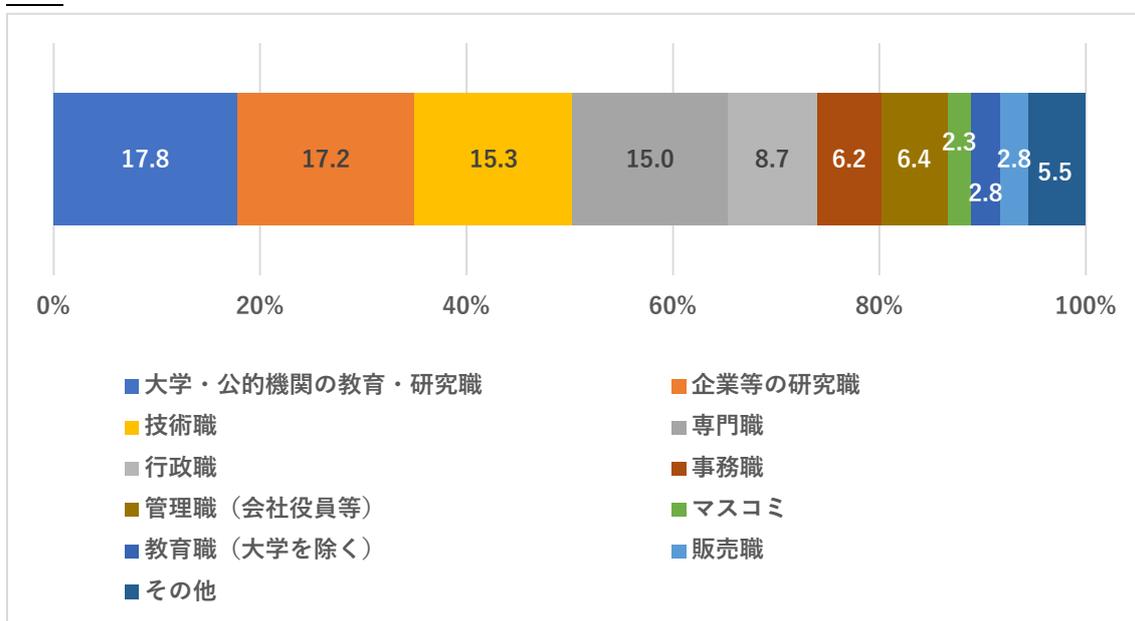
留学生の進路に関する希望は、国内生と比較すると文系・理系の差が小さく、いずれも大学院進学希望者が多い傾向にある。詳細は、留学生版調査報告書を参照のこと。

### Ⅲ. 就職

#### 13. 就職希望職種

- 全体的な就職希望職種上位3項目は「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」、「技術職」
- 「専門職」と「技術職」の順位が逆転

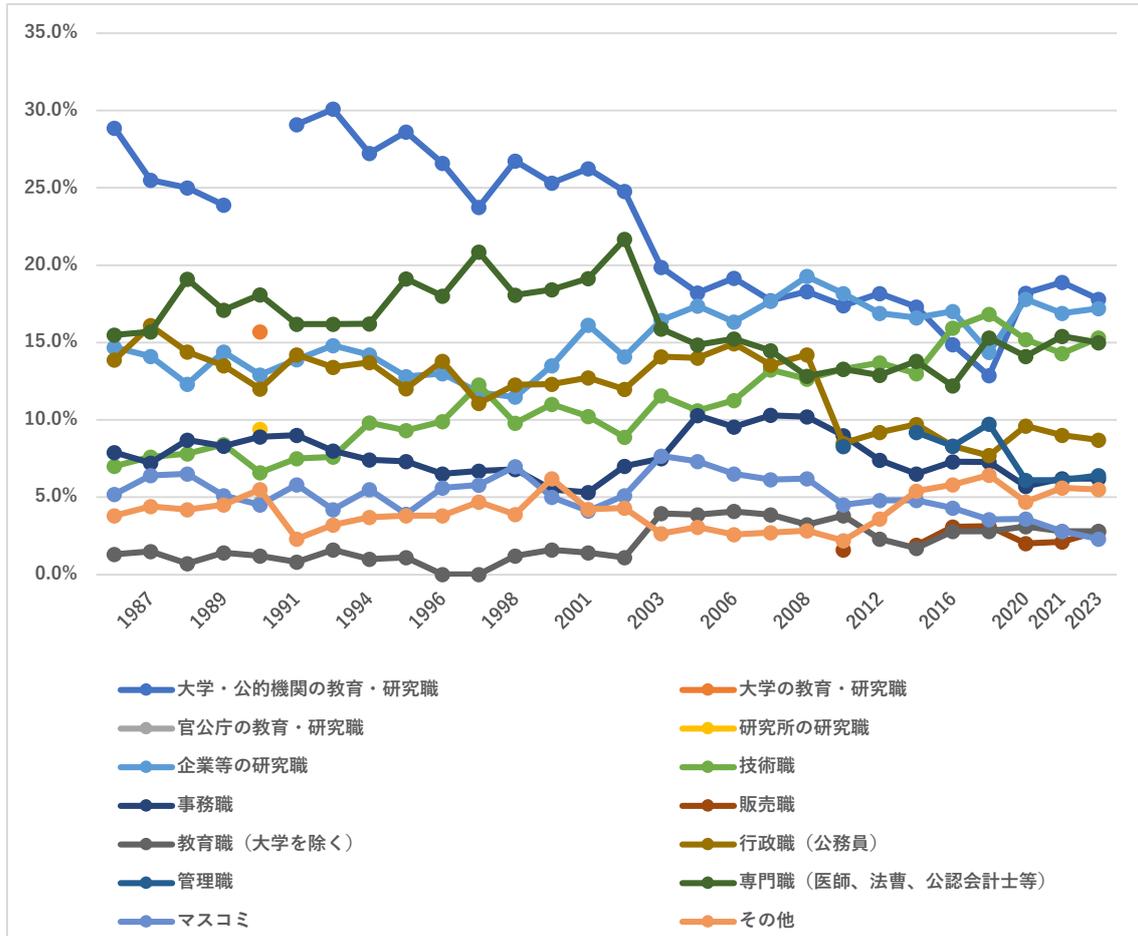
13. どのような「職種」に就きたいと思っていますか。あてはまるものを1つ選んでください。



「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」が合わせて35.0%を占め、前回調査の35.8%から0.8%ポイント減少となった。「技術職」は前回調査（14.3%）より1%ポイントの増加、「専門職」は前回調査（15.4%）より0.4%減少のため、両者の順位が前回調査と比較して逆転した。

## 【学部学生】

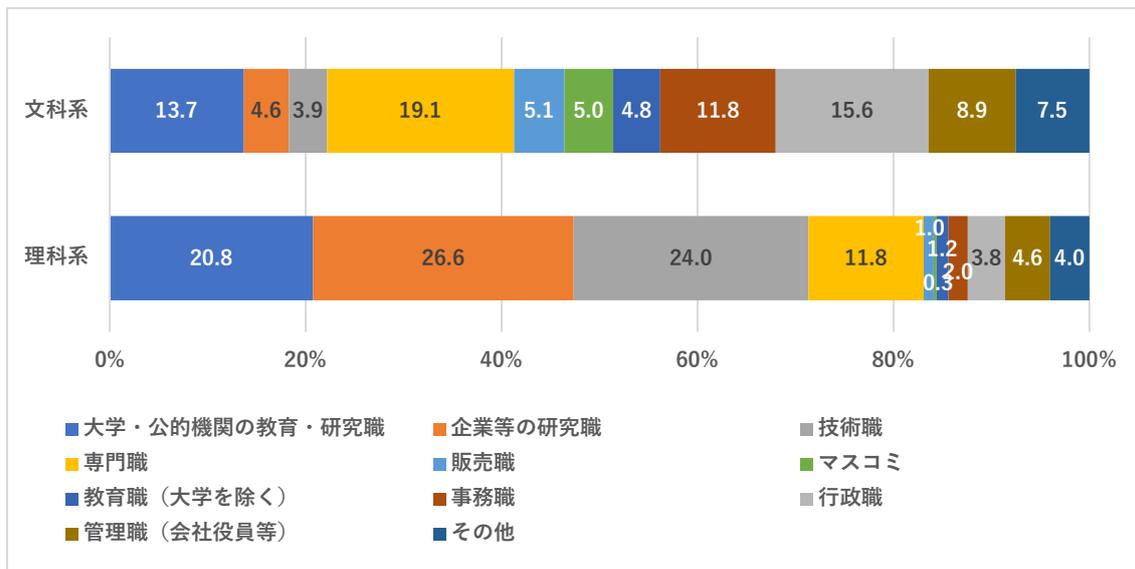
就職希望職種の経年変化



経年変化を確認する。「大学・公的機関の教育・研究職」は前回調査から微減したが、「企業等の研究職」と「技術職」は微増した。「専門職」は前回調査から微減しているが、2010年調査から上位4項目に変動はない。「マスコミ」は2006年調査から減少傾向が続いている。「事務職」は前回調査と同率だが、「行政職」同様にここ十数年間で全体的な傾向は減少している。

## 【学部学生】

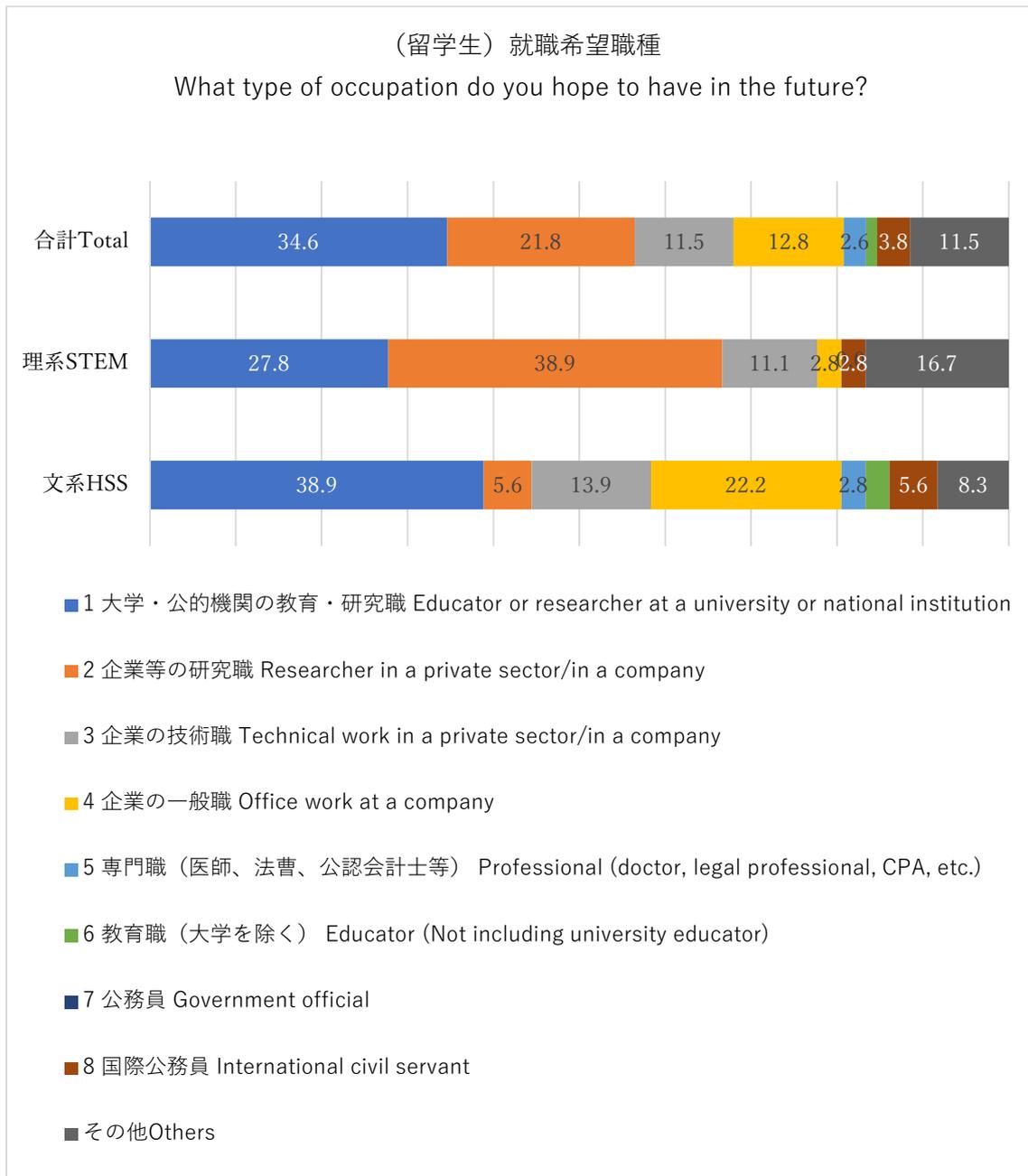
### 就職希望職種（文理別）



文科系の上位2項目は「専門職」（前回調査 22.3%、今回調査 19.1%）と「行政職」（前回調査 16.3%、今回調査 15.6%）で、「大学・公的機関の教育・研究職」は前回調査と同率であり、「事務職」（前回調査 12.2%、今回調査 11.8%）は微減した。

理科系の学生は大学院への進学率が高いため、大学と企業での研究職を志望する割合は合わせて 47.4%で、前回調査（49.1%）より 1.7%ポイント減少し、2020 年調査の 50.2%より減少傾向である。今回調査で「技術職」（前回調査 21.6%）は 24.0%であり、「大学・公的機関の教育・研究職」（前回調査 22.5%、今回調査 20.8%）の減少により、第 2 位となった。また「専門職」は前回調査（10.3%）より 1.5%ポイント増加した。

## 【学部学生】



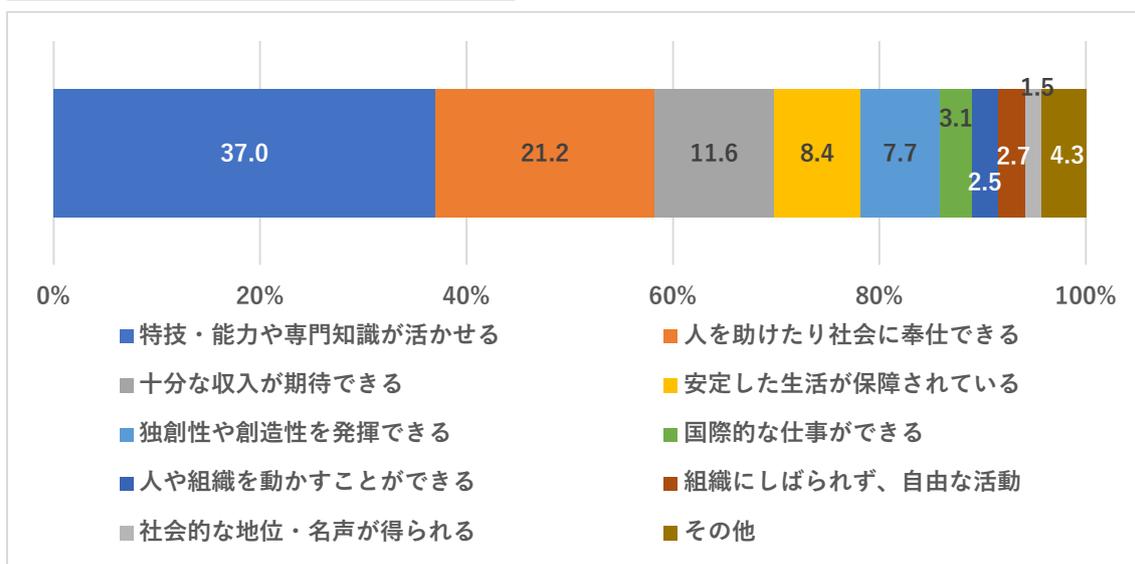
学部留学生の将来の職業に関しては、文系学生で研究職希望者が 38.9%を占めている点  
が、日本人学生と比較した際の特徴といえる。この傾向は例年みられるが、本年度調査では  
さらに強まっている。理系学部留学生では、企業の研究職 (38.9%) を志向する学生が増えて  
いる。母数が小さいため、今後の変化に注目する必要があるが、理系学生においては、大  
学等の研究職につく競争の激しさが、学部留学生の進路選択にも影響を及ぼしている可能  
性がある。

## 【学部学生】

### 14. 就職希望職種選択理由

- 就職希望職種選択理由の上位3項目「特技・能力や専門知識が活かせる」、「人を助けたり社会に奉仕できる」、「十分な収入が期待できる」
- 理科系では「特技・能力や専門知識が活かせる」、文科系では「人を助けたり社会に奉仕できる」が最も選ばれた

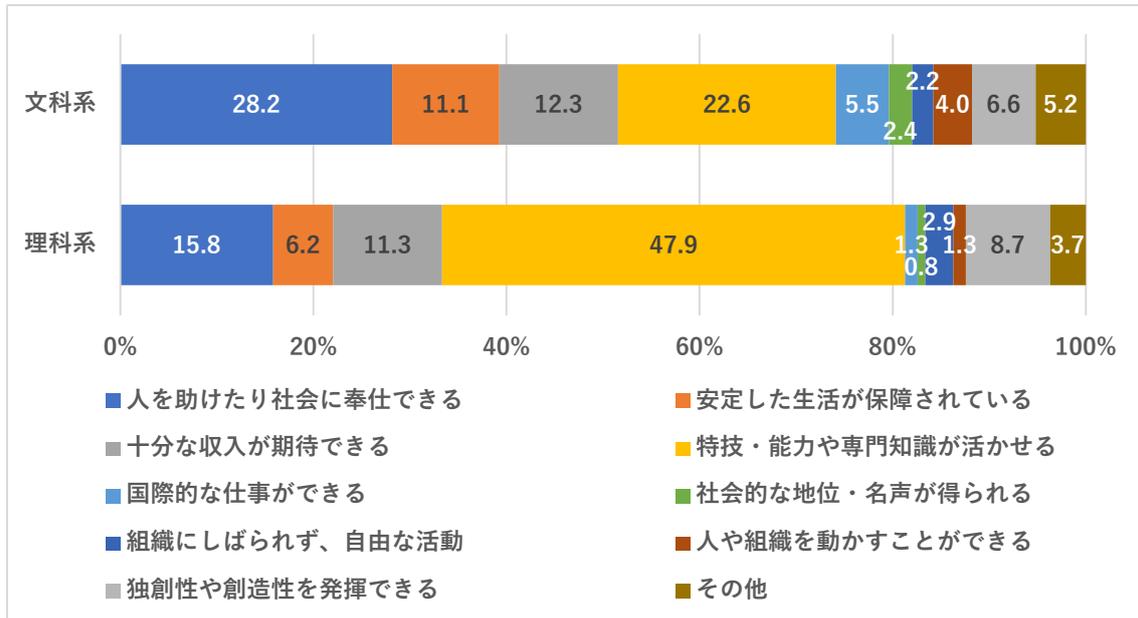
14. 設問13で答えていただいた「その職業に就きたい」と思っている理由は何ですか。  
あてはまるものを1つ選んでください。



希望する職業に就きたい理由の上位3項目は「特技・能力や専門知識が活かせる」（前回調査 36.5%、今回調査 37.0%）、「人を助けたり社会に奉仕できる」（前回調査 21.6%、今回調査 21.2%）、「十分な収入が期待できる」（前回調査 12.3%、今回調査 11.6%）である。一方で「人や組織を動かすことができる」（前回調査 2.6%、今回調査 2.5%）といったリーダーシップ志向の割合や、「組織にしばられず、自由な活動」（前回調査 2.5%、今回調査 2.7%）といった個性を強調する志向の割合は前回調査同様に高くはなく、名声を求める志向も非常に低い傾向にある。

## 【学部学生】

就職希望職種選択理由（文理別）



文理間で就職希望職種の選択理由に差がみられた。文科系の一番の志望理由は「人を助けたり社会に奉仕できる」（前回調査 30.5%、今回調査 28.2%）である一方、理科系は「特技・能力や専門知識が活かせる」（前回調査 47.1%、今回調査 47.9%）であり、大学で学んだ知識をすぐに活用したいという傾向が読み取れる。また、「十分な収入が期待できる」割合は文理間（文科系 12.3%、理科系 11.3%）でさほど差はないが、「安定した生活が保障されている」（文科系 11.1%、理科系 6.2%）と「国際的な仕事ができる」（文科系 5.5%、理科系 1.3%）割合は、文理間で差が大きく生じている。

### 「Ⅲ. 就職」の分析（まとめ）

就職希望職種とその理由を尋ねたところ、職種は「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」、「技術職」が挙げられた。僅差ではあるものの、前回調査と比較して「技術職」と「専門職」の項目が逆転した。

文科系の第一の職種選択理由は「人を助けたり社会に奉仕できる」であるが、理科系の場合は「特技・能力や専門知識が活かせる」で、大学院進学の第1位の理由である知識や技術を身につけたいことと合致している。一方で、どちらにおいても国際的な活躍志向やリーダーシップ志向の割合、名声を求める志向も非常に低いが、理科系では特にその傾向がある。文理間で職種選択理由に傾向の違いはみられるが、比較的安定した職種を希望しており、不安定な時勢が学生の就職観に引き続き影響を与えているとみられる。

留学生は、日本人学生と比較すると例年から、文系学生にも研究者志向が強くみられるが、今年度調査でも同様の結果がみられた。さらに、母数が小さいため今後の変化に注目する必要があるが、理系学生においては、企業の研究職を志向する学生が増加している傾向にある。

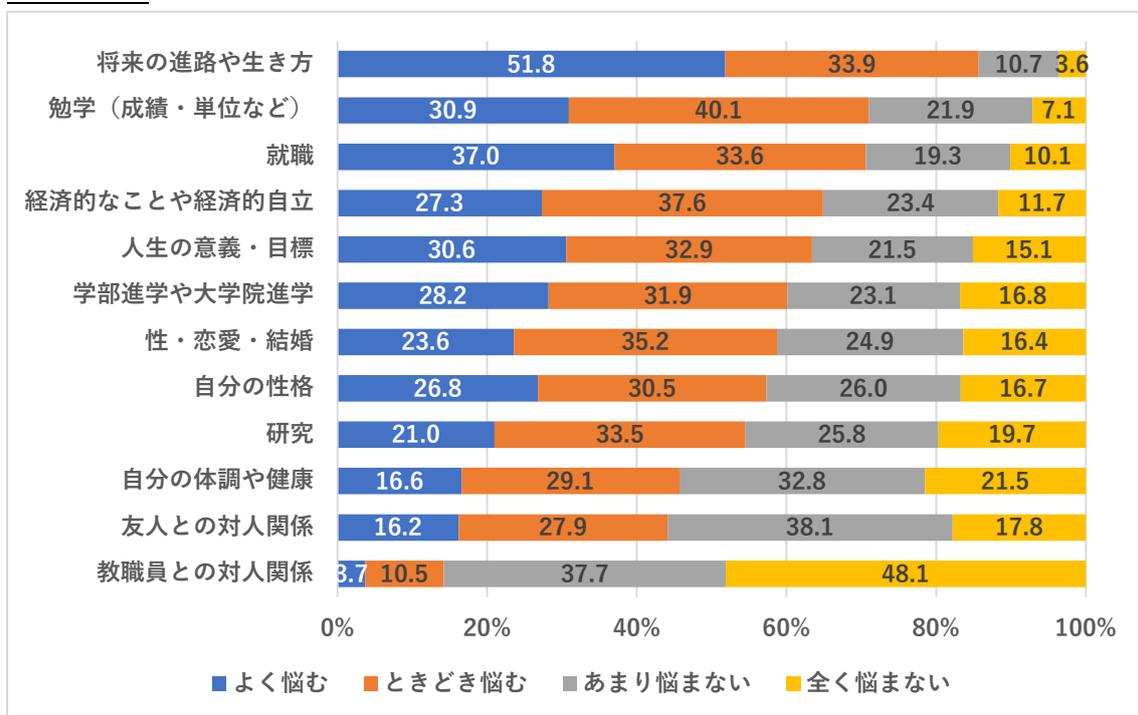
## 【学部学生】

### IV. 不安・悩み

#### 15. 不安・悩みの程度

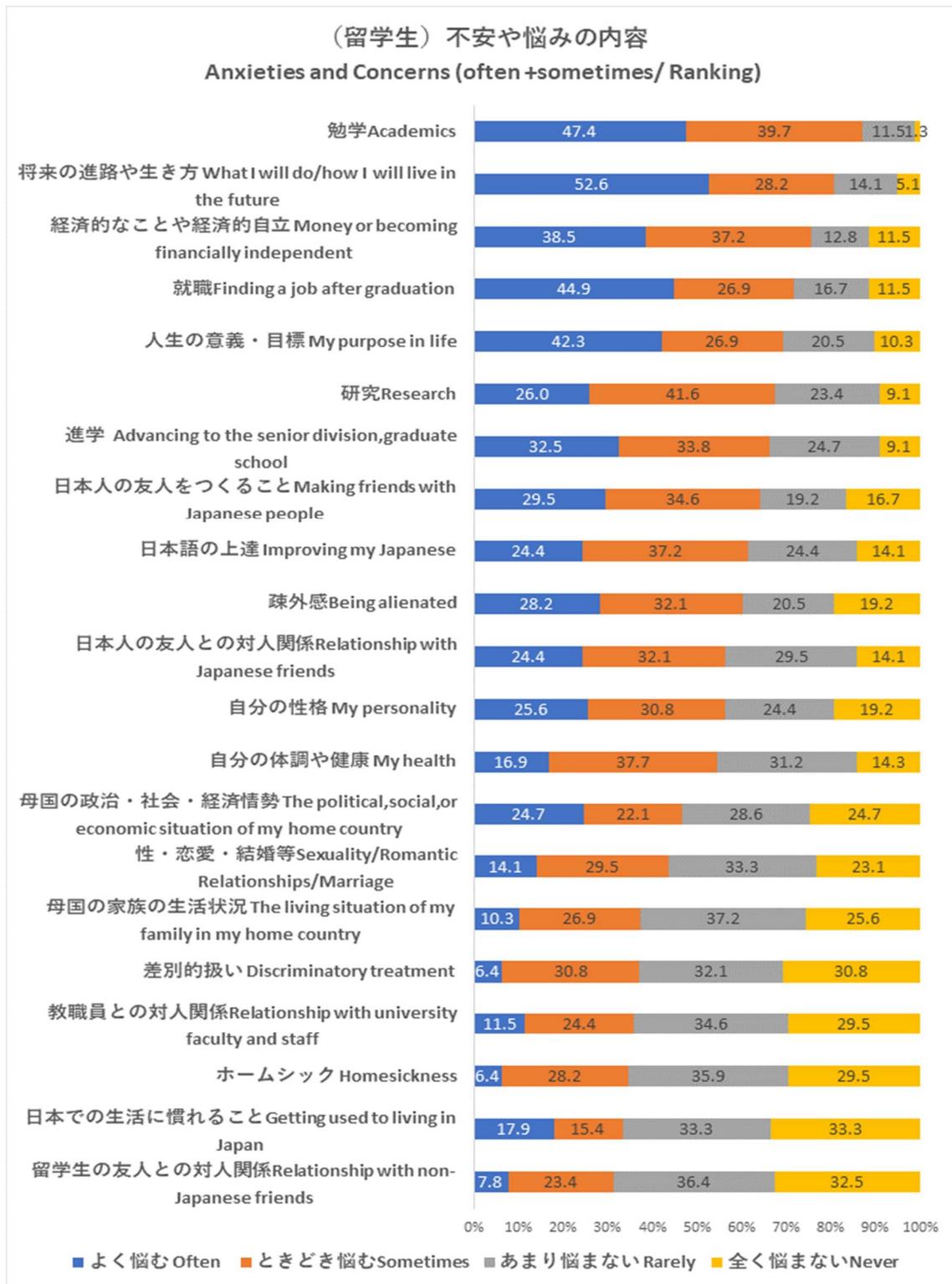
- 不安・悩みをもたらす上位3項目「将来の進路や生き方」、「勉学(成績・単位など)」、「就職」
- 最も少ない悩みは「教職員との対人関係」

15. 現在の学生生活の中で、次の各項目について、どの程度悩んだり不安を感じたりしていますか。



学生生活の中で悩みや不安を感じるものとして、「よく悩む」と「ときどき悩む」の合算値が最も大きかった項目は「将来の進路や生き方」で合計85.7%（前回84.9%）であった。次いで「勉学(成績・単位など)」の71.0%（前回69.6%）、「就職」の70.8%（前回72.5%）と続き、前回調査から前者と後者とで順位が入れ替わった。「あまり悩まない」「全く悩まない」の合算値が最も大きかった項目は「教職員との対人関係」で85.8%（前回85.8%）。次いで、「友人との対人関係」で55.9%（前回57.5%）、「自分の体調や健康」で54.3%（前回57.5%）であった。下位3項目は前回調査と同様であった。

## 【学部学生】



学部留学生の不安・悩みの上位は、「勉学」87.1%（前回2021年度：86.5%）「将来の進路や生き方」80.8%（81.1%）「経済的なことや経済的自立」75.7%（69.8%）であり、日本人学生と比較すると、「勉学」に対する不安・悩みがより高い。

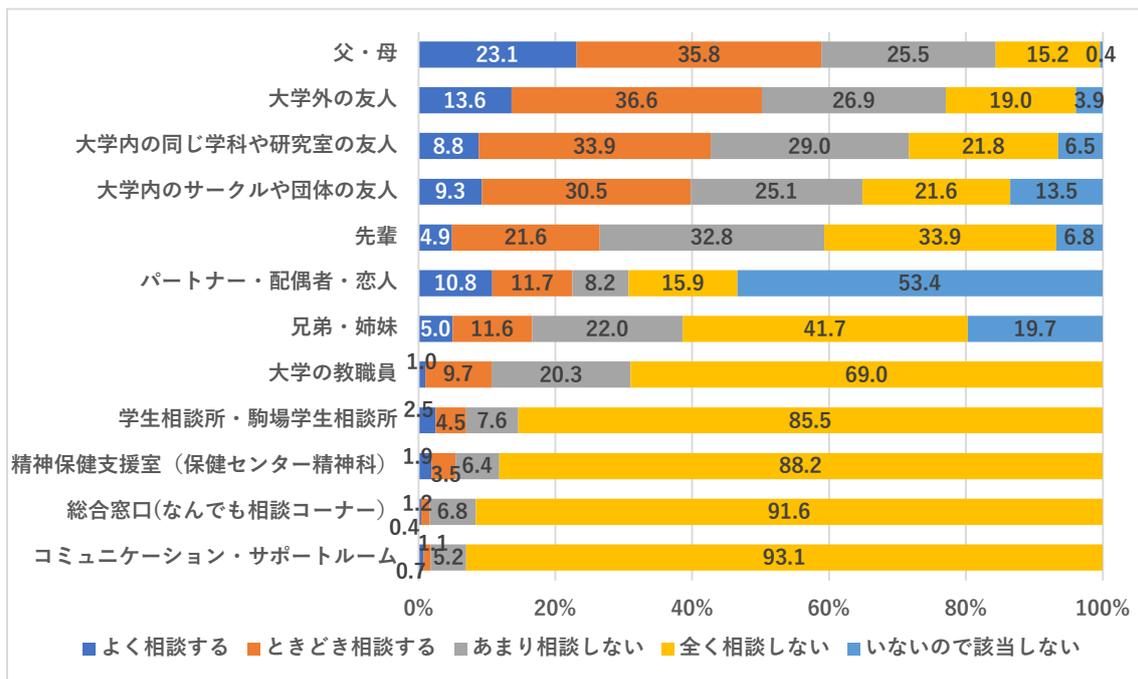
項目の順位、悩む割合ともに前回調査と大きな変化は見られない。

## 【学部学生】

### 16. 悩みの相談相手

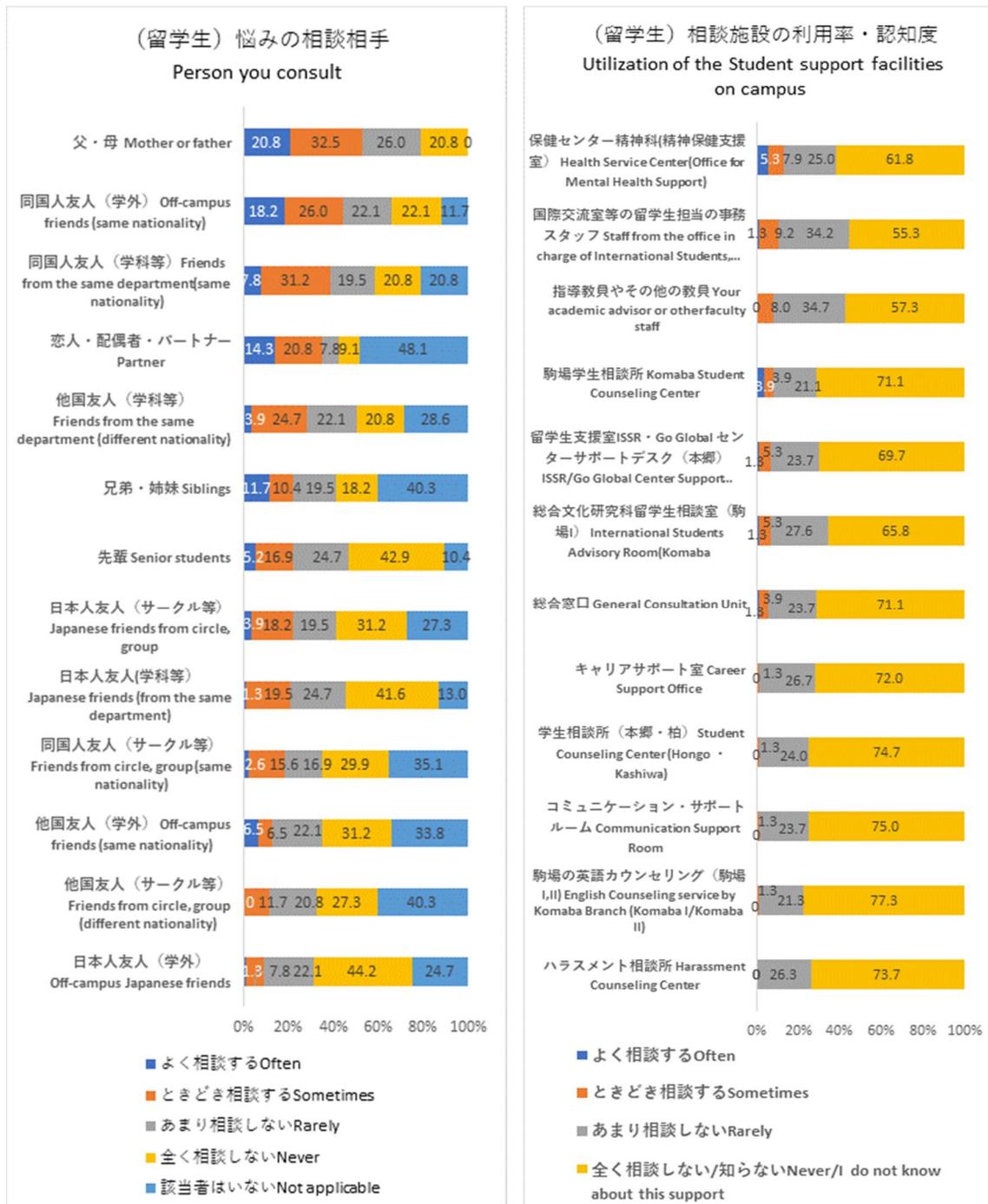
- 悩みを相談する相手の上位3項目は「父・母」、「大学外の友人」、「大学内の同じ学科や研究室の友人」
- 大学の相談施設の利用は多くない

16. あなたは、不安や悩みを感じたとき、だれと相談したり、話し合ったりしますか。



不安や悩みを誰に相談するか尋ねたところ、「よく相談する」、「ときどき相談する」の合計値が最も多かった項目は、「父・母」で合計 58.9%（前回 56.4%）で、前回調査よりも 2.5% ポイント増加した。次いで、「大学外の友人」50.2%（前回 49.6%）、「大学内の同じ学科や研究室の友人」は 42.7%（前回 33.5%）で前回調査より 9.2% ポイント増加し、「大学内のサークルや団体の友人」39.8%（前回 34.8%）と前回調査より順位が入れ替わった。一方、悩みの相談相手としての教職員や大学の相談施設の利用は多くないのも例年同様である。

## 【学部学生】



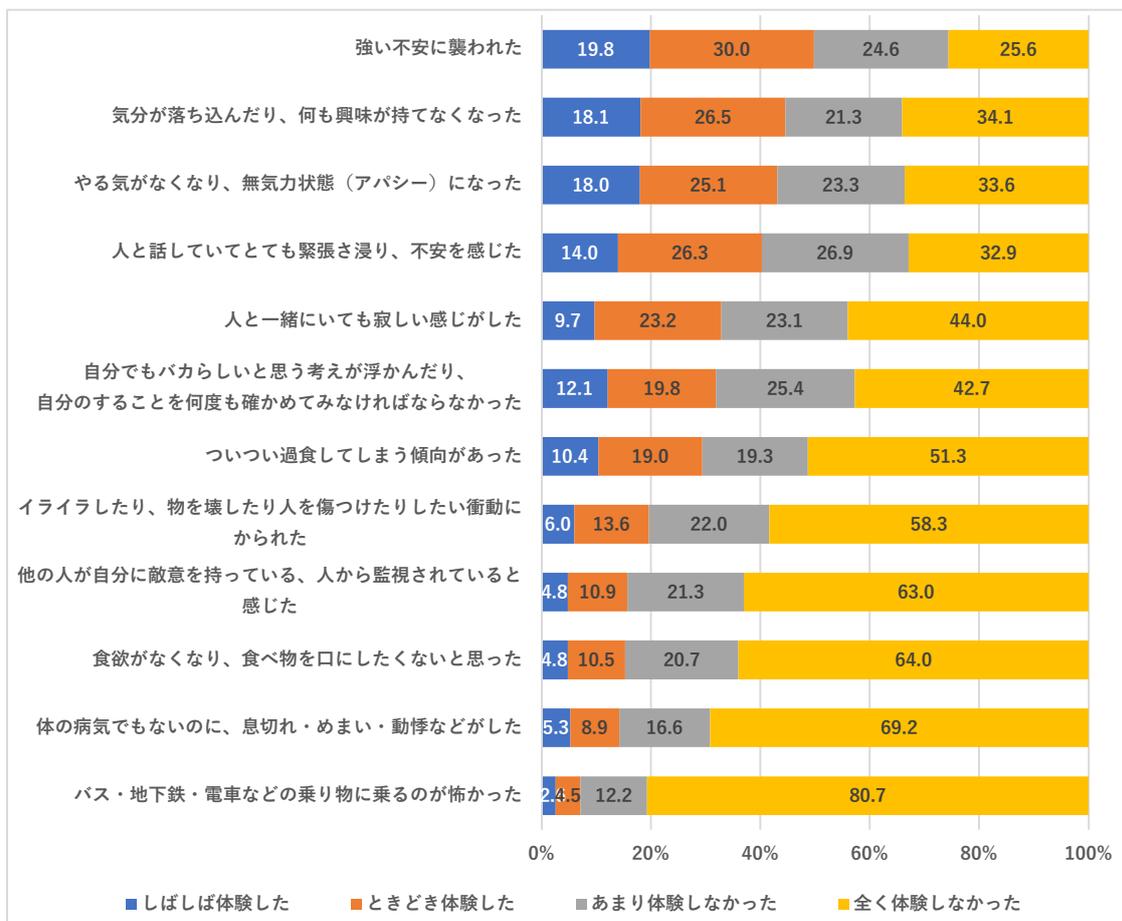
学部留学生が最もよく相談する相手は、「父・母」であり、大学外の同国人の友人・知人が続く。この傾向は、過去の調査においても同様にみられる。大学内の相談施設のうち相対的に利用割合が高いのは、保健センター、駒場・本郷の留学生対応の相談室であり、特に保健センターは前回調査の3位から順位を上げ、最上位となっている。指導教員や国際交流室等に相談している学生の割合は大学院留学生と比較すると少ない。

## 【学部学生】

### 17. メンタルヘルスの状態

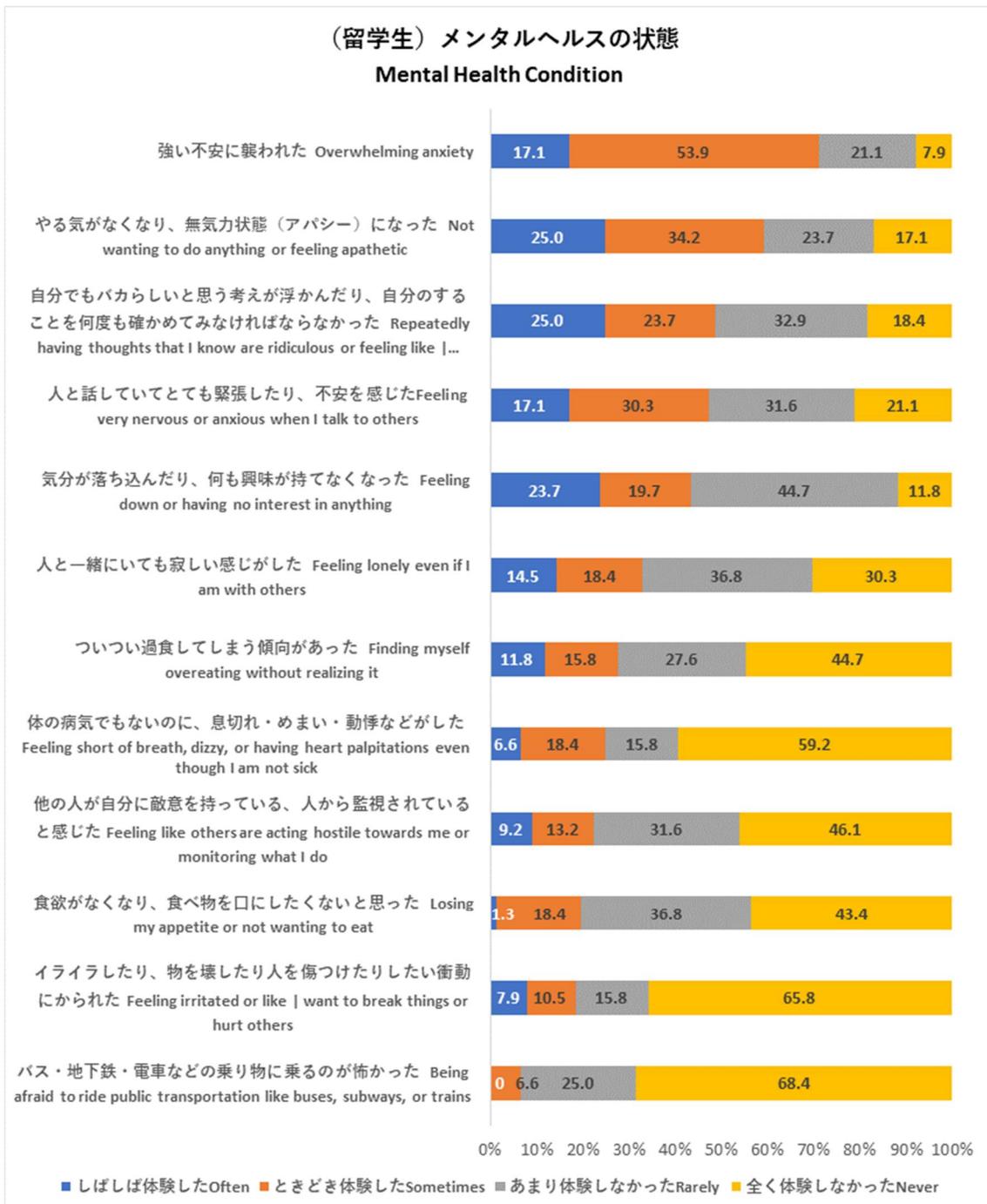
- 上位3項目は、「強い不安に襲われた」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」
- 8項目において前回調査と比較し、「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が減少していた

17. あなたは、最近6ヶ月の間に次の項目について、体験したり悩んだりしましたか。



メンタルヘルスの不調を「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が最も多かった項目は「強い不安に襲われた」で49.8%（前回52.0%）である。次いで、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」44.7%（前回46.2%）、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」44.1%（前回48.6%）が続く。上位3項目を含む12項目中8項目において、前回調査と比較して、「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が減少した。

## 【学部学生】



学部留学生のメンタルヘルスの不調状態については、「強い不安に襲われた」71.0%（前回 59.4%）が最上位であり、「やる気がなくなり、無気力状態になった」59.2%（前回 52.6%）が続く。全体的な傾向は日本人学生等と重なっているが、上位項目については、留学生の方が不調を報告する学生の割合が高い。

## 【学部学生】

### 「IV. 不安・悩み」の分析（まとめ）

学部学生は、「将来の進路や生き方」、「勉学(成績・単位など)」、「就職」でとくに不安や悩みを抱えていることが多く、12項目中9項目で半数以上が「よく悩む」「ときどき悩む」と回答しており、多くの学生が何らかの悩みを抱えていることが示された。主な悩みの相談相手としては、「父・母」、「大学外の友人」、「大学内の同じ学科や研究室の友人」が挙げられ、今回の調査では、上位3項目それぞれの割合が増加した。相談施設の利用率は他大学と比較して極端に低いわけではないが、例年同様に低くなっている。悩みを抱えた学生の援助要請を促進するために、相談施設利用に関するスティグマの軽減や認知度の向上を図る必要があるだろう。

学部学生が経験したメンタルヘルス不調としては、「強い不安に襲われた」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」が多く挙げられた。今回調査では、「強い不安に襲われた」学生は50%を下回り、12項目中8項目においては前回調査よりもメンタルヘルスの不調を訴える学生が減少した。

留学生においては、「日本語の上達」で悩む学生の割合が10%ポイント近く減少した他は、コロナ禍であった前回調査と比べて大きな違いは見られない。上位2項目が「将来の進路や生き方」、「勉学(成績・単位など)」であることは日本人学生等と同じだが、留学生は「勉学(成績・単位など)」が最上位となっており、その割合も日本人学生等より、16%ポイント近く高くなっている。また、メンタルヘルスの不調状態については、「強い不安に襲われた」と「やる気がなくなり、無気力状態になった」の上位2項目において、悩む割合が拡大傾向にある。

## 【学部学生】

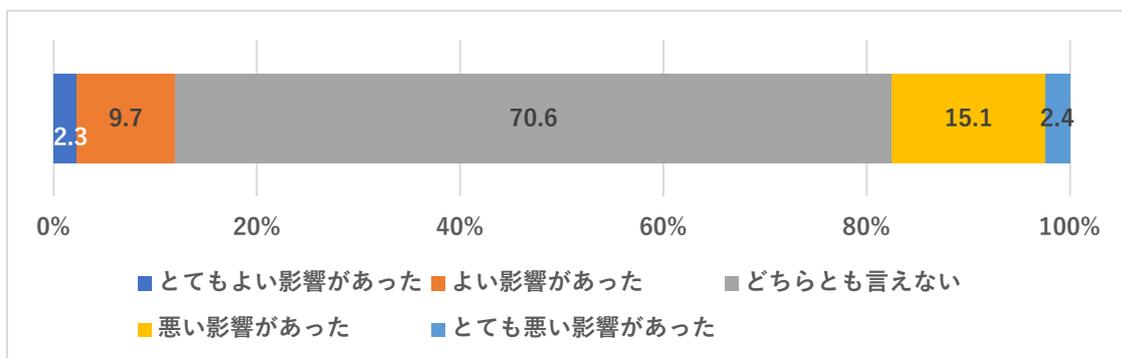
### V.新型コロナウイルス感染症の影響

#### 18. 活動制限による影響

- 全項目で悪影響を受けたとする回答は大幅に減少した
- 「家族関係や友人との関係」において最も悪影響の割合が減少した

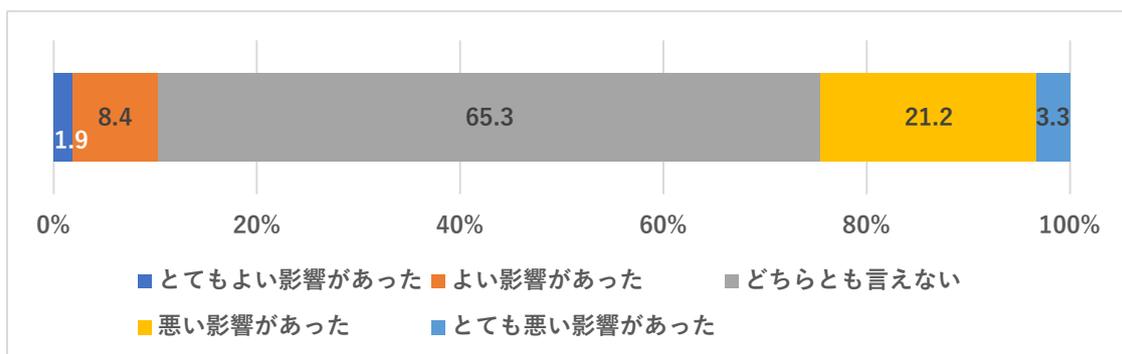
18. 新型コロナウイルス感染症による様々な制限は、今現在あなたの生活にどのような影響がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。

自身のキャリア形成や就職・進学



全体的に「どちらとも言えない」が多数を占めているが、「とてもよい影響があった」「よい影響があった」の合計値は 12.0%で、「とても悪い影響があった」「悪い影響があった」の合計値は 17.5%であった。前回調査と比較して、良い影響があった合計値にあまり変化はないが、悪い影響があった合計値（前回調査 38.1%）は 20%ポイント以上減少した。

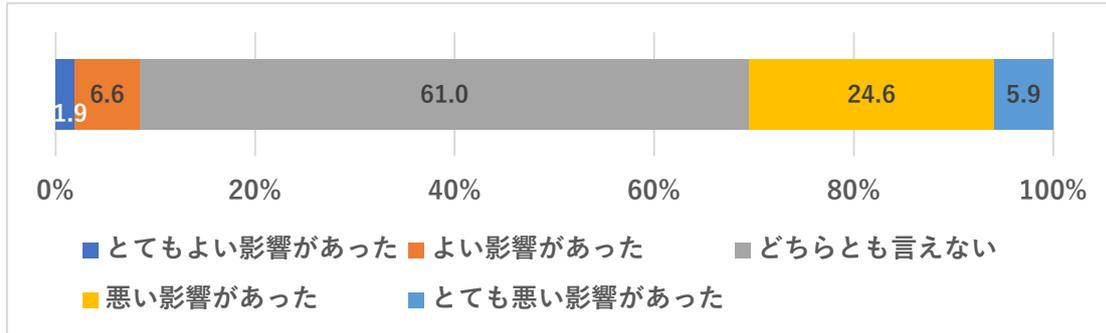
家族関係や友人との関係



「とてもよい影響があった」「よい影響があった」の合計値は 10.3%で前回調査（9.6%）とあまり変化はなかった。「とても悪い影響があった」「悪い影響があった」の合計値は 24.5%で、前回調査（52.6%）から半数近く減少した。

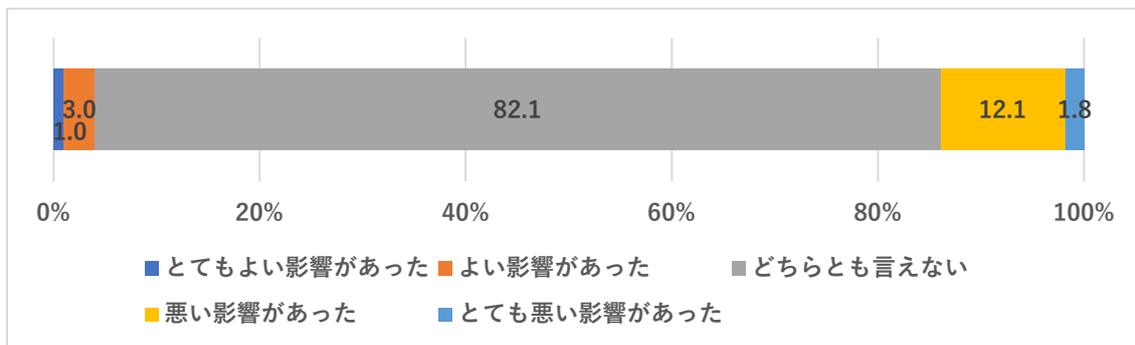
## 【学部学生】

### 自身のメンタルヘルスや健康状態



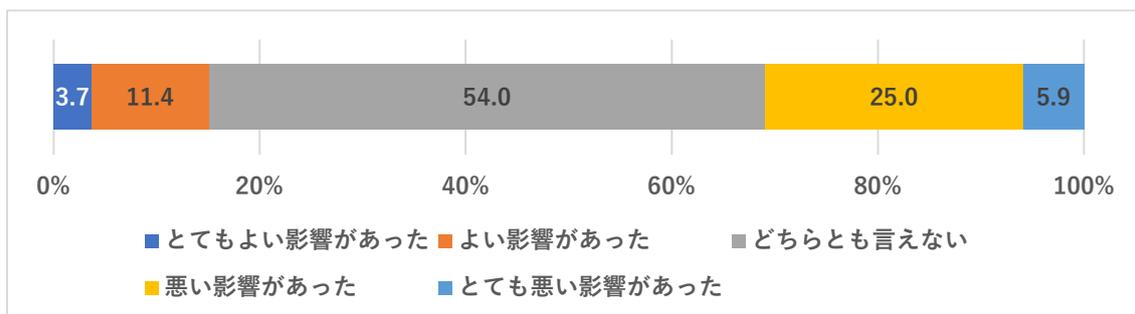
「とてもよい影響があった」「よい影響があった」の合計値は 8.5%で前回調査 (13.8%) より 5.3%ポイント減少した。「とても悪い影響があった」「悪い影響があった」の合計値は 30.5%で、前回調査 (50.6%) から 20%ポイントほど減少した。

### アルバイト収入や家族の収入



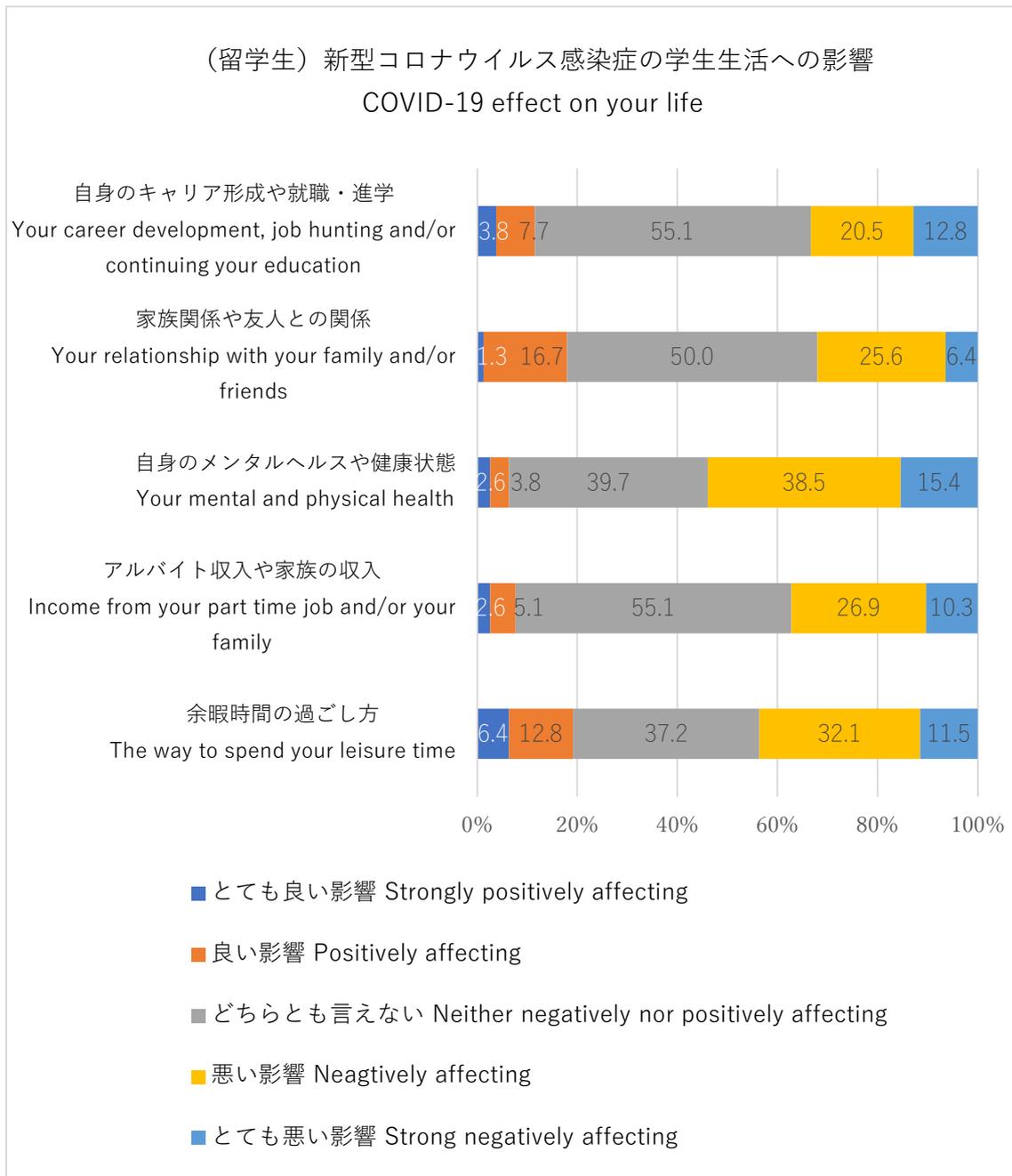
「とてもよい影響があった」「よい影響があった」の合計値は 4%で前回調査 (9.2%) より 5.2%ポイント減少した。「とても悪い影響があった」「悪い影響があった」の合計値は 13.9%で、前回調査 (23.3%) から 9.4%ポイント減少した。

### 課外活動等の余暇時間の過ごし方



「とてもよい影響があった」「よい影響があった」の合計値は 15.1%で前回調査 (20.1%) より 5%ポイント減少した。「とても悪い影響があった」「悪い影響があった」の合計値は 30.9%で、前回調査 (56.4%) から 25.5%ポイントと大幅に減少した。

## 【学部学生】



コロナ禍であった前回の 2021 年度調査と比べると「悪い影響」「とても悪い影響」を選択した留学生は、「自身のキャリア形成や就職・進路」33.3%（前回 55.6%）、「家族関係や友人との関係」32.0%（前回 55.6%）、「自身のメンタルヘルスや健康状態」53.9%（前回 71.3%）、「アルバイト収入や家族の収入」37.2%（前回 47.8%）、「余暇時間の過ごし方」43.6%（前回 59.1%）であり、すべての項目で前回調査よりも影響が少なく報告されている。一方で、日本人学生と比較すると、より強くネガティブな影響を体験している学生が多い。

## 【学部学生】

### 「V.新型コロナウイルス感染症の影響」の分析（まとめ）

今回調査では、新型コロナウイルス感染症の影響として活動制限等による影響を確認したが、制限緩和（2023年5月頃）が始まって以降に本調査の回答（2023年11月頃）を収集したため、悪影響の回答割合は各項目において前回調査から大幅に減少する結果となった。最も悪影響を受けた割合が減少した項目は「家族関係や友人との関係」であり、制限緩和以降は従来の交流を徐々に持つことができたことが推察できる。また、それらの交流に伴ってメンタルヘルスや余暇活動、キャリア形成等にも良い影響が波及していることがわかる。一方、収入についてはその他の項目程度の減少幅は見られなかった。コロナ禍における活動制限の悪影響は少なくなっているものの、いまだ全体の2割程度は悪影響があったと回答しているため、今後も引き続き活動制限にて悪影響を受けた学生に対し、適切なサポートを提供する必要がある。

留学生においても、全ての項目で悪影響を受けた割合は減少しているものの、日本人学生よりも、悪い影響を強く認知しており、影響の長期化の傾向が見受けられることから、日本人学生と同様に適切なサポートが必要である。

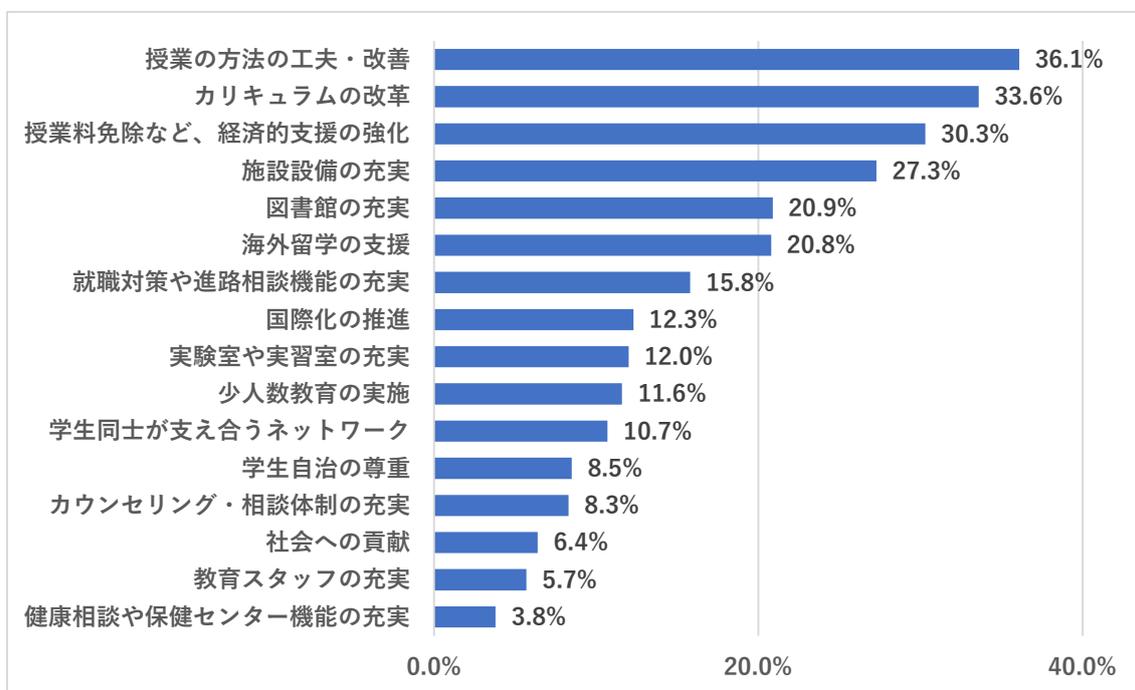
## 【学部学生】

### VI.大学への要望

#### 19. 大学への要望・期待

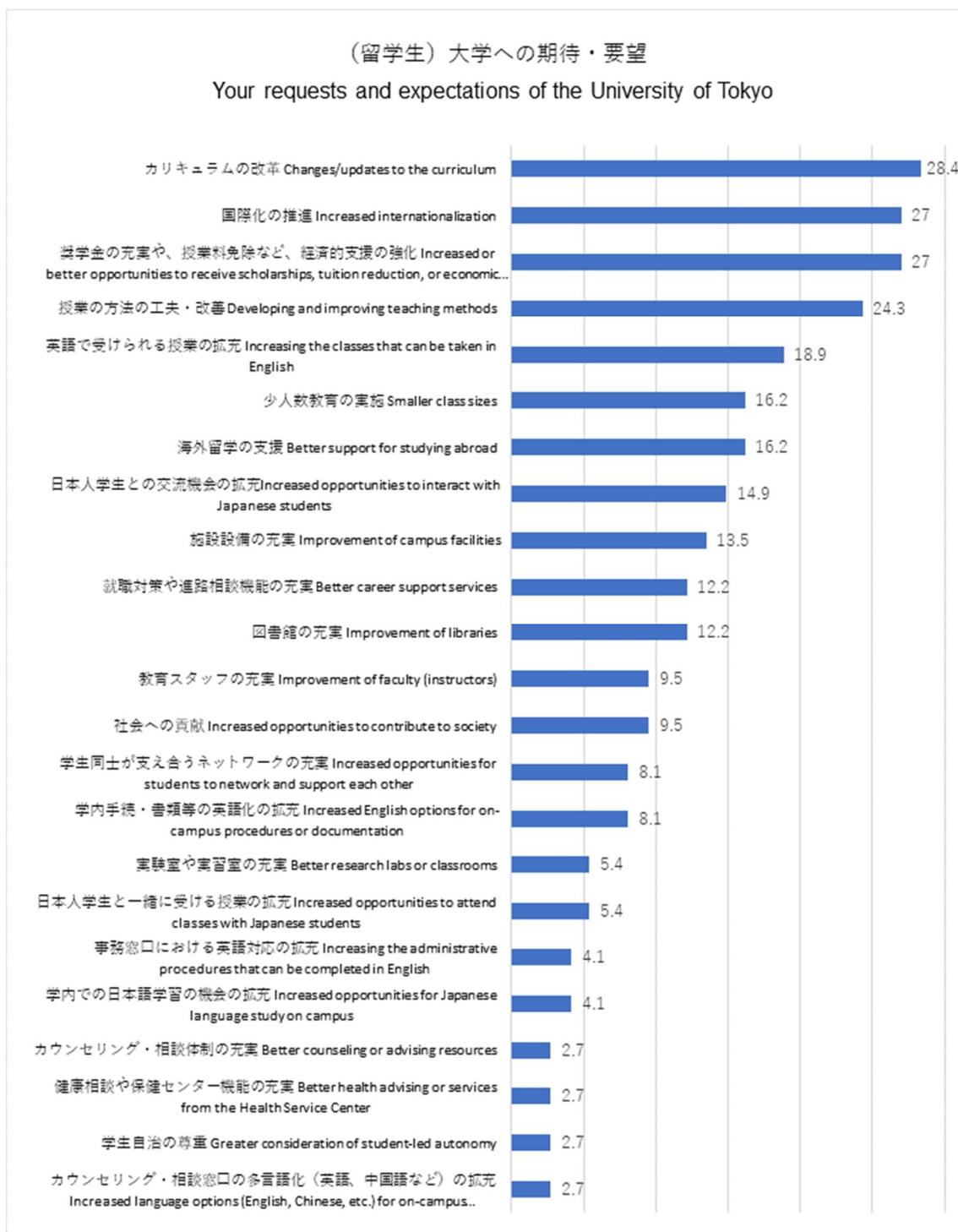
- 大学に期待すること「授業の方法の工夫・改善」、「カリキュラムの改革」、「授業料免除など、経済的支援の強化」
- 「図書館の充実」、「施設設備の充実」前回調査と比べて期待する割合は増加

19. 大学へ特に要望したいことや期待することは何ですか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。



大学への要望で期待されるのは、上から「授業の方法の工夫・改善」36.1%、「カリキュラムの改革」33.6%、「授業料免除など、経済的支援の強化」30.3%であった。前回調査で「授業の方法の工夫・改善」は48.6%だったが、今回調査では12.5%ポイントも減少した。「授業料免除など、経済的支援の強化」においては、前回調査（23.1%）より7.2%ポイント増加した。前回調査では順位が降下した「施設設備の充実」（前回調査18.4%）や「図書館の充実」（前回調査14.8%）は、今回調査ではそれぞれ27.3%と20.9%で上位5項目に入った。また前回調査で上位項目であった「就職対策や進路相談機能の充実」（前回調査20.6%）、「学生同士が支え合うネットワーク」（前回調査18.3%）については、それぞれ15.8%と10.7%に減少した。

## 【学部学生】



留学生に提示した選択項目は大きく異なるため、詳細は留学生版で報告するが、日本人学生版と共通する選択肢の中で上位に位置したのは、「カリキュラムの改革」「授業料免除など、経済的支援の強化」「授業の方法の工夫・改善」等であった。

国際化の推進は、2018年度2位、2020年度、2021年度は1位、今回調査は2位であり、一貫して、日本人学生よりも留学生が強く要望する項目となっている。

## 【学部学生】

### 「VI.大学への要望」の分析（まとめ）

大学への要望は「授業の方法の工夫・改善」、「カリキュラムの改革」、「授業料免除など、経済的支援の強化」があげられ、前回調査同様の結果となった。しかし割合については変化しており、「授業の方法の工夫・改善」の割合が大幅に減少しているのは、コロナ禍における活動制限緩和により対面授業の増加が影響しているものとみられる。また前回調査で期待する割合が減少していた「施設設備の充実」や「図書館の充実」は、今回調査では大きく順位を上げて上位 5 項目に入っている。通学機会が増えたことにより、ハード面での期待が増えたことが示唆される。また「就職対策や進路相談機能の充実」と「学生同士が支え合うネットワーク」については、今回調査で大きくポイントを落としている。通学や対面での交流機会が増えたことにより、情報交換の場が生まれたため、大学へのサポートを希望する割合が減少したと言えるのではないだろうか。リアルでの交流の場が今後増えることで、学生が大学に期待することはコロナ禍以前と同様になるのか、引き続き注視する必要がある。

留学生の要望においては、上位項目は概ね日本人学生と共通であるが、コロナ禍以前から「国際化の推進」が強い特徴があり、今回調査においても同様であった。

## 【学部学生】

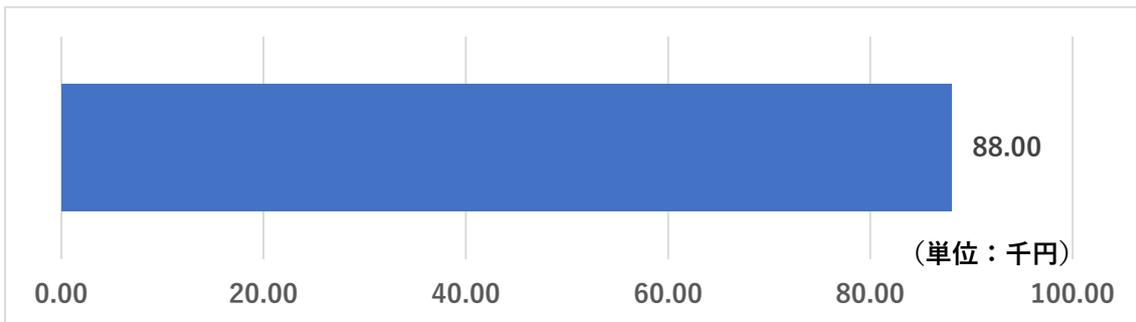
### Ⅶ. 生活費の状況

#### 20. 収入・支出

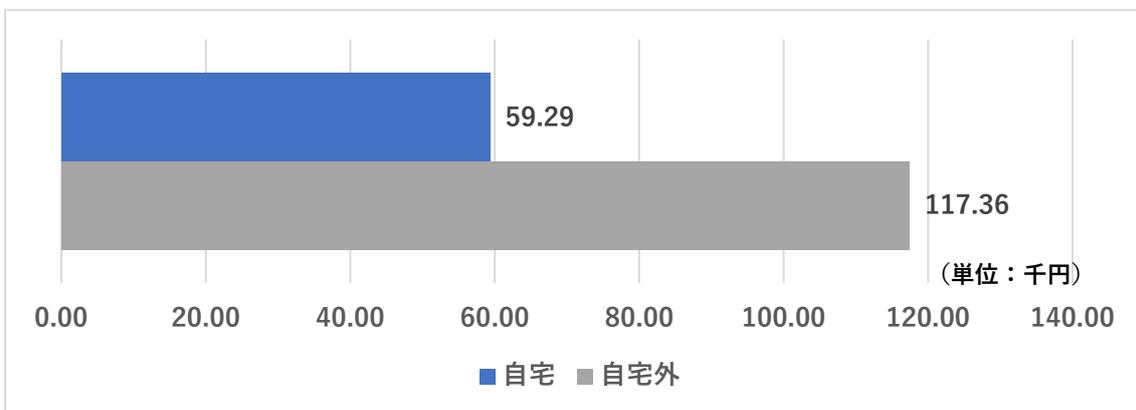
- 収入金額が増加し、収支の差が拡大

20. あなた自身の生活費の状況について、金額を選んでください。(最近3ヶ月の実績から、平均1ヶ月の収支額を、該当しない場合は「0円」を選んでください。)

収入合計



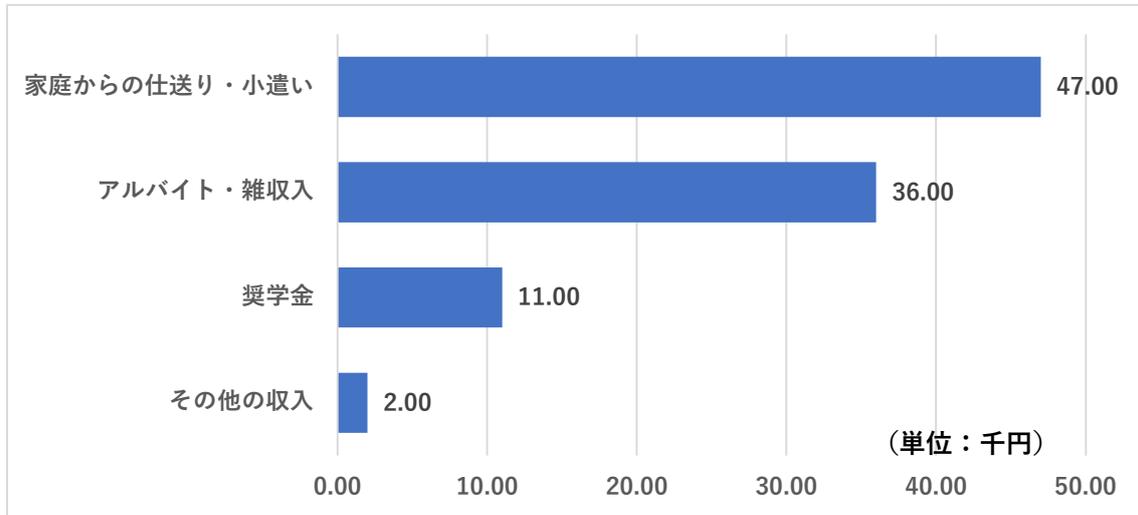
収入合計 (自宅生・自宅外生)



収入の合計は88,000円となり、前回調査(87,970円)とほぼ同様である。自宅生と自宅外生の収入合計差は58,070円となり、前回調査(60,440円)よりも縮小していた。

## 【学部学生】

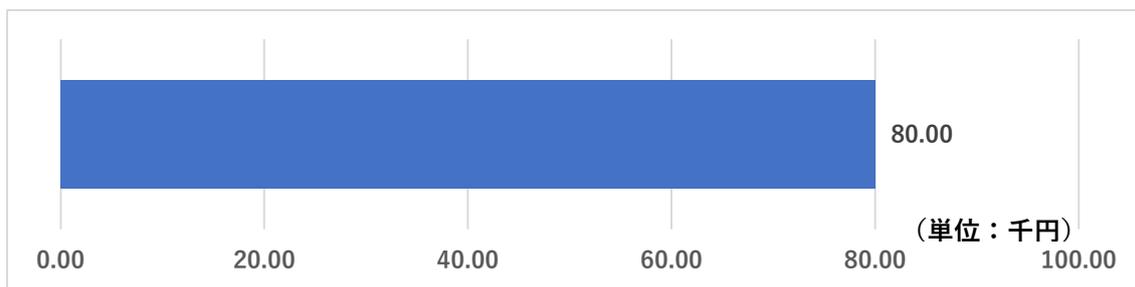
### 主な収入項目



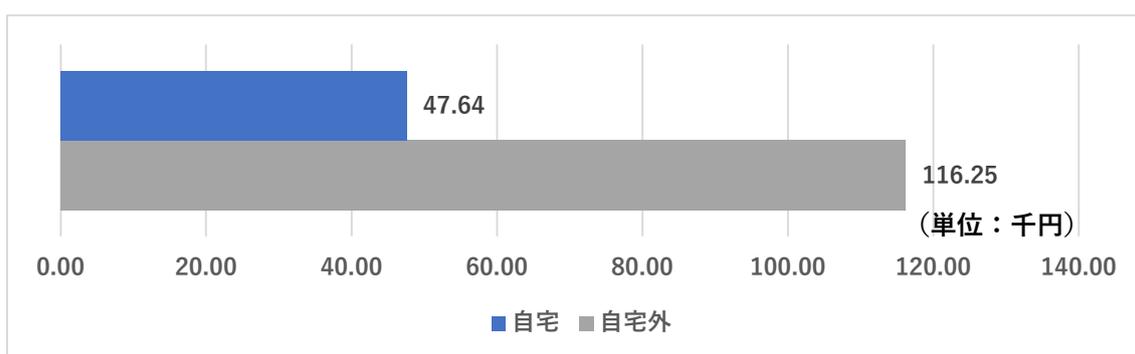
収入項目は、「家庭からの仕送り・小遣い」が最も高く47,000円、「アルバイト・雑収入」36,000円と続く。「家庭からの仕送り・小遣い」は前回調査から4,000円の増加となり、「アルバイト・雑収入」も3,000円増加した。なお、奨学金については、受給していない人も含めての平均としており、前回調査同様の結果となった。

## 【学部学生】

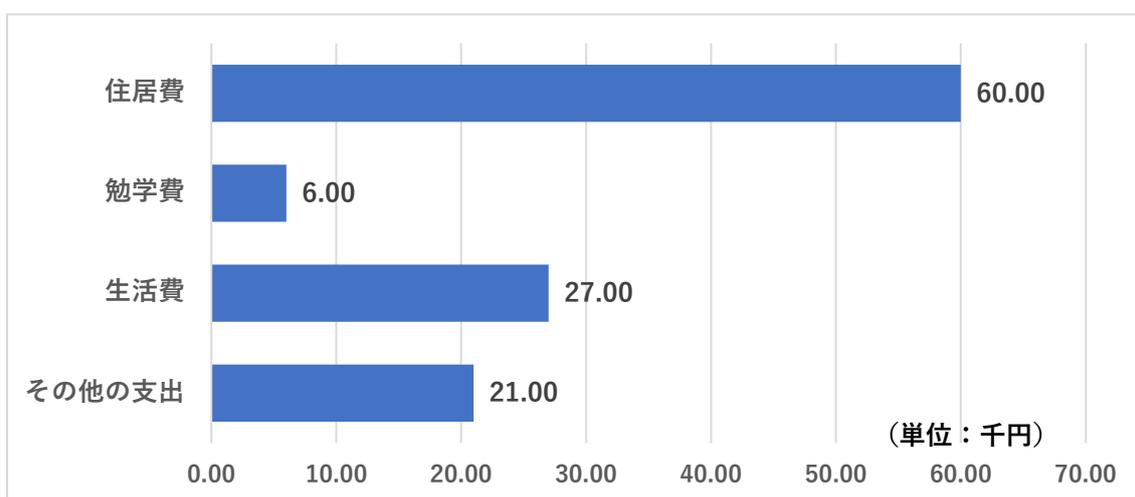
### 支出合計



### 支出合計（自宅生・自宅外生）



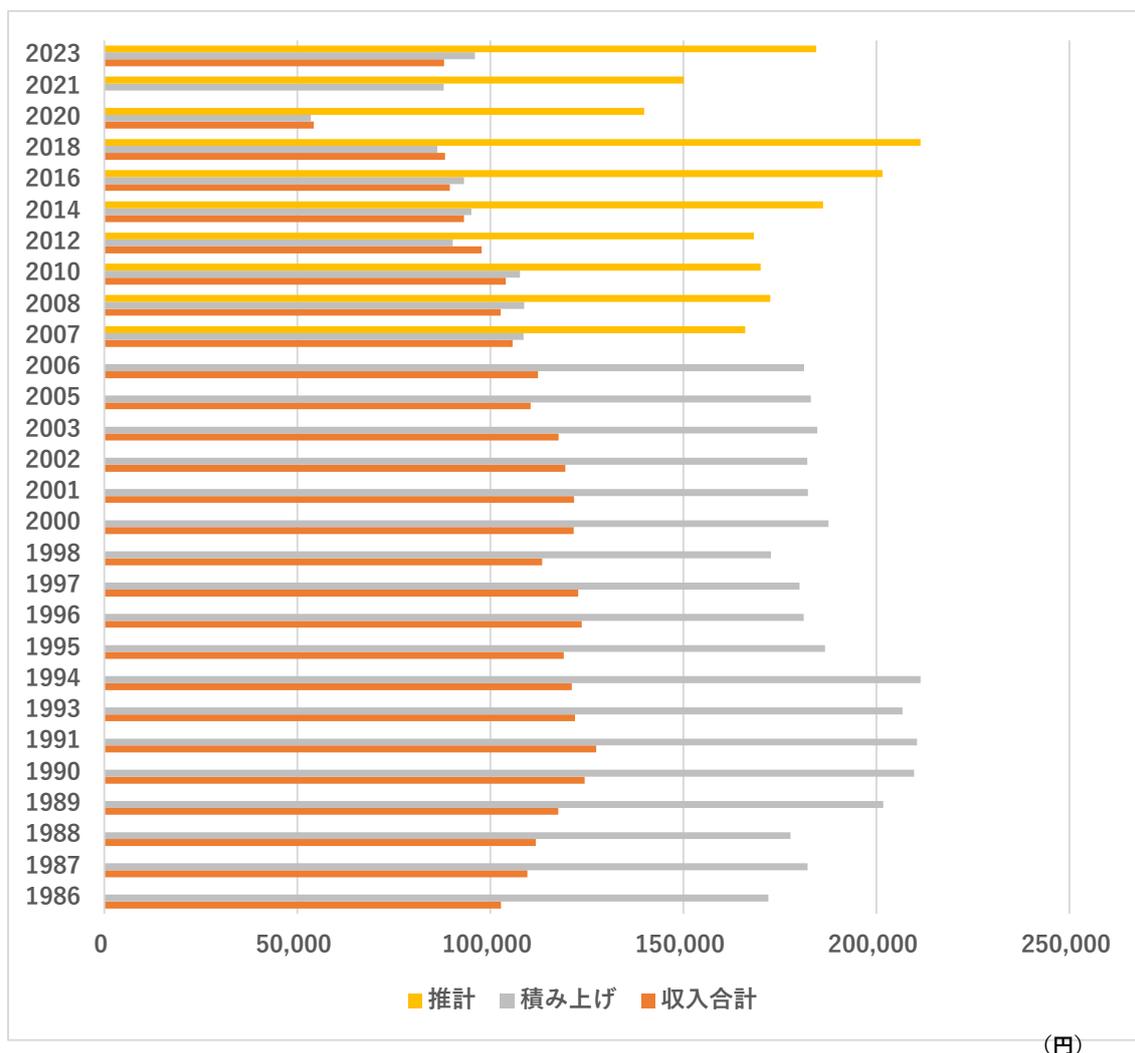
### 主な支出項目



一月あたりの支出合計（授業料は含まず）では80,000円と、前回調査より17,000円も増加した。自宅生、自宅外生ともに前回調査と比較して大幅に支出が増えており、自宅生は13,720円増加（前回33,920円）、自宅外生は22,710円増加（前回93,540円）となった。コロナ禍後に外出機会が増えたこと、物価上昇等が影響を与えている可能性が見られる。

## 【学部学生】

### 収入合計の経年変化



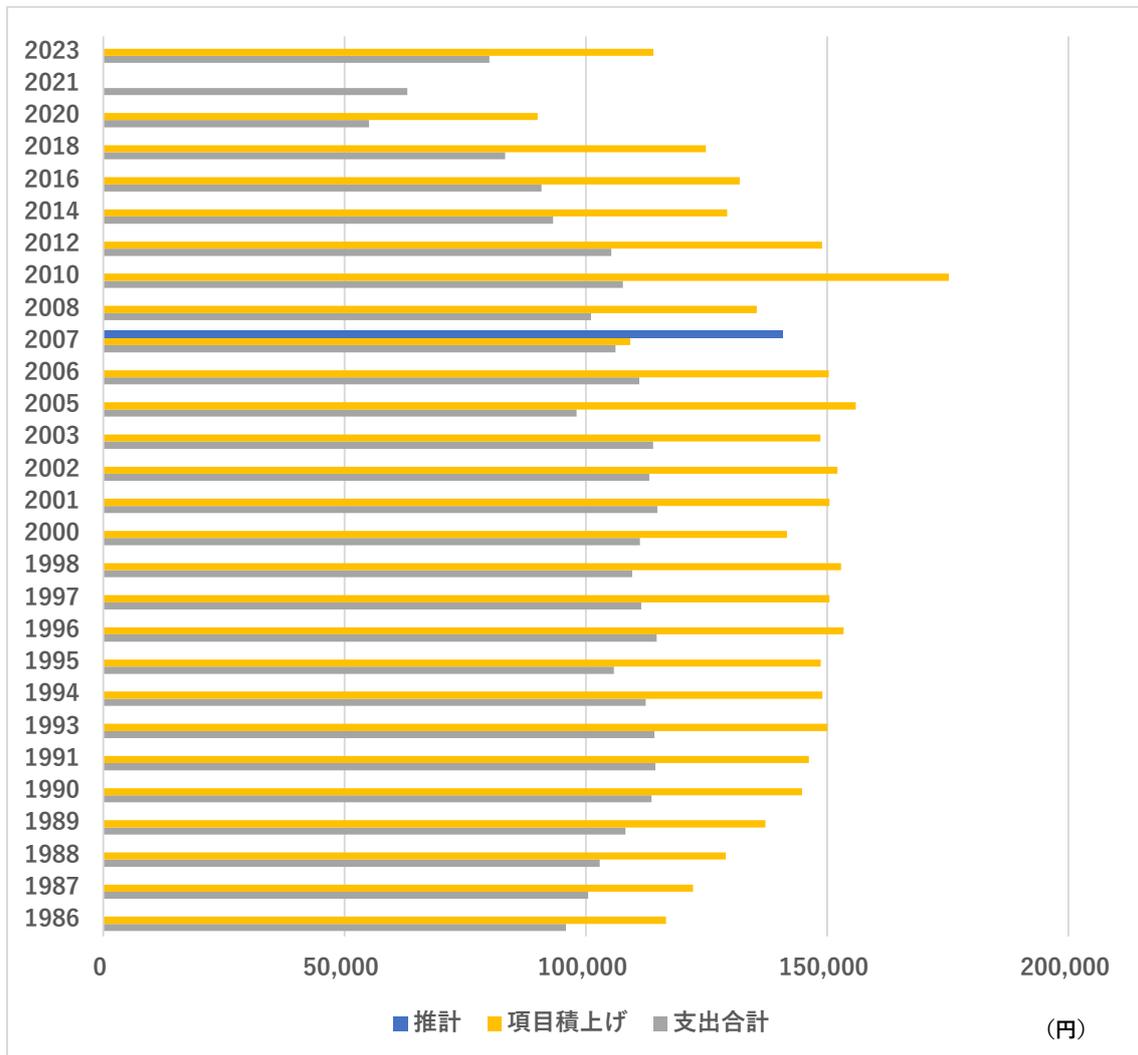
2006年までの調査では、各項目別の収入は該当者のみの平均額としていたが、2007年以降は全回答者の平均額に記載を変更したため、経年変化をみるグラフでは「推計」を出して補正している。

- 収入合計・・・「収入合計」全回答結果の平均額
- 積み上げ・・・「家庭からの仕送り・小遣い」「奨学金」「アルバイト・雑収入」「ローン・クレジット・借入金」「その他の収入」それぞれの回答結果（非該当「0円」も含む）の平均額合計
- 推計・・・「奨学金」、「アルバイト・雑収入」、「ローン・クレジット・借入金」、「その他の収入」は、それぞれ該当者のみの平均額を計算し、「家庭からの仕送り・小遣い」は全体の平均額のままとし、これを合計した推計値を推計額としている。

なお、前回調査より収入内訳（収入項目）において「ローン・クレジット・借入金」は回答項目から外している。

## 【学部学生】

支出合計の経年変化



- 支出合計・・・「支出合計」全回答結果の平均額
- 項目積上げ・・・「衣料費」「食費【自宅生は外食代】」「住居費【自宅外生のみ回答】」「勉強費」「教養・娯楽費」「通学費」「雑費」のそれぞれの回答結果（非該当「0円」も含む）の平均額合計

※ 2007年の「推計」

当該年調査において、住居費を「全学生の」平均額と誤って算出してしまったと推察されることが調査報告書発行以降に発覚した。そのため、2015年の報告書以降のグラフでは、自宅外学生のみ平均額に差替えたものを推計値として掲載している。

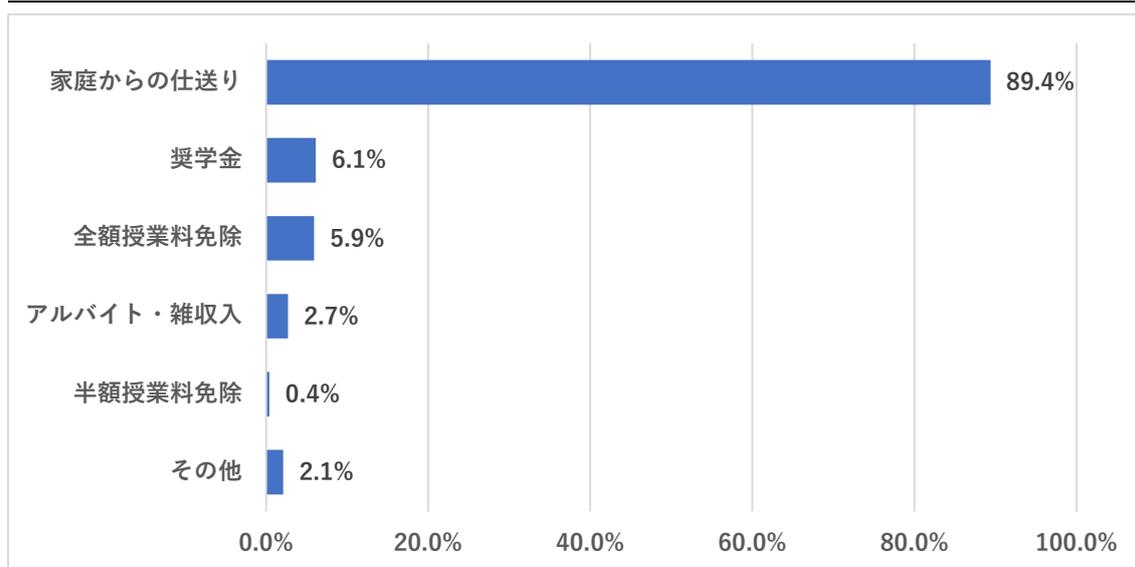
なお、前回調査では支出内訳（支出項目）の設問を大幅に減らしたため、項目積上げについては掲載していない。

## 【学部学生】

### 21. 授業料負担

- 前回調査同様「家庭からの仕送り」が9割程度
- 「奨学金」、「全額授業料免除」の割合がともに減少

21. 大学の授業料はどのように負担していますか。あてはまるものを全て選んでください。



授業料の負担は「家庭からの仕送り」が9割近くを占める。前回調査で第3位の「奨学金」は6.1%と前回調査（6.3%）より0.2%ポイント微減したが、第2位となった。前回調査で第2位であった「全額授業料免除」は5.9%で、前回調査より1%ポイント減少して第3位となっている。

## 【学部学生】

### 「Ⅶ. 生活費の状況」の分析（まとめ）

収入、支出ともに新型コロナウイルスが発生して以降大きく落ち込んでいたが、活動制限緩和後はコロナ禍前の水準へ回復傾向にあることが示唆される。収入については、前回調査と比較して大きな変化は見られなかったが、支出については大きく増加していた。支出増加の要因としては、活動制限緩和後の外出機会の増加や昨今の物価上昇などが想定される。また、授業料の負担では奨学金、全額授業料免除の割合が前回調査より微減していた。「Ⅺ.家庭の状況」でも後述するが、世帯年収が低い層が減少傾向にあることから、授業料の負担についても、相関関係にある可能性が高い。

留学生の収入・支出状況は、国内に保護者がいる学生とかなり異なる状況にあり、数字の比較が困難であるため、留学生版に詳細を記載する。

なお、国内生の自宅外学生と留学生に関しては、収入・支出の状況を比較できることが望ましいが、回答がスキップされやすい項目であり、母集団サイズの小さい留学生は、実態把握に限界がある。また国内生調査の結果も、年度による数字の変化が大きく、より現状を把握することができる指標を用いて、収入・支出状況の変化を正確にとらえていく調査上の工夫が必要である。

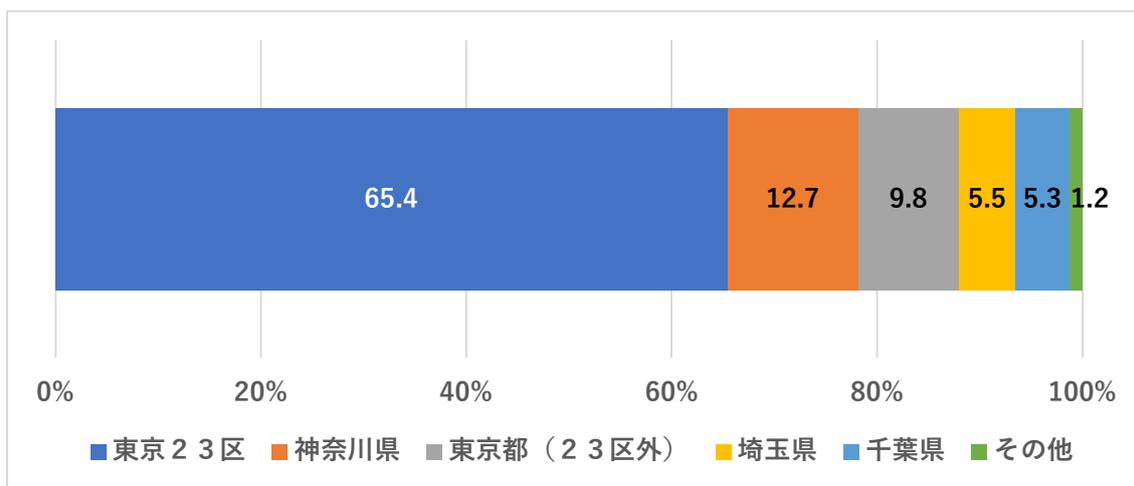
## 【学部学生】

### Ⅷ.通学・住居

#### 22. 居住地

- 現在の居住地上位3項目「東京23区」、「神奈川県」、「東京都（23区外）」

22. あなたは、現在どこに住んでいますか。あてはまるものを1つ選んでください。



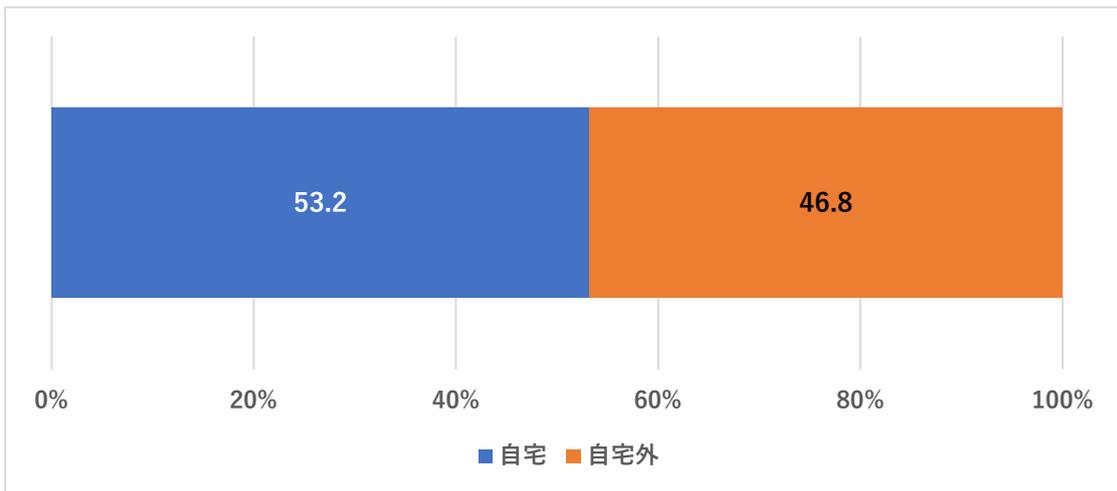
現在の居住地は「東京23区」が65.4%（前回調査61.7%）で、2020年調査から引き続きポイントを増加しながら第1位を維持している。「神奈川県」12.7%（前回調査11.5%）が「東京都（23区外）」9.8%（前回調査11.6%）を超えて第2位となった。

## 【学部学生】

### 23. 居住形態（自宅／自宅外）

- 半数以上が「自宅」に住んでいるものの、減少傾向

23. あなたの居住形態はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



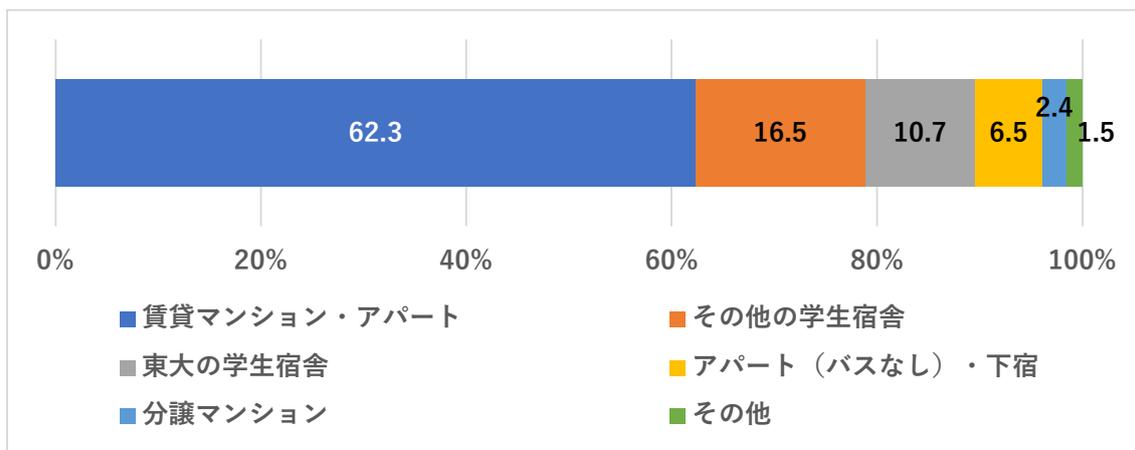
現在の居住形態は自宅が 53.2%（前回調査 52.8%、前々回調査 58.1%）、自宅外が 46.8%（前回調査 47.2%、前々回調査 41.9%）であった。前回調査と同様の傾向にある。

## 【学部学生】

### 24. 居住形態（自宅外選択者への設問）

- 居住形態上位 3 項目は、「賃貸マンション・アパート（バス付）」、「その他の学生宿舎」、「東大の学生宿舎」
- 「東大の学生宿舎」が減少した

24. 設問 2 3 で【居住形態が「2. 自宅外】】を選んだ方にお伺いします。現在あなたが住んでいるのはどれですか。あてはまるものを 1 つ選んでください。



自宅外生の居住形態をみると、「賃貸マンション・アパート（バス付）」（前回調査 61.4%、今回調査 62.3%）の割合が最も多い。次いで「その他の学生宿舎」（前回調査 16.6%、今回調査 16.5%）「東大の学生宿舎」（前回調査 12.9%、今回調査 10.7%）と続く。前回調査と概ね同様の傾向がみられるが、「東大の学生宿舎」が 2.2%ポイント減少した。

## 【学部学生】

### 「Ⅷ.通学・住居」の分析（まとめ）

居住地は「東京 23 区」、「神奈川県」、「東京都（23 区外）」が上位 3 項目を占め、駒場キャンパスまたは本郷キャンパスに近い居住地の割合が高かった。居住形態は「自宅外」が前回同様に過半数に近づきつつある。「自宅外」のうちでは「賃貸マンション・アパート（バス付）」の割合が最も高く、依然として 6 割以上を占めている。一方で、「自宅外」のうちでは「東大の学生宿舎」の割合が前回調査より減少し、追分国際学生宿舎の募集を停止した影響とみられる。

留学生の宿舎状況も、追分国際学生宿舎の募集停止による影響がみられるが、詳細は留学生版でまとめて報告を行う。

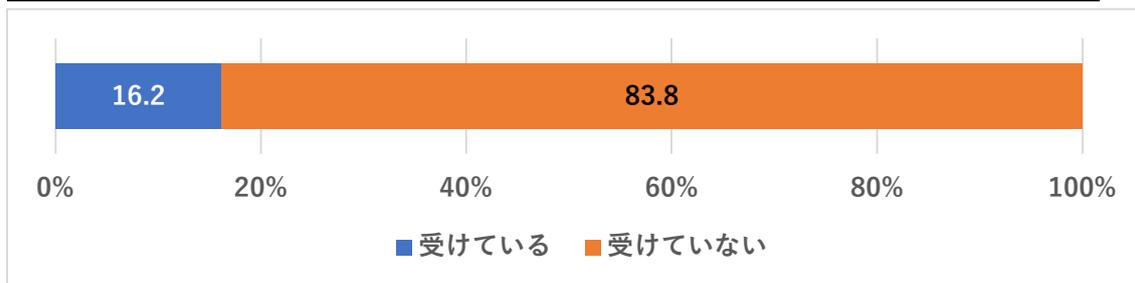
## 【学部学生】

### IX. 奨学金

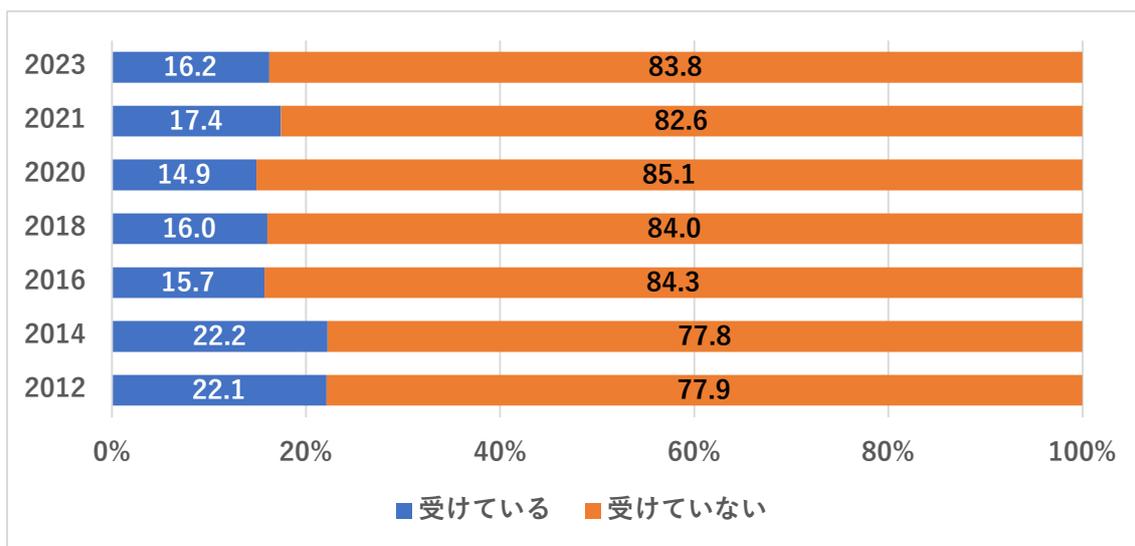
#### 25. 奨学金受給の有無

- 前回調査同様、8割以上が定期的な奨学金を「受けていない」

25. 現在、定期的な奨学金を受けていますか。あてはまるものを1つ選んでください。



受給状況の経年変化



定期的な奨学金は83.8%が受けていない。前回調査より1.2%ポイント増加したが、2016年以降大きな変動はない。

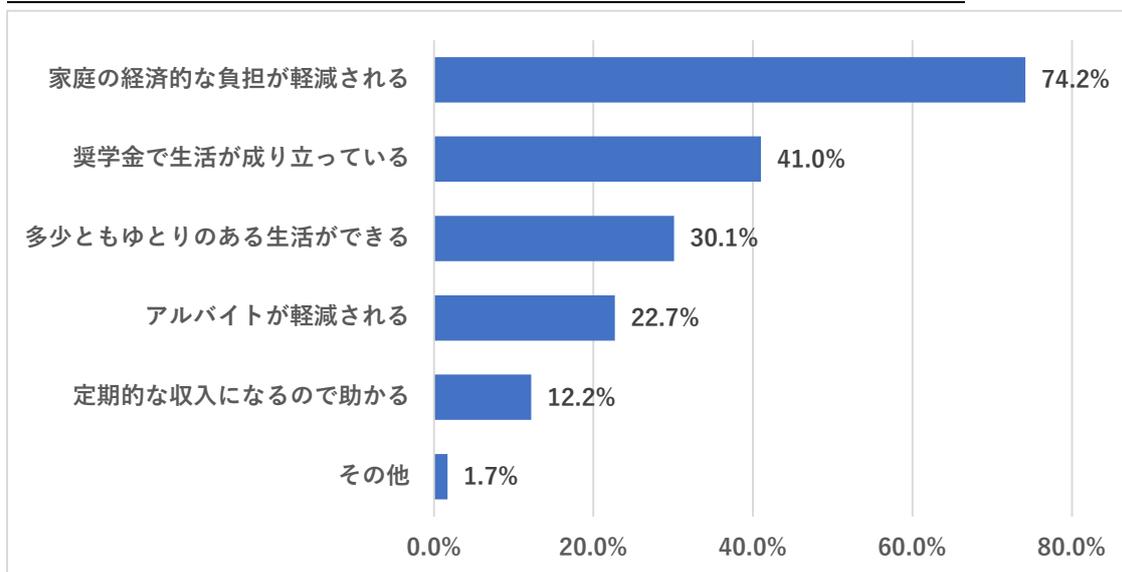
学部留学生については、奨学金を受けている学生は70.9%（前回69.0% 前々回62.2%）であった。また、そのうち日本政府の国費奨学金の受給者が32.1%（38.3% 36.5%）、民間奨学金28.6%（23.3% 28.8%）、東京大学の支給する奨学金受給者が23.2%（20.0% 21.2%）であった。

## 【学部学生】

### 26. 奨学金の役立て方

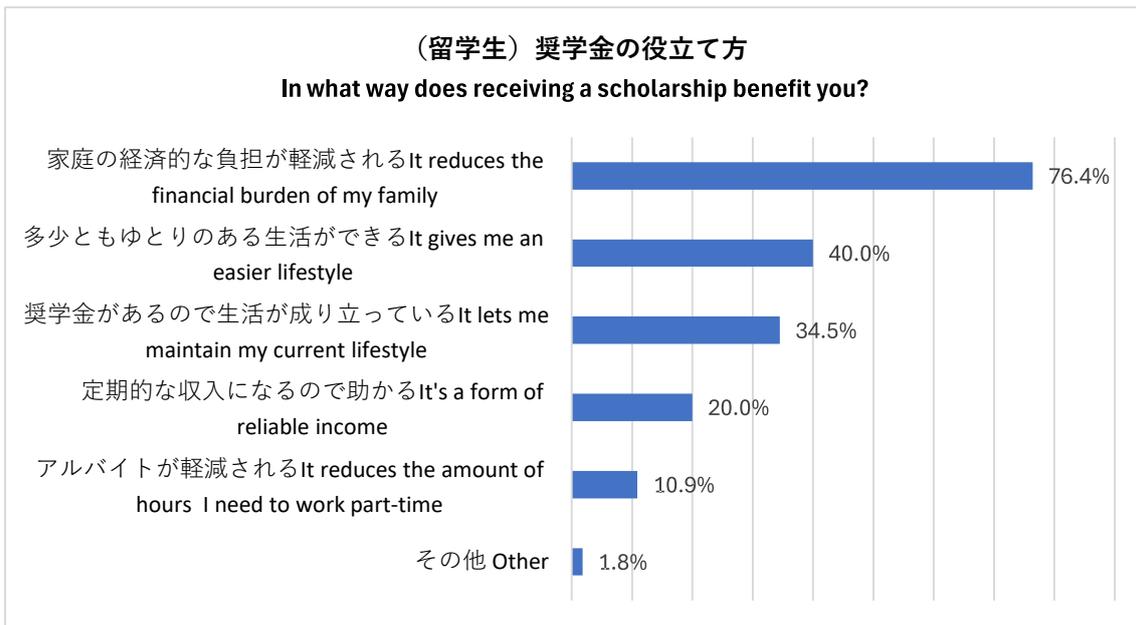
- 奨学金の役立て方は、「家庭の経済的な負担が軽減される」、「生活が成り立っている」、「多少ともゆとりのある生活ができる」
- 「奨学金があるので生活が成り立つ」の回答割合を所得階層別でみると、450万円未満の者が過半数近い

26. 設問25で【奨学金を「受けている」】と答えた方にお伺いします。奨学金はどんな面で役に立っていますか。主にあてはまるものを2つまで選んでください。



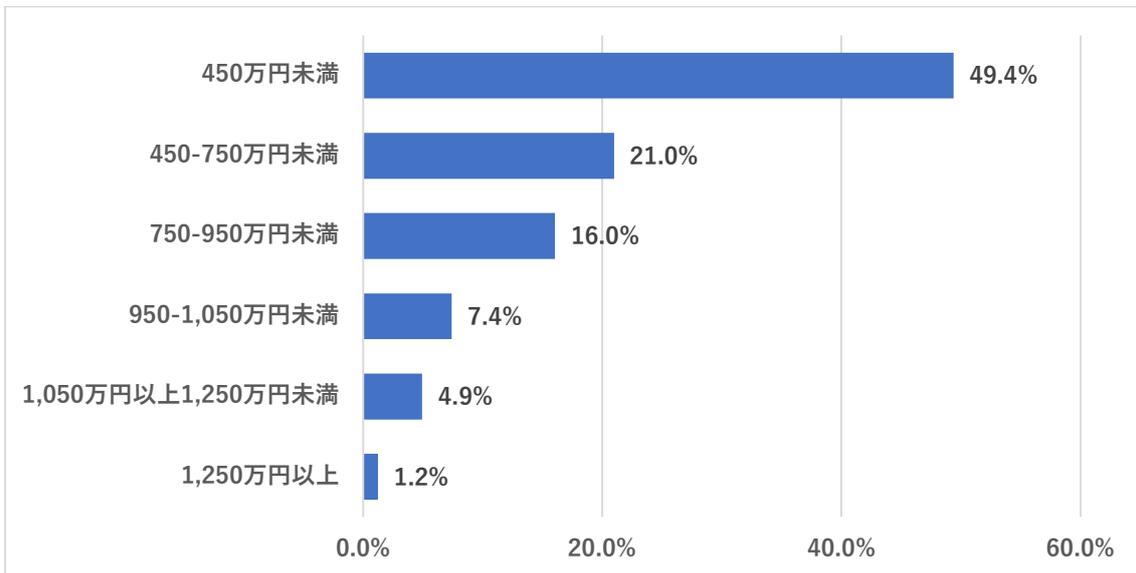
奨学金が役に立つ面は「家庭の経済的な負担が軽減される」が最も多く74.2%、「生活が成り立っている」41.0%、「多少ともゆとりのある生活ができる」30.1%、と続く。前回調査と比較して、「生活が成り立っている」と「多少ともゆとりのある生活ができる」の順位が逆転し、「生活が成り立っている」（前回調査28.3%）は12.7%ポイントも増加した。

## 【学部学生】



受給している学部留学生のうち、奨学金受給の効果として最も選択されたのは、「家庭の経済的な負担の軽減」76.4%（75.0%、84.3%）であった。奨学金の役立て方として、各項目の選択状況は、国内生と大きく変わらない。

「奨学金があるので生活が成り立っている」（所得階層別）



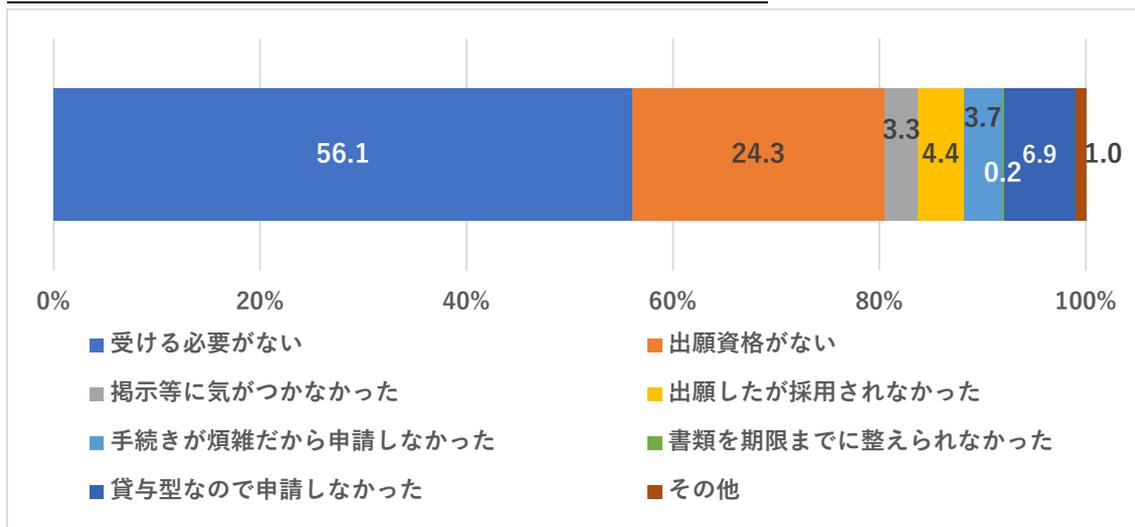
「奨学金があるので生活が成り立つ」の回答割合を所得階層別に確認したところ、450万円未満の割合が49.4%と前回調査（51.6%）より2.2%ポイント減少した。750-950万円未満の層では16.0%と前回調査（19.4%）より3.4%減少していたが、950-1,050万円未満の層では7.4%となり、前回調査（4.8%）より2.6%ポイント増加していた。前回調査同様に、所得階層が低くなるほど生活が奨学金によって支えられていることが示唆されたが、高所得層でも奨学金が生活の支えになっていることが見られる。

## 【学部学生】

### 27. 奨学金不受給理由

- 奨学金不受給理由「受ける必要がない」、「出願資格がない」、「貸与型なので申請しなかった」

27. 設問25で【奨学金を「受けていない】と答えた方にお伺いします。その理由はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



奨学金不受給理由は「受ける必要がない」（今回調査 56.1%、前回調査 60.3%）が過半数を占め、「出願資格がない」（今回調査 24.3%、前回調査 25.1%）、「貸与型なので申請しなかった」（今回調査 6.9%、前回調査 6.4%）と続く。概ね全体的な傾向としては前回と同じである。

## 【学部学生】

### 「IX.奨学金」の分析（まとめ）

全体では、およそ 80%以上が定期的な奨学金を受給していないこと、受給者にとっては、奨学金は「家庭の経済的な負担が軽減される」といったメリットがあり、生活を支える役割を大いに果たしていることなど、前回同様の傾向を示していた。なお、奨学金不受給理由は「受ける必要がない」が過半数を占めているが、「出願資格がない」、「貸与型なので申請しなかった」の合計は3割を超える結果となっていた。

留学生の回答者のうち、約 7 割の学生が奨学金を受給しており、前回調査と同様の状況である。奨学金の効果については、国内生と留学生の回答傾向に大きな相違はない。

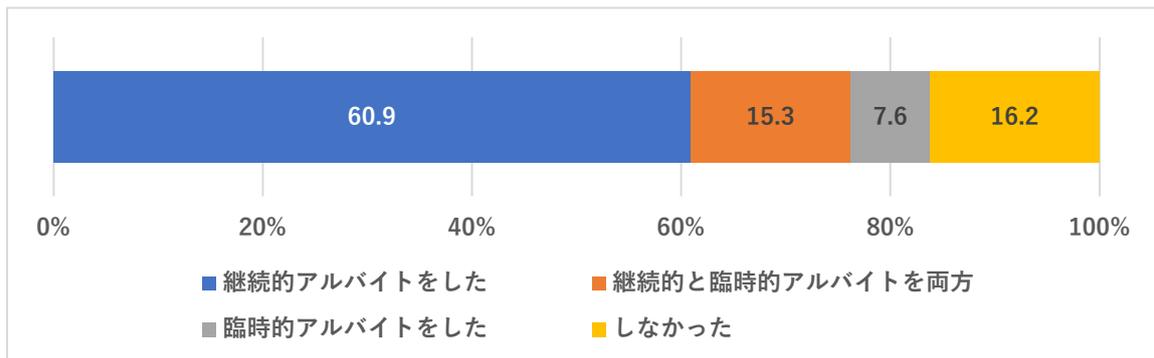
## 【学部学生】

### X. アルバイト

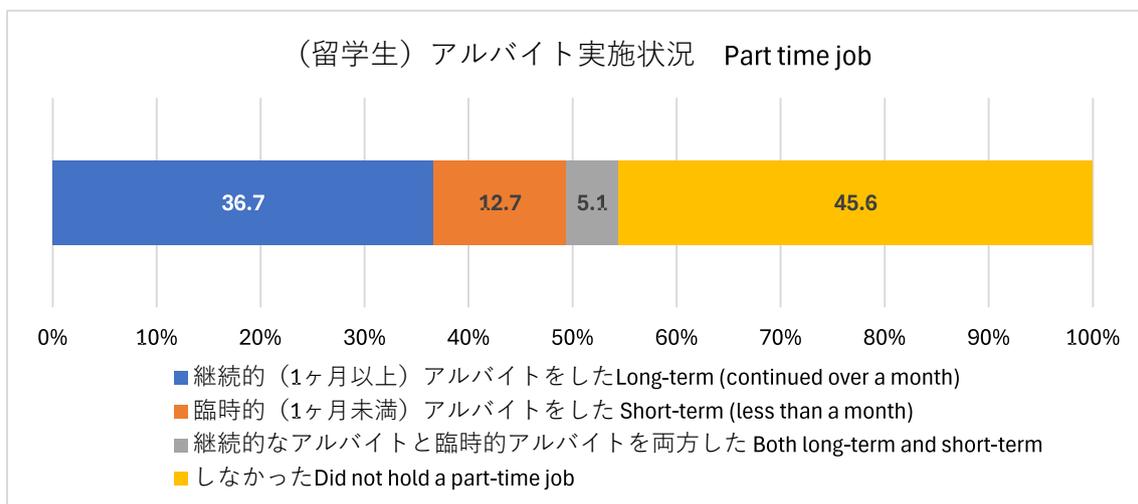
#### 28. 過去1年間のアルバイト実施状況

- アルバイト従事率 83.8%、前回調査に引き続き増加傾向である
- 男子より女子の方がアルバイトをしている傾向がある

28. 過去1年間にアルバイトをしましたか。あてはまるものを1つ選んでください。



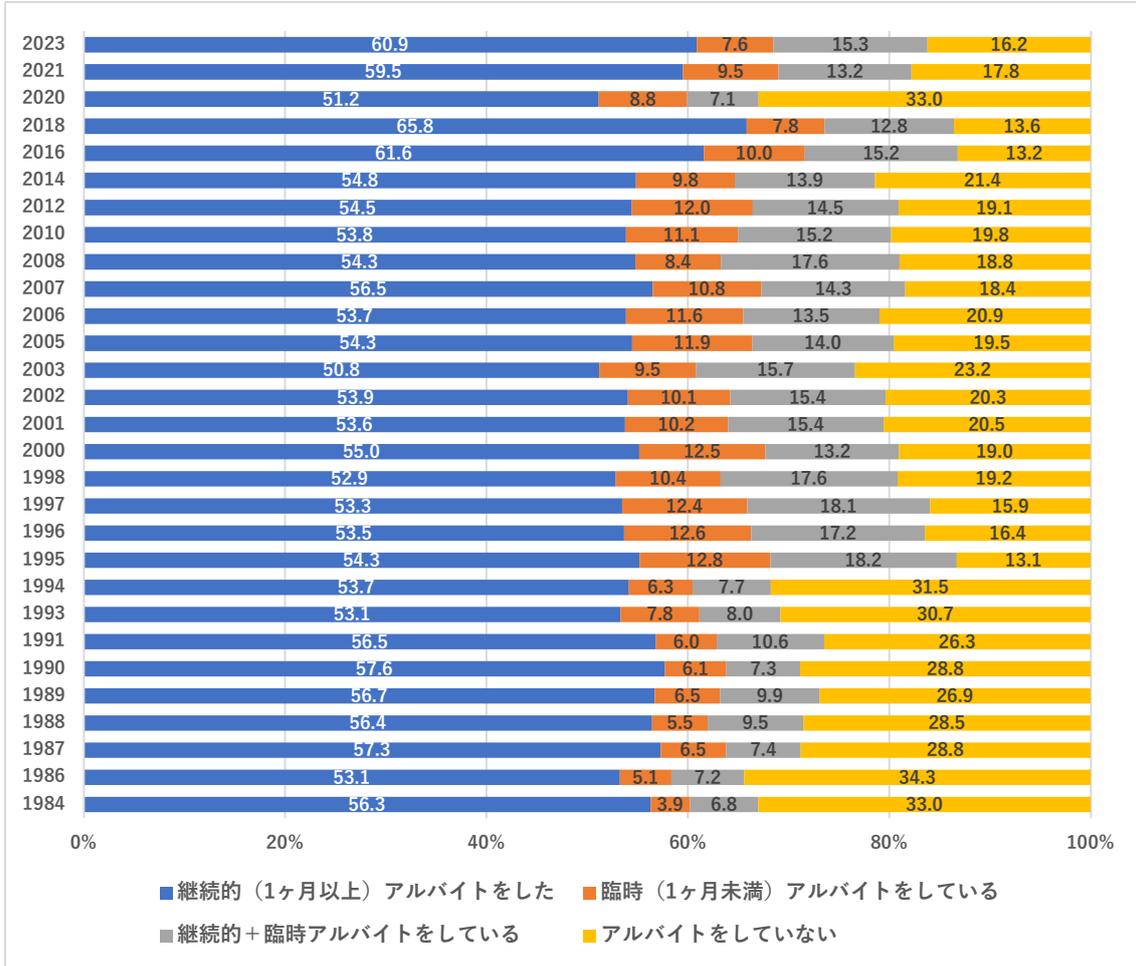
「継続的アルバイトをした」の割合が一番高く、60.9%で前回調査より1.4%ポイント増加した。



学部留学生で、継続的アルバイトをした学生は36.7% (前回 42.0% 前々回 42.9%)、継続的なアルバイトと臨時的なアルバイトの両方をした学生は5.1% (4.5% 6.5%)、しなかった学生は45.6% (46.6% 36.4%)であった。日本人学生と比較すると、アルバイトをしていない学生が多い。

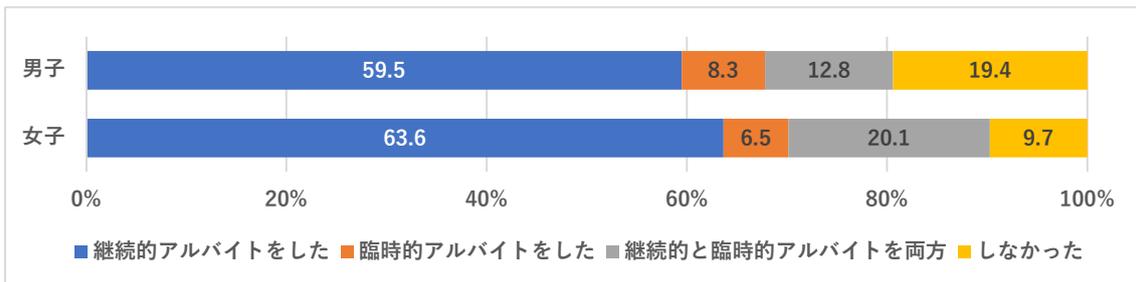
## 【学部学生】

### アルバイト実施状況の経年変化



アルバイト従事率は前回調査より増加し、「アルバイトをしていない」の割合は16.2%で2020年調査から減少傾向である。

### アルバイト実施状況（男女別）



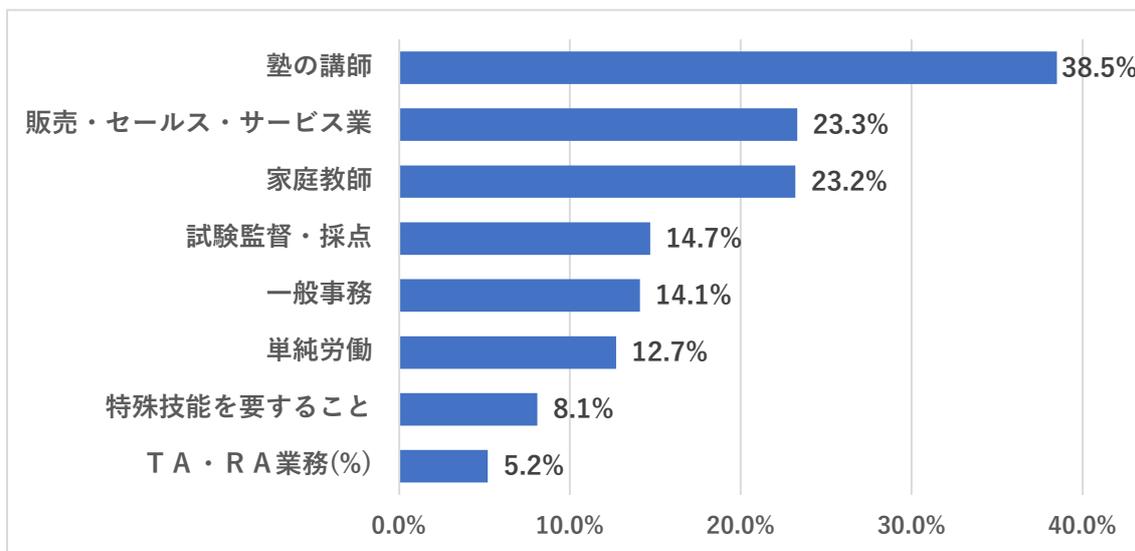
男女間でアルバイト実施の有無に差はあるが、概して男子よりも女子のアルバイト実施率が高い。「継続的アルバイトをした」、「臨時的アルバイトをした」、「継続的と臨時的アルバイトを両方した」の合算値は男子で80.6%、女子で90.3%と9.7%ポイントの差が認められ、前回調査より差は拡大した。前回調査と比べて男女ともにアルバイト実施率が増加した。

## 【学部学生】

### 29. アルバイトの種類

- アルバイトの種類は前回調査同様「塾の講師」、「販売・セールス・サービス業」、「家庭教師」

29. 設問28で「過去1年間にアルバイトをした」と答えた方にお伺いします。そのアルバイトの種類はどれにあたりますか。主にあてはまるものを2つまで選んでください。



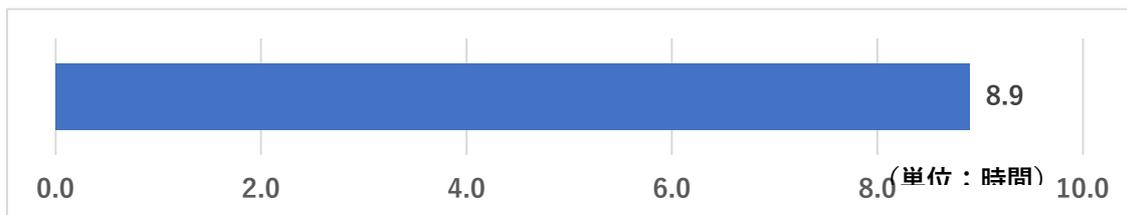
アルバイトの種類は「塾の講師」が最も多く 38.5%（前回調査 41.2%）、「販売・サービス・セールス業」23.3%（前回調査 16.9%）、「家庭教師」23.2%（前回 26.2%）と続く。「販売・サービス・セールス業」は前回調査よりも 6.4%ポイント増加して、上位3項目に入った。

## 【学部学生】

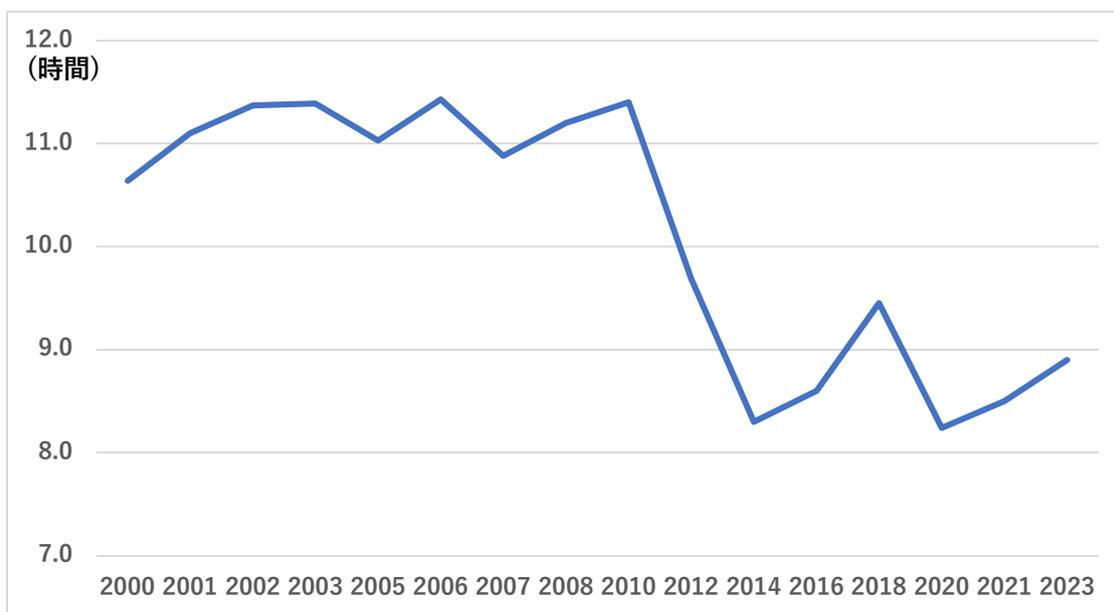
### 30. アルバイトの時間

- アルバイトの時間は週およそ 8.9 時間

30. アルバイトに費やした時間はどのくらいでしたか。(往復時間を含め、一週間の合計時間)



アルバイト従事時間の経年変化



アルバイトに費やした時間は 8.9 時間であり、前回の 8.5 時間より増加した。2020 年調査より増加傾向にある。

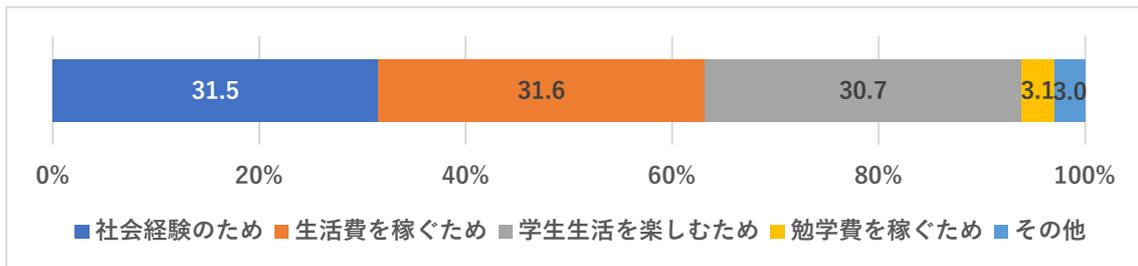
留学生のアルバイトの一週間あたりの従事時間は、8.1 時間 (SD=6.39) であった (ただし、アルバイト経験のある学生のみを対象として算出しているため、国内生のアルバイト時間との比較はできない)。前回 2021 年度調査では 10.8 時間、2020 年度調査では 8.0 時間であり、従事経験のある学生に関しては、従事時間はコロナ禍初期に近づいている。

## 【学部学生】

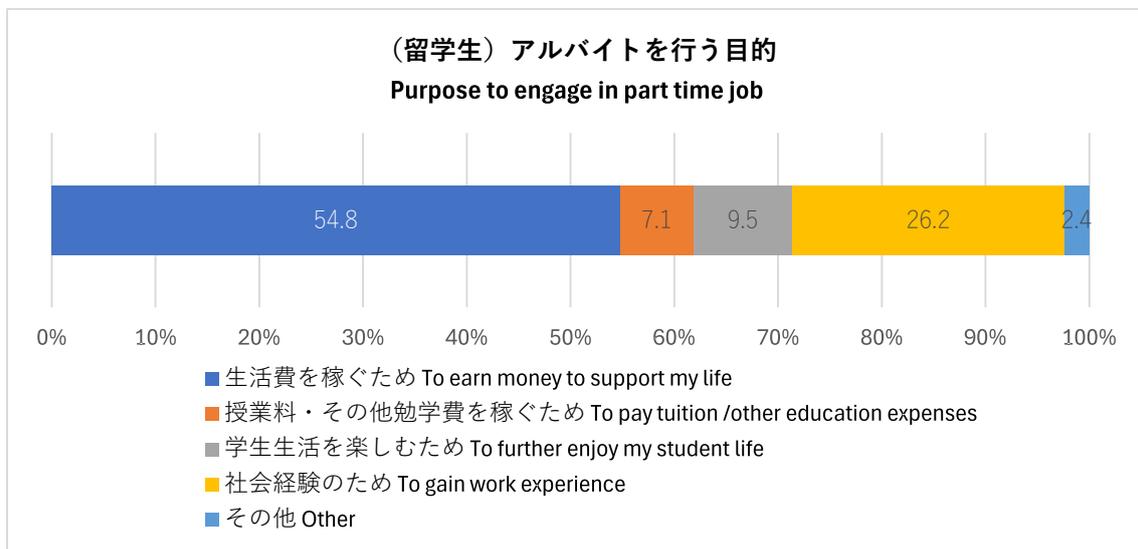
### 31. アルバイトの目的

- アルバイトの目的は「生活費を稼ぐため」、「社会経験のため」、「学生生活を楽しむため」
- 所得が少ない者の約半数が「生活費を稼ぐため」にアルバイトを行っている

31. アルバイトをした目的はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



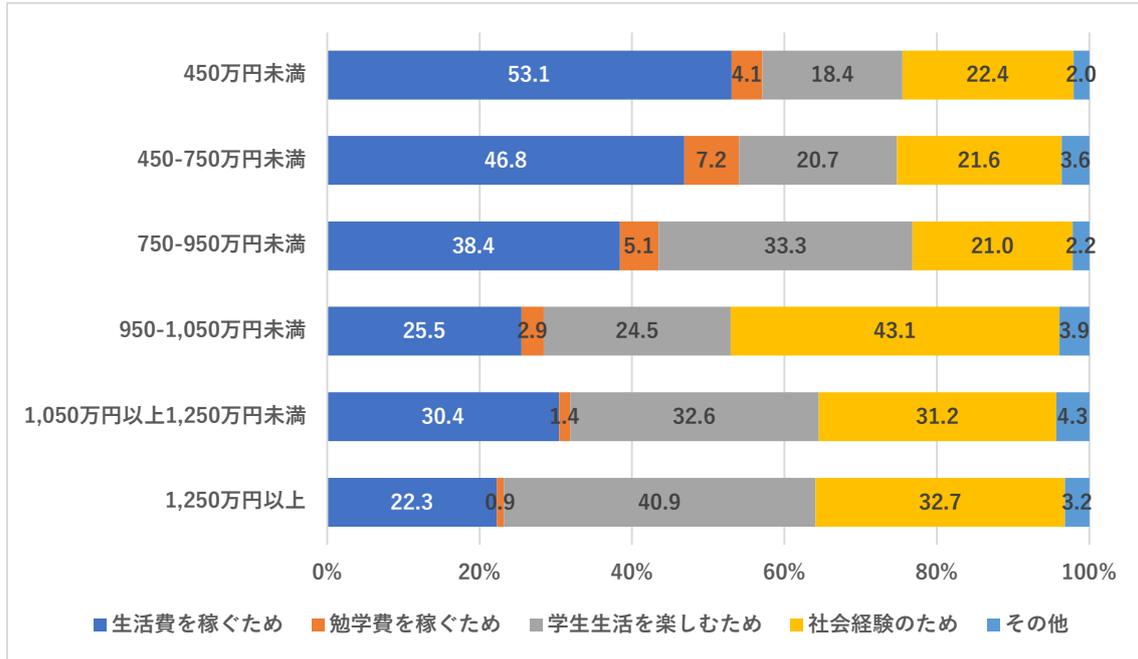
アルバイトの目的は「生活費を稼ぐため」が31.6%で最も多く（前回調査26.5%）、「社会経験のため」31.5%（前回調査37.0%）、「学生生活を楽しむため」30.7%（前回28.0%）と続く。前回調査より「生活費を稼ぐため」が5.1%ポイント増加し、他の項目と僅差ではあるが、最も多い割合となった。



学部留学生のアルバイト従事目的は、「生活費を稼ぐため」54.8%（前回48.9% 前々回53.2%）、「社会経験のため」26.2%（27.7% 25.5%）、「学生生活を楽しむため」9.5%（17.0% 12.8%）であった。国内生と比べると生活費を補填する目的でアルバイトをする学生が多い傾向は以前からみられるが、「学生生活を楽しむため」を選択した学生が、前回調査時よりも減少している。

## 【学部学生】

アルバイトの目的（所得階層別）



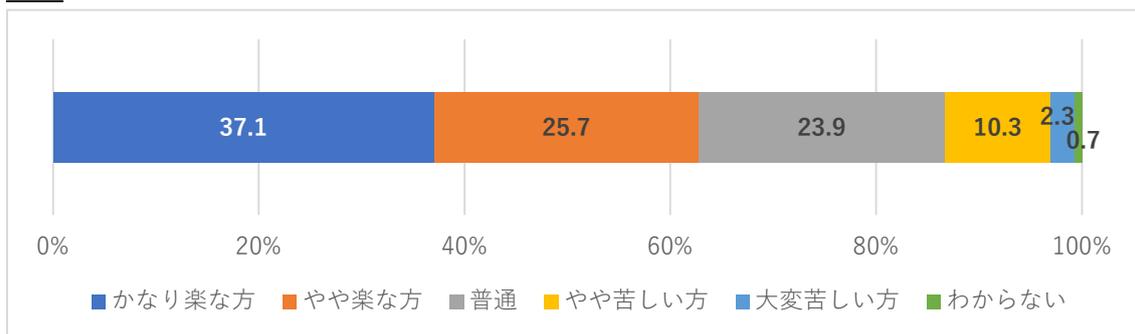
アルバイトの目的を所得階層別にみたところ、450万円未満の層では「生活費を稼ぐため」が53.1%と最も多く（前回調査43.0%）、今回調査では過半数を占めた。また所得が高くなるにつれて、学生生活を楽しむためや社会経験のためにアルバイトをしている学生が多くなる傾向にある。

## 【学部学生】

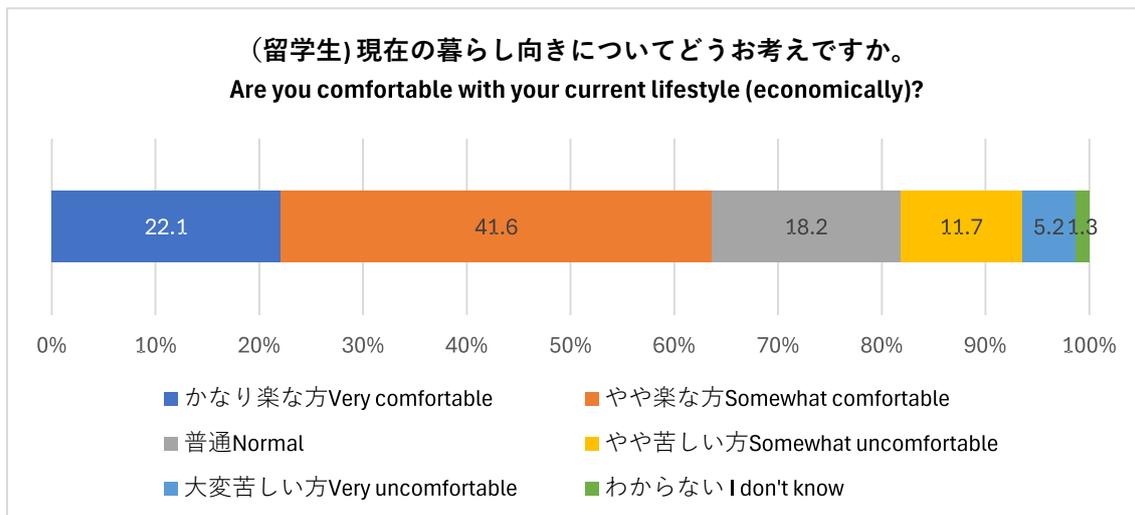
### 32. 現在の暮らし向き

- 暮らし向き「楽な方」62.8%、前回調査より微減
- 所得が450万円未満層の「楽な方」「苦しい方」の各割合は、回答者全体の割合と比較して、前回調査よりも縮小した

32. 現在の暮らし向きについてどうお考えですか。あてはまるものを1つ選んでください。



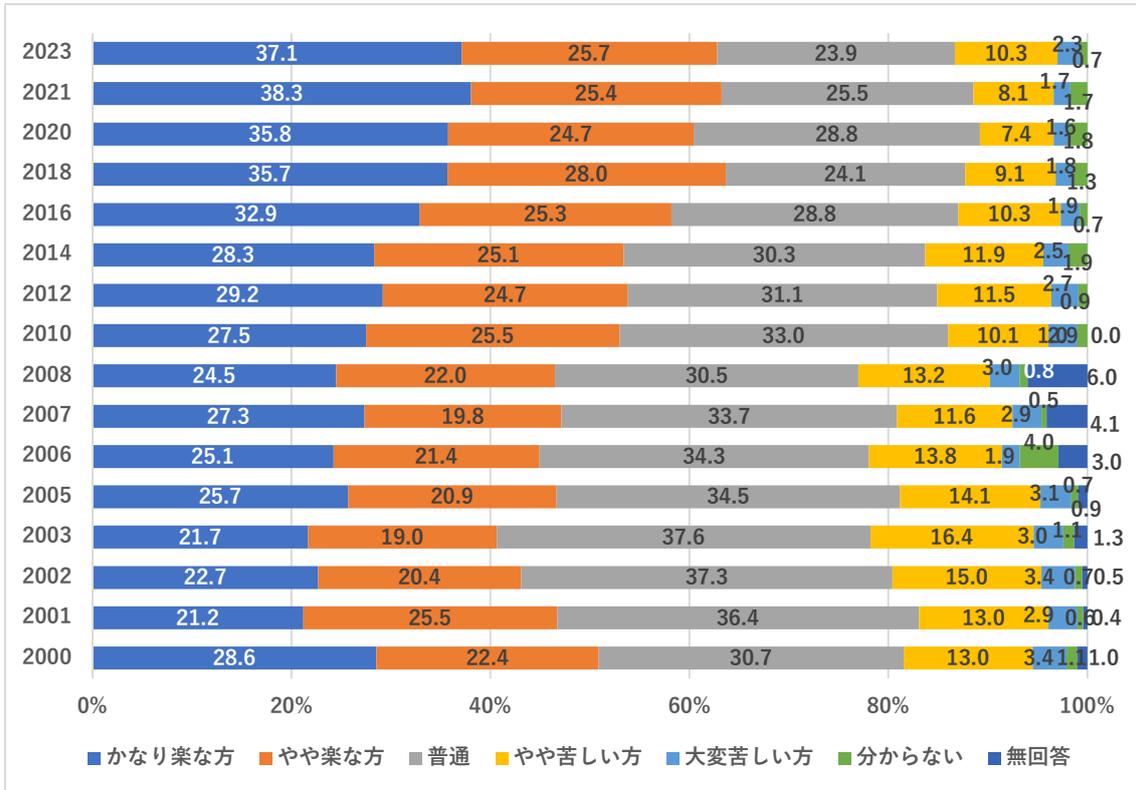
現在の暮らし向きについて、「かなり楽な方」「やや楽な方」は合計で62.8%で前回調査(63.7%)よりも微減した。



学部留学生の現在の暮らし向きは、「かなり楽な方」(22.1%)、「やや楽な方」(41.6%)、「普通」(18.2%)、「やや苦しい」(11.7%)「大変苦しい」(5.2%)であった。日本人学生よりも、「かなり楽」と回答した学生の割合は少なく、「苦しい」と感じている学生の割合も高めである。特筆すべき点として、「やや楽な方」と回答した留学生の割合が、前回の24.3%と比べて大幅に増加している。

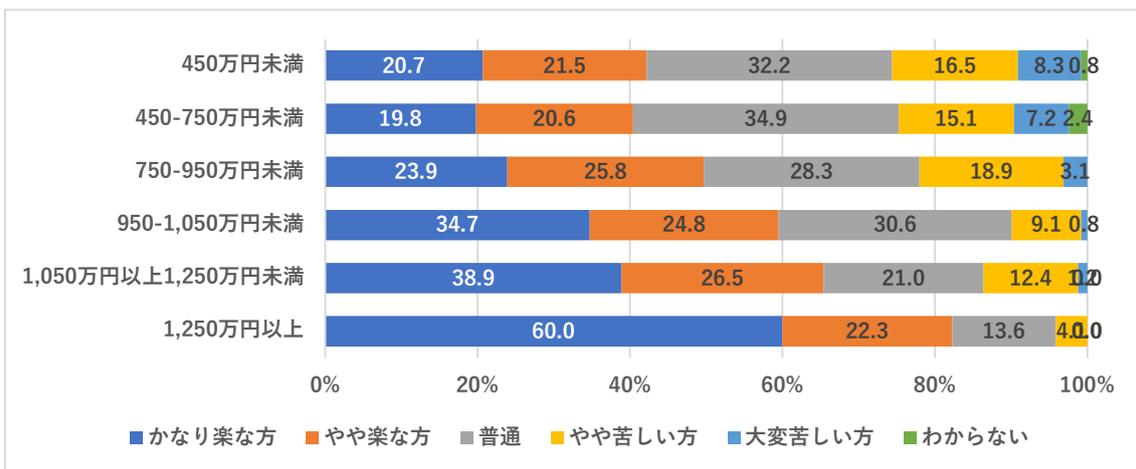
## 【学部学生】

「現在の暮らし向き」の経年変化



前回調査と比べて「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値は0.9%ポイント減少したが、前回調査とほぼ同水準のままである。

「現在の暮らし向き」(所得階層別)



所得階層別に暮らし向きに違いがみられた。暮らし向きが「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値は450万円未満の層では42.2%（前回33.8%）、「やや苦しい方」「大変苦しい方」の合算値は24.8%（前回33.8%）となった。この数値は回答者全体と比べて大きな差があるが、前回調査と比較してその差は縮小している。

## 【学部学生】

### 「X. アルバイト」の分析（まとめ）

過去1年間にアルバイトをしたことがある者は83.8%で、前回調査より引き続き増加傾向である。活動制限緩和に伴う飲食店などの営業再開も背景の一つと考えられるが、アルバイトの種類をみると、「販売・セールス・サービス業」が上位2項目となった。一方、「塾の教師」と「家庭教師」が合計で61.7%と前回調査より5.7%ポイント減少した。また、男子よりは女子の方がアルバイトをしている傾向は変わっていない。アルバイトの目的について、僅差ではあるものの今回調査では「生活費を稼ぐため」が最も多くなった。暮らし向きについては、新型コロナウイルスの発生前と比べて大きな変化は見られなかったが、所得が少ない者(450万円未満)の「苦しい方」と回答した割合は前回調査より減少した。

学部留学生は、奨学金受給者の割合が国内生よりも高いこともあり、アルバイト従事経験のある学生の割合は国内生よりも低い。アルバイトを行っている学生は、生活費を補填する目的でアルバイトをする学生が多い傾向は変わらずみられるが、「社会経験のため」の学生もおり、目的は多様であると考えられる。

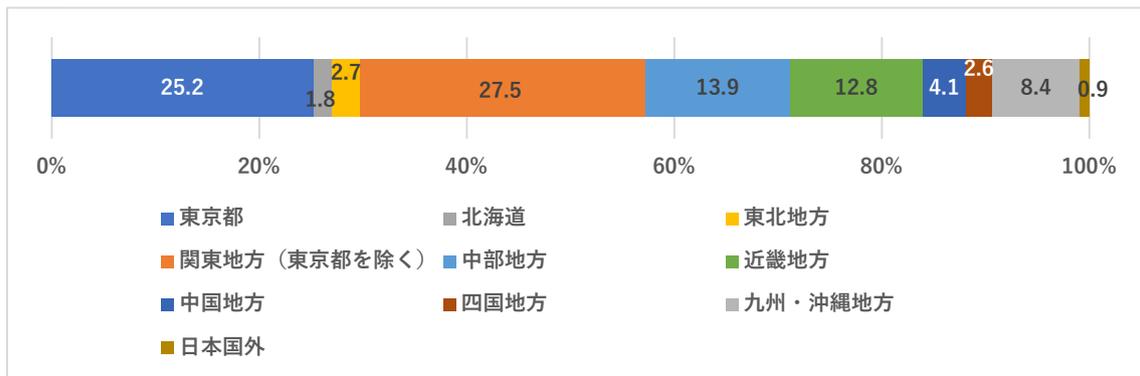
# 【学部学生】

## XI. 家庭の状況

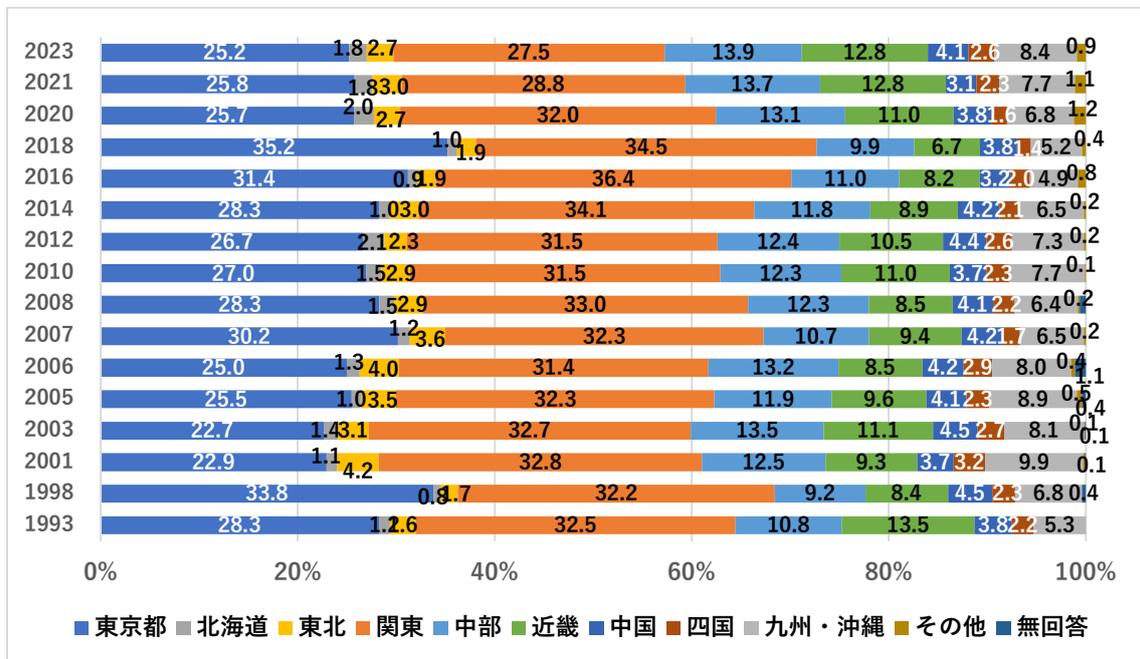
### 33. 高校時代の居住地

- 高校時代の居住地の上位は「関東地方（東京都を除く）」、「東京都」、「中部地方」
- 男子は「関東地方（東京都を除く）」が多く、女子は「東京都」が多い

33. あなたが大学入学前の高校時代（その年齢当時）に住んでいた地方を1つ選んでください。



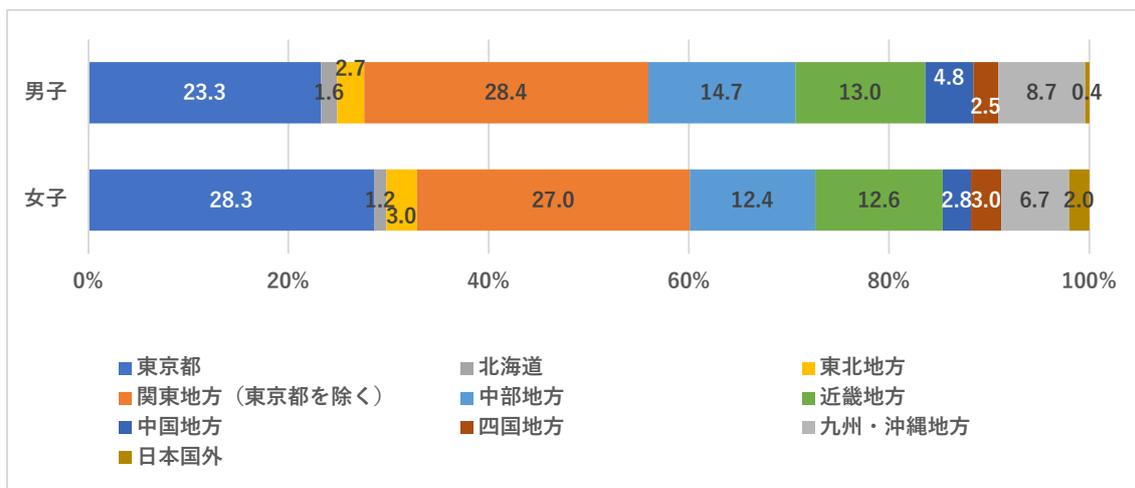
「高校時代の居住地」の経年変化



高校生相当の年齢のときの居住地は「関東地方（東京都を除く）」が最も多いが、前回調査より1.3%ポイント減少した。東京都を含めた関東地方の割合は近年減少傾向ではあるものの、長い期間で見ると大きな変動はない。

## 【学部学生】

「高校時代の居住地」(男女別)



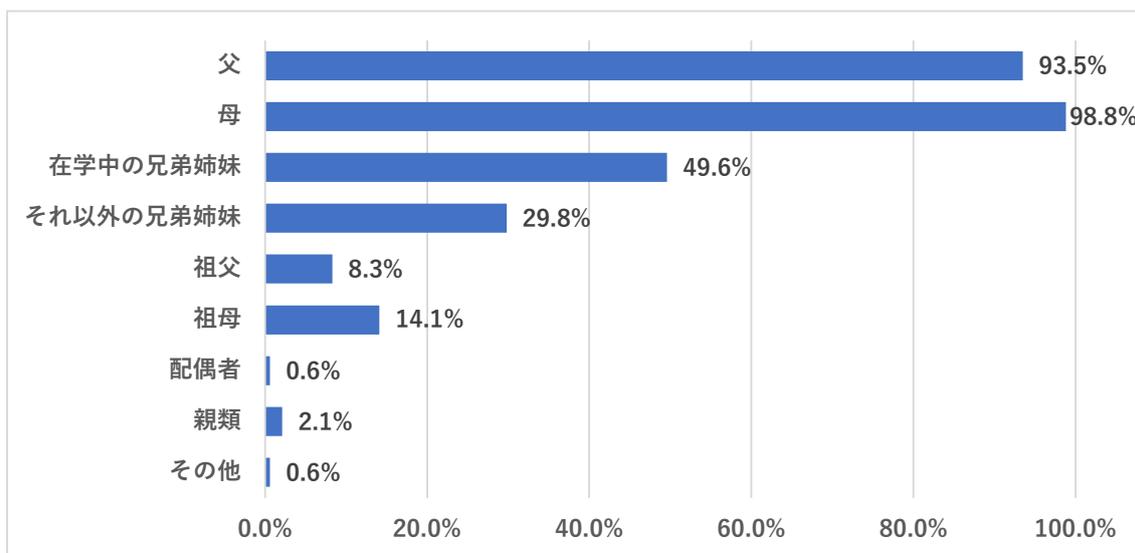
男女間の高校時代の居住地は、前回調査と同じ傾向で、どちらかといえば男子は「関東地方（東京都を除く）」が多く、女子は「東京都」が多いものの、全体的な傾向としては大きな変化はみられない。

## 【学部学生】

### 34. 家族構成

- 家族構成は前回調査と概ね変わらなかったものの、「在学中の兄弟姉妹」が増加、「それ以外の兄弟姉妹」が減少

34. 家族構成について、あてはまるもの全てを選んでください。



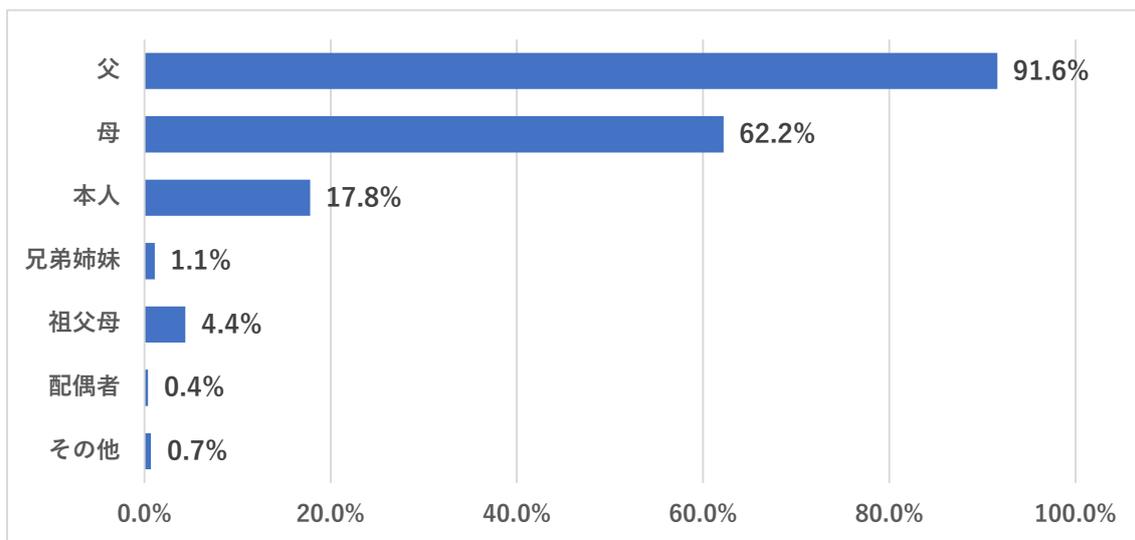
家族構成は前回調査と概ね変わらず、「父」「母」が多数を占め、「在学中の兄弟姉妹」「それ以外の兄弟姉妹」と続く。「在学中の兄弟姉妹」の割合が前回調査の 47.0%から 2.6%ポイント増加し、「それ以外の兄弟姉妹」が前回調査の 32.2%から 2.4%ポイント減少している。

## 【学部学生】

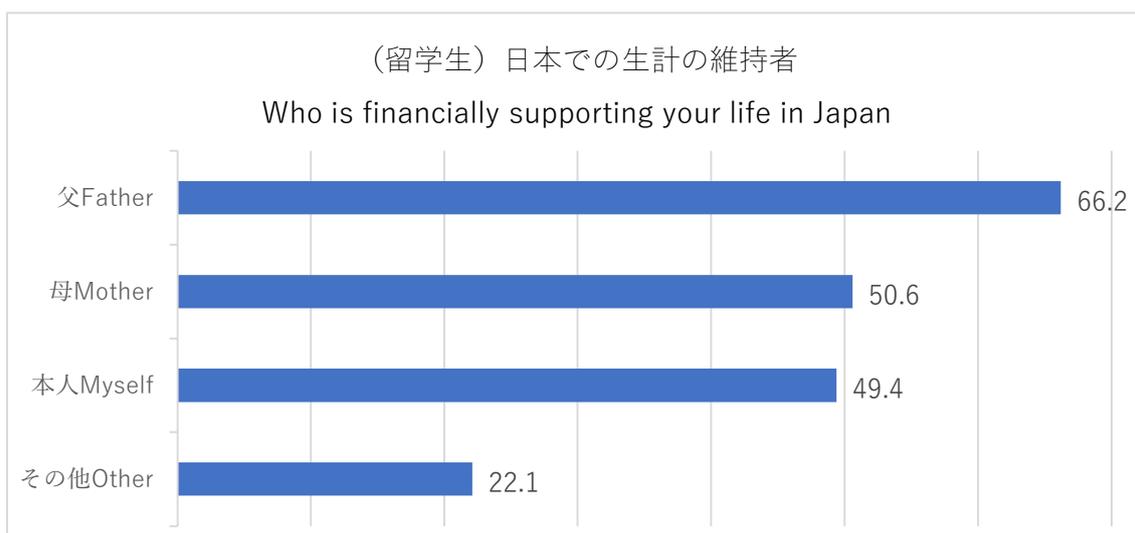
### 35. 生計維持者

- 生計維持者（複数回答可）については「父」91.6%
- 「母」が前回調査から引き続き約60%、「本人」が2020年調査より増加傾向

35. あなたの現在の生計を支えている方について、あてはまるもの全てを選んでください。



生計を支えている者は「父」が91.6%（前回91.8%）で、「母」62.2%が（前回59.9%）、「本人」が17.8%（前回12.5%）と続く。前回調査ですでに増加傾向であった「本人」が今回調査においても増加していた。



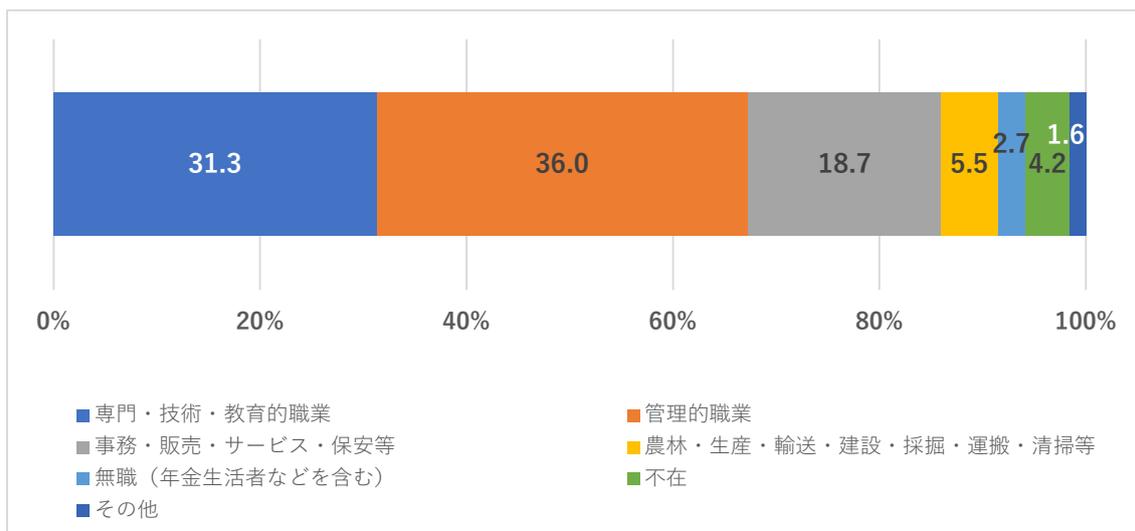
留学生は、「父」が66.2%（前回39.4%）、「母」が50.6%（前回43.6%）と前回調査との順位が逆転している。奨学金によって生計を支えている学生が一定数いることから、「本人」の占める割合が高いことが特徴といえる。

## 【学部学生】

### 36. 父親の職業

- 父親の職業の上位は「管理的職業」、「専門・技術・教育的職業」、「事務・販売・サービス・保安等」

36. あなたの父親の職業について、あてはまるものを1つ選んでください。



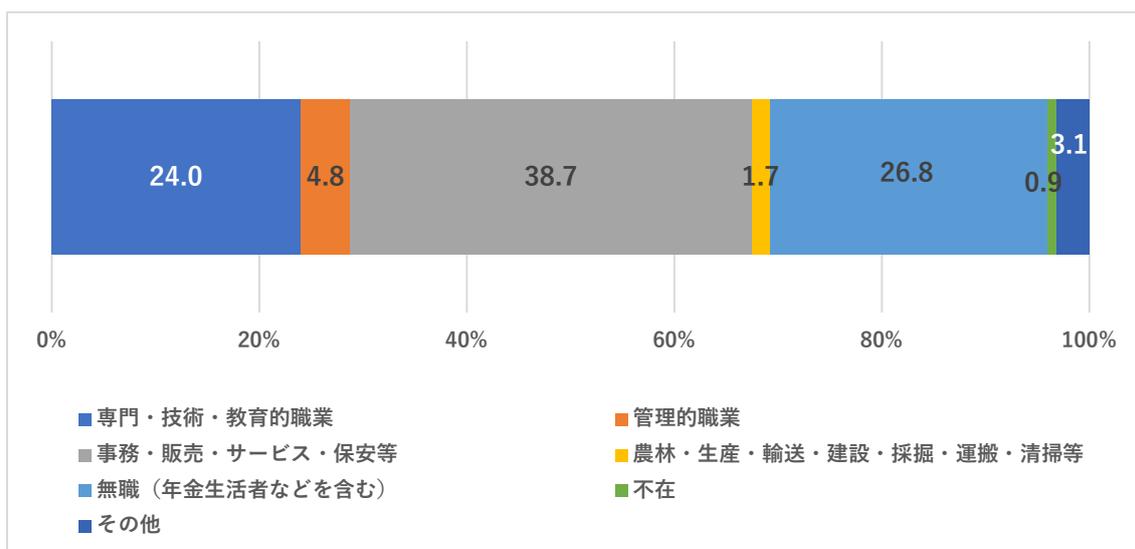
父親の職業は「管理的職業」が36.0%と最も多く（前回37.3%）、「専門・技術・教育的職業」は31.3%（前回30.1%）、「事務・販売・サービス・保安等」が18.7%（前回18.8%）と続く。ほぼ前回同様の傾向にある。

## 【学部学生】

### 37. 母親の職業

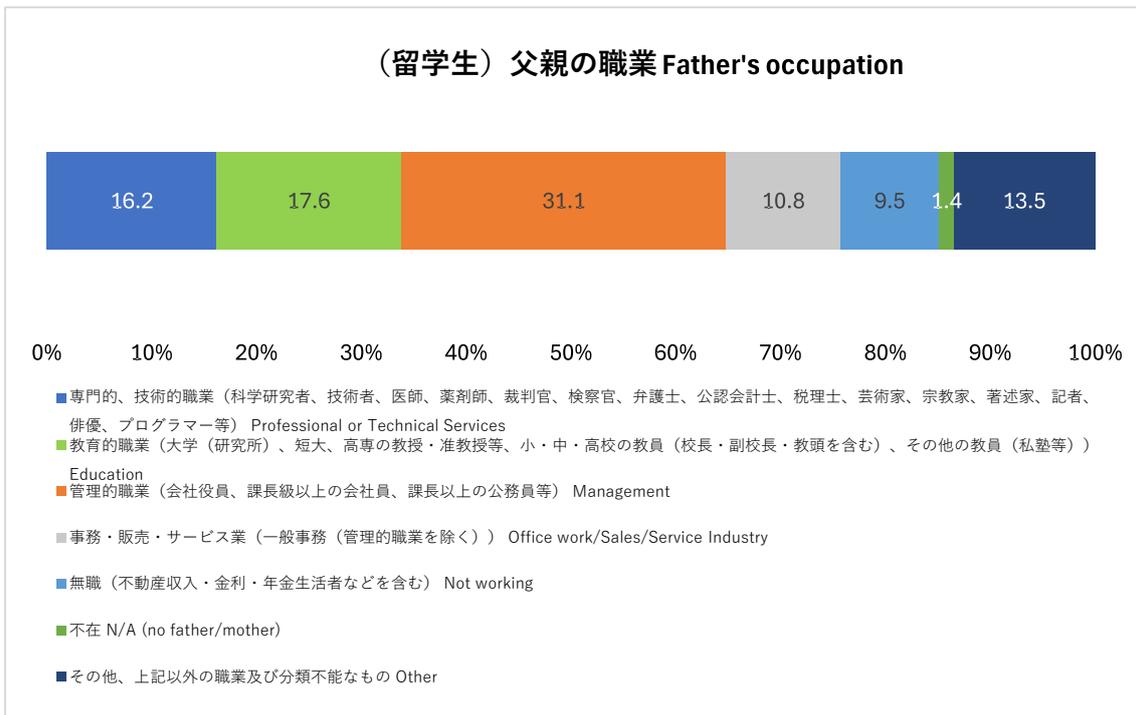
- 母親の職業の上位は「事務・販売・サービス・保安等」、「無職」、「専門・技術・教育的職業」
- 「無職」が減少傾向

37. あなたの母親の職業について、あてはまるものを1つ選んでください。

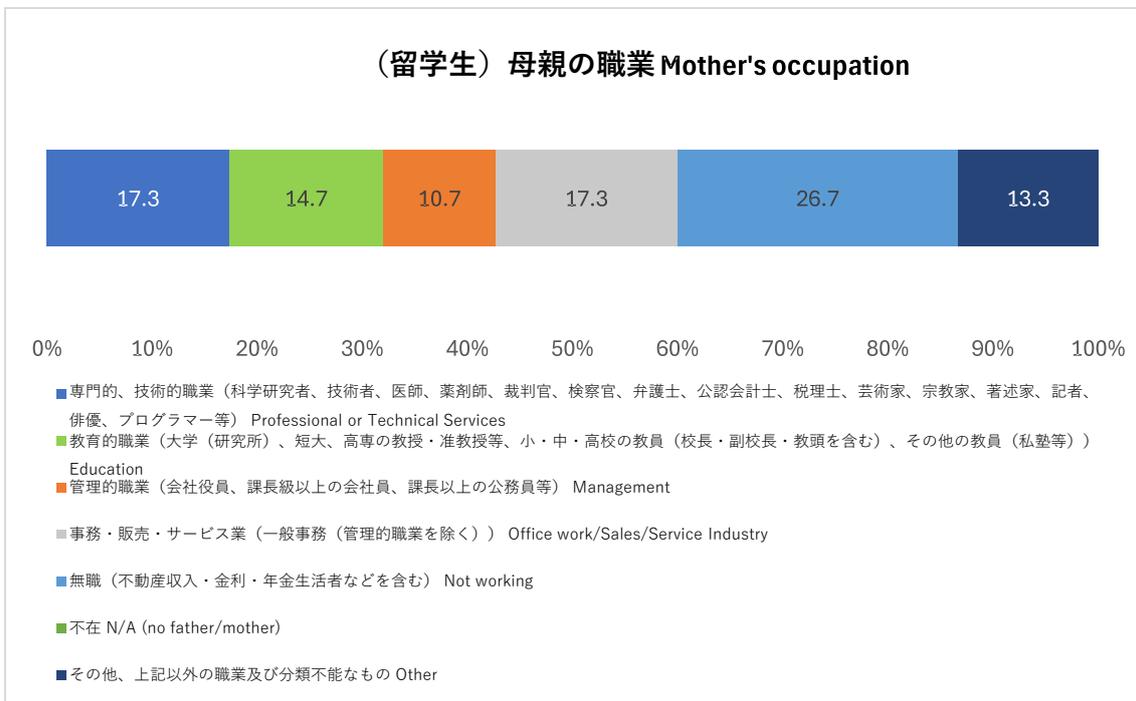


母親の職業は「事務・販売・サービス・保安」38.7%（前回36.8%）が最も多い。次いで、「無職」は26.8%で、前回調査（29.5%）より2.7%ポイント減少した。「専門・技術・教育的職業」は24.0%で、前回調査（23.4%）から微増した。

## 【学部学生】



日本人学生の父親と比較すると、留学生の父親は、「管理的職業」(31.1%)が少なく、「無職」(9.5%)も国内生の親に比べると多い。



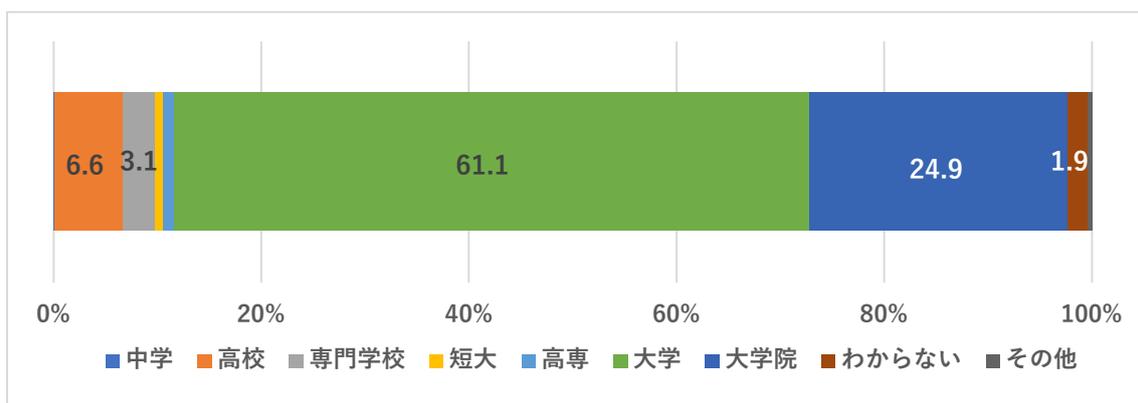
留学生の母親の職業は、日本人学生の母親と、職業の分布に相違がみられ、「専門的」、「教育的」職業が合わせて32%を占めており、また「管理的職業」も10.7%と高い。また母親が「無職」の割合が高いものの、父母の職業分布に国内生ほど差がないのも、留学生の親の職業の特徴である。

## 【学部学生】

### 38. 父親の最終学歴

- 父親の最終学歴の上位項目は「大学」、「大学院」
- 「大学」、「大学院」の合計が全体回答の86%を占める

38. あなたの父親が最後に通った（または現在通っている）学校は次のどれにあたりますか。わかる範囲でお答えください。



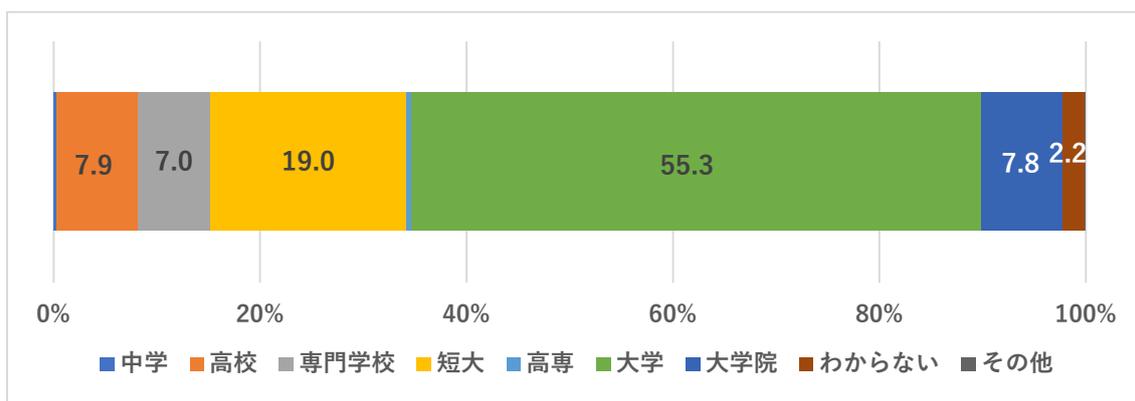
父親の最終学歴は「大学」が61.1%と最も多く、次いで「大学院」が24.9%、「高校」が6.6%と続く。「大学」と「大学院」の合計は86%となり、全体回答者の8割強となる。

## 【学部学生】

### 39. 母親の最終学歴

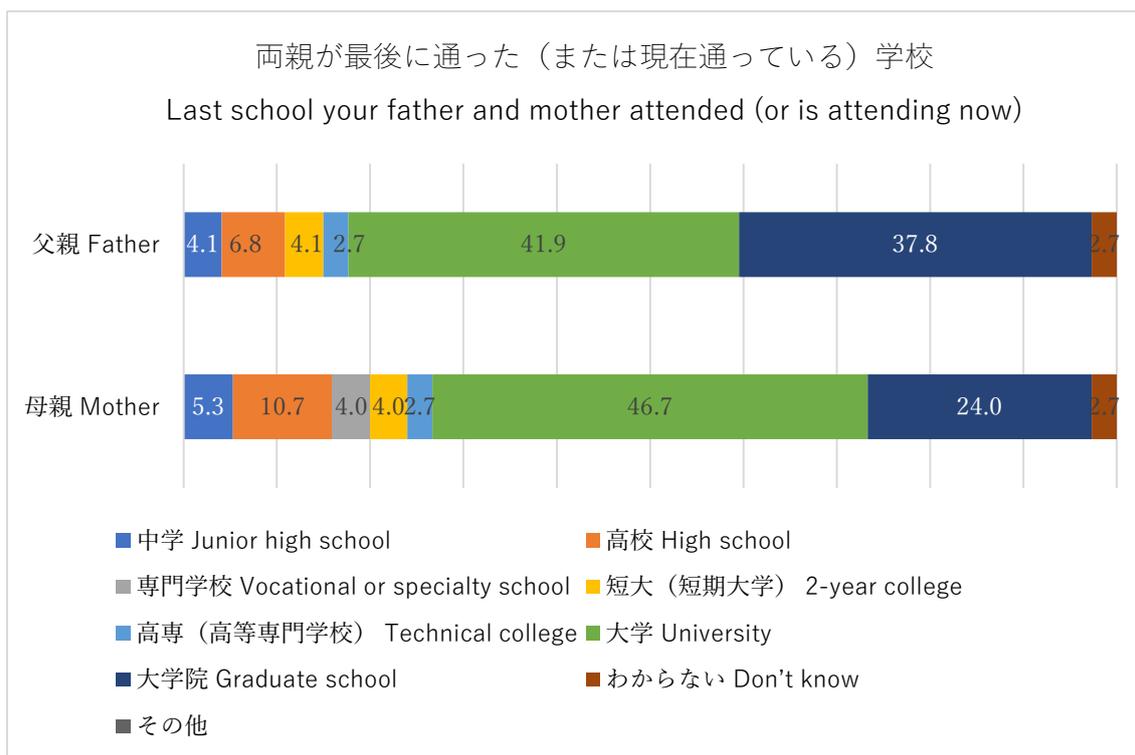
- 母親の最終学歴の上位項目は「大学」、「短大」
- 「大学」、「大学院」の合計が全体回答の約6割を占める

39. あなたの母親が最後に通った（または現在通っている）学校は次のどれにあたりますか。わかる範囲でお答えください。



母親の最終学歴は「大学」が55.3%と最も多く、次いで「短大」が19.0%、「高校」が7.9%と続く。「大学」と「大学院」の合計は63.1%となり、全体回答者の約6割となる。

## 【学部学生】



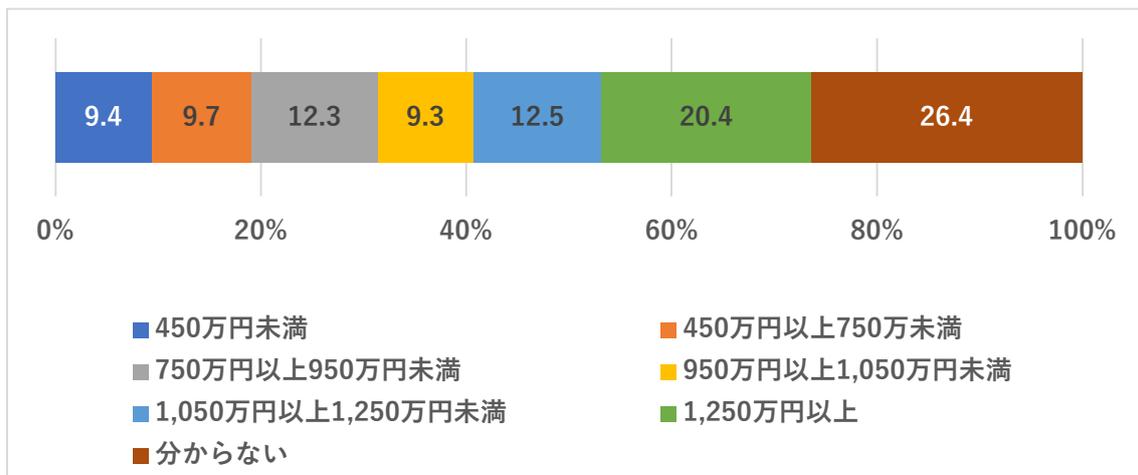
日本人学生の両親の最終学歴と比較すると、「大学」の割合は低いものの「大学院」の割合はどちらも高くなっている。「大学」と「大学院」の合算値では、父親が79.7%、母親が70.7%となっており、日本人学生の父親86.0%、母親63.1%と若干の相違が見られた。

## 【学部学生】

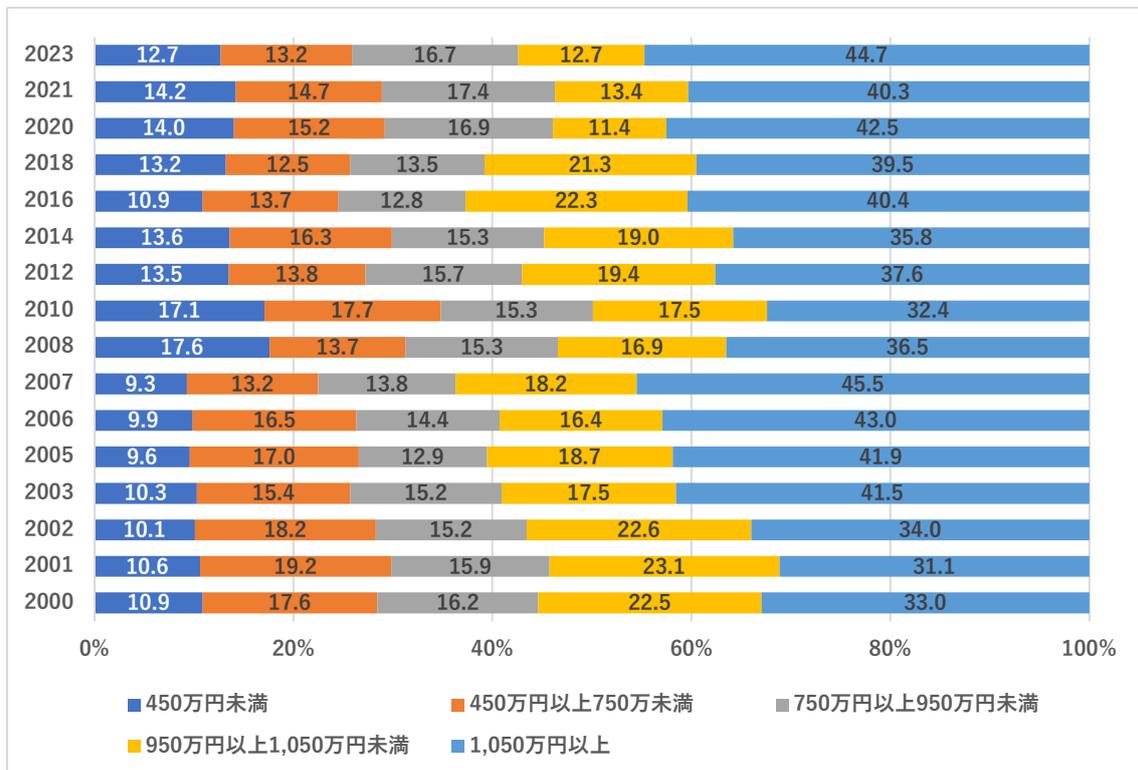
### 40. 世帯収入

- 世帯収入は概ねこれまでの傾向と同様
- 前回調査同様、男子よりも女子で世帯収入が高い割合が多い

40. あなたの現在の生計を支えている方の昨年（2022年1月～12月）の年間税込み収入はどれくらいですか。おおよその金額を選択してください。（設問35で複数回答している場合には、その全員分を合算してください。）



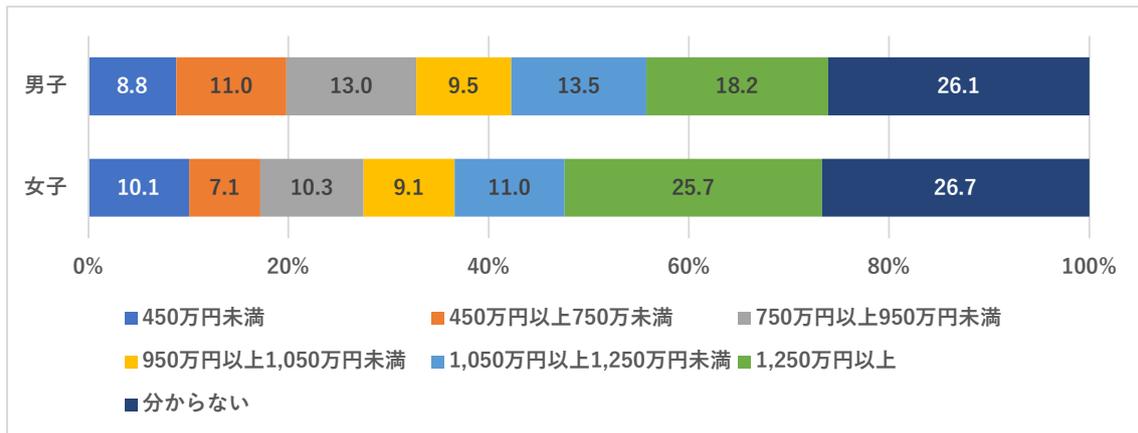
生計維持者の年間税込み収入の経年変化



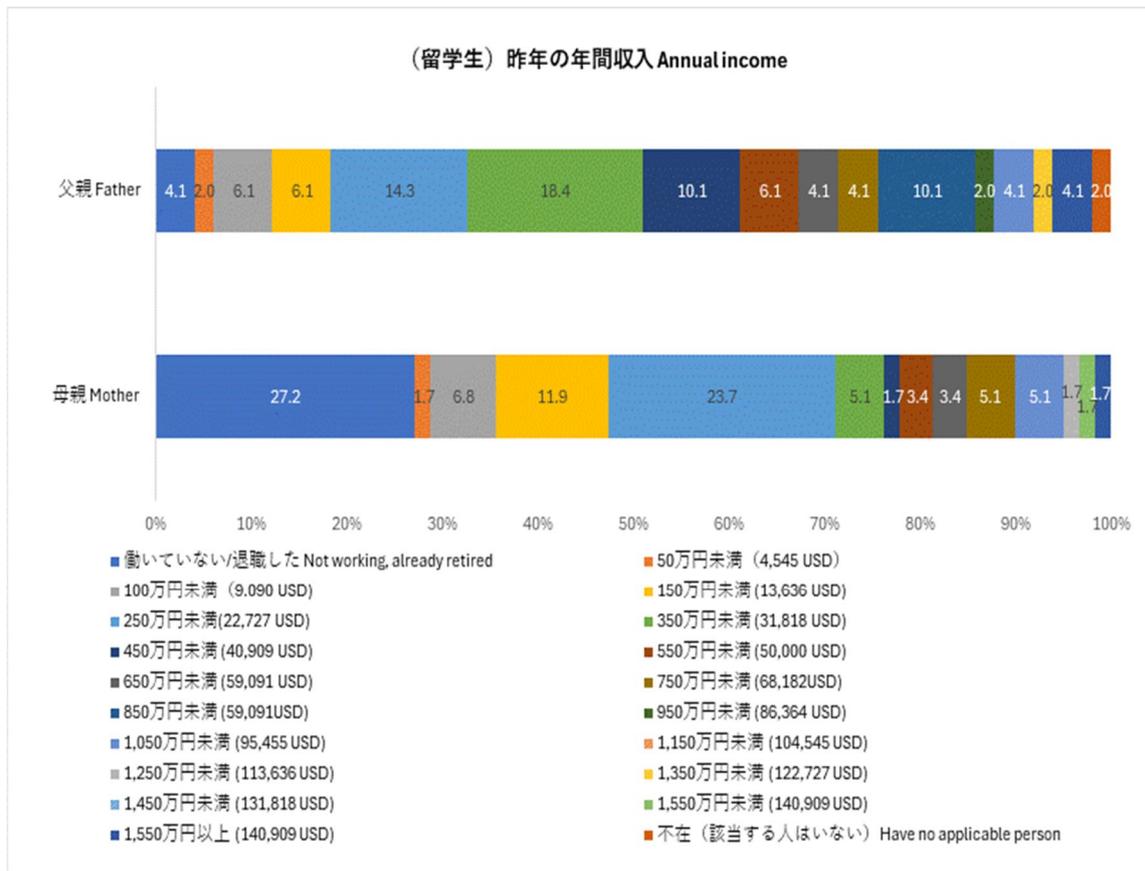
## 【学部学生】

世帯年収については、前回調査と比較して概ね同水準であった。経年変化では、「1,050万円以上」の層が2008年から増加傾向である。一方、「450万円未満」の層は、2008年から減少傾向にある。

生計維持者の年間税込み収入（男女別）



世帯収入は男子よりも女子で「1,250万円以上」と回答した割合が7.5%ポイント高く、前回調査よりその差は拡大した。その他は、概ね同水準である。



## 【学部学生】

留学生については、父・母それぞれの昨年度の年間収入について回答を求めている。国内生と比較すると450万円未満世帯の割合が高く、経済的な格差は大きい。一方で収入の高い層にも分布がみられ、留学生集団内の差も大きい。

また学部留学生は母数が少ないため、数値の解釈には注意が必要であるが、大学院留学生と比較すると、学部留学生の保護者の収入は高い傾向がある。詳細は、留学生版を参照のこと。

## 【学部学生】

### 「XI. 家庭の状況」の分析（まとめ）

家庭の状況について本調査においては、「父親・母親の最終学歴」についても調査を行った。父親の最終学歴で大学・大学院の割合は全体の8割強、母親の最終学歴で大学・大学院の割合は約6割であった。また生計維持者で母親と回答した割合は約6割であり、母親の職業で「無職」の割合が減少していることから、就労している母親が増えていること、それに伴い世帯年収は増加傾向にあることが示唆される。

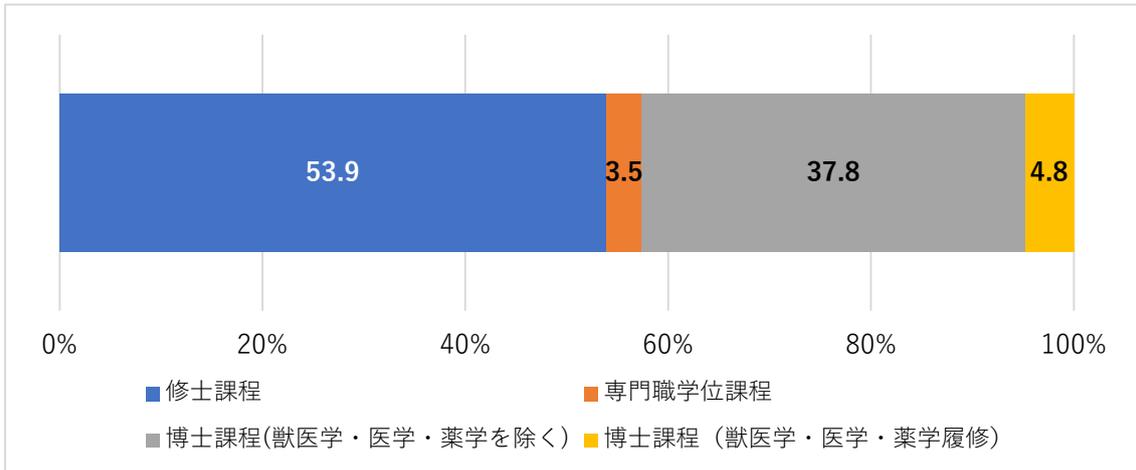
留学生と国内生の世帯の年間収入には大きな差はあるものの、母国の親の収入が高い層の留学生もみられ、留学生集団内の差にも留意が必要といえる。

また留学生の母親の職業は、日本人学生の母親と比べると「専門的」「教育的」「管理的職業」に従事する人の割合が高く、父母間の職業分布の差も国内生に比べると小さい。こうした点は、留学生の職業選択やジェンダー観等にも、影響を及ぼしうるだろう。

# 【大学院学生】

## I. 基本的事項（回答者の特性）

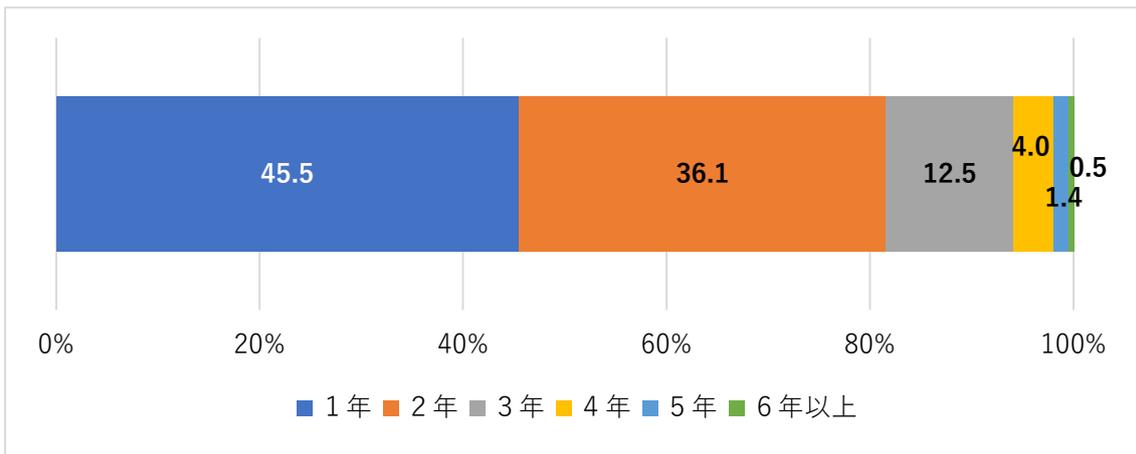
### 1. 課程



回答者は、修士課程が53.9%、専門職学位課程が3.5%、博士課程（獣医学・医学・薬学を含む）が42.6%となっている。全学の構成と比べて、修士課程の回答者がやや多い。

留学生版回答者は、修士課程（45.6%）、専門職学位課程（1.0%）、博士課程（獣医学、医学又は薬学を除く）（42.4%）、獣医学、医学又は薬学を履修する博士課程（2.0%）、大学院研究生（9.0%）であり、留学生の構成と比べると、修士課程の留学生の回答者がやや多いが、概ね在籍者の比率を反映している。

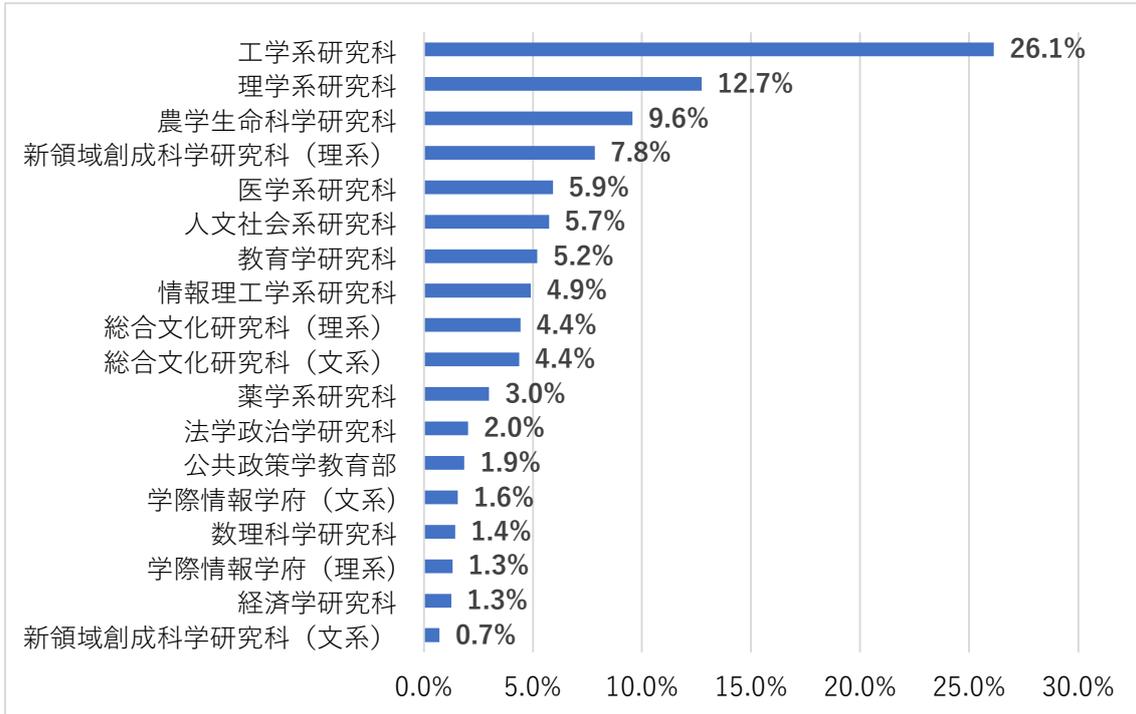
### 2. 学年



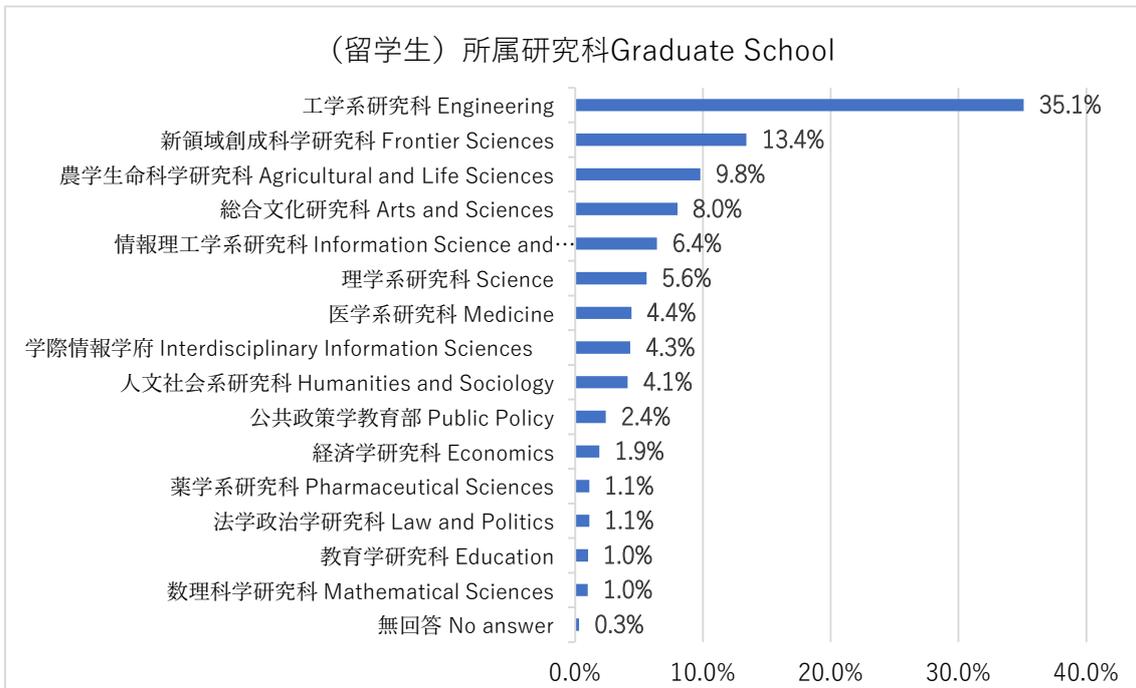
課程に入学してからの年数は1年～2年が8割以上で、3年以上の者は合計18.4%であった。

## 【大学院学生】

### 3. 所属研究科



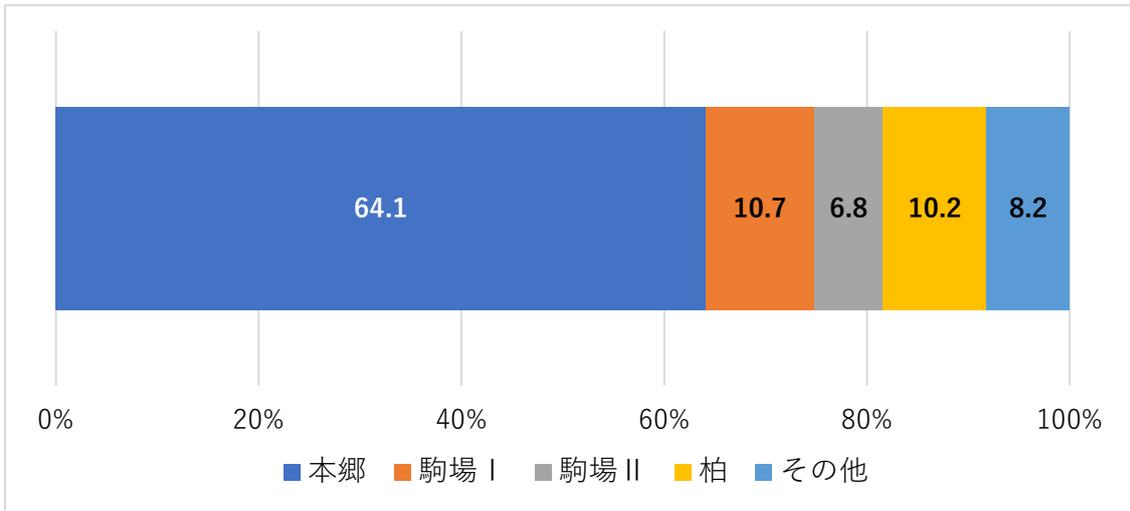
研究科別の回答数は工学系研究科が最も多く、次いで、理学系研究科が多い。全学の構成比と大きくは異なっておらず、各学部から均等に回答が得られている。



留学生の回答者は、多い順から工学系（在籍者に占める比率 31.5%、回答者に占める比率 35.1%）、新領域（同 15.8%、同 13.4%）、農学生命科学（同 9.0%、同 9.8%）であり、その他も概ね在籍者の比率を反映していた。

## 【大学院学生】

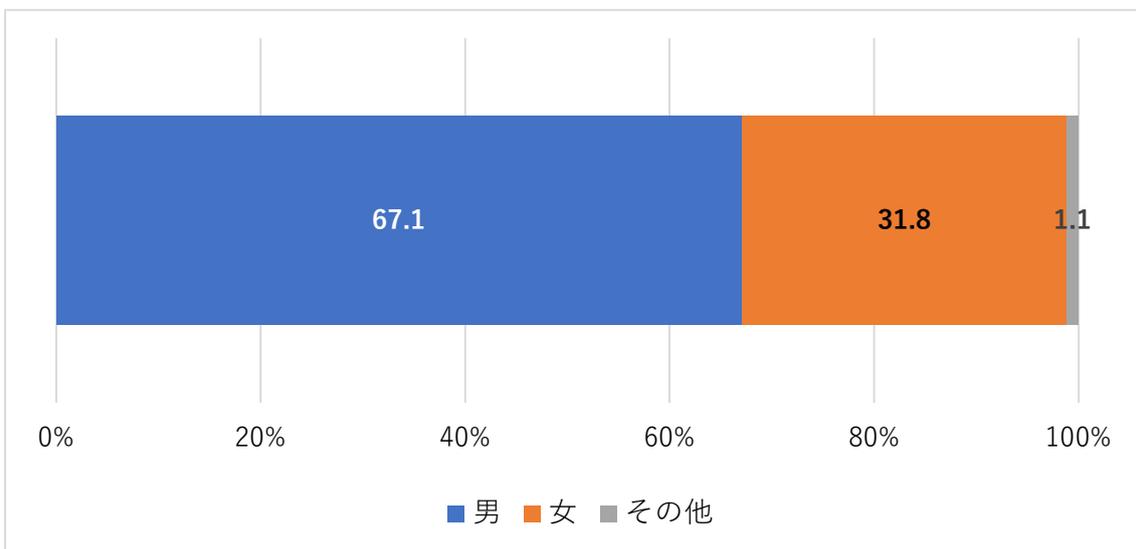
### 4. キャンパス



通っているキャンパスは「本郷」が過半数を占め、「柏」「駒場 I」と続く。2021 年度 (第 71 回) 調査 (以下、「前回調査」という。) とほぼ同じである。

留学生の回答者は、「本郷」が 62.8%、駒場 I (8.8%)、駒場 II (11.0%)、柏 (13.3%)、その他 (3.3%) であった。

### 5. 性別

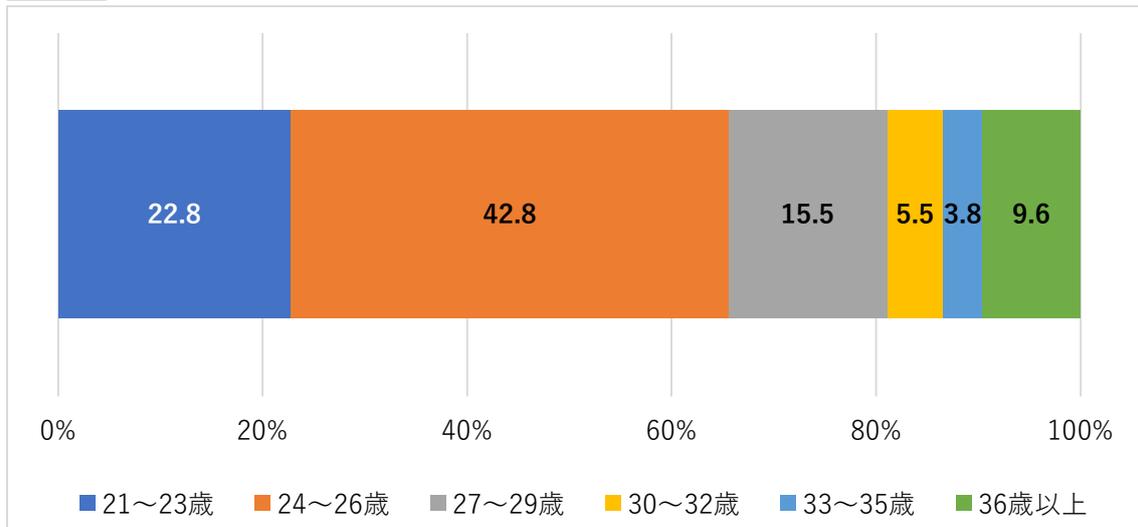


回答者の性別は男性が 67.1%、女性が 31.8%で、在籍者比率 (男性 71.7%、女性 28.3%) と比較して、女性の回答率が高い。

留学生は、男性 (59.8%)、女性 (39.3%)、その他・回答しない (0.9%) であり、在籍者比率 (男性 59.3%、女性 40.7%) を概ね反映している。

## 【大学院学生】

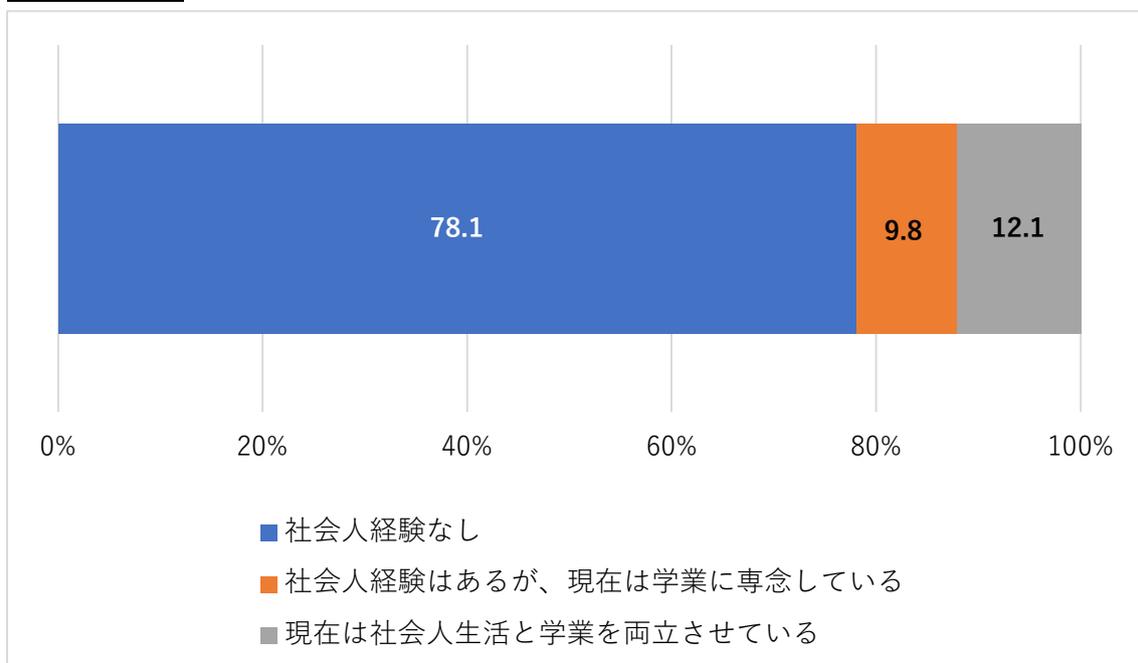
### 6. 年齢



年齢は 20 代が 81.1%と過半数を占める。特に 24～26 歳は 42.8%と半数近くを占める。

留学生の年齢は 20 代が 83.9%、24～26 歳が 41.5%を占めるが、国内生と比較すると、30～35 歳の層の割合が高いのが特徴である。平均 26.6 歳 (SD=3.12) であるが、出身地域による差がある。中国出身学生の年齢平均は日本人学生と比較的近いが、その他の地域出身者は、全体的に国内生よりも年齢が高い。

### 7. 社会人経験



8 割弱は社会人経験なしと回答している。一方、社会人生活と学業を両立させている者も 12.1%あった。

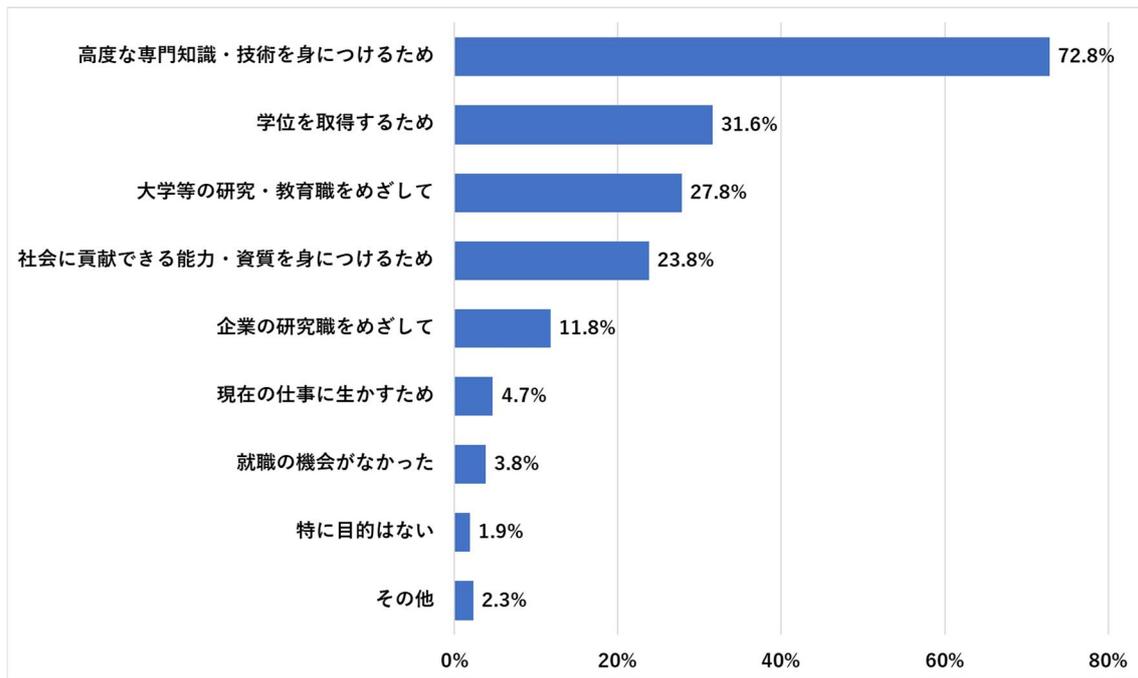
## 【大学院学生】

### Ⅱ. 大学院入学の目的

#### 8. 入学目的

- 大学院に入学した目的は「高度な専門知識・技術を身につけるため」が72.8%
- 「大学等の研究・教育職を目指して」と「学位を取得するため」の順位が逆転

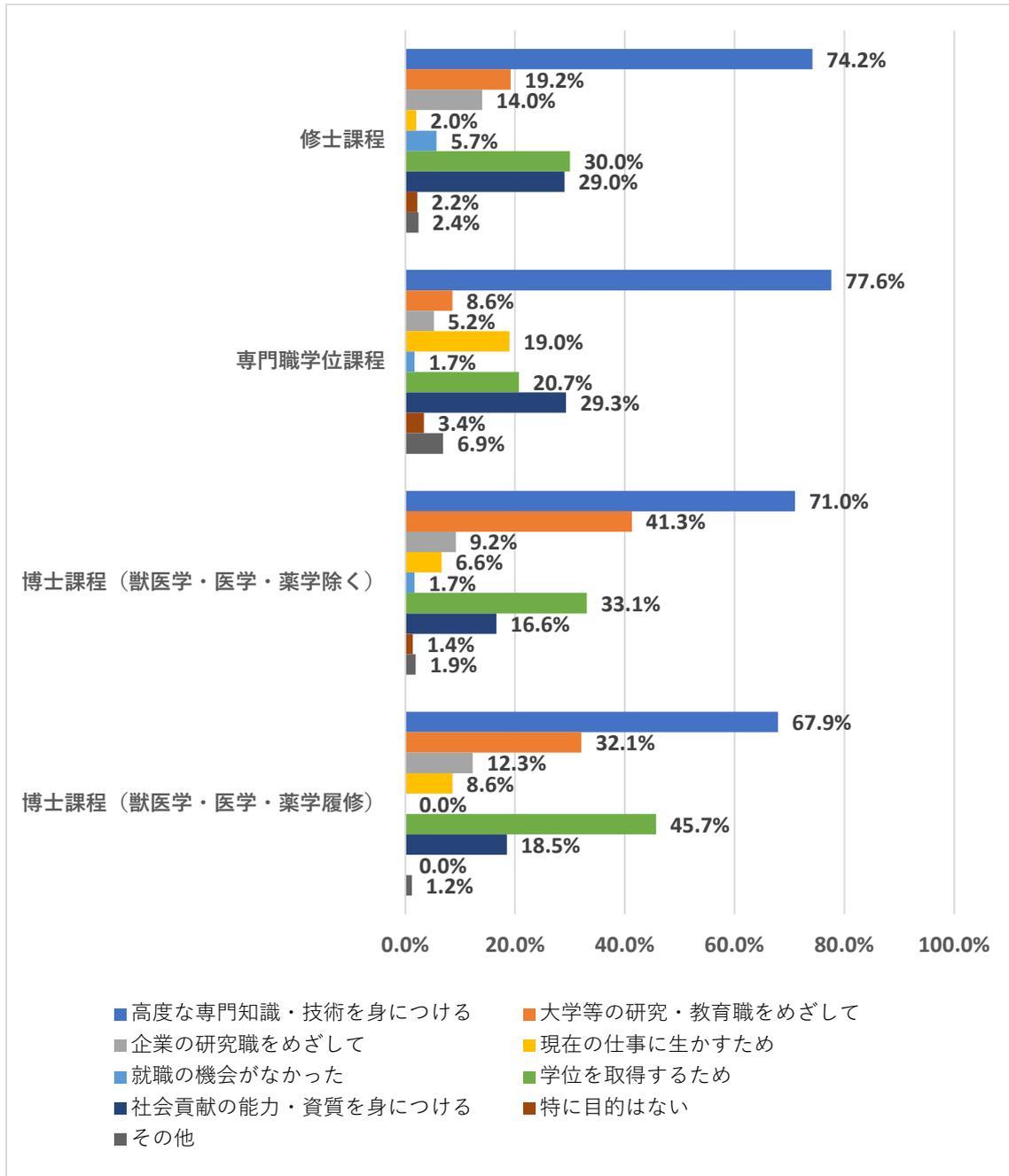
8. 本学の大学院に入学した目的は、どれにあたりますか。(2つまで選んでください。)



大学院入学の目的は1999年(第49回)調査から続けて「高度な専門知識・技術を身につけるため」が72.8%(前回調査74.6%)で最も多い。第2位の「学位を取得するため」は31.6%(前回調査30.3%)で、前回調査より1.3%ポイント増加し、「大学等の研究・教育職をめざして」との順位を逆転した。「大学等の研究・教育職をめざして」は27.8%(前回調査31.8%)で、前回調査より4%ポイント減少した。次いで、「社会に貢献できる能力・資質を身につけるため」が23.8%(前回調査22.7%)である。

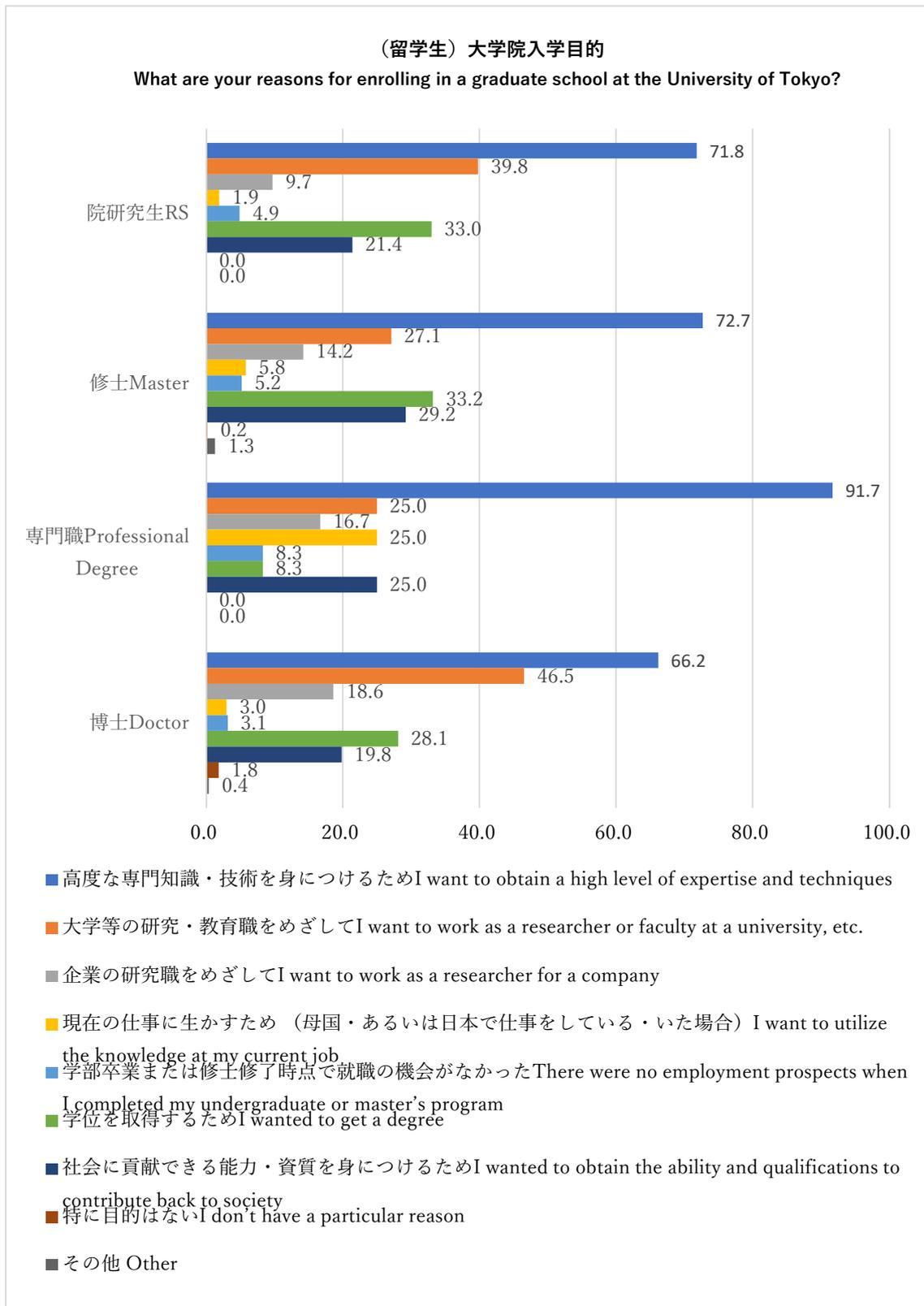
## 【大学院学生】

入学目的（課程別）



課程別で見ると、「高度な専門知識・技術を身につけるため」が修士課程 74.2%（前回調査 78.5%）、専門職学位課程 77.6%（前回調査 87.1%）、博士課程（獣医学・医学・薬学除く）71.0%（前回調査 68.9%）、博士課程（獣医学・医学・薬学履修）67.9%（前回調査 57.4%）と、いずれの課程においても過半数を超えている。その他、博士課程（獣医学・医学・薬学履修）の「大学等の教育・研究職を目指して」（前回調査 59.6%、今回調査 32.1%）、「学位を取得するため」（前回調査 29.8%、今回調査 45.7%）において、前回調査との大きな差がみられる。

## 【大学院学生】



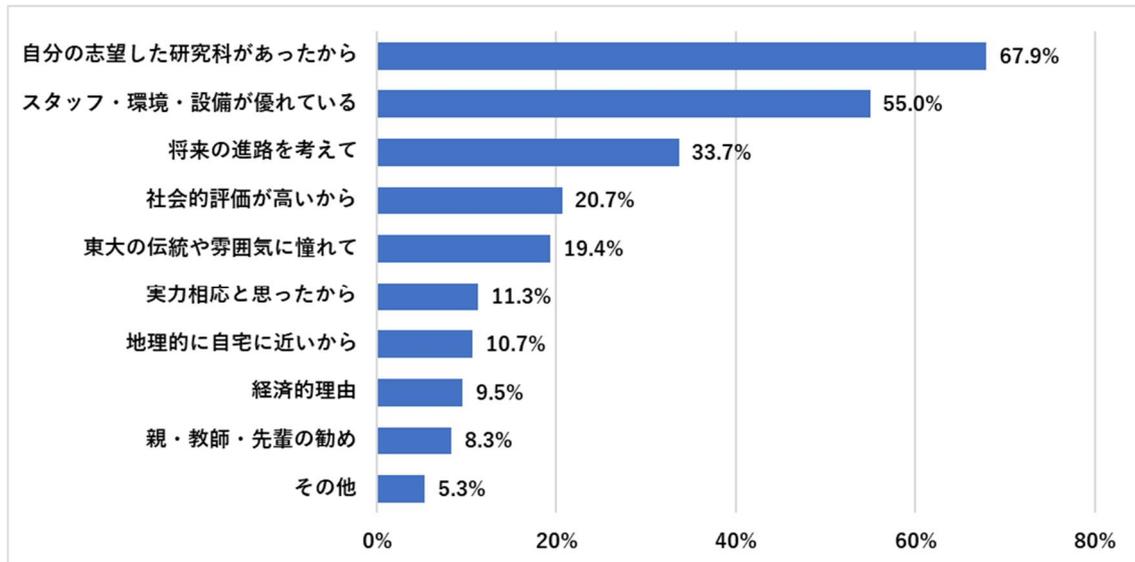
大学院留学生の大学院入学目的については、日本人学生と概ねの傾向は重なり、「高度な専門知識・技術を身につけるため」が7割前後を占める。

## 【大学院学生】

### 9. 入学理由

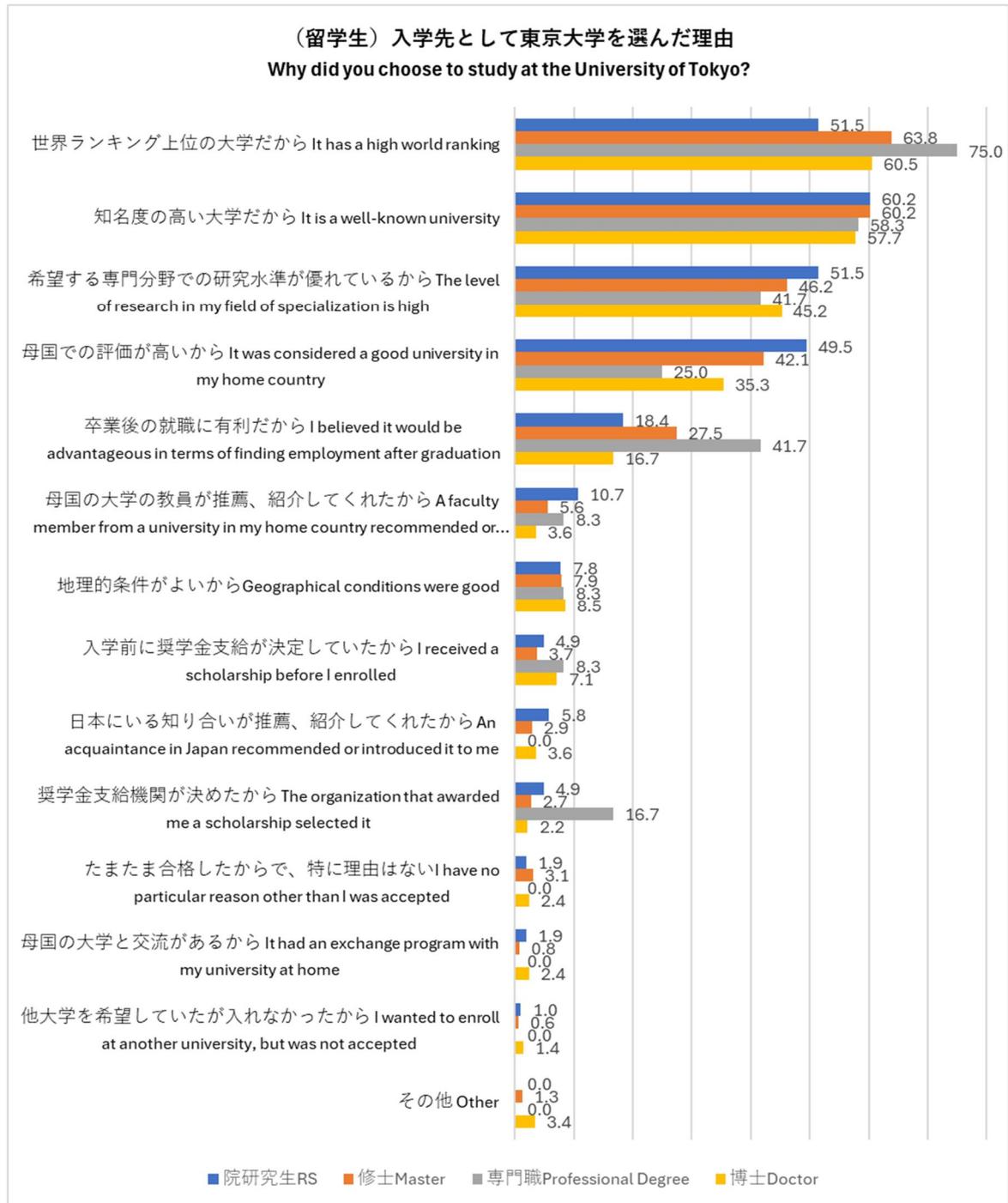
- 大学院に入学した理由は「自分の志望した研究科(専攻分野)があったから」が67.9%
- 前回調査より「実力相応と思ったから」「地理的に自宅に近いから」「経済的理由」「親・教師・先輩の勧め」の順位が変動

9. 本学を選んだ理由は、どれにあたりますか。(3つまで選んでください。)



選択項目は「自分の志望した研究科(専攻分野)があったから」が67.9%と最も多く、前回調査(70.2%)とほぼ同じである。第2位の「スタッフ・環境・設備が優れているから」は55.0%で、前回調査(60.3%)より5.3%ポイント減少した。第3位の「将来の進路を考えて」は33.7%となり、前回調査(30.7%)より3%ポイント減少した。第1位から第3位の順位は2013年以降変化していない。なお、第6位~第9位はいずれも10%前後で前回調査とほぼ同じであるが、順位は前回調査から変動があり、多い方から「経済的理由」、「実力相応と思ったから」、「親・教師・先輩の勧め」、「地理的に自宅に近いから」だったのが、今回調査では多い方から「実力相応と思ったから」「地理的に自宅に近いから」「経済的理由」「親・教師・先輩の勧め」となった。

## 【大学院学生】



本学選択理由は、日本人学生とは選択肢が異なるため、留学生版報告書で詳細は述べる。在学段階によって回答に若干相違はあるものの、「世界ランキング上位」と「知名度の高さ」は、いずれの在籍段階においても上位に位置している。

## 【大学院学生】

### 「Ⅱ.大学院入学の目的」の分析（まとめ）

大学院入学の目的自体は「高度な専門知識・技術を身につけるため」が1999年から変わらず、大多数が専門的な知識を得るために大学院への入学を検討していた。

一方、「学位を取得するため」の割合が、特に博士課程（獣医学・医学・薬学履修）において、前回調査より15.9%ポイント増加し、「大学等の研究・教育職をめざして」を超えて第2位の目的となった。

入学した理由は前回調査同様「自分の志望した研究科（専攻分野）があったから」、「スタッフ・環境・設備が優れているから」、「将来の進路を考えて」が上位層を占め、研究科や環境の充実度、そしてそうした環境で高度な専門知識を得られると考えていることが見て取れ、ソフト面とハード面双方が東京大学の魅力であることを示している。

大学院留学生の本学入学目的は、日本人学生同様に「高度な専門知識・技術を身に着けるため」が多く、また在学段階によって回答に若干相違はあるものの、本学を選択した理由は、「世界ランキング上位」と「知名度の高さ」が主要な選択理由になっている。

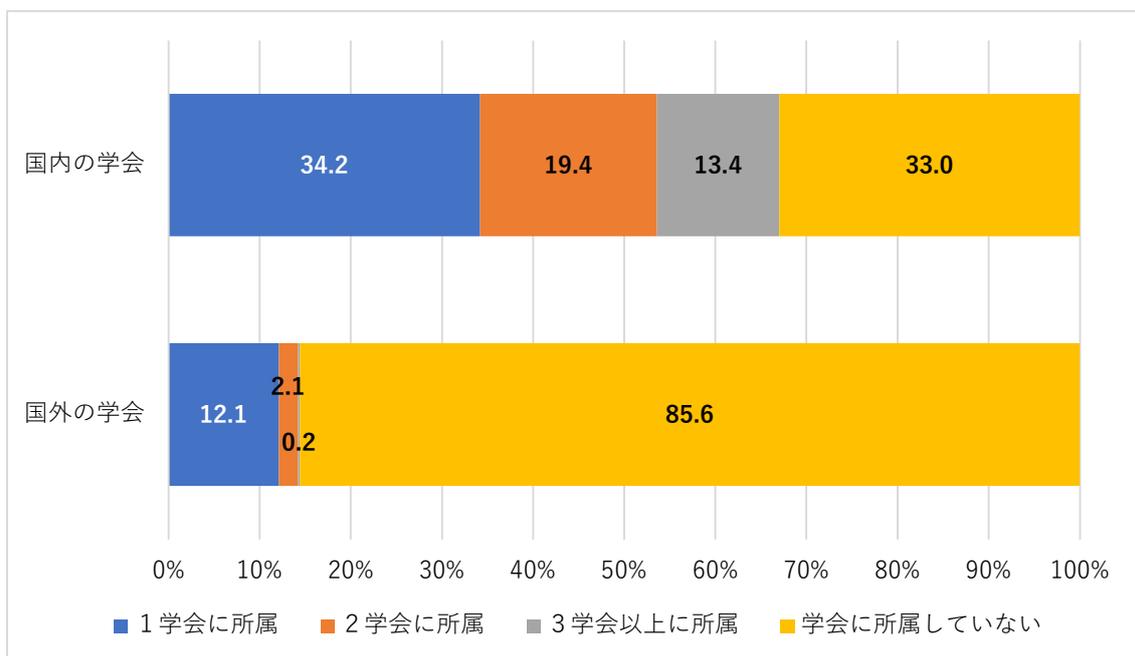
## 【大学院学生】

### Ⅲ.学会参加・研究活動

#### 10. 所属学会

- 国内の学会に所属している割合は 66.9%
- 国外の学会に所属している割合は 14.4%

10. 現在所属している日本国内・外の学会数はいくつですか。国内と国外のそれぞれ1つを選んでください。



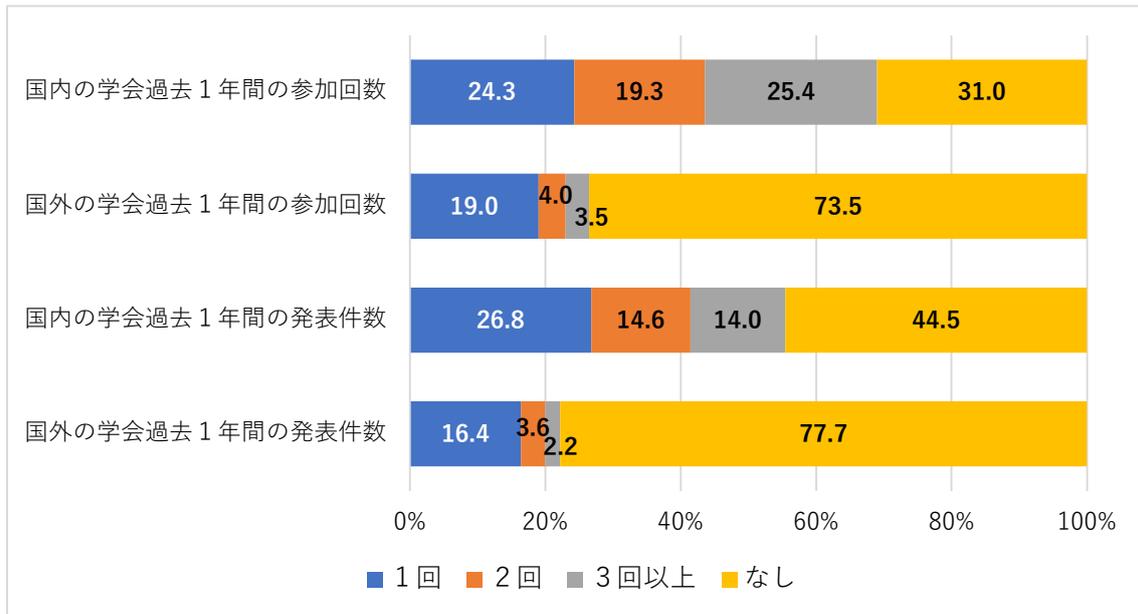
所属学会数は国内の学会は1学会以上所属している者は67.0%（前回66.9%）であったのに対し、国外の学会に1学会以上所属している者は14.4%（前回11.3%）と、52.6%ポイントの差がみられ、この差が前回調査よりも3.0%ポイント縮小した。

## 【大学院学生】

### 11. 学会参加・発表

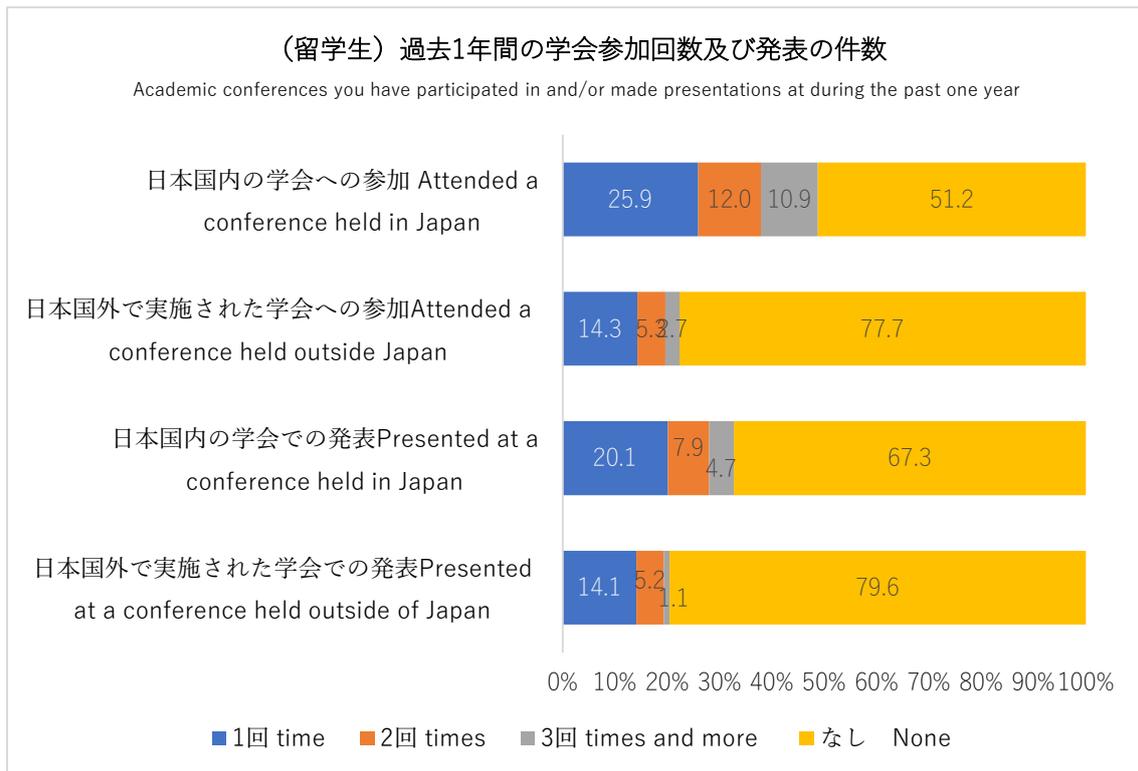
- 国内学会に「1 回以上参加」69.0%、「1 件以上発表」55.5%
- 国外学会に「1 回以上参加」26.5%、「1 件以上発表」22.3%

11. 過去 1 年間の学会参加回数及び発表の件数を回答してください。それぞれ 1 つを選んでください。



過去 1 年間の学会参加および発表の回数を尋ねたところ、国内の学会に 1 回以上参加した割合は 69.0%（前回 66.4%）、1 件以上発表した割合は 55.5%（前回 52.1%）であり、いずれも前回調査より増加した。前回調査(2021 年)と比べて、コロナ禍後に国内の学会が開催されることも多くなり、コロナ禍前の水準に戻りつつある。国外の学会に関しては、1 回以上参加した者は 26.5%で前回の 26.1%より若干増加した。コロナ禍中には学会がオンラインで開催されることもあるが、学会の参加回数に関しては、大きな変化はみられなかった（前回 52.1%、今回 55.5%）。一方、国外の学会で 1 件以上発表した者は 22.3%（前回 19.0%）と若干増加した。

## 【大学院学生】



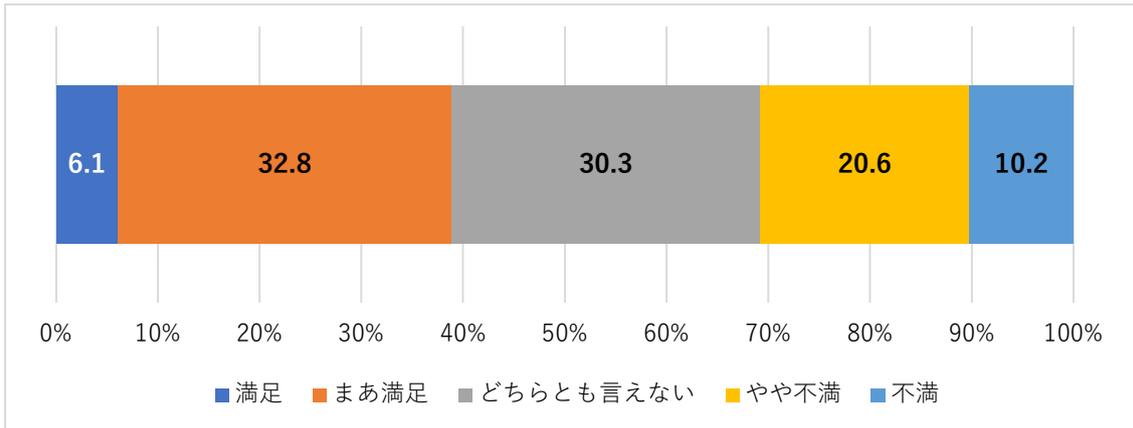
留学生の学会参加状況は、国外で実施された学会に関しては国内生と大きな相違はないが、国内実施の学会への参加経験がない（51.2%）、あるいは発表経験がない（67.3%）学生が、留学生は多い。留学生の回答者には、研究生段階や、来日1年未満の学生が多く含まれていることと、さらには日本語力の問題が影響している可能性があるが、本項目は前回調査で初めて留学生版にも設定した項目であり、今後継続的に確認していく必要がある。

## 【大学院学生】

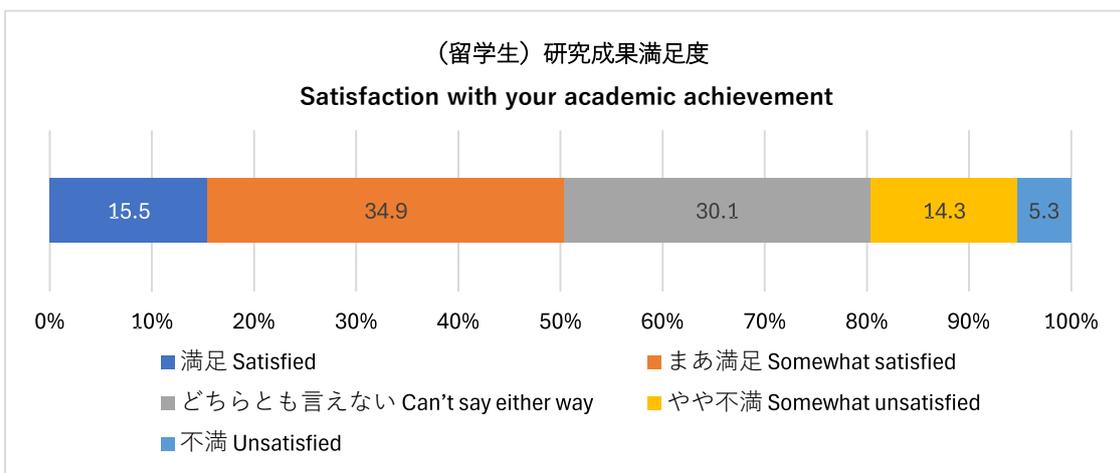
### 12. 研究成果満足度

- 研究成果「満足」38.9%、「不満」30.8%、「どちらともいえない」30.3%
- 長期的にみると、研究成果「不満」は減少傾向

12. あなたご自身のこれまでの研究成果についてどうお考えですか。



自身の研究成果への満足度を尋ねたところ「満足」「まあ満足」と回答した割合が38.9%、「どちらともいえない」と回答した割合が30.3%、「やや不満」「不満」と回答した割合が30.8%と、満足と回答した割合が若干多いものの、ほとんど同程度の分布となっている。不満と回答した者は前々回調査では32.4%、前回調査では31.9%となっており、割合自体は微減傾向にある。同様の設問のある調査が開始された2011年と比べると、「不満」「やや不満」が2011年には40.6%であるが、今回は30.8%と減っており、より長期的にみると研究成果に対する不満度は低下しているといえる。



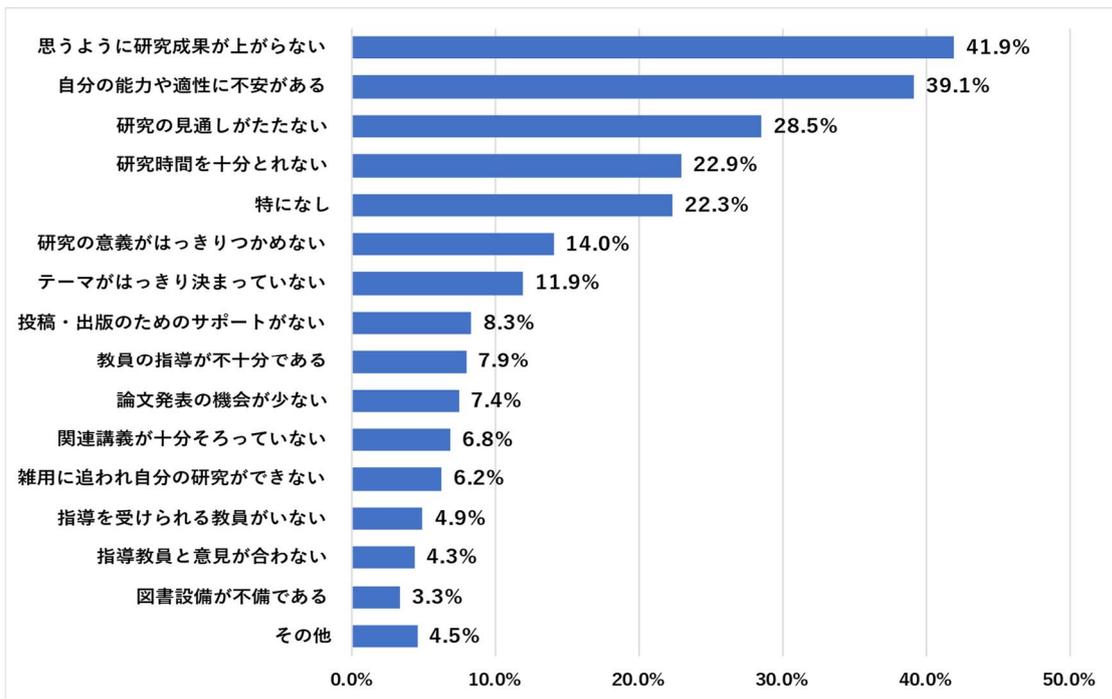
留学生の研究成果への満足度は、「満足」(15.5%)と回答した学生が日本人学生よりも多く、「不満」(5.3%)と回答した学生は少ない。全体的には満足度が、日本人学生よりも高い結果となった。

## 【大学院学生】

### 13. 研究活動に関する不満等

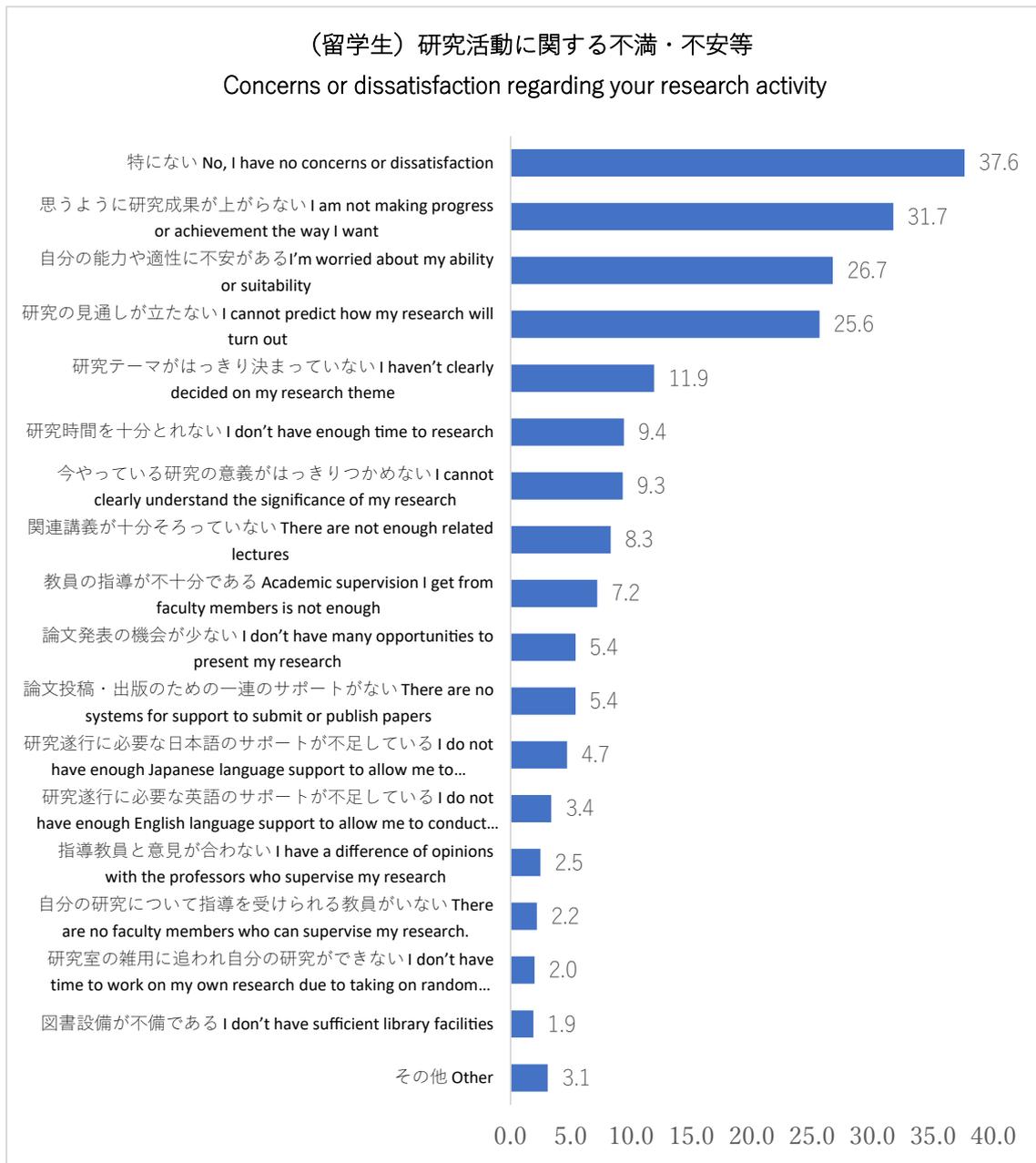
- 研究活動に対する不満のうち上位3項目は「思うように研究成果が上がらない」、「自分の能力や適性に不安がある」、「研究の見通しが立たない」

13 あなたの研究活動に関して、不満や不安はありますか。不満や不安がなければ1を選び、不満や不安があれば他の選択肢からいくつでも選んでください。



研究活動に対する不満や不安について複数回答可で尋ねたところ、「思うように研究成果が上がらない」（前回調査 41.8%、今回調査 41.9%）が「自分の能力や適性に不安がある」（前回調査 44.7%、今回調査 39.1%）を逆転して第1位となった。次いで、「研究の見通しが立たない」が 28.5%（前回調査 27.5%）と続く。不満や不安がなく「特になし」と回答した者は 22.3%で、前回調査の 18.1%より 4.2%ポイント増加した。

## 【大学院学生】



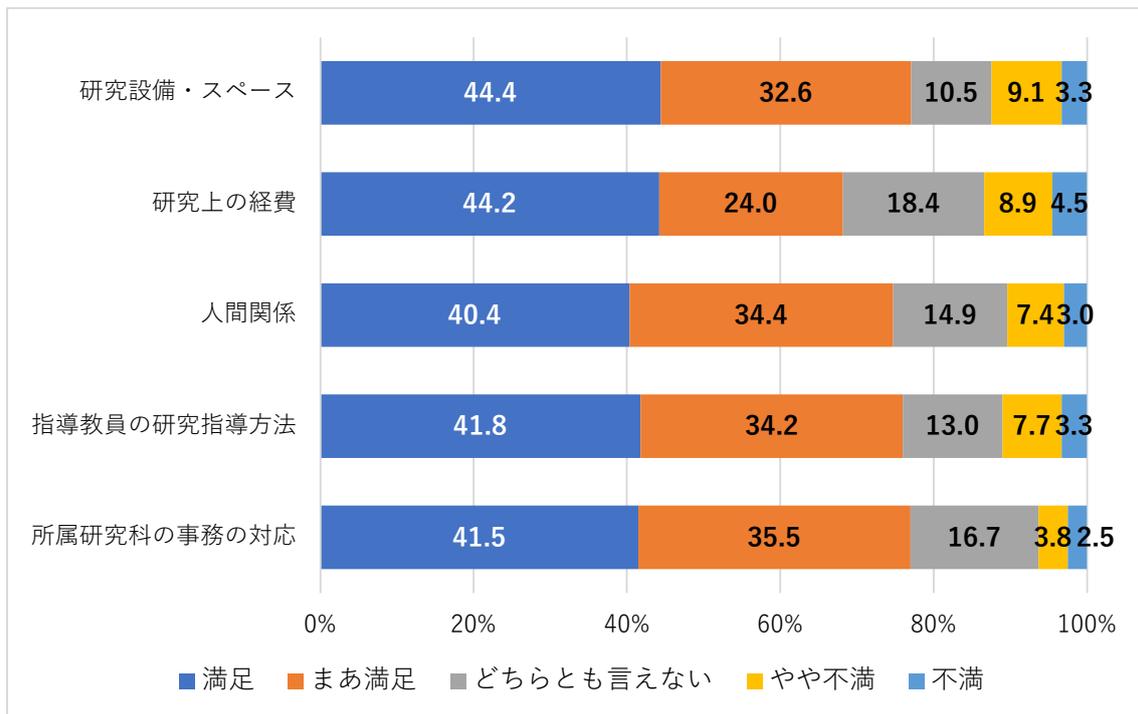
留学生の研究活動に関する不満・不安等として上位に選択されたのは、「思うように研究成果が上がらない」「自分の能力や適性に不安がある」「研究の見通しが立たない」であり、概ね日本人学生等の回答傾向と重なっている。

## 【大学院学生】

### 14. 研究室満足度

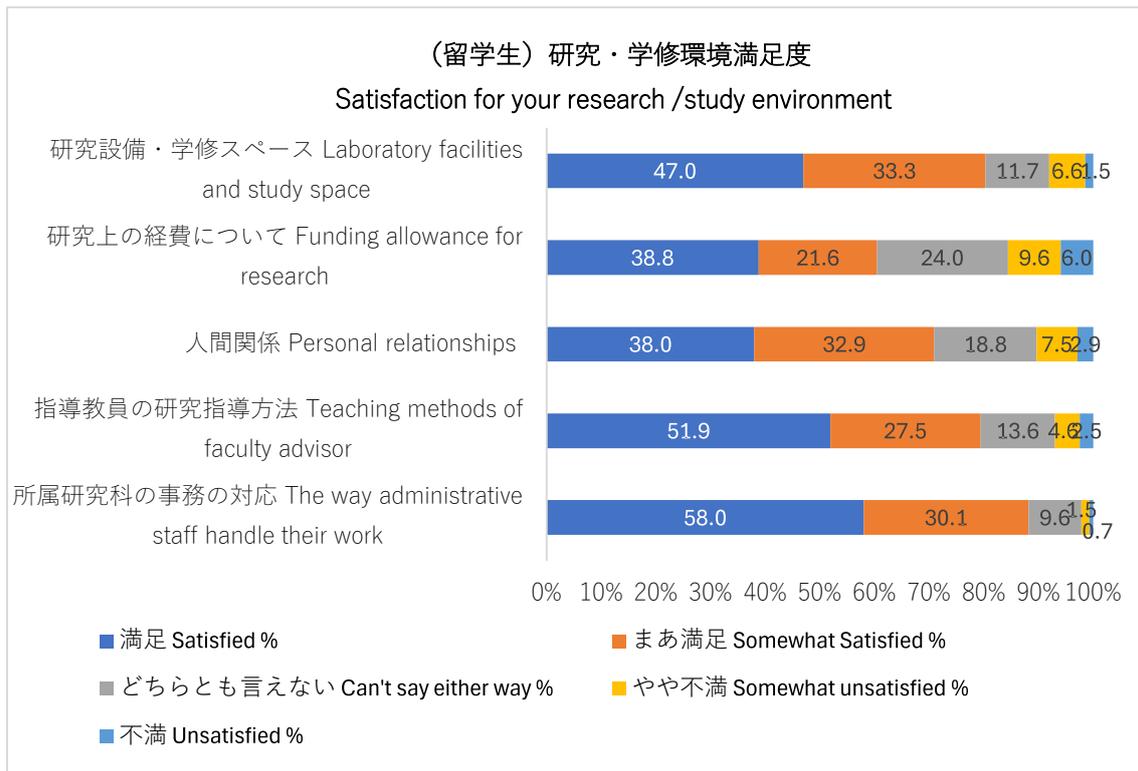
- 全体的にはいずれの項目でも7割程度が「満足」「まあ満足」と回答
- 研究科別の設備満足度で順位変化がみられる
- 「研究上の経費」に関して、文科系は満足度が低く、理科系は満足度が高い

14. 研究室での日常生活の中で、次の各項目を総合的に見て、満足感をどの程度持っていますか。



研究室の満足度について尋ねたところ、研究設備・スペース、研究上の経費、人間関係、指導教員の研究指導方法、所属研究科の事務の対応いずれの項目に関しても、7割程度満足していると回答していた。概ね、前回調査より満足度の向上がみられるが、「研究上の経費」については前回調査（70.3%）より2.1%ポイント減少した。

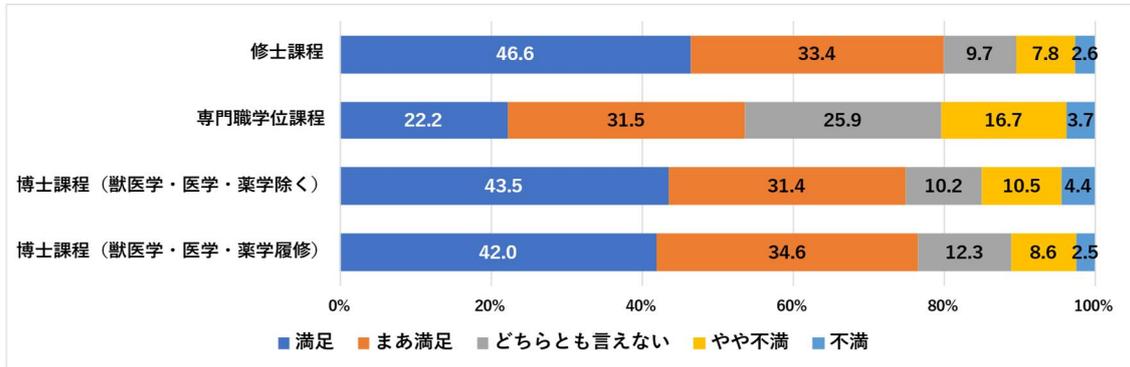
## 【大学院学生】



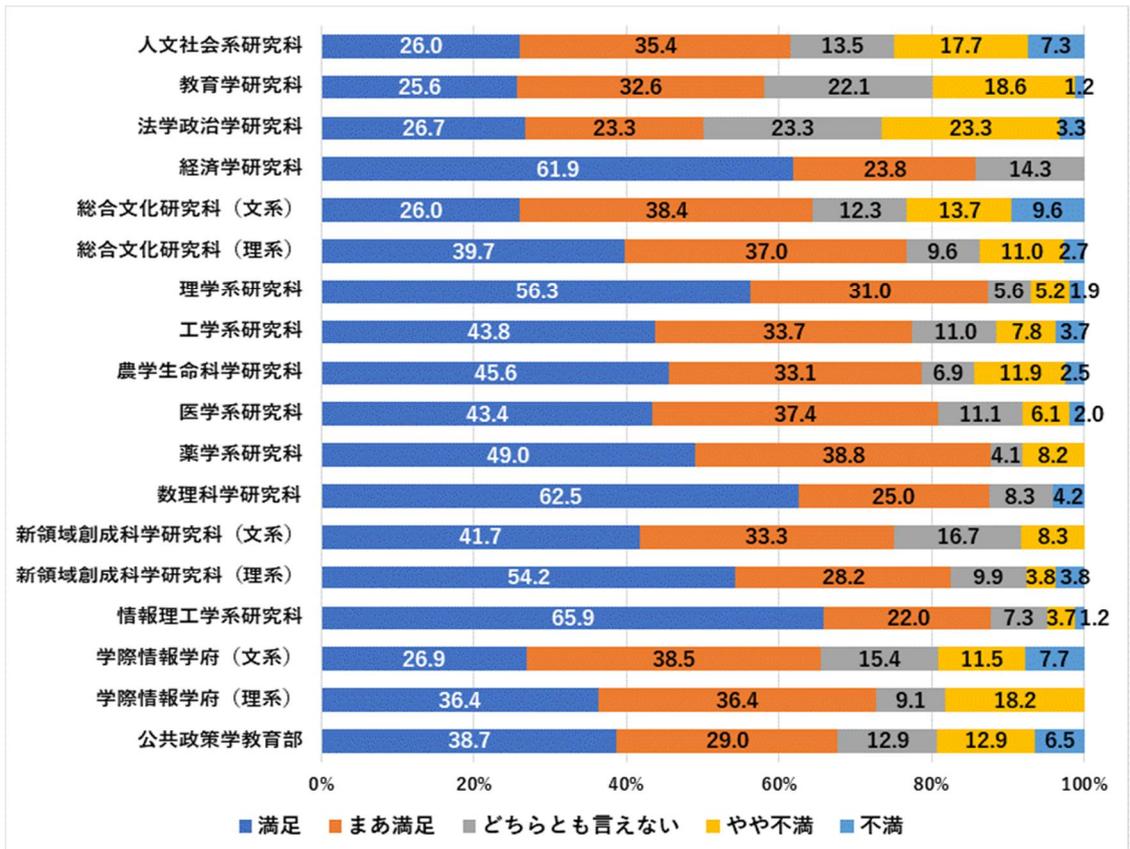
留学生が、日本人学生と同等か、それ以上満足している項目は、「研究設備・学修スペース」「指導教員の研究指導方法」「研究科事務対応」であり、いずれも半数程度が「満足」と回答している。一方、「研究上の経費」、「人間関係」については、留学生の方が、「満足」と回答した学生が少ない。

## 【大学院学生】

研究設備満足度（課程別）



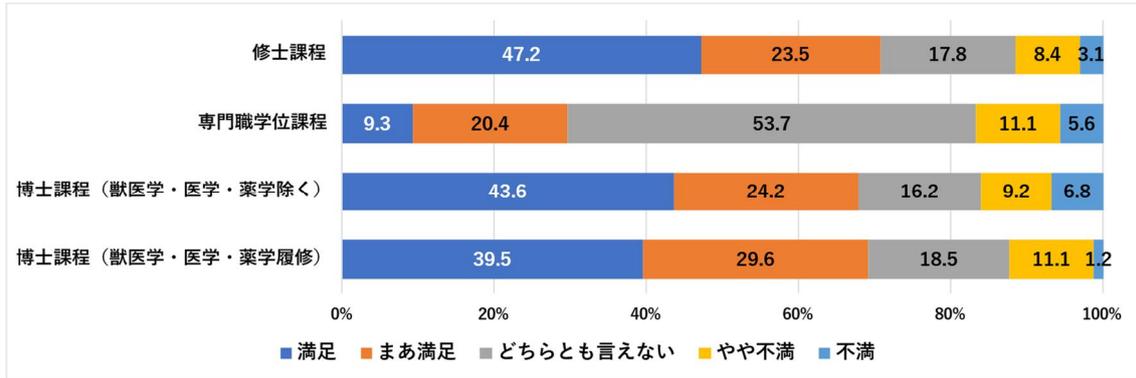
研究設備満足度（研究科別）



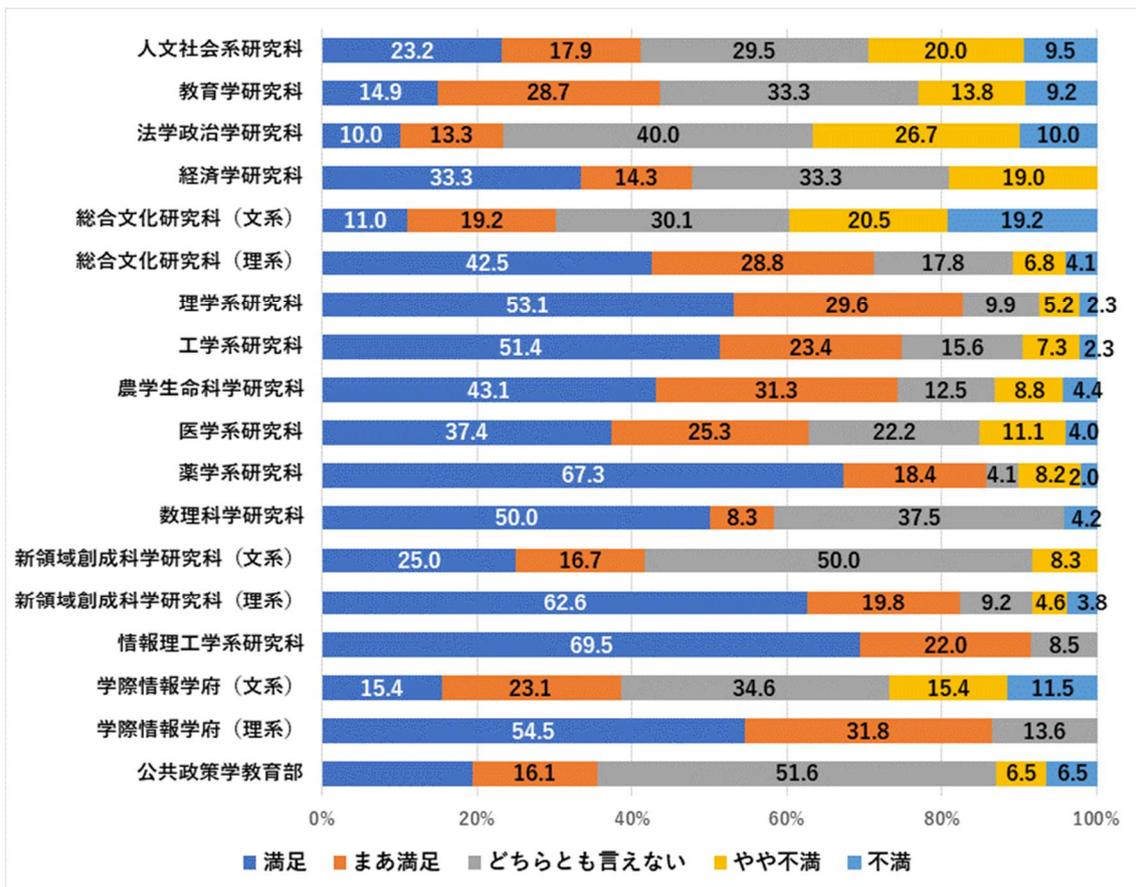
研究科別に研究設備の満足度をみると、情報理工学系研究科が 87.9%で最も満足度が高く、次いで薬学系研究科の 87.8%、数理科学研究科の 87.5%、理学系研究科の 87.3%と続く。この順位は前回調査（新領域創成科学研究科(文系)92.2%、理学系研究科 86.8%、薬学系研究科 84.7%、農学生命科学研究科 83.0%）と異なっている。一方、最も不満度が高かった研究科は法学政治学研究科の 26.6%（前回 28.5%）、人文社会系研究科の 25.0%（前回 27.3%）、総合文化研究科(文系)の 23.3%（前回 29.5%）と続く。前回調査と比較して、上位 3 つの研究科の不満足度は減少しているが、依然、文科系の研究科の方が理科系の研究科よりも不満度が高く、満足度が低い傾向が見て取れる。

## 【大学院学生】

研究上の経費の満足度（課程別）



研究上の経費の満足度（研究科別）



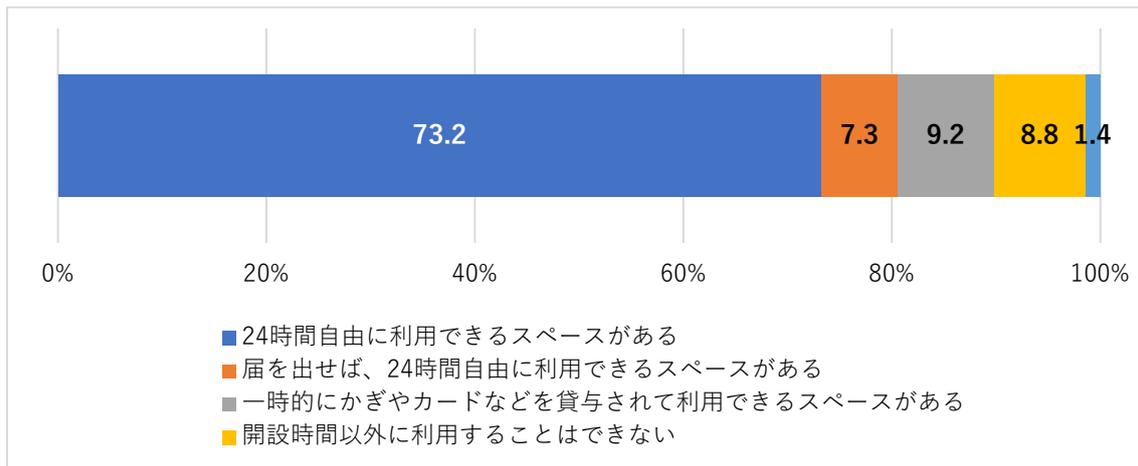
研究科別に研究上の経費の満足度をみると、最も満足度が高かった研究科は情報理工学系研究科の91.5%であり、学環情報学府（理系）の86.3%、薬学系研究科の85.7%と続く。公共政策学教育部では「どちらとも言えない」の割合が51.6%と高い。最も不満度が高かった研究科は総合文化研究科(文系)39.7%であり、法学政治学研究科の36.7%、人文社会系研究科の29.5%と続く。研究設備満足度と同様に文科系の研究科の不満度が高く、理科系の研究科の満足度が高い傾向が確認された。

## 【大学院学生】

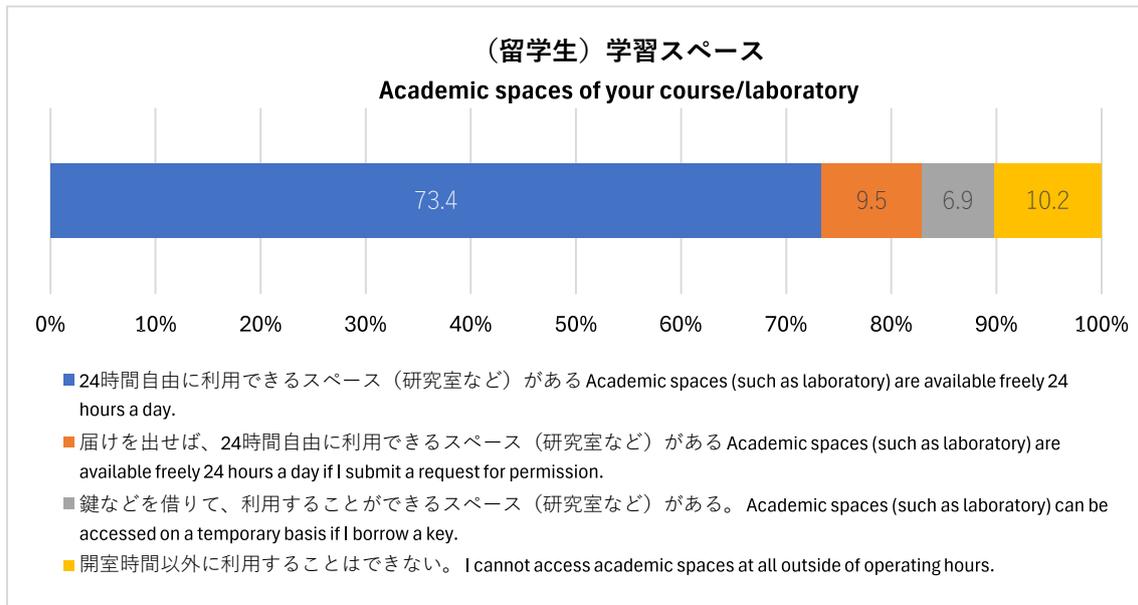
### 15. 研究室スペース

- 73.2%が「24時間自由に利用できるスペースがある」、前回調査より増加

15. あなたの所属している研究室（実験室を含む）や学習スペースの利用について、次の中からどれか1つ選んでください。



研究室や学習スペースについて尋ねたところ、「24時間自由に利用できるスペースがある」が73.2%（前回69.7%）で最も多い。「開設時間以外に利用することはできない」「利用できる学習スペースがない」が計10.2%（前回13.9%）であった。コロナ禍後、研究・学習スペースの利用条件における制限緩和が利用状況に影響を及ぼしている可能性がある。



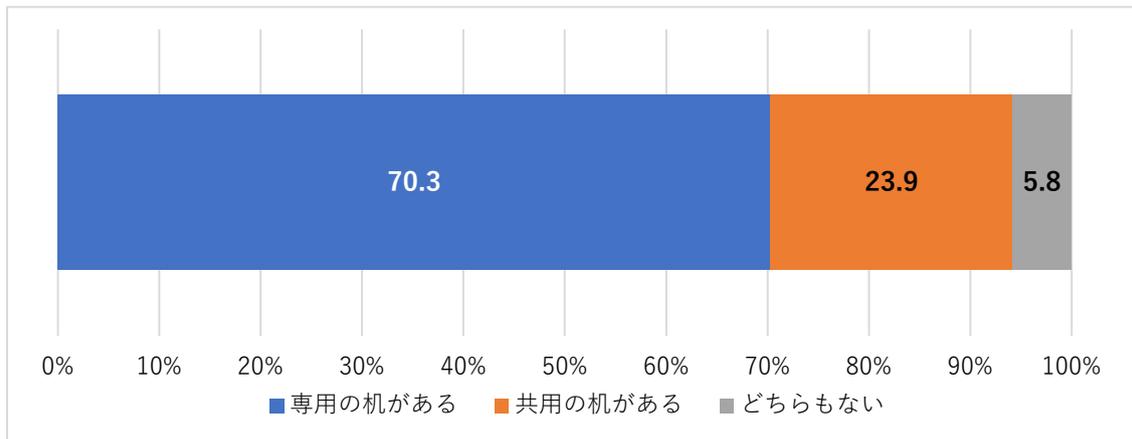
留学生版は「利用できる学習スペースがない」という選択肢がなく、「開室時間以外に利用することはできない」に「スペースがない」も含まれていると考えられる。全体としては日本人学生と大きな相違は見られなかった。

## 【大学院学生】

### 16. 研究室机

- 70.3%は研究室に「専用の机がある」

16. 研究室に、あなたの専用又は共用の机はありますか。



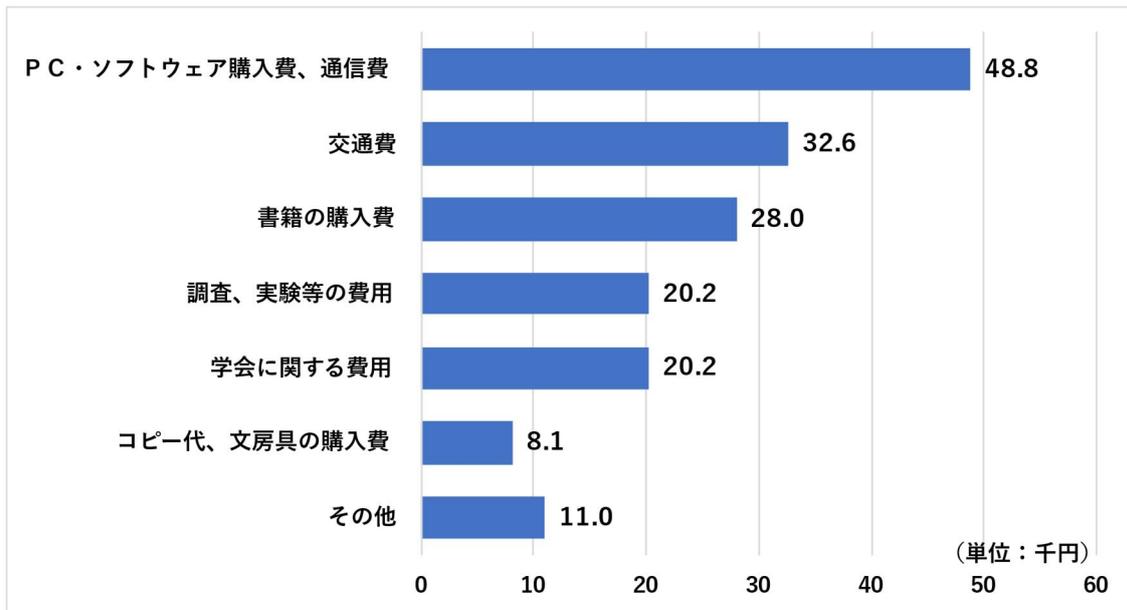
「研究室に、あなたの専用又は共用の机はありますか」と尋ねたところ、「専用の机がある」が70.3%（前回70.3%）、「共用の机がある」が23.9%（前回21.2%）、「どちらもない」が5.8%（前回8.5%）であった。

## 【大学院学生】

### 17. 研究費自己負担額

- 研究のために自己負担している金額は総計 168,900 円で、前回より 64,900 円増加
- 理科系よりも文科系で書籍の購入費・コピー代、文房具の購入費の金額が高い傾向

17. あなたの研究にあなた自身が負担しているお金は過去 1 年間でどれくらいですか。

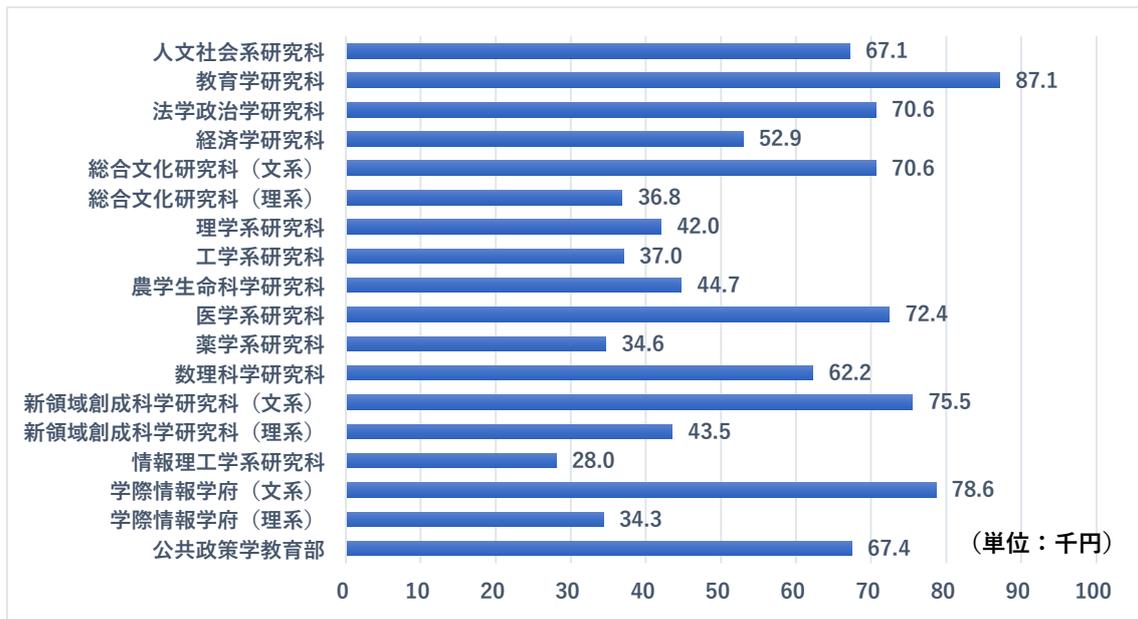


「あなたの研究にあなた自身が負担しているお金は過去 1 年間でどれくらいですか」という質問に対して、各品目の合算値は 168,900 円であり、前回の 104,000 円より 64,900 円も増加した。品目毎にみると、「PC・ソフトウェア購入費、通信費」が 48,800 円、「交通費」が 32,600 円である。「書籍の購入費」は 28,000 円で前回調査 (33,200 円) より 5,200 円減少した。「調査・実験等の費用」は 20,200 円で前回調査 (14,800 円) より 5,400 円増加した。「学会に関する費用」は 20,200 円で、前回調査 (11,100 円) より 9,100 円増加した。「コピー代、文房具の購入費」は 8,100 円で前回調査 (11,800 円) より 3,700 円減少している。「その他」は 11,000 円で前回調査 (33,100 円) から 22,100 円も減少した。

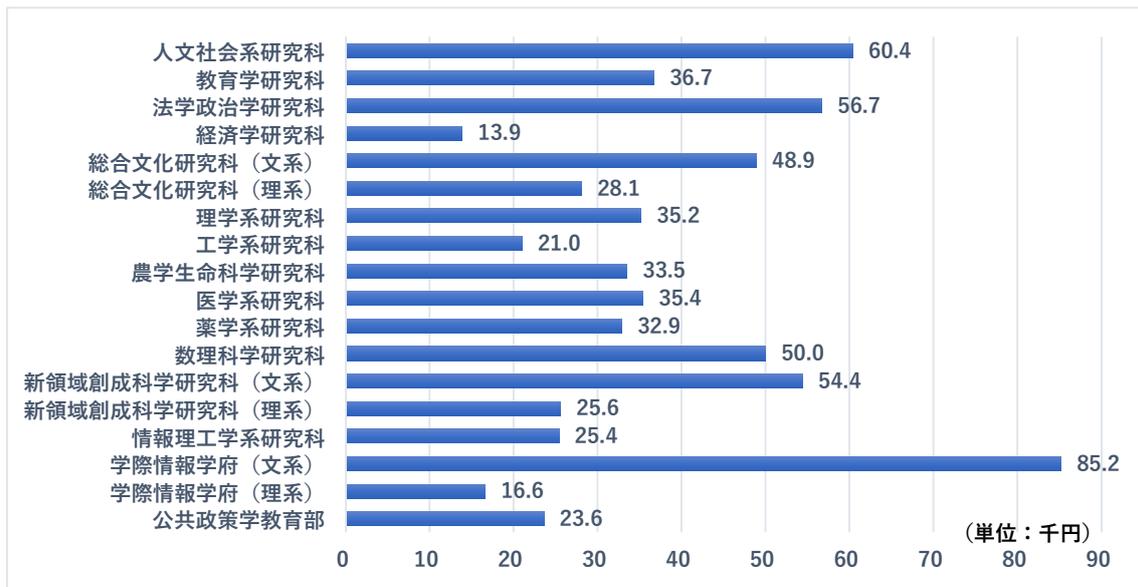
前回調査では回答項目に含まれていなかった PC・通信費等の費用と交通費について、物価上昇も伴って、負担額が大きい回答となった。書籍代や文房具等の費用については、活動制限緩和後に通学機会が増えたことで、負担額減少につながった可能性がある。

なお、回答方法について、前回調査では回答項目を「書籍の購入費」、「コピー代、文房具の購入費」、「調査、実験等の費用」、「学会に関する費用」、「その他」としていたが、今回調査では「書籍の購入費」「コピー代、文房具の購入費」、「調査、実験等の費用」、「学会に関する費用」、「交通費」、「PC・ソフトウェア購入費、通信費」、「その他」とした。そのため、合算値等が前回調査よりも大幅に増加している要因の一つとして注意する必要がある。自己負担分の PC・ソフトウェア購入費、通信費 (研究科別)

## 【大学院学生】



### 自己負担分の交通費 (研究科別)

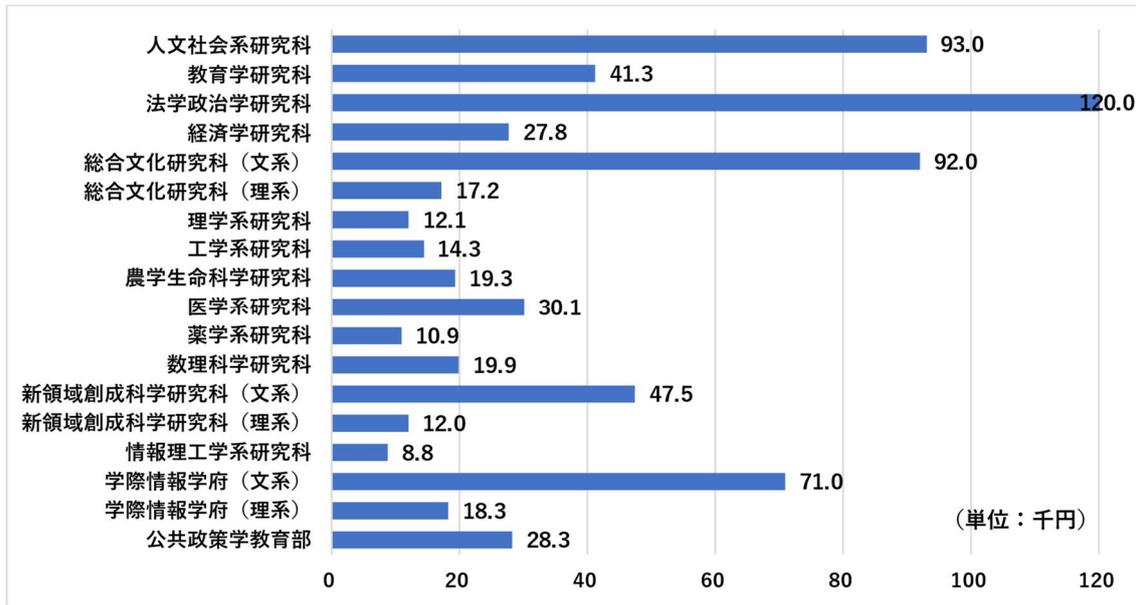


研究科別の自己負担分のPC・ソフトウェア購入費、通信費をまとめたところ、教育学研究科が87,100円と最も高く、学際情報学府（文系）の78,600円、新領域創成科学研究科（文系）の75,500円と続く。理科系の研究科よりも文科系の研究科で自己負担分のPC・ソフトウェア購入費、通信費が高い傾向がある。

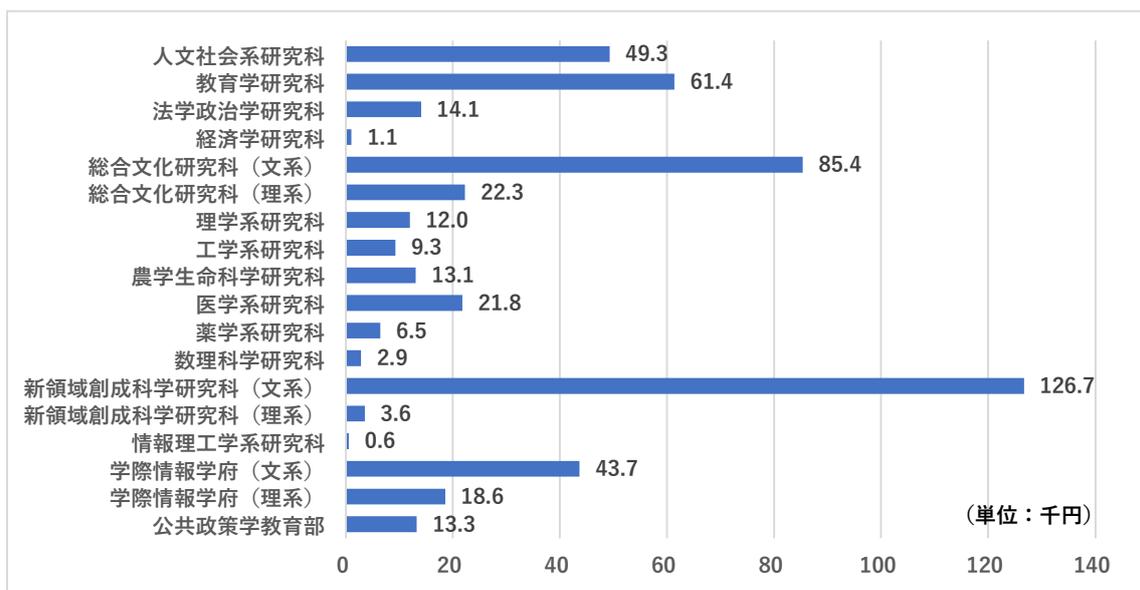
自己負担分の交通費については、学際情報学府（文系）が85,200円と最も高く、人文社会系研究科の60,400円、法学政治学研究科の56,700円と続く。自己負担分の交通費については、フィールドスタディを取り入れている研究科に多く見られ、また研究上の経費満足度が低い研究科に多い傾向が見られる。

## 【大学院学生】

自己負担分の書籍購入費（研究科別）



自己負担分の調査、実験等の費用（研究科別）

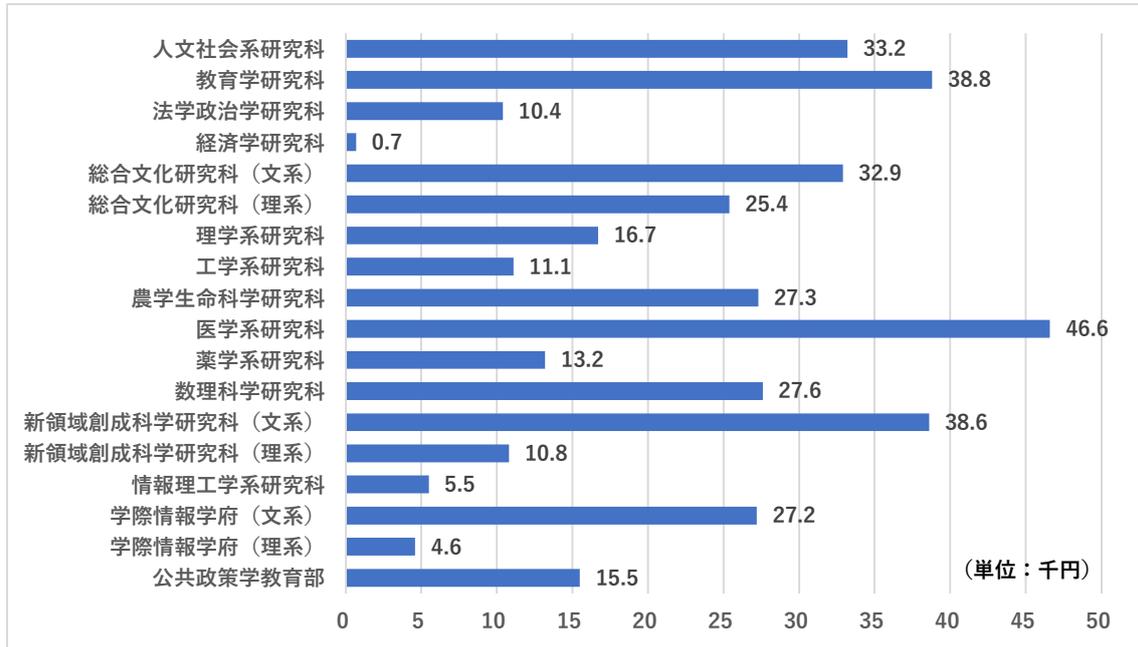


研究科別の自己負担分の書籍の購入費については、法学政治学研究科が 120,000 円と最も多く、人文社会系研究科の 93,000 円、総合文化研究科(文系)の 92,000 円と続く。前回調査同様に、理科系の研究科よりも文科系の研究科で自己負担分の書籍の購入費が高いことがみられる。

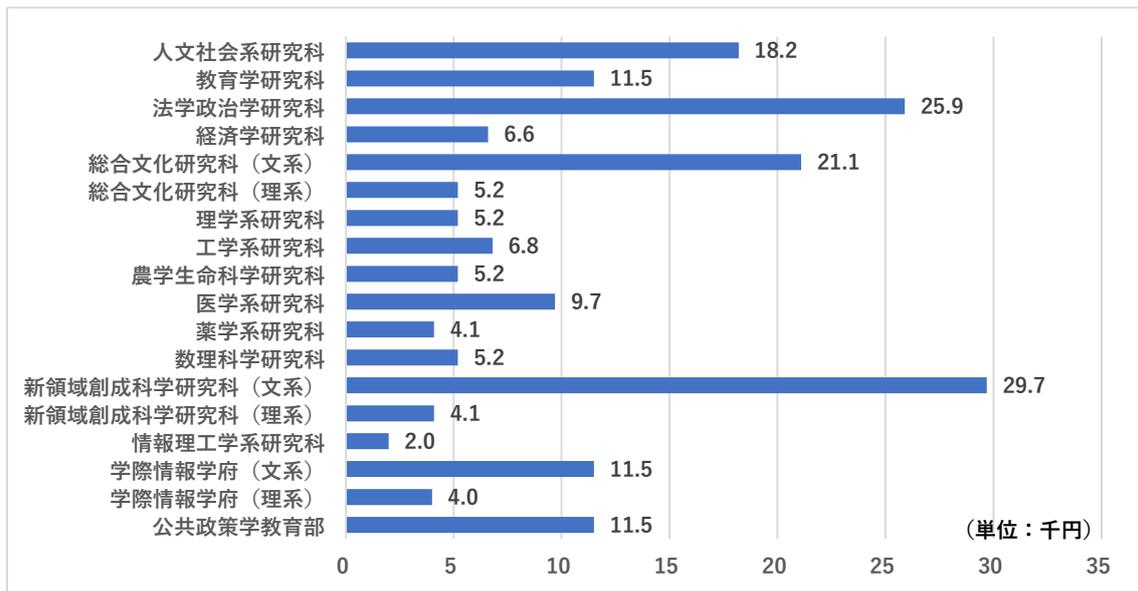
自己負担分の調査、実験等の費用については、新領域創成科学研究科（文系）が 126,700 円と最も多く、総合文化研究科（文系）の 85,400 円、教育学研究科の 61,400 円と続く。書籍の購入費同様に、理科系の研究科よりも文科系の研究科で調査、実験等の自己負担が大きいことがみられるうえに、その金額の差も目立っている。

## 【大学院学生】

自己負担分の学会に関する費用（研究科別）



自己負担分のコピー代、文房具の購入費(研究科別)



研究科別の自己負担分の学会に関する費用については、医学系研究科が46,600円と最も多く、教育学研究科の38,800円、新領域創成科学研究科（文系）の38,600円と続く。学会への参加頻度が高い研究科において、自己負担額も高くなっている可能性が見られる。

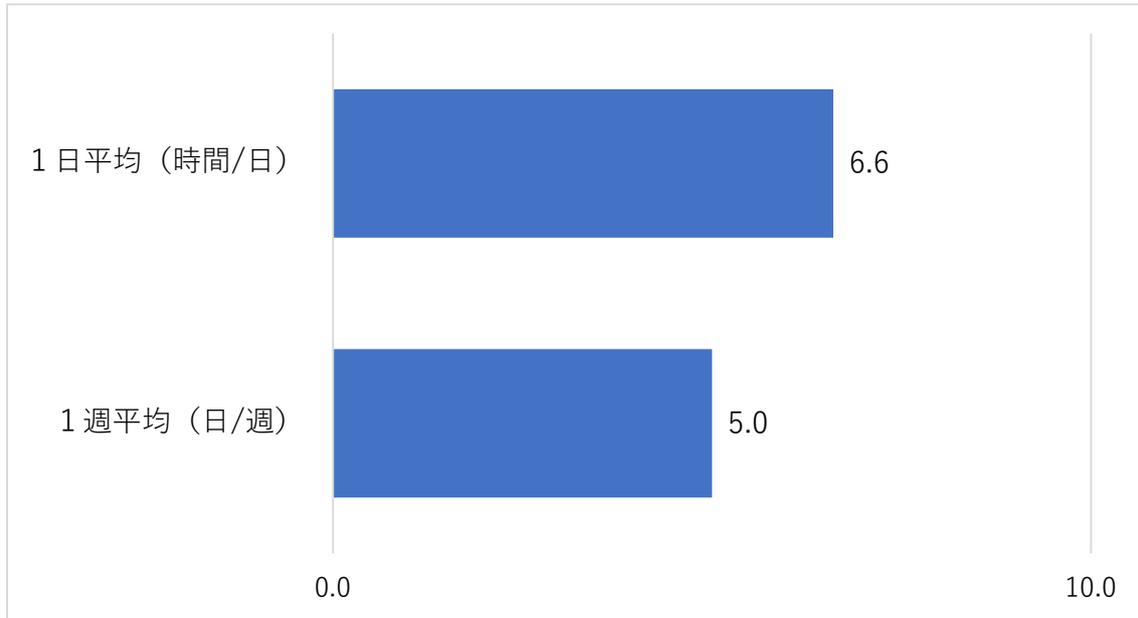
自己負担分のコピー代、文房具の購入費については、新領域創成科学研究科（文系）が29,700円と最も多く、法学政治学研究科の25,900円、総合文化研究科（文系）の21,100円と続く。コピー代、文房具については、理科系の研究科より文科系の研究科で自己負担額が高い傾向にあるが、その金額はコロナ禍であった前回調査から全体的に減少傾向にある。

## 【大学院学生】

### 18. 研究平均時間

- 研究時間は1日あたり6.6時間、1週間あたり5.0日

18. あなたは、どのくらい研究に従事していますか。(自宅等での作業時間も含む)



研究時間は1日あたり6.6時間(修士課程6.3時間、専門職学位課程3.6時間、博士課程(獣医学・医学・薬学除く)7.2時間、博士課程(獣医学・医学・薬学)8.2時間)、1週間あたり5.0日(修士課程4.9日、専門職学位課程4.2日、博士課程(獣医学・医学・薬学除く)5.3日、博士課程(獣医学・医学・薬学)5.2日)であった。1週間の研究時間に換算すると33時間となった。前回調査では1日あたり6.9時間、1週間あたり35.9時間であり、前回調査から引き続き減少傾向となっている。

留学生は、一日の平均の研究時間は6.8時間(SD=2.68)であり、在籍段階別にみると、研究生5.9時間(SD=2.45)、修士課程6.1(SD=2.60)、専門職学位4.7時間(SD=2.49)、博士7.7時間(SD=2.52)であった。特に博士課程の学生の研究時間が長い傾向は、日本人学生・留学生同様にみられる。

## 【大学院学生】

### 「Ⅲ.学会参加・研究活動」の分析（まとめ）

学会参加・研究活動の分析として、学会所属・発表状況、研究室の状況、研究時間などを調査した。活動制限緩和による影響を感じられるものも多く、学会への参加や発表会数については前回調査よりも増加しており、研究室や学習スペースの利用においても前回調査から利用状況は増加していた。また研究に対する学生の金銭的負担は、前回調査から引き続き大きく増加していた。特に研究室の設備や経費に対する満足度の低い文科系の研究科において、書籍費や調査費等の負担の割合が大きく、設備や研究費が潤沢な理科系との格差が感じられる。一方で研究時間については前回調査から引き続き減少傾向にあり、活動制限緩和後で通学やアルバイトの頻度等が増えたとしても、大学院生の研究時間の減少は大学の研究力に影響を与える可能性が高いため、今後も動向を注視する必要がある。

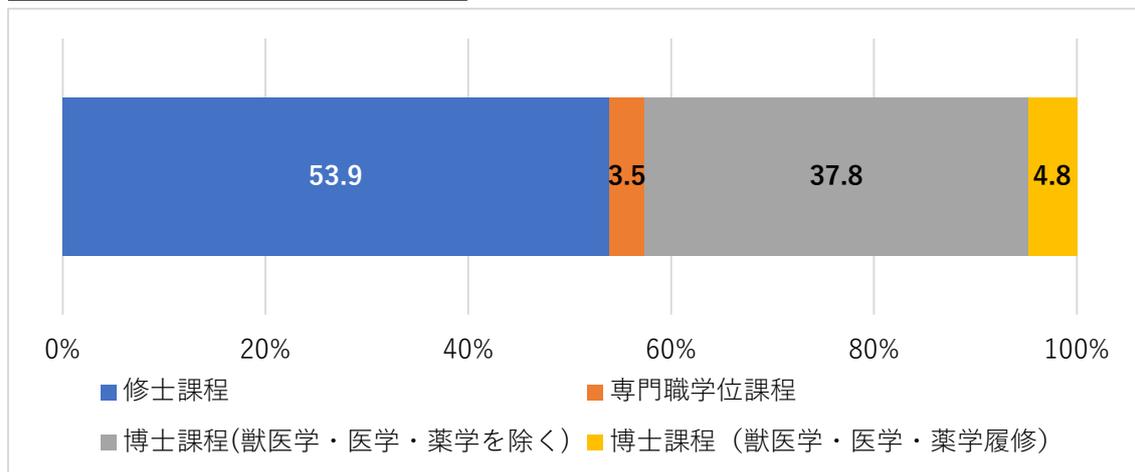
留学生の学会参加は、国内学会の参加経験が少ないことが一つの特徴としてみられた。また、一日の研究時間は、特に博士課程学生において長い。研究活動に関する満足度は国内生と比べても高い。ただし研究費や研究室内の人間関係等には、不満を感じている留学生もいる。

## 【大学院学生】

### IV. 就職

#### 19. 課程（設問 1 のグラフを再掲）

19. あなたの課程を選んでください。



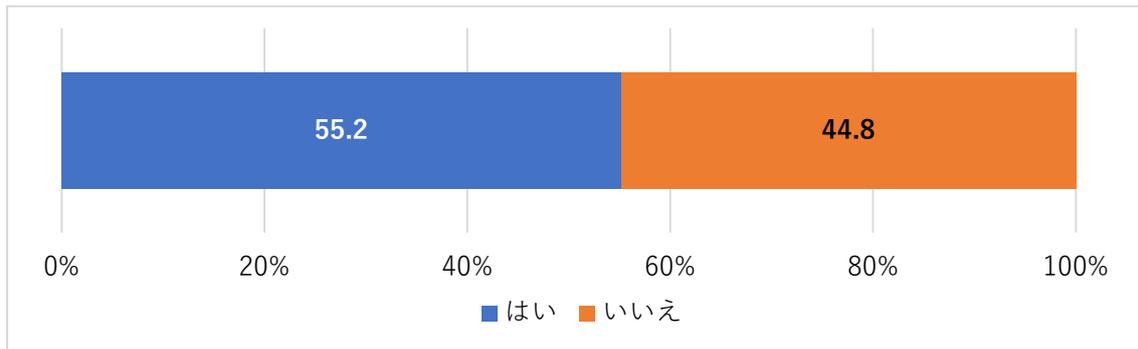
回答者は、修士課程が 53.9%、専門職学位課程が 3.5%、博士課程（獣医学・医学・薬学を含む）が 42.6%となっている。全学の構成と比べて、修士課程の回答者がやや多い。

## 【大学院学生】

### 20. 修了後の進路予定（修士課程）

- 半数以上の回答者は修了後の進路が決まった
- 前回調査に比べ、進路が決定した者の割合が7.4%ポイント減少

20. 修士課程修了後の進路は決まりましたか。



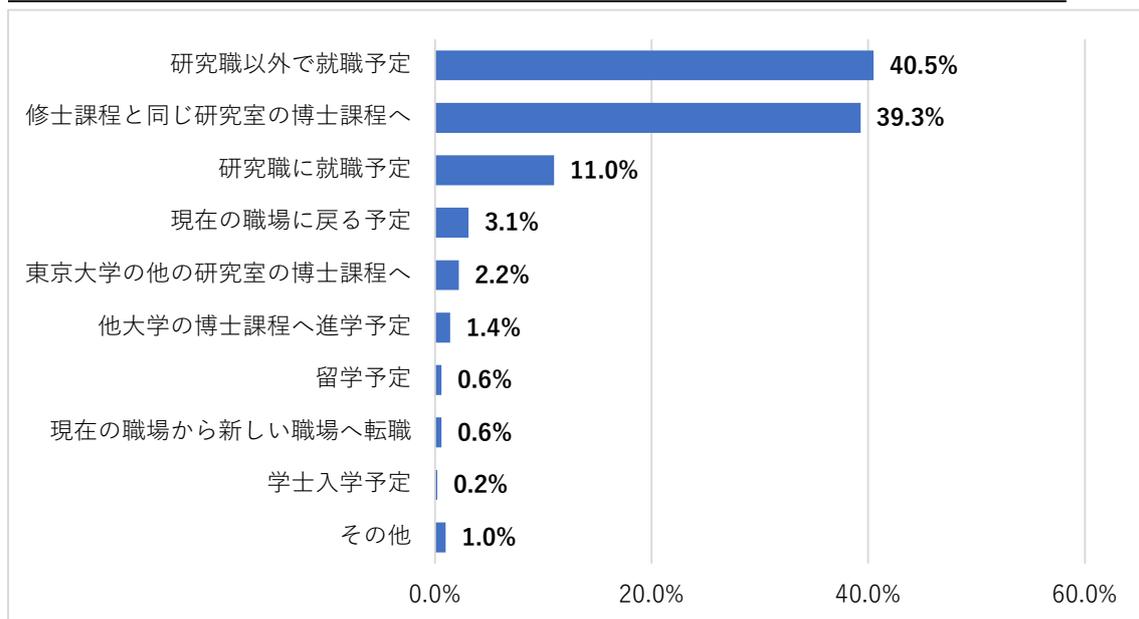
修士課程の中で、半数以上の回答者は修了後の進路が決まった。前回調査に比べ、進路が決定した者の割合が7.4%ポイント減少（前回62.6%）した。

## 【大学院学生】

### 21. 修了後の決定進路（修士課程）

- 修士課程修了後の決定進路は「研究職以外で就職予定」が最も多いが、40.5%で半数未満
- 「研究職以外で就職予定」「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」を選択した割合の差が、前回の9.4%から1.2%に縮小し、ほぼ同等

21. 修士課程修了後の決定進路について、あてはまるものを1つ選んでください。



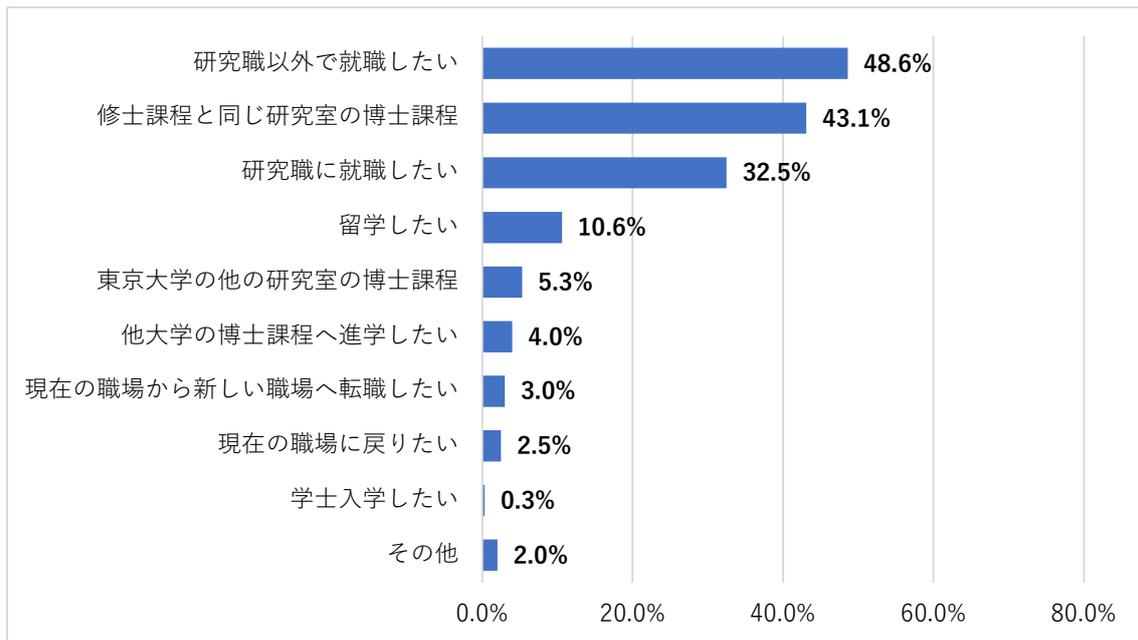
修士課程修了後の決定進路は「研究職以外で就職予定」が40.5%で最も多く、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」の39.3%と「研究職に就職予定」の11.0%と続く。上位の順位は前回調査から変動はないが、「研究職以外で就職予定」「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」を選択した割合の差が、前回の9.4%から1.2%に縮小し、ほぼ同等となった。

## 【大学院学生】

### 22. 修了後の希望進路（修士課程）

- 修士課程修了後の進路希望の上位3項目は「研究職以外で就職したい」、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」、「研究職に就職したい」
- 「研究職以外で就職したい」を回答した者は前回より3.8%ポイント減少

22. 進路希望について、どのように考えていますか。（2つまで選んでください。）



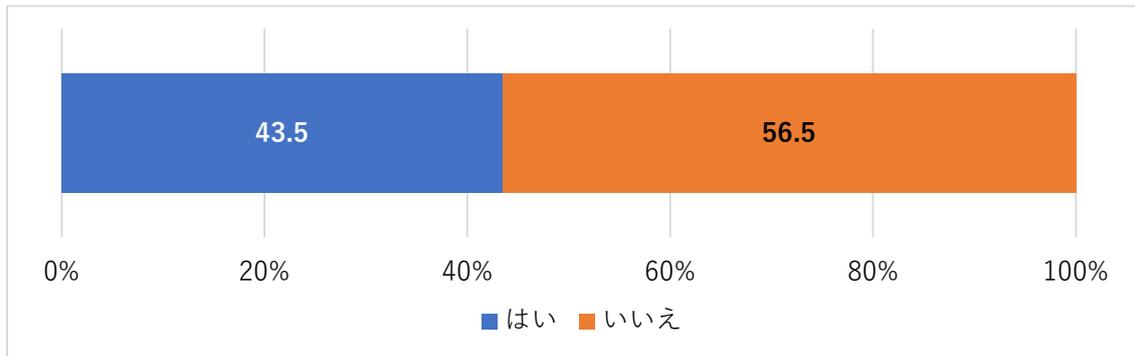
修士課程修了後の希望進路について2つまで尋ねたところ、「研究職以外で就職したい」が48.6%(前回52.4%)と最も多く、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」の43.1%(前回36.5%)と「研究職に就職したい」の32.5%(前回34.8%)と続く。上位6項目の順位は前回調査と同じで変動はないが、「研究職以外で就職したい」が前回より3.8%ポイント減少、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」が前回より6.6%ポイント増加した。

## 【大学院学生】

### 23. 修了後の進路予定（専門職学位課程）

- 半数以上の回答者は修了後の進路が決まっていない
- 前回調査に比べ、進路が決定した者の割合が4.8%ポイント増加

23.専門職学位課程修了後の進路は決まりましたか。



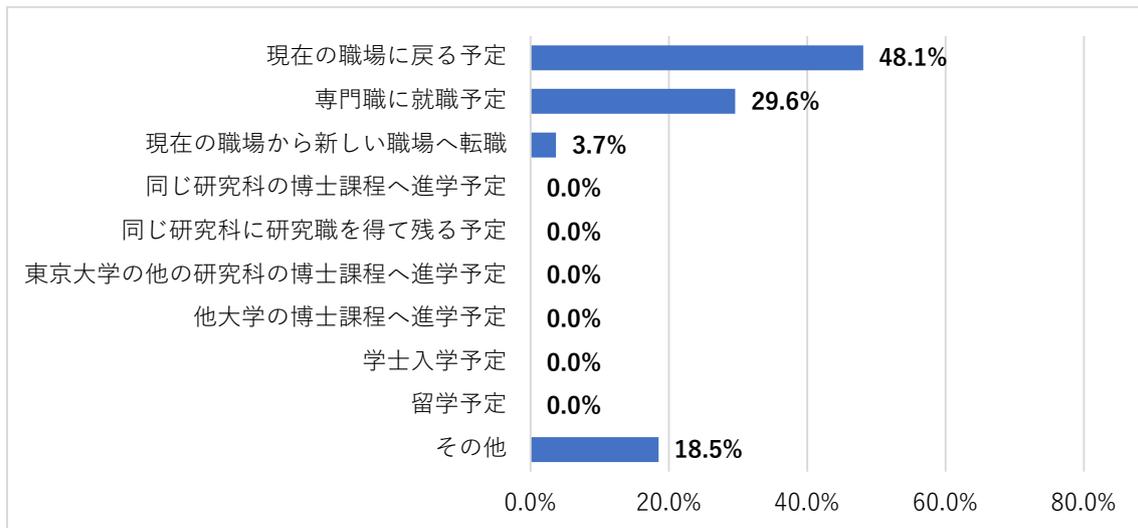
専門職学位課程の中で、半数以上の回答者は修了後の進路が決まっていない。修士課程修了予定者と逆の結果になっている。前回調査に比べ、進路が決定した者の割合が4.8%ポイント増加（前回38.7%）した。

## 【大学院学生】

### 24. 修了後の決定進路（専門職学位課程）

- 専門職学位課程修了後の決定進路は「現在の職場に戻る予定」が半数近くを占め最も多い
- 前回調査より第1位と第2位の順位が変動し、「現在の職場に戻る予定」の者の割合が「専門職に就職予定」の者の割合を上回った

24. 専門職学位課程修了後の決定進路について、あてはまるものを1つ選んでください。



専門職学位課程修了後の決定進路は「現在の職場に戻る予定」が48.1%で最も多く、「専門職に就職予定」の29.6%、「その他」の18.5%と続く。

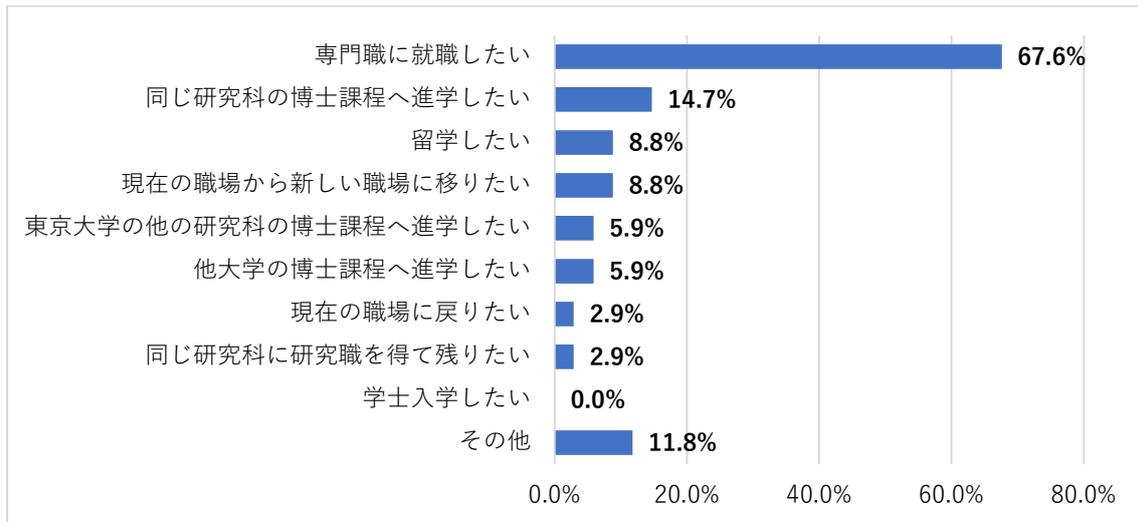
第1位の「現在の職場に戻る予定」（前回調査29.2%）は、前回調査より18.9%ポイント増加し、「専門職に就職予定」（前回調査50.0%）は、前回調査より20.4%ポイント減少しているが、サンプル数が少ないため、その影響を受けている可能性がある。

## 【大学院学生】

### 25. 修了後の希望進路（専門職学位課程）

- 専門職学位課程修了後の進路希望の上位3項目は「専門職に就職したい」、「同じ研究科の博士課程へ進学したい」、「その他」
- 前回調査では0.0%だった「同じ研究科の博士課程へ進学したい」が14.7%に増加

25. 進路希望について、どのように考えていますか。（2つまで選んでください。）



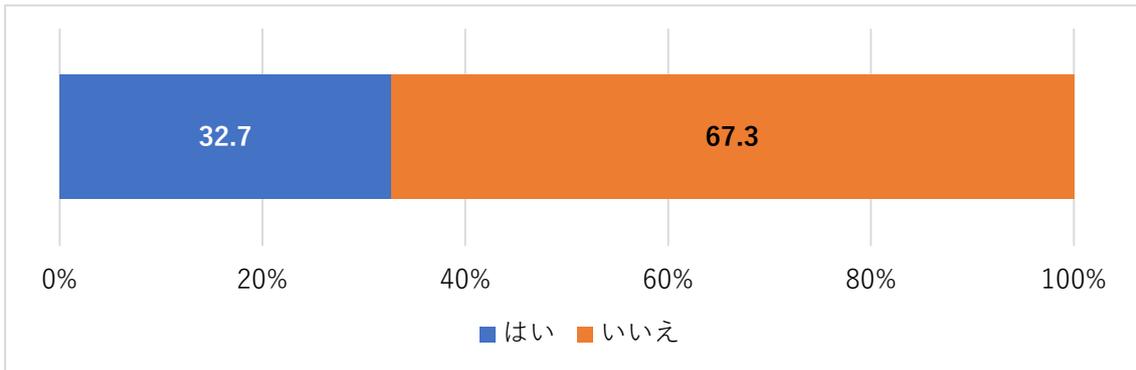
専門職学位課程修了後の希望進路について2つまで尋ねたところ、「専門職に就職したい」が67.6%(前回73.7%)と最も多く、「同じ研究科の博士課程へ進学したい」の14.7%(前回0.0%)と「その他」の11.8%(前回15.8%)と続く。

## 【大学院学生】

### 26. 修了後の進路予定（博士課程）

- 67.3%の回答者は修了後の進路が決まっていない
- 割合は前回調査から変動なし

26.博士課程修了後の進路は決まりましたか。



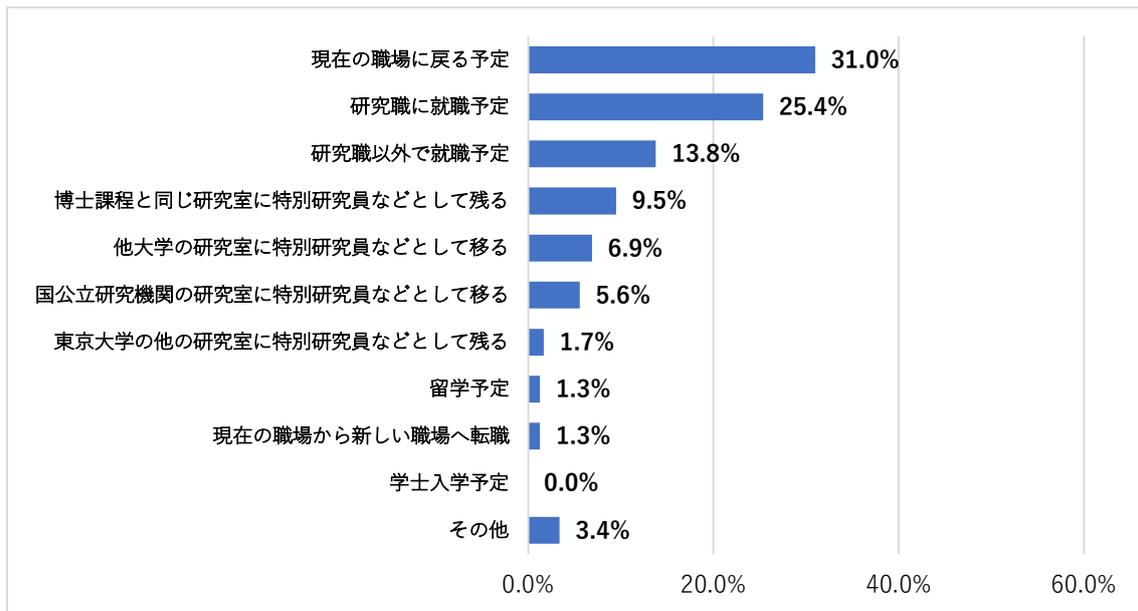
博士課程の中で、67.3%の回答者は修了後の進路が決まっていない。なお、この割合は前回調査から変動はない。修士課程修了予定者と逆の結果になっている。

## 【大学院学生】

### 27. 修了後の決定進路（博士課程）

- 博士課程修了後の決定進路は「現在の職場に戻る予定」「研究職に就職予定」
- 前回調査から順位に変動はない

27. 博士課程修了後の決定進路について、あてはまるものを1つ選んでください。



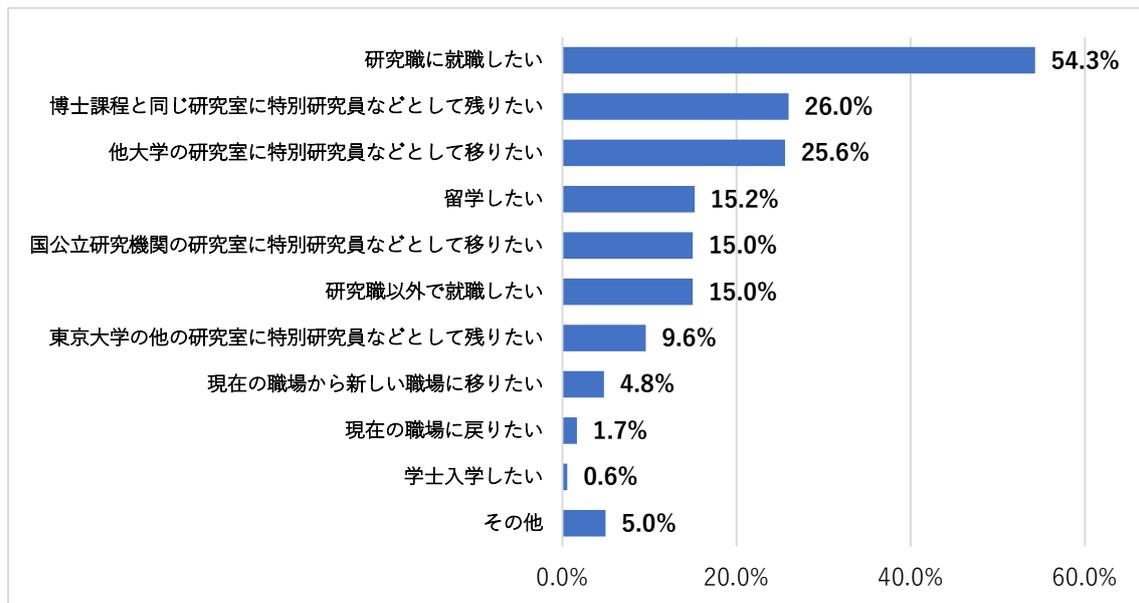
博士課程修了後の決定進路は「現在の職場に戻る予定」が31.0%で最も多く、「研究職に就職予定」の25.4%、「研究職以外で就職予定」の13.8%と続く。各項目の順位は前回調査から変動はないが、第1位の「現在の職場に戻る予定」（前回調査27.3%）は、前回調査より3.7%ポイント増加した。

## 【大学院学生】

### 28. 修了後の希望進路（博士課程）

- 博士課程修了後の進路希望の上位3項目は「研究職に就職したい」、「博士課程と同じ研究室に特別研究員などとして残りたい」、「他大学の研究室に特別研究員などとして移りたい」

28. 進路希望について、どのように考えていますか。（2つまで選んでください。）



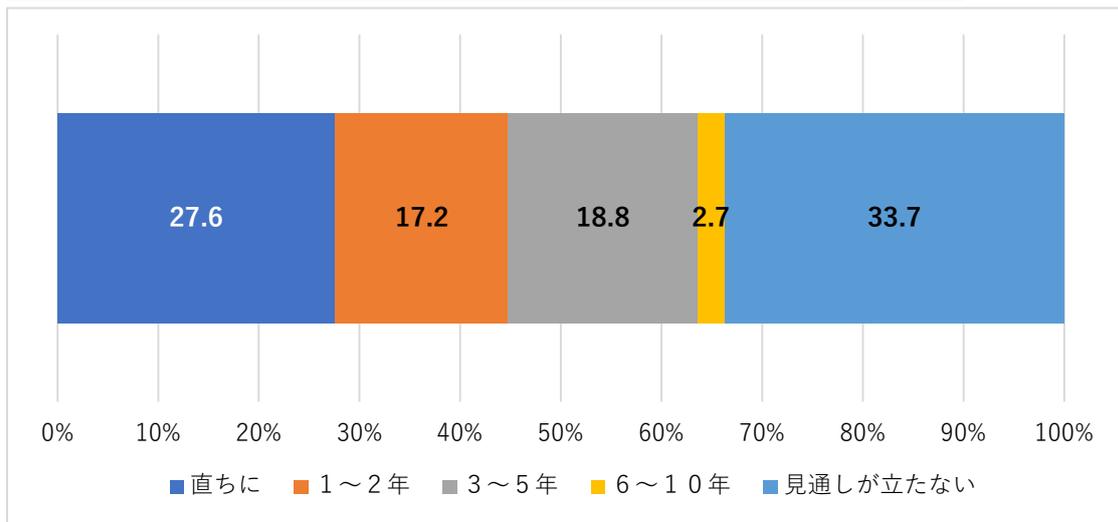
博士課程修了後の希望進路について2つまで尋ねたところ、「研究職に就職したい」が54.3%(前回55.4%)と最も多く、「博士課程と同じ研究室に特別研究員などとして残りたい」の26.0%(前回25.6%)、「他大学の研究室に特別研究員などとして移りたい」の25.6%(前回24.1%)と続く。一方、過半数の回答者が「研究職に就職したい」と回答しているが、決定進路では「研究職に就職予定」と回答している者が25.4%で、28.9%ポイントの差がある。

## 【大学院学生】

### 29. 教育職・研究職就職

- 博士課程の修了後、教育職・研究職への就職見込み「2年以内」44.8%、「見通しが立たない」33.7%

29. 教育職、研究職をめざしている方に伺います。博士課程修了後、何年くらいで教育職・研究職に就けるとお考えですか。次の中からどれか1つ選んでください。



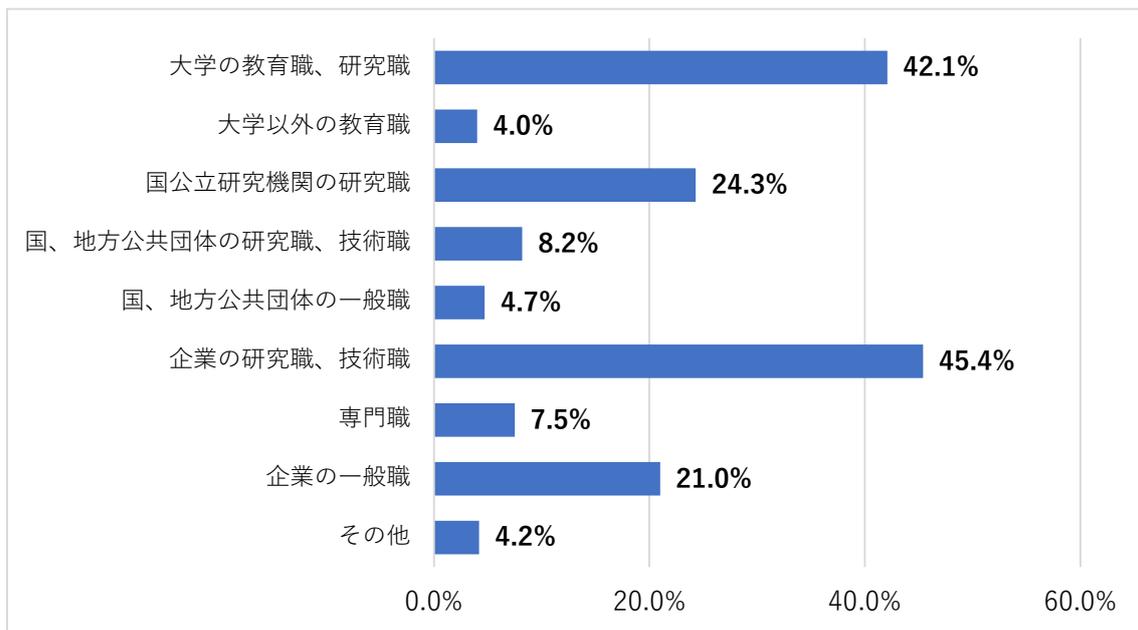
博士課程の修了後、教育職・研究職を目指している者を対象に就職までの期間について尋ねたところ、「見通しが立たない」が33.7%(前回37.4%)で最も多く、「直ちに」の27.6%(前回25.4%)、「3～5年」の18.8%(前回18.2%)と続く。

## 【大学院学生】

### 30. 希望する就職先

- 「企業の研究職、技術職」が45.4%で最も多い
- 文科系では「大学の教育職、研究職」が63.1%で最も多い
- 理科系では「企業の研究職、技術職」が55.6%で最も多い

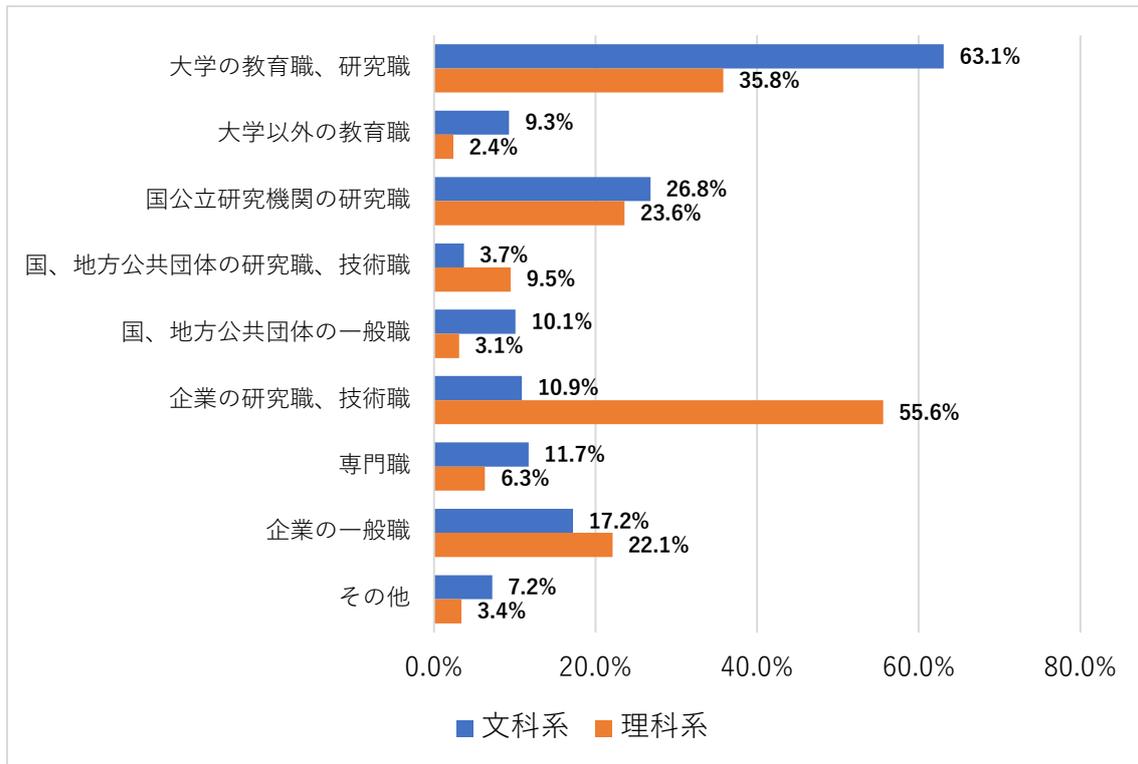
30. 将来どのような方面に就職したいと思っていますか。(2つまで選んでください。)



全員に対して就職希望に関して尋ねたところ、「企業の研究職、技術職」が45.4%（前回43.5%）で最も多く、「大学の教育職、研究職」の42.1%（前回40.8%）、「国公立研究機関の研究職」の24.3%（前回27.4%）と続く。

## 【大学院学生】

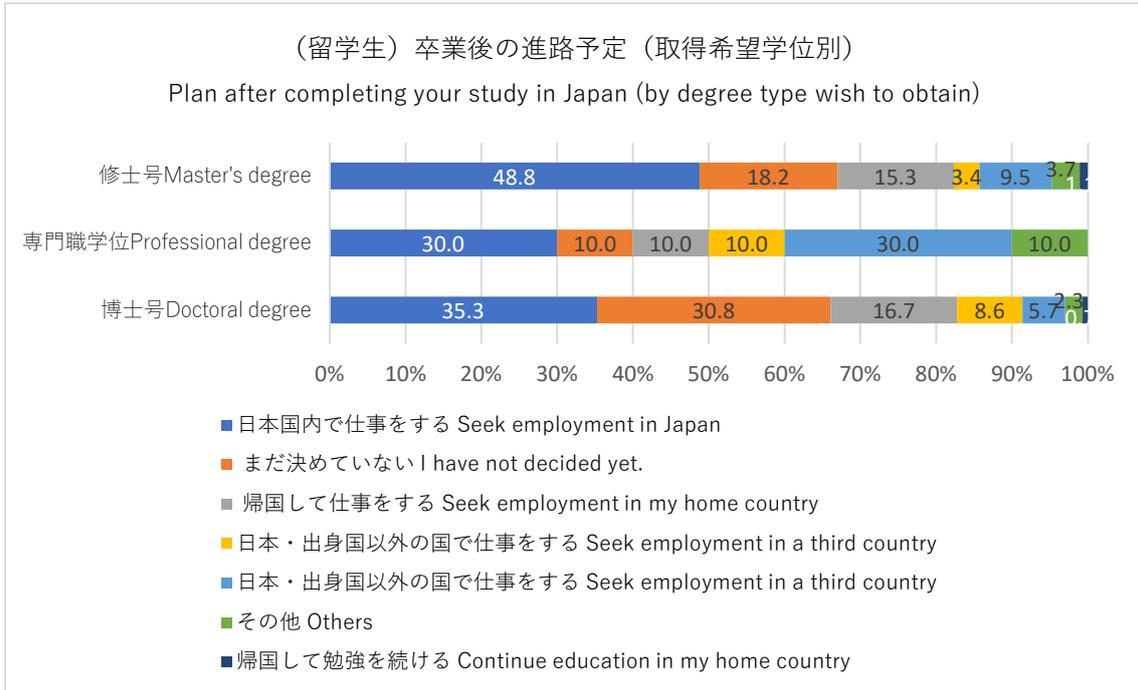
### 希望する就職先（文理別）



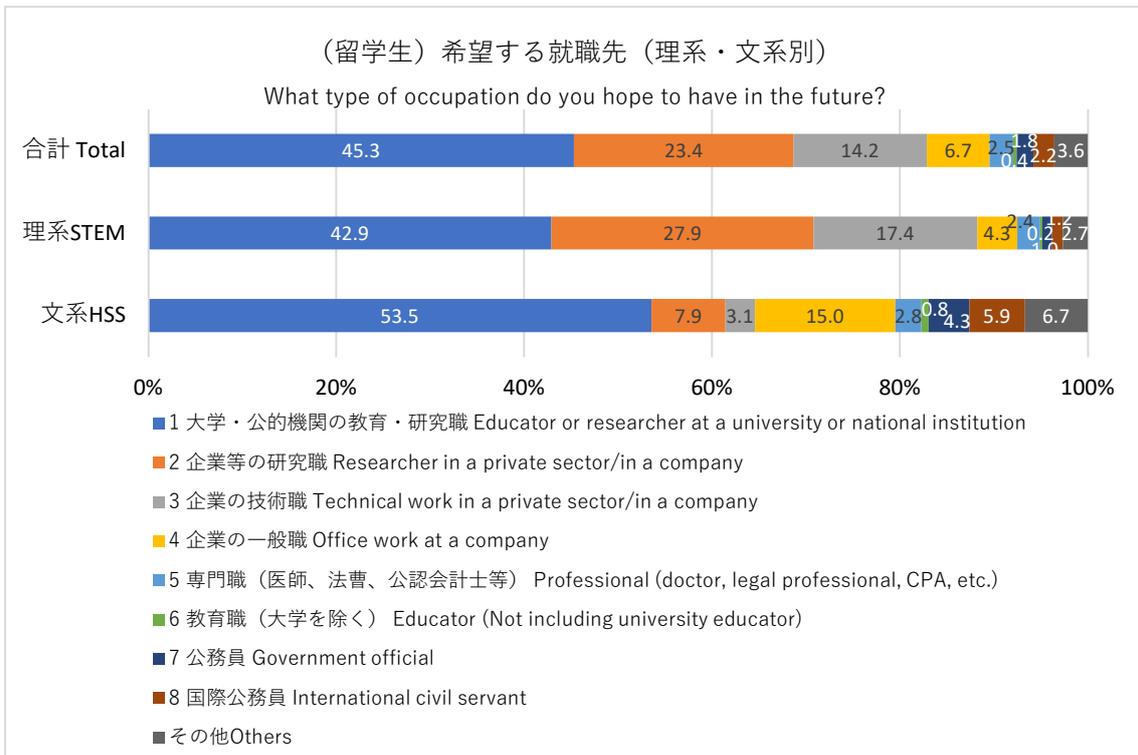
文理別に結果を確認すると、文科系では「大学の教育職、研究職」が 63.1%で半数を超え、(前回 61.2%)最も多い。次いで「国公立研究機関の研究職」の 26.8%(前回 27.1%)、「企業の一般職」の 17.2%(前回 15.2%)と続く。一方で理科系では「企業の研究職、技術職」が 55.6%(前回 54.3%)で最も多く、「大学の教育職、研究職」の 35.8%(前回 34.4%)、「国公立研究機関の研究職」の 23.6%(前回 27.4%)と続く。文科系で最も選択された「大学の教育職、研究職」では文理で 27.3%ポイント(前回 26.8%ポイント)の差がみられたのに対し、理科系で最も選択された「企業の研究職、技術職」は文理で 44.7%(前回 45.3%ポイント)の差がみられ、文科系と理科系で明確に志望先が異なっている。

# 【大学院学生】

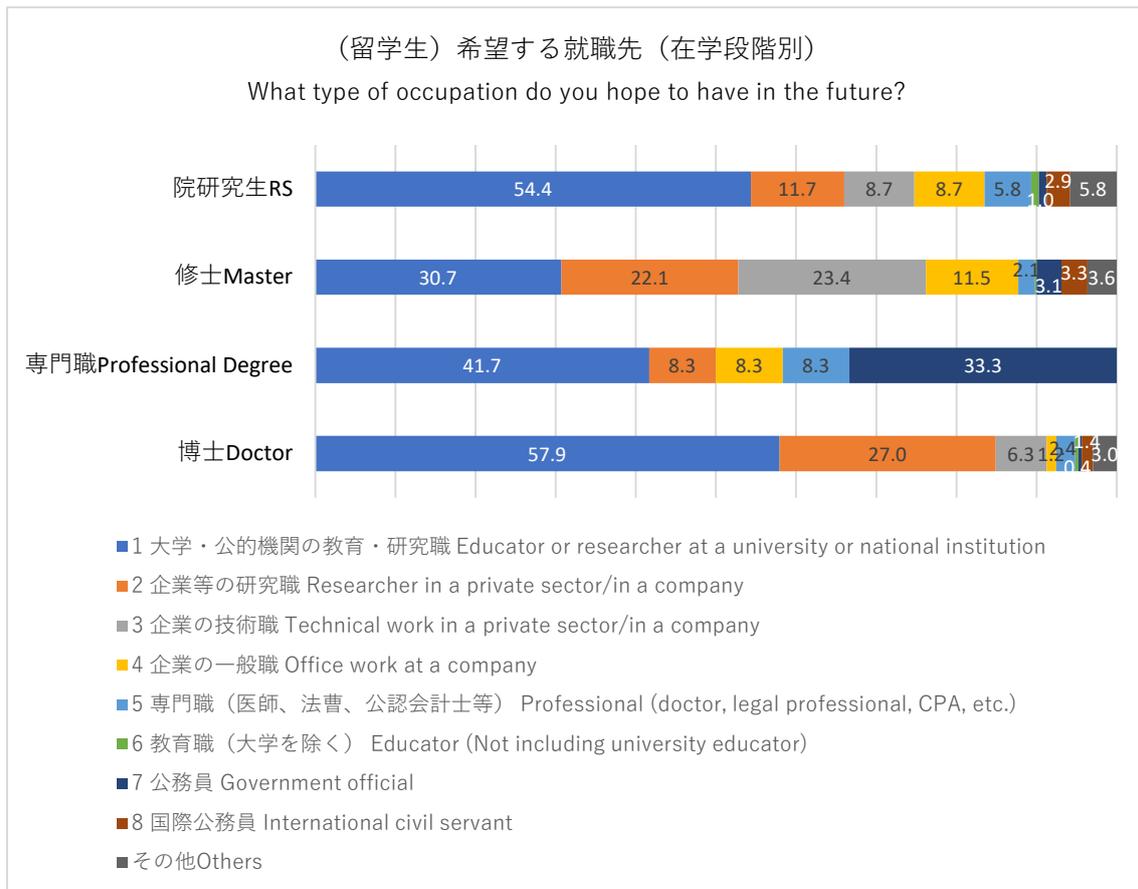
## 大学院留学生の進路



修士号まで取得希望の留学生のうち、48.8%は、日本国内での就職を希望しており、最も日本での就職希望者割合が高い。博士号まで取得予定者は、35.3%が日本国内、30.8%がまだ決めていないと回答している。一方、帰国して仕事することを予定している学生も、修士号では15.3%、専門職学位では10.0%、博士号取得希望者では16.7%みられる。



## 【大学院学生】



希望する就職先は、どの在学段階においても大学などの研究職が多く、ついで企業などの研究職が多い。在学段階別には、専門職学位の学生において、公務員を目指す学生が多い。

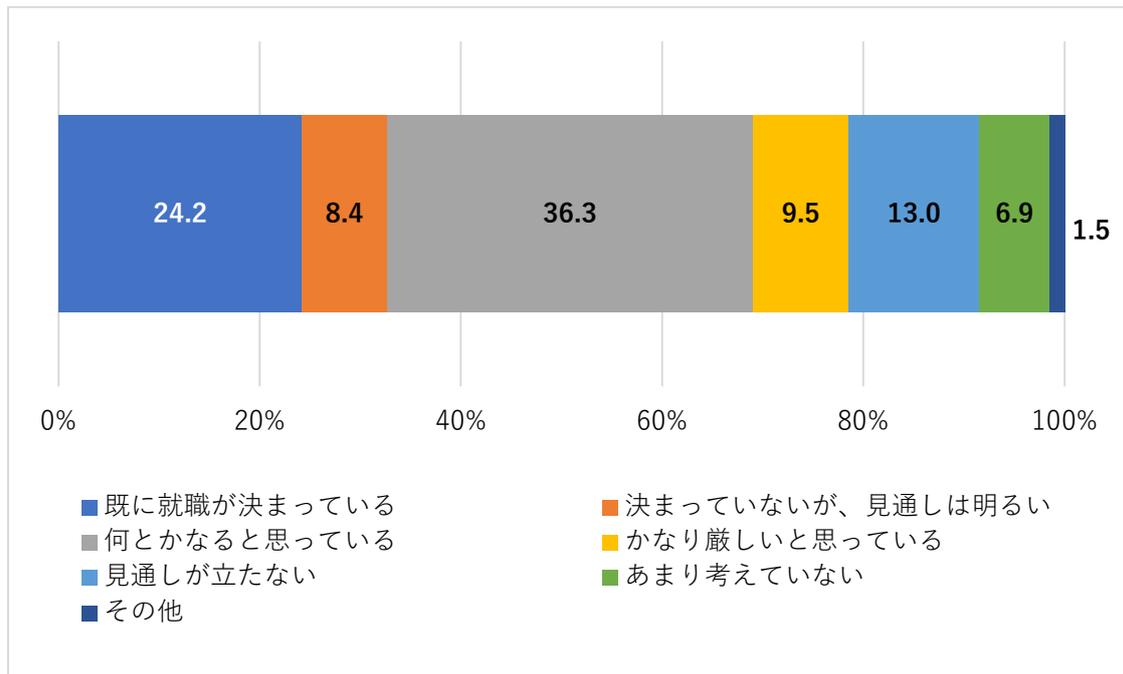
その他、進路に関する質問項目は、留学生と日本人学生版とで異なる項目が多いため、別途留学生版報告書で詳細を述べる。

## 【大学院学生】

### 31. 就職見通し

- 就職の見通し「何とかなると思っている」が36.3%で最も多い
- 前回調査に比べ、「何とかなると思っている」と回答した者の割合が5.3%ポイント増加

31. 就職の見通しについて、どのように考えていますか。次の中からどれか1つ選んでください。



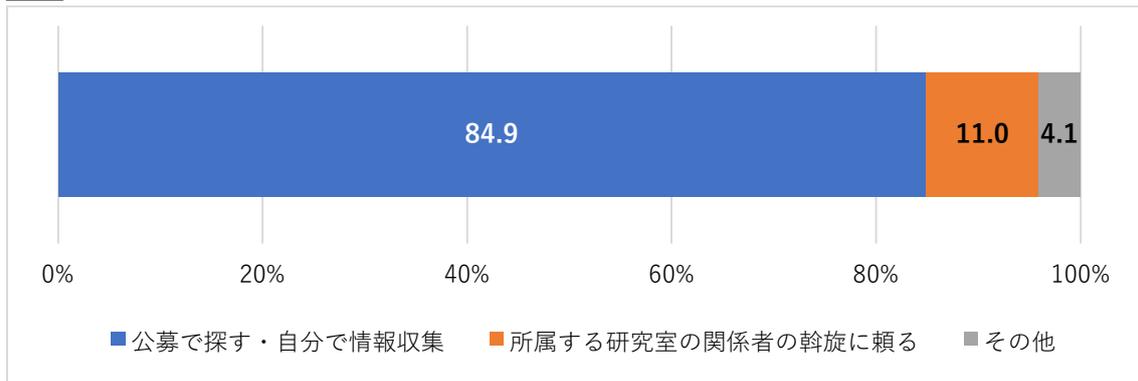
就職の見通しについて尋ねたところ、「何とかなると思っている」が36.3%で最も多く（前回31.0%）、「既就職が済んでいる」の24.2%（前回29.9%）、「見通しが立たない」の13.0%（前回12.7%）と続く。各項目の順位は前回調査から大きな変動はないが、「何とかなると思っている」が5.3%ポイント増加し、「既就職が済んでいる」が5.7%ポイント減少した。

## 【大学院学生】

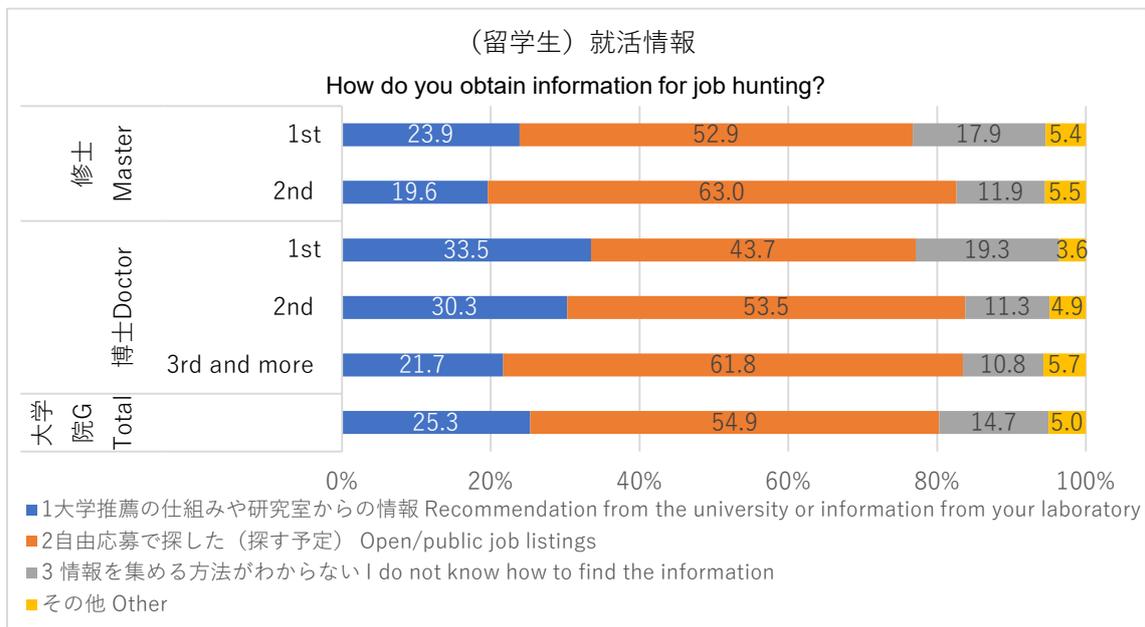
### 32. 就職情報

- 就職情報「公募で探す・自分で情報収集」8割

32. どのように就職活動をしますか。(しましたか。)次の中からどれか1つ選んでください。



就職情報は「公募で探す・自分で情報収集」が84.9%(前回85.8%)で最も多い。「所属する研究室の関係者の斡旋に頼る」は11.0%で前回より0.4%ポイント増加したが、基本的に前回調査と一致する。



選択肢は若干異なるが、大学院留学生全体のうち「自由応募で探す」が54.9%で最も多く、「大学推薦の仕組みや研究室からの情報」は25.3%、「情報を集める方法がわからない」が14.7%であった。学年が若いほど、「大学推薦」等の方法への期待がみられるが、実際に就職活動経験を持つ人が多い最終学年では、自由応募が増えており、「情報を集める方法」のわかりにくさが生まれていることが見て取れる。

## 【大学院学生】

### 「IV.就職」の分析（まとめ）

進路予定について、修士課程では半数以上が決まったことに対して、専門職学位課程では半数以上、博士課程では6割以上の回答者が修了後の進路が決まっていない。これは前回調査と同様の傾向である。修士課程では「研究職以外で就職予定」が40.5%を占めるが、専門職学位課程では「現在の職場に戻る予定」が半数近く、「専門職に就職予定」が29.6%と続き、博士課程学生は「現在の職場に戻る予定」と「研究職に就職予定」の割合が比較的高く、それぞれ3割前後である。一方で、いずれの課程においても、希望進路と決定進路の差がみられる。特に、博士課程修了後に「研究職に就職したい」学生は過半数であるが、希望通り就職予定者は3割未満である。教育職・研究職を目指しても、修了から就職までの見通しが立たないと回答した博士課程学生は33.7%おり、前回調査と同様の傾向が引き続きみられる。

文理別で希望する就職先をみると、目立った差異を確認できた。文科系では「大学の教育職、研究職」が、理科系では「企業の研究職、技術職」が過半数となった。

大学院留学生のうち、取得希望学位が修士号の場合と、博士号までの場合とでは、進路予定に傾向の相違がみられる。修士までの学生は、日本国内での就職希望割合が高い。博士まで取得希望者は未決定者が多く、また帰国を予定している学生もいずれの在学段階の学生にもみられる。留学生の進路は、職種や仕事を行う場所など、選択肢も多い一方で、進路決定に必要な情報が得にくいため、引き続き、学生の進路希望動向を把握しながら、ニーズに沿った就職支援の在り方を検討していく必要がある。

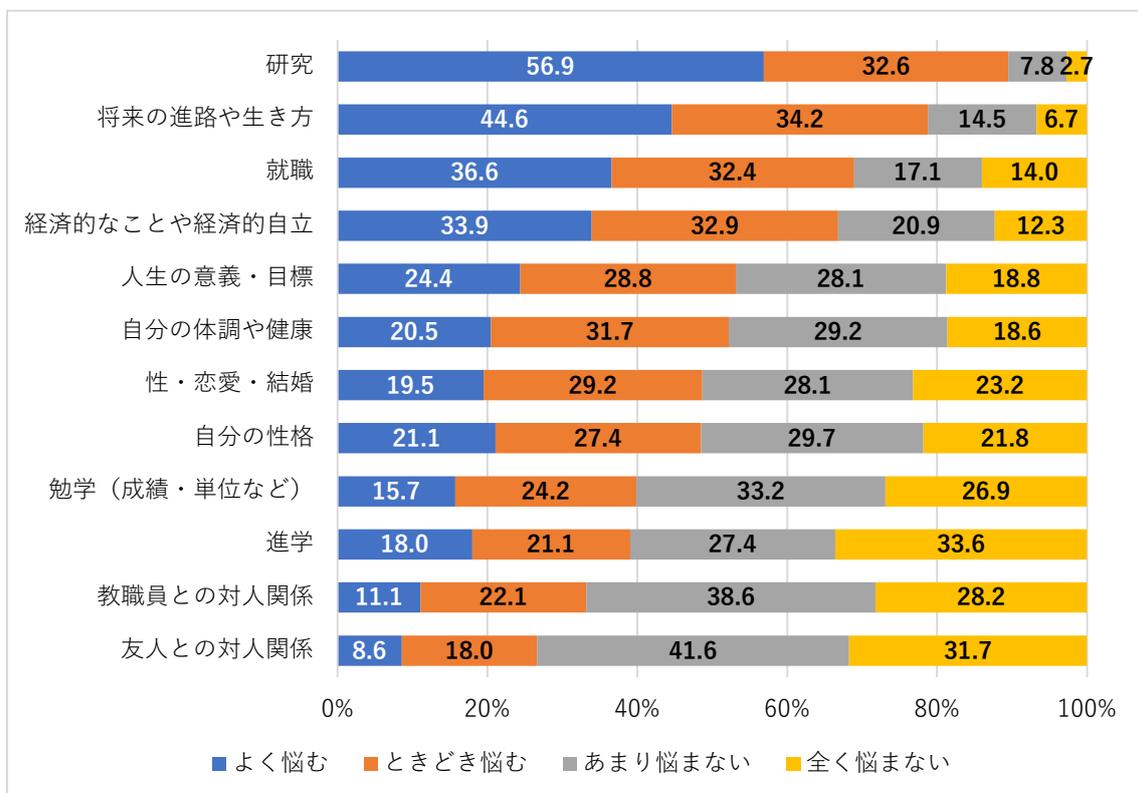
## 【大学院学生】

### V. 不安・悩み

#### 33. 不安・悩みの程度

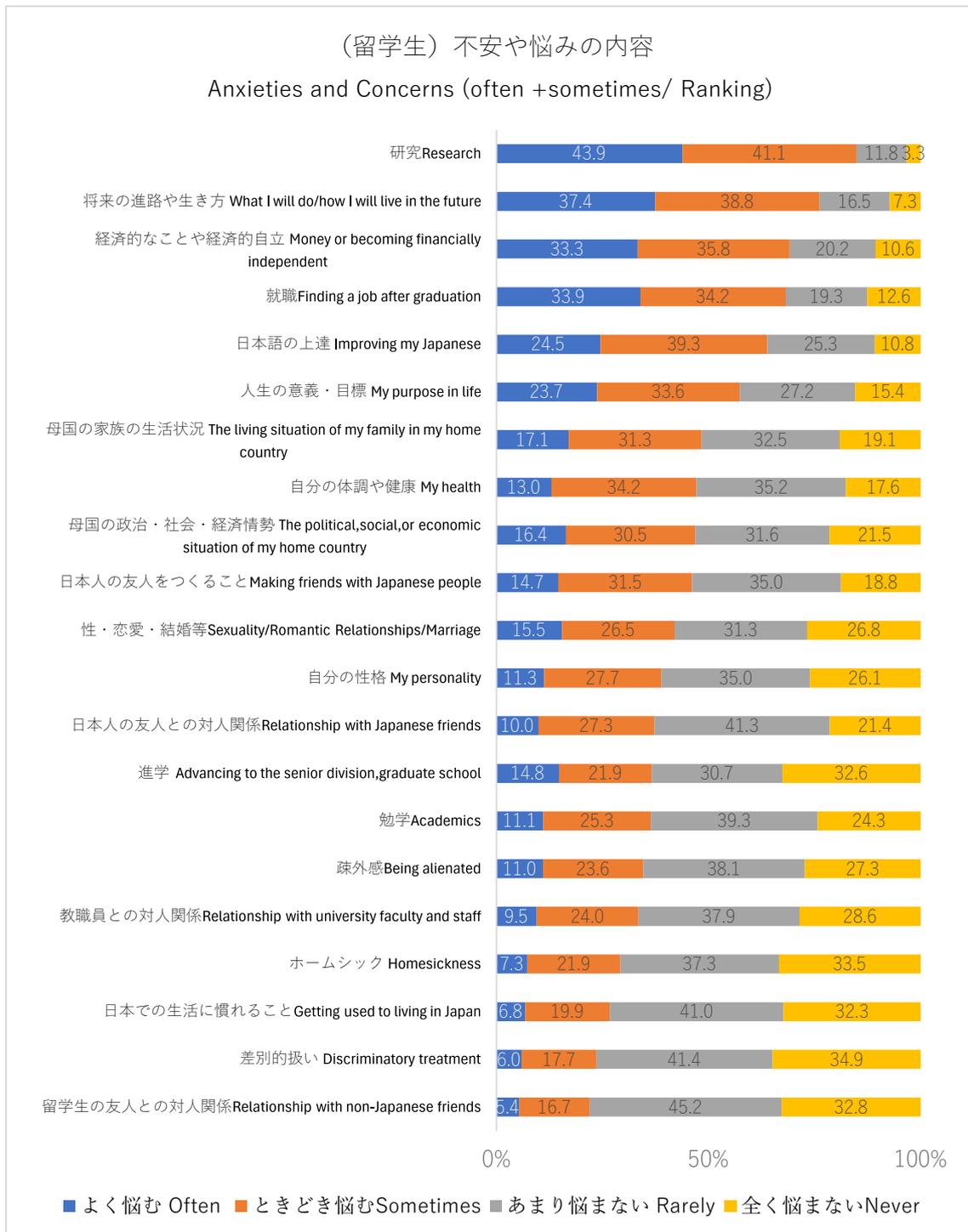
- 不安・悩みをもたらす上位3項目は、「研究」、「将来の進路や生き方」、「就職」
- 「研究」に「よく悩む」または「ときどき悩む」学生は9割弱
- 最も少ない悩みは「友人との対人関係」

33. 現在の学生生活の中で、次の各項目について、どの程度悩んだり不安を感じたりしていますか。



大学院学生が学生生活の中で悩みや不安を感じるものとして、「よく悩む」と「ときどき悩む」の合算値が最も大きかった項目は、「研究」で合計89.5%（前回項目なし）であった。次いで、「将来の進路や生き方」の78.8%（前回81.2%）、「就職」の69.0%（前回72.3%）と続いた。新設した項目である「研究」が第1位となったが、前回調査における上位3項目は、今回調査では順位の変動なく第2位、第3位、第4位と続いた。「あまり悩まない」「全く悩まない」の合算値が最も大きかった項目は、「友人との対人関係」で73.3%（前回73.7%）。次いで、「教職員との対人関係」で66.8%（前回65.7%）、「進学」で61.0%（前回63.0%）であった。下位3項目の順位は前回調査と同様であった。

## 【大学院学生】



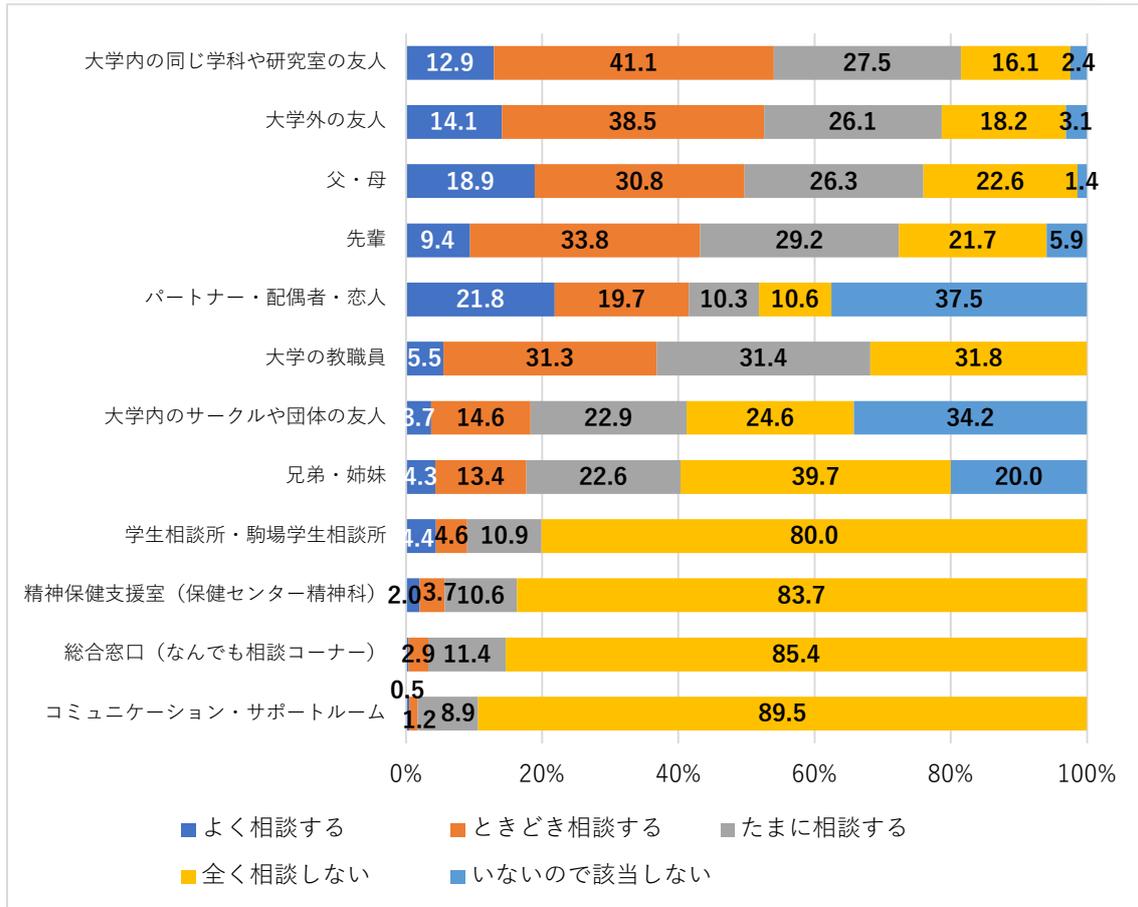
大学院留学生の回答において、「よく悩む」と「ときどき悩む」の選択割合上位は、「研究」、「将来の進路や生き方」「経済的なことや経済的自立」であった。新設した項目である「研究」が 85.0%で第1位となったが、前回調査における第2位、第3位については順位の変動はなく、今回も「将来の進路や生き方」76.2%（前回 80.8%）、「経済」69.1%（前回 77.4%）と続いた。前回第1位であった「勉学」は 36.4%（前回 88.9%）と大きく減少したが、これは「研究」を新設したためであると考えられる。

## 【大学院学生】

### 34. 悩みの相談相手

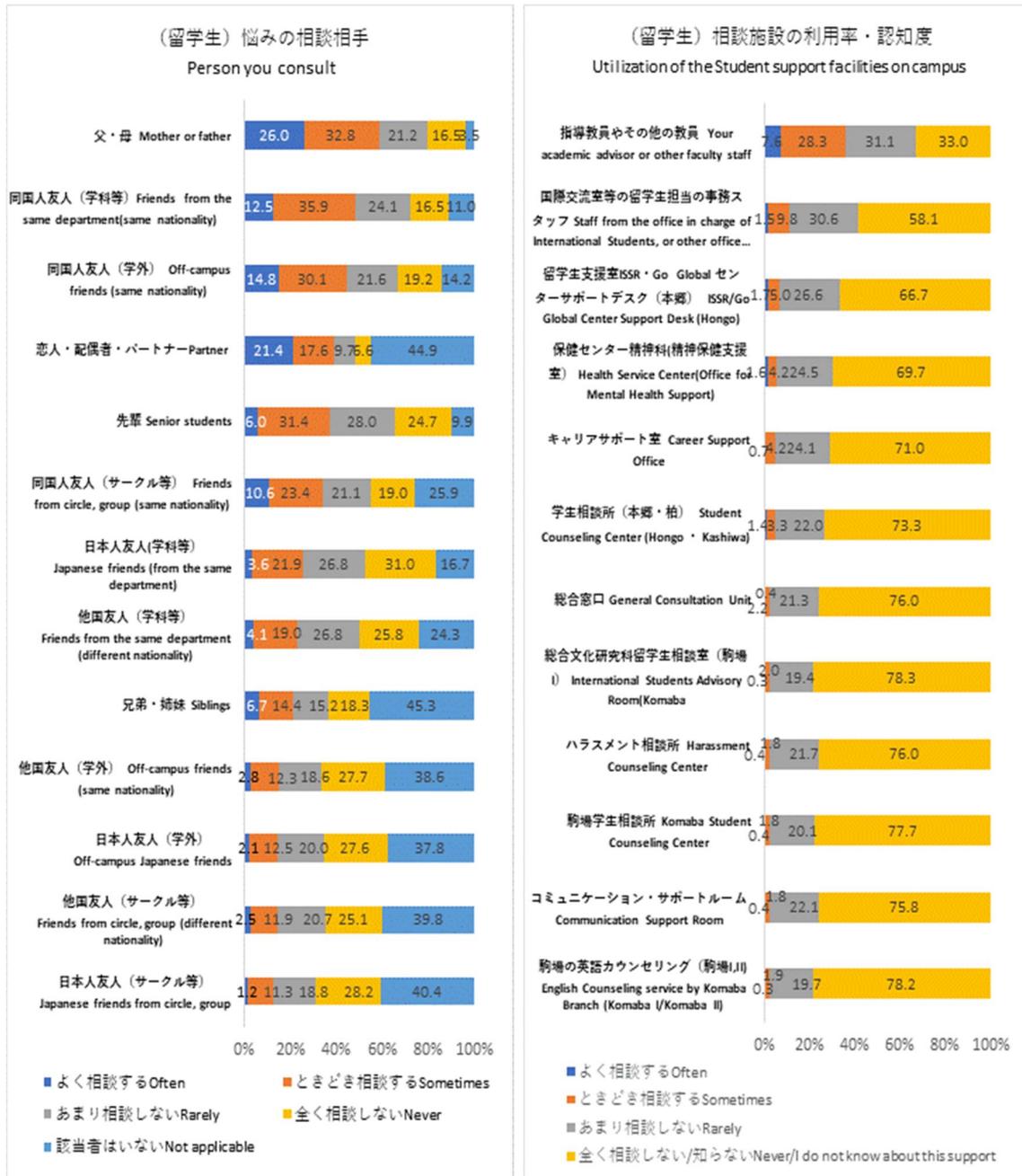
- 悩みを相談する相手の上位3項目は、「大学内の同じ学科や研究室の友人」、「大学外の友人」、「父・母」
- 大学の相談施設の利用は多くない

34. あなたは、不安や悩みを感じたとき、だれと相談したり、話し合ったりしますか。



不安や悩みを誰に相談するか尋ねたところ、「よく相談する」、「ときどき相談する」の合計値が最も多かった項目は前回調査で第3位だった「大学内の同じ学科や研究室の友人」で合計54.0%（前回48.5%）であった。前回調査で第1位だった「大学外の友人」は52.6%（前回49.2%）で第2位、前回調査で第2位だった「父・母」は49.7%（前回48.7%）で第3位と続く。一方、悩みの相談相手として、教職員や大学の相談施設の利用が多くないのも例年同様である。

## 【大学院学生】



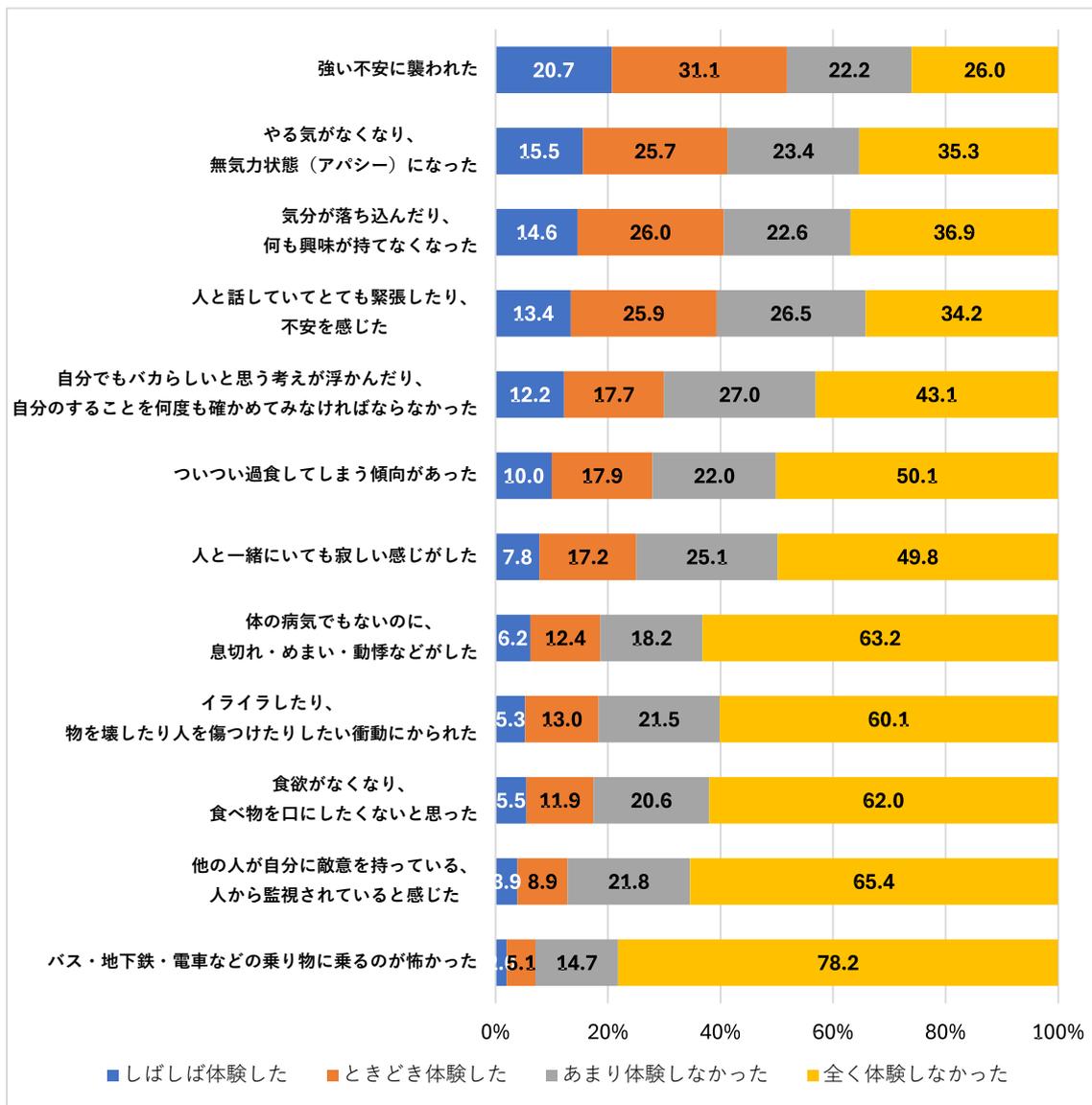
大学院留学生が、不安や悩みを最もよく相談しているのは「父・母」であり、同国人の学内・学外の友人が続く。また日本人の友人を相談相手として選択した学生の割合は極めて小さい。こうした傾向は、コロナ禍前から同様に示されており、2021年度の前回調査と大きく変化していない。留学生調査では、大学内で相談できる場所に関する項目を別途設けているが、相談先としては指導教員が最もよく選択され、部局の国際交流室等も、身近な相談先となっている。専門的な相談資源としては、留学生支援室、保健センターを利用している学生が5%程度である。

## 【大学院学生】

### 35. メンタルヘルスの状態

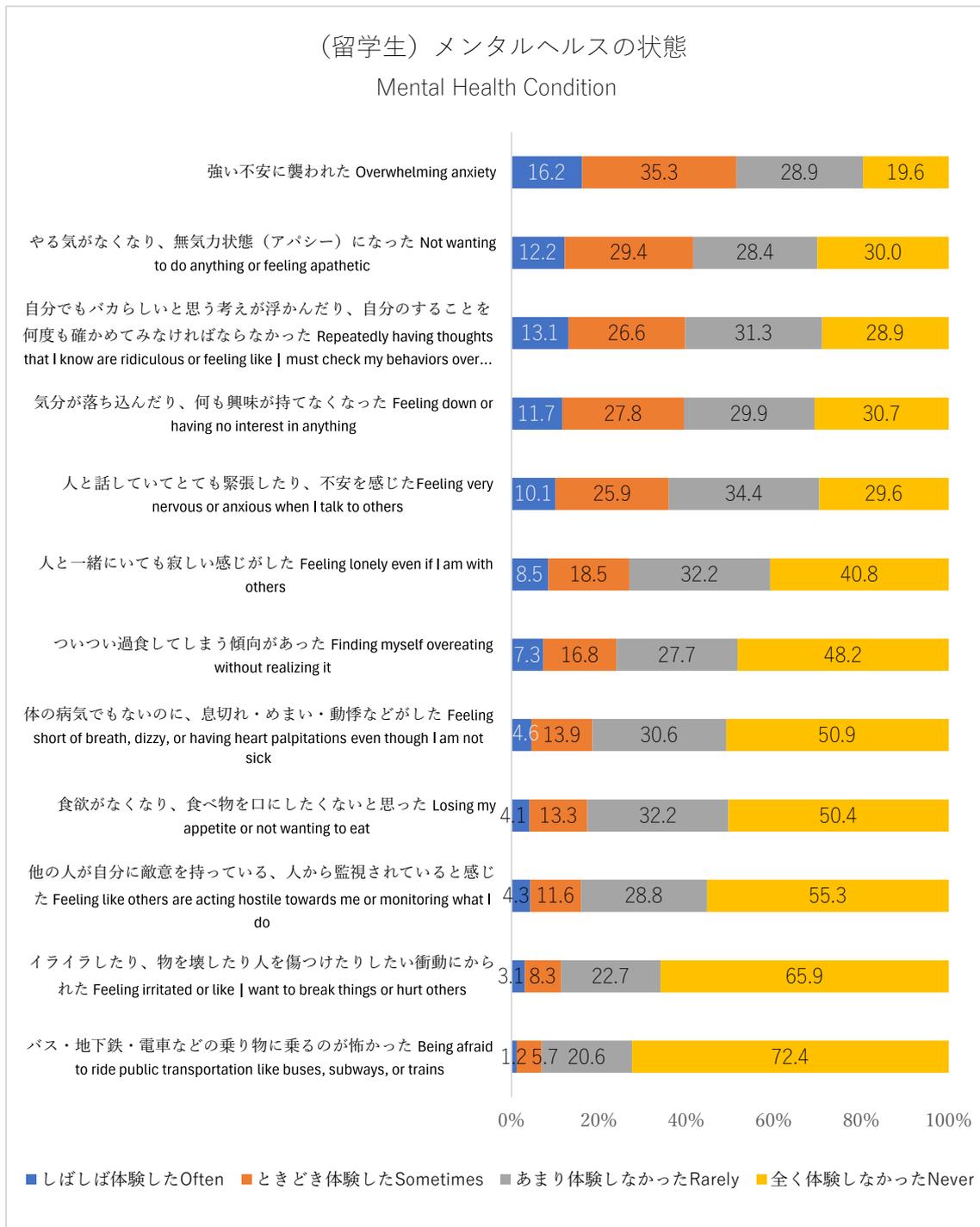
- 上位3項目は、「強い不安に襲われた」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」
- 過半数が「強い不安に襲われた」経験あり

35. あなたは、最近6ヶ月の間に次の項目について、体験したり悩んだりしましたか。



メンタルヘルスの不調を「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が最も多かった項目は、「強い不安に襲われた」で51.8%（前回54.9%）であった。次いで、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」41.2%（前回46.7%）、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」は40.6%（前回46.1%）が続いた。上位3項目の順位に変動はないが、割合はいずれも前回調査より減少した。

## 【大学院学生】



大学院留学生のメンタルヘルスの状態において、もっとも体験されていたのは「強い不安に襲われた」であり、「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が51.5%（前回調査では46.7%）であった。前々回調査（2019年度）で4割以上の学生が「しばしば」「時々」体験している項目は2項目、前回調査（2021年度）では6項目だったが、今回は2項目だった（日本人学生は12項目中3項目）。

## 【大学院学生】

### 「V.不安・悩み」の分析（まとめ）

多くの大学院学生は「研究」において不安や悩みを抱えており、その割合は、9割近くにのぼる。「将来の進路や生き方」、「就職」、「経済的なことや経済的自立」についても、「よく悩む」または「ときどき悩む」と回答した学生の割合は、いずれの項目でも6割を超えた。

「研究」は今回調査より新設した項目であるが、「将来の進路や生き方」、「就職」、「経済的なことや経済的自立」について、6割以上の学生が不安や悩みを抱えている点は前回調査と同様の傾向である。また、約半数の大学院学生は「強い不安に襲われた」経験があり、何らかのメンタルヘルス不調を経験する学生が多いことが示されたが、この点も前回調査と同様である。

そのような悩みを相談する相手としては、教職員や大学の相談施設よりも、「大学内の同じ学科や研究室の友人」、「大学外の友人」、「父・母」などの身近な関係者が選ばれる傾向が見られた。相談施設の利用率が低いことも例年同様であり、悩みを抱えた学生の援助要請を促進するために、相談施設利用に関するスティグマの軽減や認知度の向上を図る必要があるだろう。

大学院留学生在が不安や悩みを感じる内容については、「研究」、「将来の進路や生き方」、「経済的なことや経済的自立」、「就職」と続き、日本人学生と同様の不安・悩みを抱えていることがわかる結果となった。前回9割近い学生が「よく悩む」「時々悩む」と回答した「勉学」については36.4%と大きく減少したが、今回調査より「研究」という項目を選択肢として新たに追加したことが影響している可能性も考えられ、成績・単位よりは研究について不安や悩みを抱えている傾向がみえる。相談相手として日本人の友人等が選択されない傾向は、コロナ以前から同様であるが、指導教員や部局の事務室等は、身近な相談先となっている。

メンタルヘルスの状態は、4割以上の学生が「しばしば」「時々」体験した項目数が2項目あり、前回調査（6項目）から減少し、2019年度調査（2項目）と同数であった。新型コロナウイルス感染症が5類になり、様々な制限が緩和されたことも一因として推測されるが、今後こうした学生の心身健康面がどのように安定していくか注意深く見守り、支援を行っていく必要がある。

## 【大学院学生】

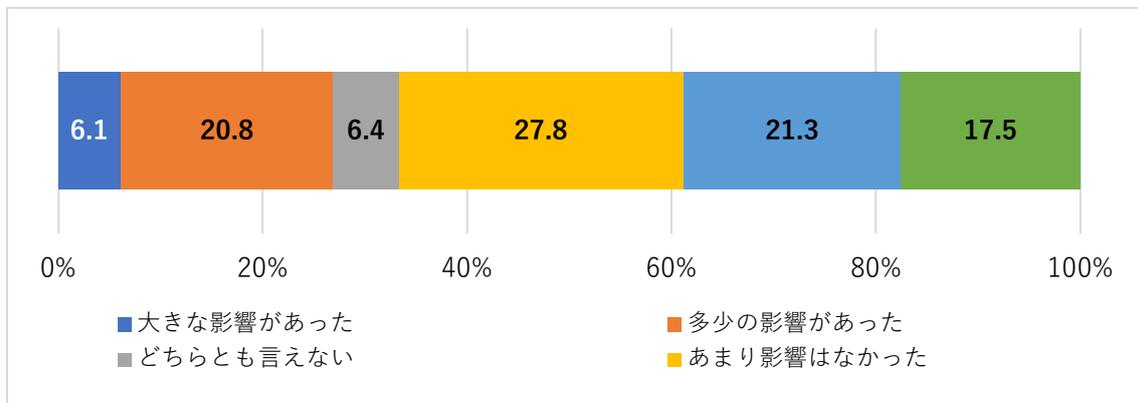
### VI. 新型コロナウイルス感染症の影響

#### 36. 研究への影響

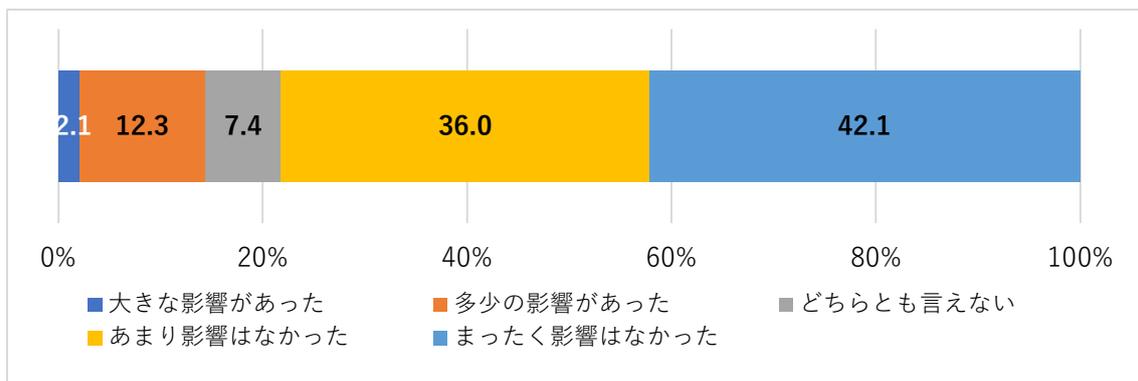
- 「大きな影響があった」、「多少の影響があった」合計 14.4%

36. 新型コロナウイルス感染症の影響により、研究がストップしたり、研究計画を変更せざるを得なくなったりといった影響はありましたか。

2022 年度



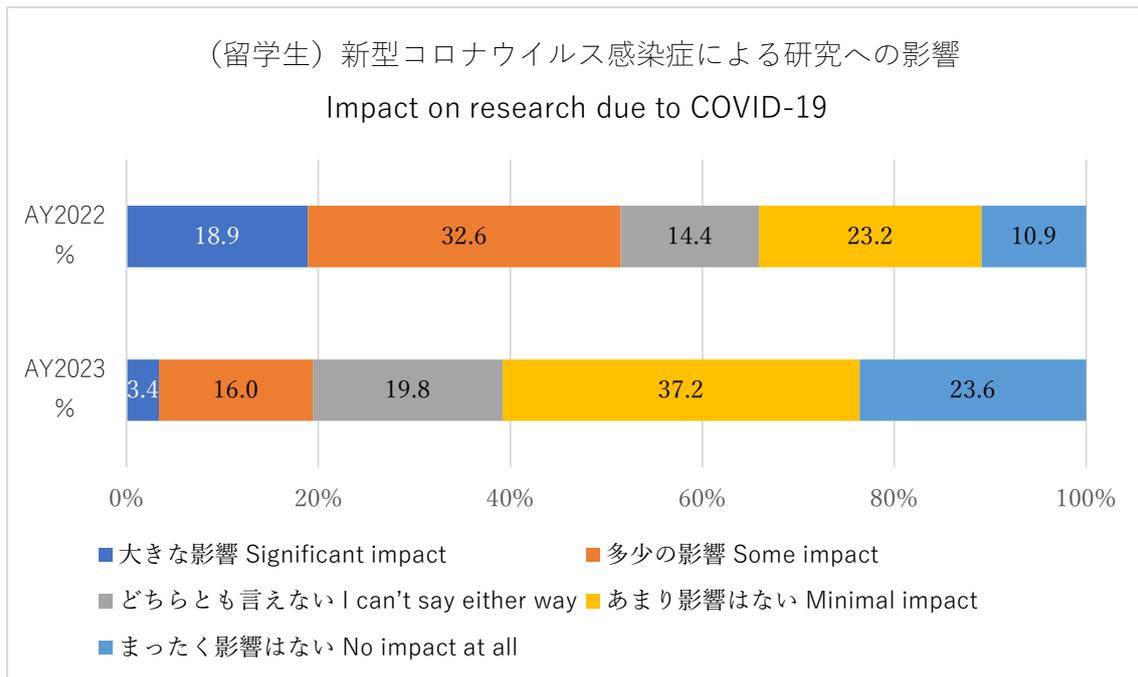
2023 年度



新型コロナウイルス感染症による研究への影響について、2022 年度は 26.9%、2023 年度は 14.4%の大学院生が影響があったと回答している。2020 年度は 62.2%、2021 年度は 48.9%の大学院生が影響があったと回答しており、影響があったと回答している学生の割合は年々減少している。

「まったく影響はなかった」と回答した学生も 2022 年度は 21.3%、2023 年度は 42.1%で、20.8%ポイント増加した。

## 【大学院学生】



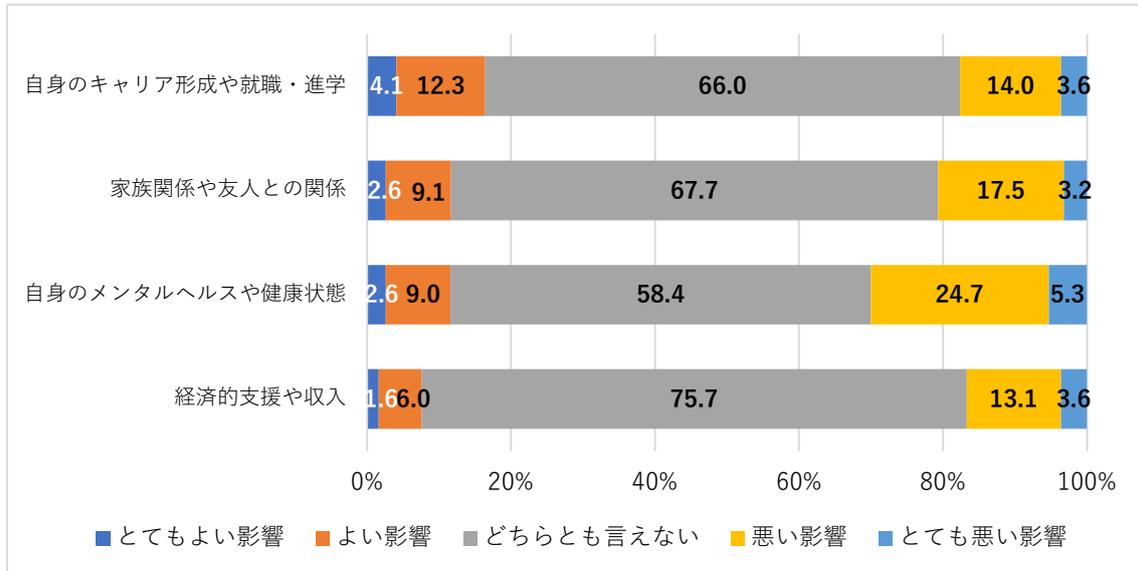
感染症の影響が、2022年度と2023年度にどのように研究に影響したかについて回答を求めた。当該年度に在籍していなかった学生を除き、各年度の影響を比較すると、大きな影響を受けていると感じている学生は日本人学生と比べて多い。2023年度のほうが研究活動への大きな影響を感じている学生はやや減少している。

## 【大学院学生】

### 37. 生活への影響

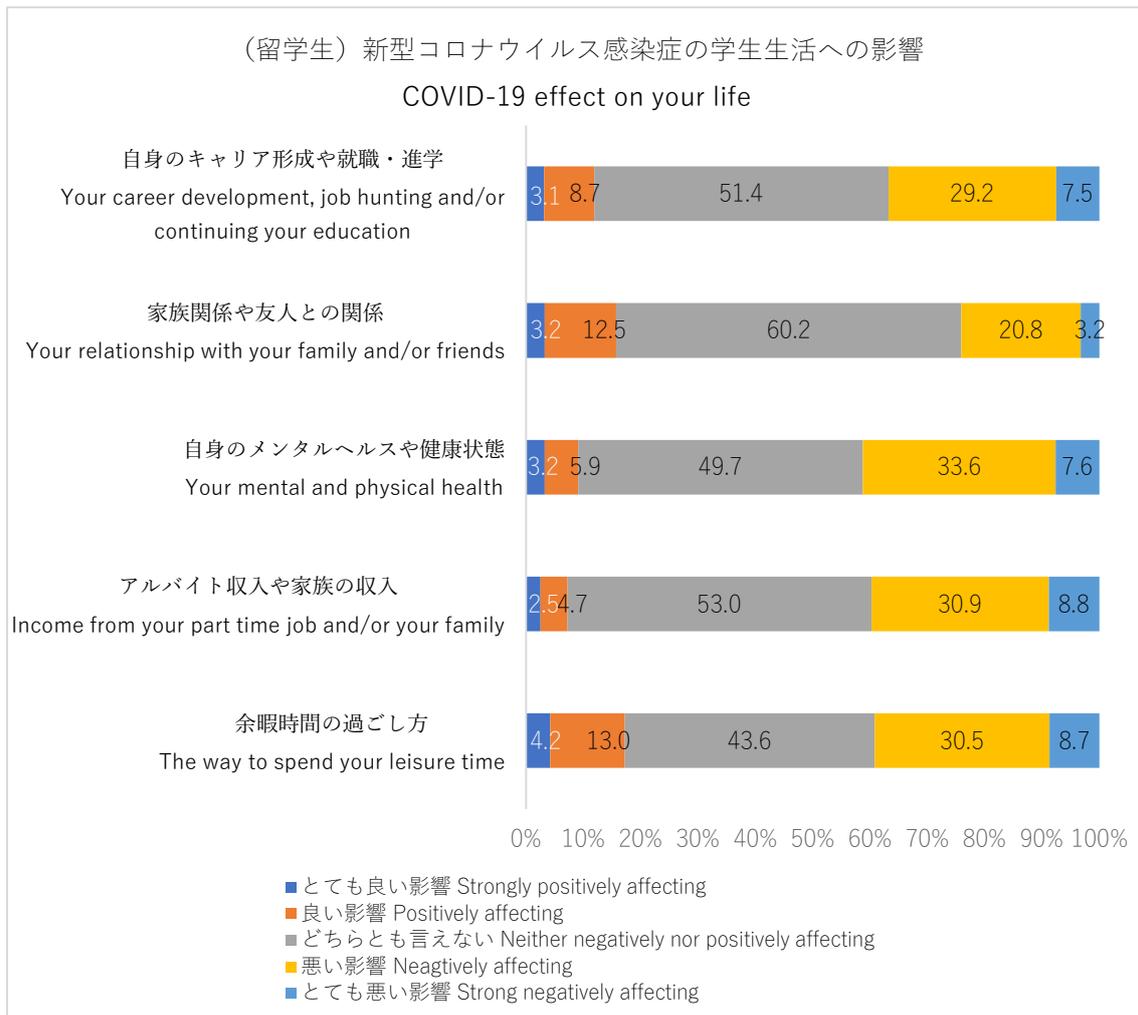
- よい影響よりも悪い影響の方が大きい

36. 新型コロナウイルス感染症下での様々な制限は、今現在あなたの生活にどのような影響がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。



全ての項目において悪い影響がよい影響を上回っている傾向は前回調査と同様であるが、前回調査では全ての項目において悪い影響がよい影響を倍以上上回っていたのに対し、今回調査では「どちらとも言えない」と回答した者の割合が増え、悪い影響・よい影響と回答した者の割合の差が小さくなる傾向にあった。「悪い影響」「とても悪い影響」の合算値が最も多かった項目が「自身のメンタルヘルスや健康状態」であることも前回調査と同様だが、その割合は30.0%（前回48.1%）と、前回に比べ18.1%ポイント減少した。

## 【大学院学生】



留学生の回答は、すべての項目において「悪い影響」を選択した学生の割合が前回調査より減少しているものの、日本人学生よりも多くなっている。

## 【大学院学生】

### 「VI. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析（まとめ）

新型コロナウイルス感染症により研究・生活への影響を感じる学生の割合は年々減少傾向にある。特に研究への影響については、2022年度は26.9%、2023年度は14.4%の大学院生が影響があったと回答しており、2023年5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行したこともあってか、「まったく影響はなかった」と回答した学生も2022年度の21.3%から20.8%増加して、2023年度は42.1%と4割を超える結果となった。

生活への影響については、「どちらとも言えない」と回答した者の割合が増え、悪い影響・よい影響と回答した者の割合の差が小さくなる傾向にあったが、前回同様「悪い影響」「とても悪い影響」の合算値が最も多かった項目である「自身のメンタルヘルスや健康状態」については30.0%（前回48.1%）と、前回に比べ18.1%ポイント減少したものの、3割の学生が「新型コロナウイルス感染症下での様々な制限が今現在自身のメンタルヘルスや健康状態に悪いまたはとても悪い影響がある」と回答している。

なお、新型コロナウイルス感染症の影響については、「11. 学会参加・発表」、「15. 研究室スペース」、「17. 研究費自己負担額」、「V. 不安・悩み」の分析（まとめ）、「VIII. 家庭の状況」の分析（まとめ）にも記載があるので参照されたい。

留学生に関しても年々改善傾向にあるが、新型コロナウイルス感染症による影響を日本人学生より大きく感じている傾向がある。詳細は、留学生版の調査報告についても参照のこと。

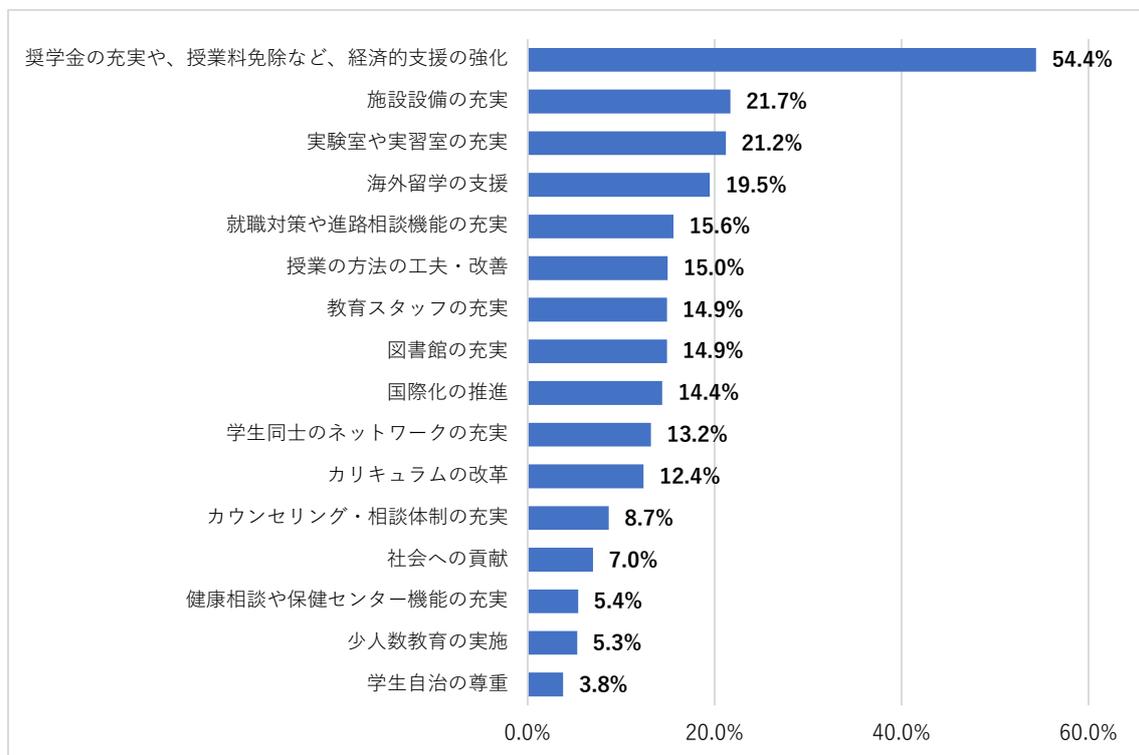
## 【大学院学生】

### Ⅶ. 大学への要望

#### 38. 要望や期待すること

- 大学に最も期待することの上位 3 項目は「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援の強化」、「施設設備の充実」、「実験室や実習室の充実」

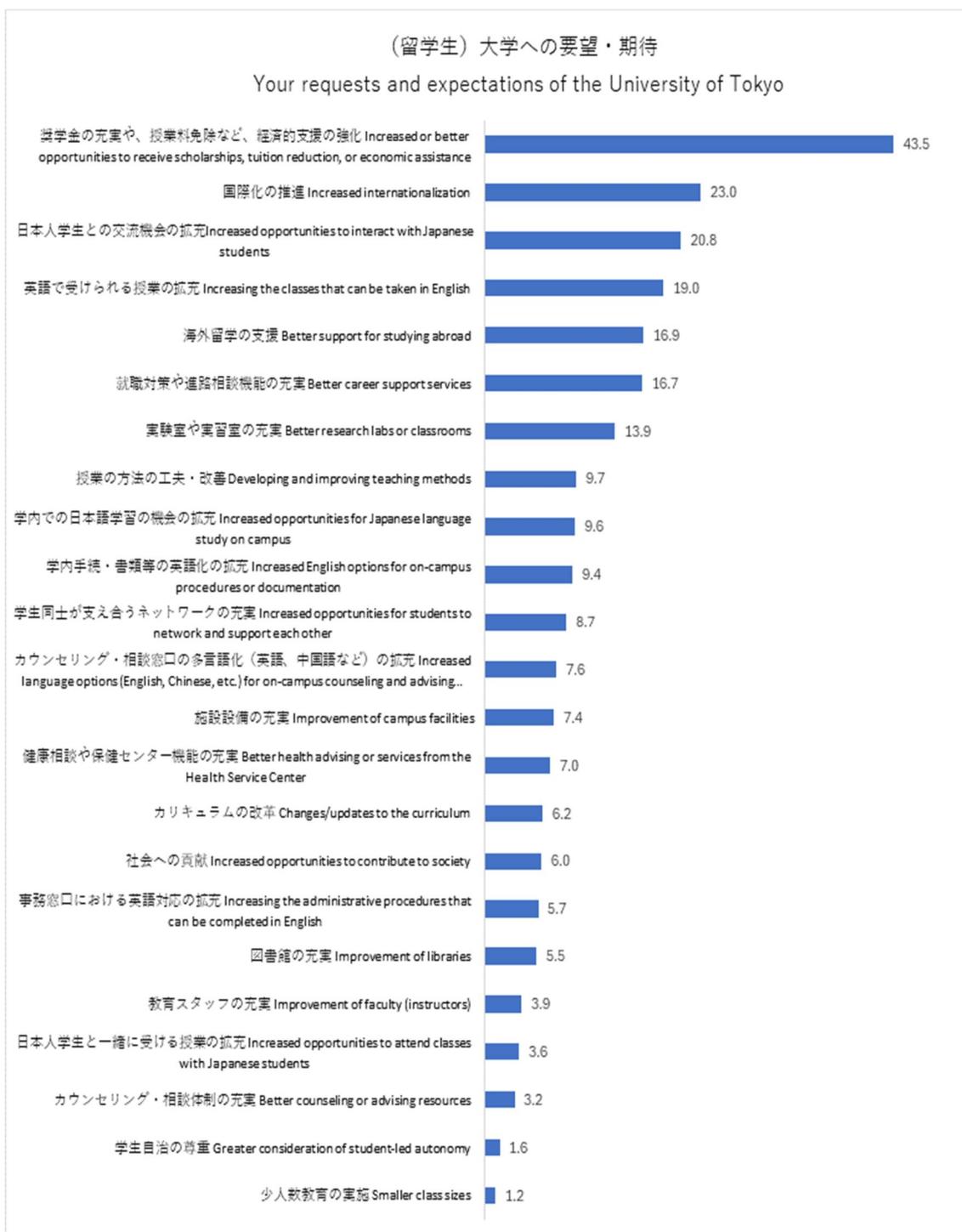
38. 大学へ特に要望したいことや期待することは何ですか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。



大学へ特に要望したいことや期待することを尋ねたところ、「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援の強化」が54.4%で最も多く、「施設設備の充実」の21.7%、「実験室や実習室の充実」の21.2%と続く。

前回調査と比べて「就職対策や進路相談機能の充実」の順位は下がり、3.4%ポイント減少した。また「海外留学の支援」については、前回調査より6.1%ポイント増加して、上位4項目に入っている。

## 【大学院学生】



大学院留学生の要望項目の最上位は、前回と同様に「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援の強化」であり、割合も 9.4%ポイント増加している。学部留学生の最上位は「カリキュラムの改革」であったが、大学院留学生については、日本人学生と同様に経済的支援強化の要望が多い。

## 【大学院学生】

### 「Ⅶ.大学への要望」の分析（まとめ）

大学への要望は、経済的支援の強化、施設設備の充実、実験室や実習室の充実が多く、一方で要望が比較的少ないのは、健康相談・保健センター機能の充実、少人数教育、学生自治の尊重などである。活動制限緩和によって、大学への通学機会が増えたことに伴い、自助努力では賄えないハード面での項目が上位に挙がっている傾向が見てとれる。経済的支援の強化については、前回の調査でも最上位であり、学部生では3位であることをふまえると、研究活動において、いかに継続的な経済的支援が重要であるかが示唆される。また活動制限緩和によって、海外への渡航制限も緩和されたことにより、海外留学の支援を求める割合も増えているため、今後の支援の在り方について検討する必要がある。

経済的支援の強化への期待の高さは、留学生も国内生と同様に強くみられた。一方、「国際化の推進」への要望の強さは、留学生の変わらぬ特徴である。さらに、「日本人学生との交流機会の拡充」は、コロナ禍を経ても依然として要望が多い。詳細は、留学生版報告書で述べる。

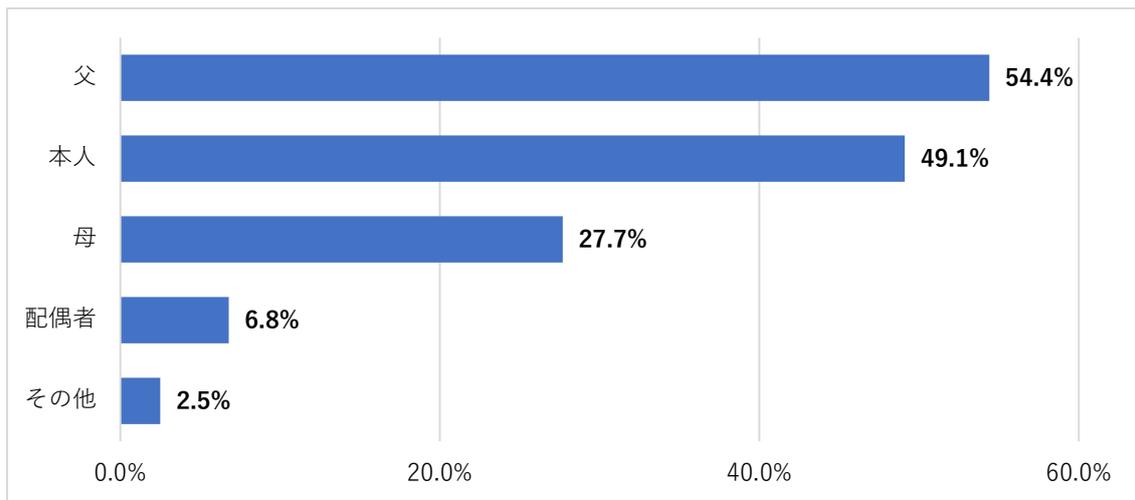
## 【大学院学生】

### Ⅷ. 家庭の状況

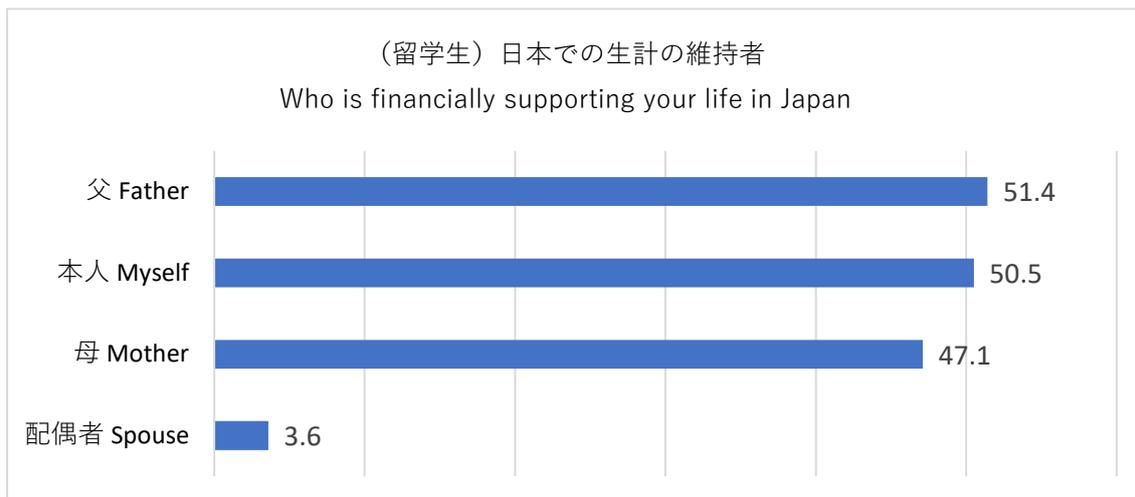
#### 39. 生計維持者

- 主たる生計維持者は「父」54.4%、前回調査より1.1%ポイント減少

39. あなたの現在の生計を主に支えているのはだれですか。(複数回答可能)



複数回答により主たる生計維持者を尋ねたところ、「父」が54.4%と過半数で最も多いが、前回の55.5%よりは1.1%ポイント減少した。次いで「本人」が49.1%で、前回の44.2%より4.9%ポイント増加した。「母」は27.7%で、前回の22.5%より5.2%ポイント増加した。順位は前回調査と同じである。



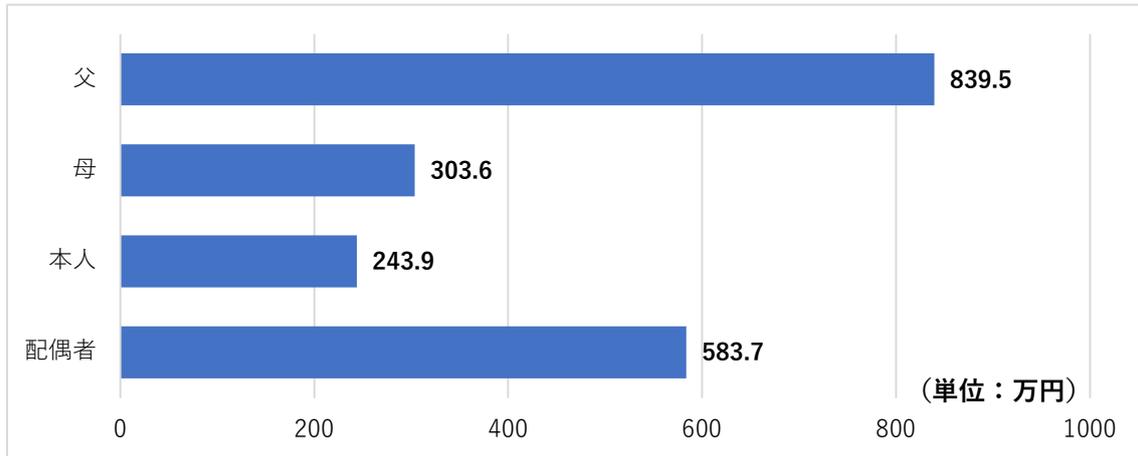
留学生版では、「日本での生計を主に支えている人」について回答を求めたため、未入国の学生を除いた852名を対象とした。日本での生計を支えているのは、「父」(51.4%)、「本人」(50.0%)、「母」(47.1%)、「配偶者」(3.6%)であり、「父」と「母」の割合が大きく変わらない点が、日本人学生の回答との相違点といえる。

## 【大学院学生】

### 40. 家族・本人の年間税込み収入

- 父が最も多く、次いで配偶者、母、本人の順

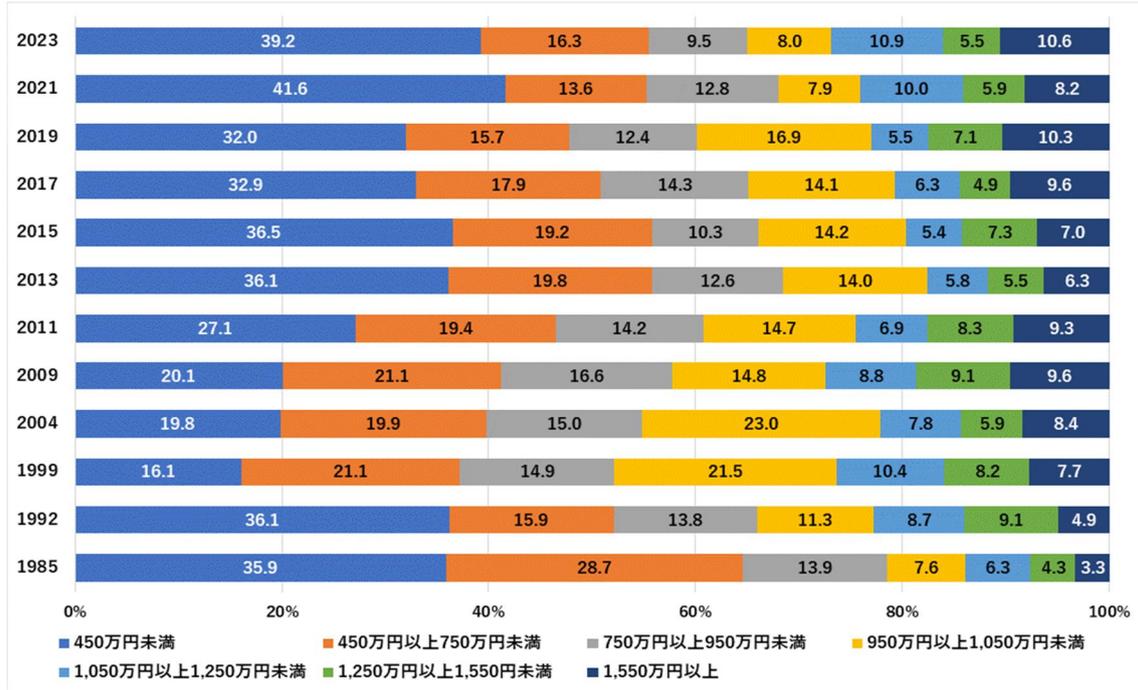
40. 昨年（2022年1月～12月）の年間税込み収入はどれくらいですか。おおよその金額を選択してください。



本人及び家族の年間税込収入(平均)は、「父」が839.5万円で最も多く、「配偶者」583.7万円、「母」303.6万円と続く。前回調査に比べると「父」(前回843.5万円)が4万円減少し、「母」(前回273.3万円)が30.3万円増加した。「41. 親・本人の職業」で後述するが、母親が無職であると答えた割合が減少傾向にあることの影響も推察される。

## 【大学院学生】

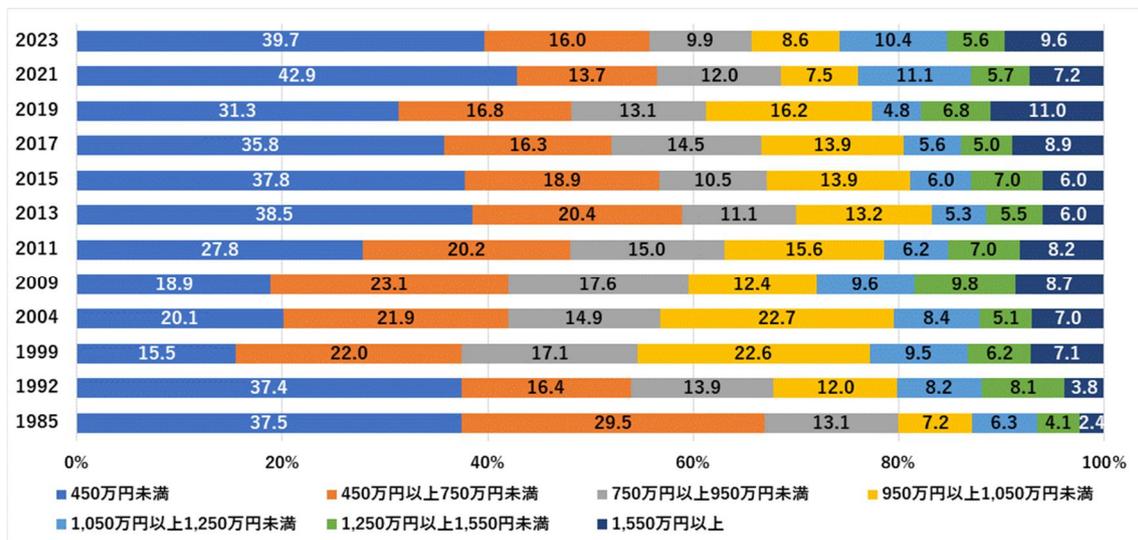
### 生計維持者の年間税込み収入の推移



生計維持者の年間税込み収入の推移をみると、今回調査で「450万円未満」の割合が39.2%で、前回調査に比べ2.4%ポイント減少した。なお、1,050万円以上の割合は2013年から増加傾向で、今回調査では合計27.0%に達して、前回調査の24.1%より微増した。

なお、2019年以前については「生計維持者」の収入金額を記入する回答方式であったが、2021年以降は「家族」の収入金額を7つの金額区分から選択する形とし、生計維持者に該当する家族の金額区分の中間値に基づいて収入額を算出していることから、2019年以前のグラフと傾向が異なっている可能性があることに留意する必要がある。

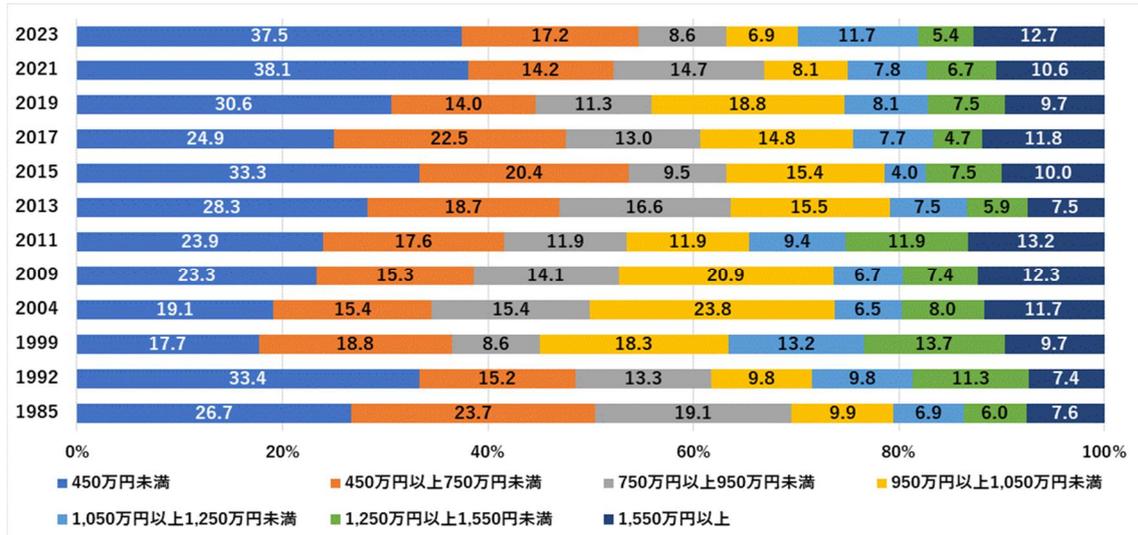
### 生計維持者の年間税込み収入（男子）



## 【大学院学生】

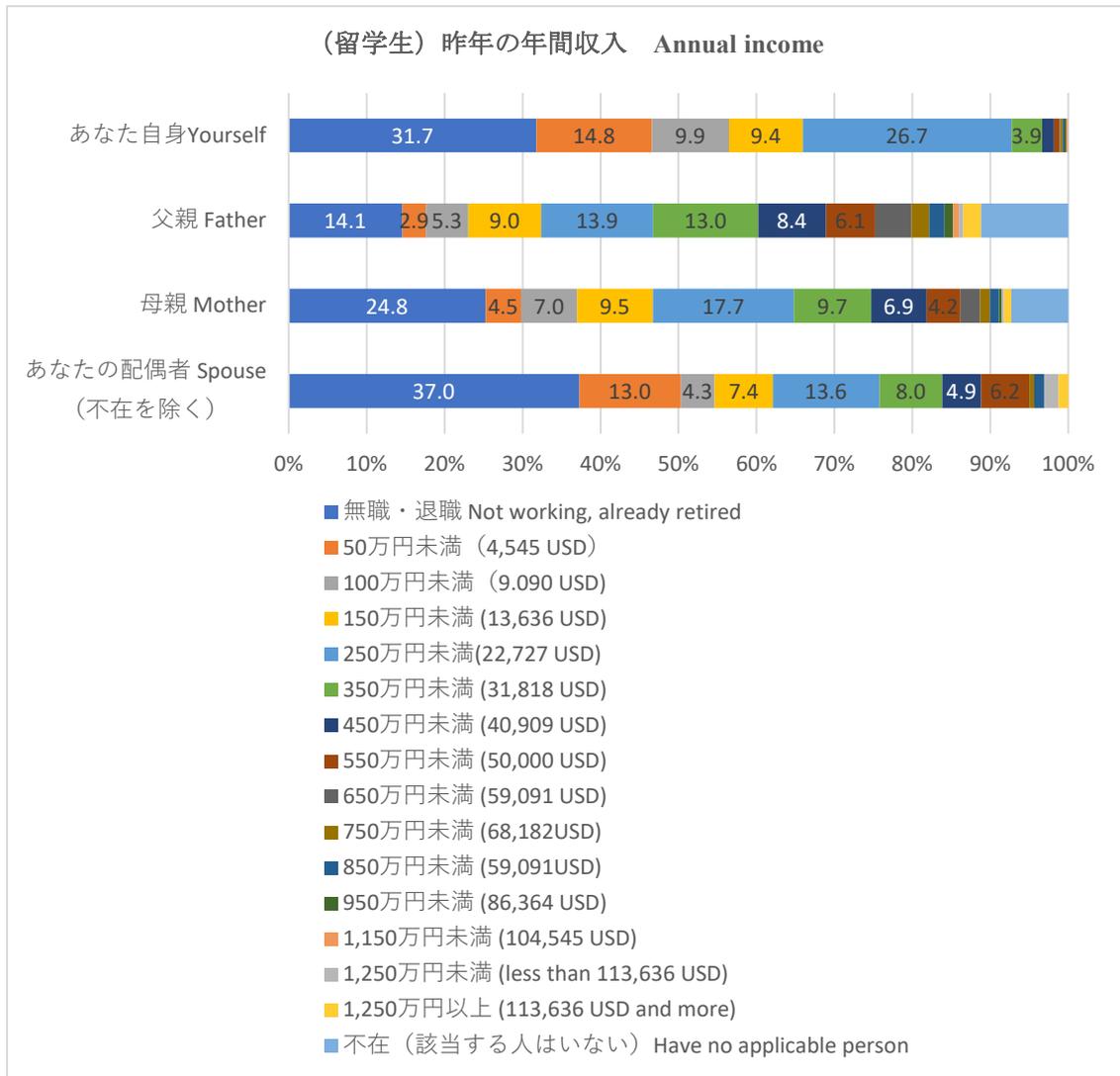
回答者を男子に限定すると、「450万円未満」の低収入層が39.7%で、前回調査より3.2%減少した。2013年~2021年の間に増加傾向であった1,050万円以上の高収入層は今回25.6%と引き続き増加傾向にある。

### 生計維持者の年間税込み収入（女子）



回答者を女子に限定すると、2017年から低収入層の拡大傾向がみられていたが、2023年は37.5%と微減。1,050万円以上の高収入層の割合は29.8%（前回25.1%）と4.7%増加した。2021年と同様、男子より割合が高い。

## 【大学院学生】



大学院留学生の生計維持者の年間の収入のうち、450万円未満の割合は父親では6割程度、母親では8割程度を占めており、日本人学生等と経済的な差が大きい。また、学部留学生と比べると、全体的に父・母の収入が低い。配偶者の収入を記載した162名のうち、37.0%は配偶者に収入がないが、この中には奨学金受給者も含まれるものと思われる。

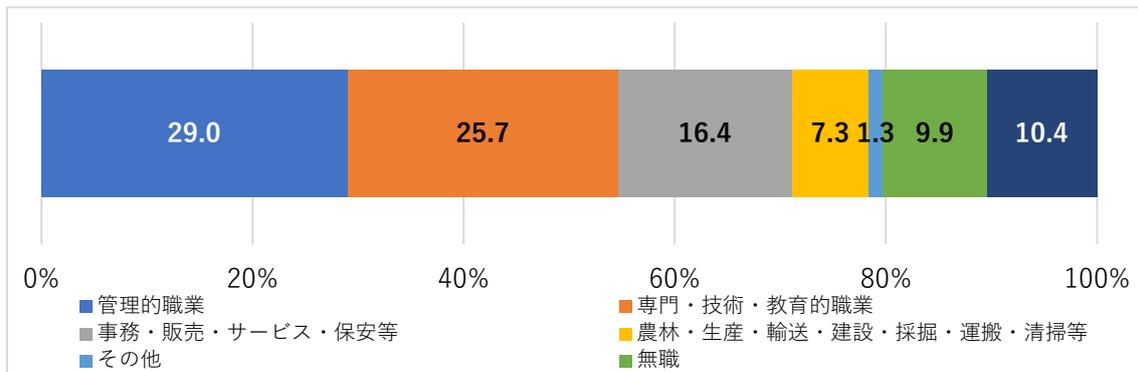
## 【大学院学生】

### 41. 親・本人の職業

- 父親の職業上位3項目「管理的職業」、「専門・技術・教育的職業」、「事務・販売・サービス・保安等」
- 母親の職業上位3項目「事務・販売・サービス・保安等」、「無職」、「専門・技術・教育的職業」
- 母親の職業「無職」の割合は引き続き減少し、「事務・販売・サービス・保安等」と順位が逆転し第2位

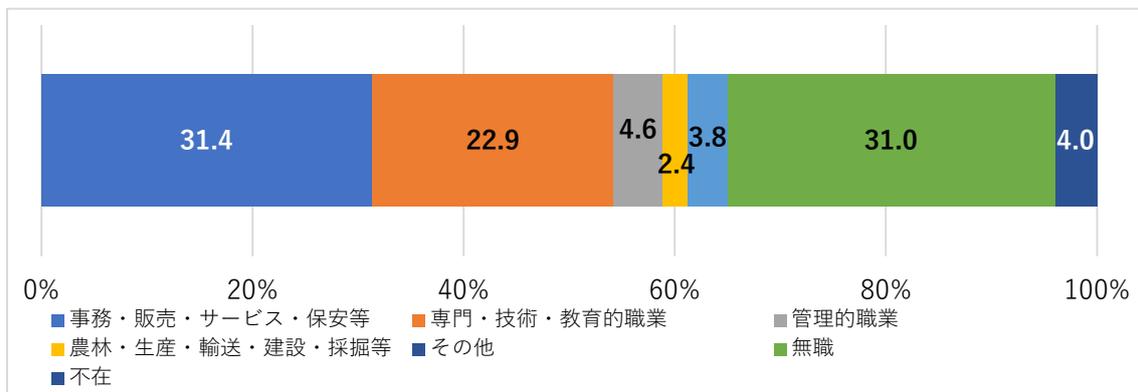
41. 次の方の職業は何ですか。

#### 父親の職業



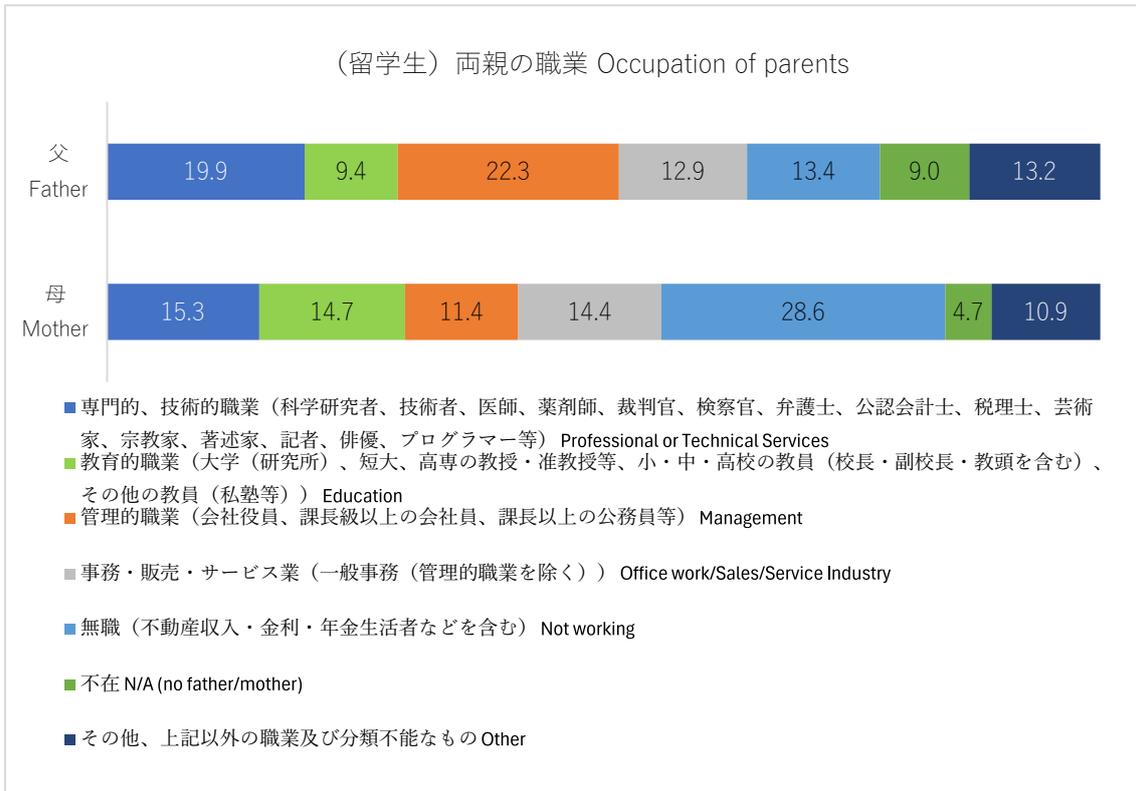
父親の職業は「管理的職業」が29.0%で最も多い（前回28.9%）。次いで「専門・技術・教育的職業」25.7%（前回27.0%）、「事務・販売・サービス・保安等」16.4%（前回14.2%）と続く。前回調査より大きな変化はなかった。

#### 母親の職業



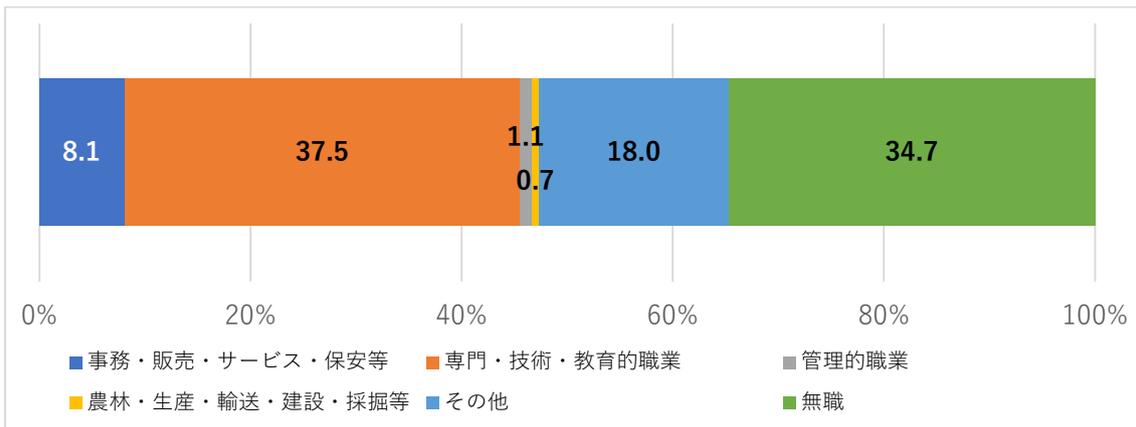
母親の職業は「事務・販売・サービス・保安等」が最も多く、31.4%（前回32.3%）。「無職」は31.0%（前回32.6%）と減少し、「事務・販売・サービス・保安等」と順位が逆転した。次いで、「専門・技術・教育的職業」22.9%（前回22.6%）と続く。

## 【大学院学生】



専門的職業、教育的職業に従事している留学生の父親は 29.3%、母親は 30.0%であり、管理的職業は父親 22.3%、母親 11.4%である。専門職・教育職、管理職に従事する母親の割合の高さが国内生と比較すると高いことが、学部生同様留学生の両親の特徴として挙げられる。母親の 3 割程度が無職である点は、国内生・留学生ともに共通している。

### 本人の職業



本人の職業について、「専門・技術・教育的職業」が 37.5%（前回 10.1%）で最も多く、無職の 34.7%（前回 36.4%）、「その他」の 18.0%（前回 17.5%）と続く。前回調査と比べて数値に大きな変動がみられ、「専門・技術・教育的職業」の割合が増加し最も多い割合を占め、前回調査で最も多い割合を占めた無職の割合を超える結果となった。また、前回 2 番目に多かった「事務・販売・サービス・保安等」は 8.1%（前回 34.7%）だった。

## 【大学院学生】

### 「Ⅷ.家庭の状況」の分析（まとめ）

大学院学生は主たる生計維持者が「父」か「本人」である。今回調査では、前回調査に比べて低収入層が微減し高収入層が微増した。主たる生計維持者の収入は「450万円未満」が39.2%で、過去10年間で最も多い結果となった前回調査に比べると微減した。「1,050万円以上」の割合も前回調査より微増した。

職業について、父親の職業は管理職が最も多い傾向は変わらず、その他の職業の割合についても前回調査と大きな変動はない。母親の職業は、減少傾向にあった「無職」の割合が引き続き減少し、今回調査では「事務・販売・サービス・保安等」が最も多く、順位が変動した。本人の職業は前回調査から大きく変動した。「専門・技術・教育的職業」の割合が37.5%（前回10.1%）と前回調査から27.4%ポイント増加し最も多い割合を占めた。前回調査で最も多い割合を占めた無職の割合は34.7%（前回36.4%）で大きな変動はなかったが、前回2番目に多かった「事務・販売・サービス・保安等」は8.1%（前回34.7%）で、26.6%ポイント減少した。

大学院留学生の父親の年収は、450万円未満が6割程度を占めており、日本人学生等と経済的な差が大きい。奨学金で生活を支えている学生が多い留学生に関しては、母国家族が経済的に頼れるかどうか、経済的な不安の強さを大きく左右するため、特に母国家族の経済状況に関しては、念頭に置いておく必要がある。

また、大学院留学生の配偶者は、回答学生本人と収入分布が類似しており、夫婦の両方に収入がある場合と、どちらか片方だけに収入がある場合で、家計の状況が大きく異なると考えられる。

大学院留学生の親の職業は、国内生と比較した際に、専門職・教育職、管理職に従事する母親の割合の高さが特徴であり、父・母の職業分布の差が国内生と比較すると小さい。これらの点は、留学生の職業選択やジェンダー観などにも、影響を及ぼしうるだろう。

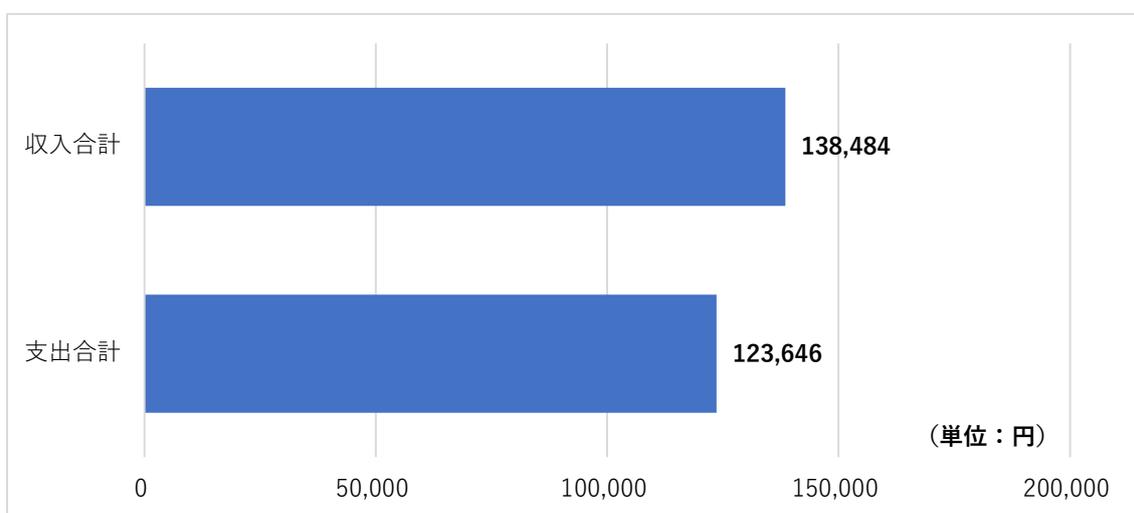
## 【大学院学生】

### IX.生活費の状況

#### 42. 収入・支出

- 収入が大きく減少
- 収入合計・収支差額は 1992 年以降の最低額

42. あなた自身の生活費の状況について、金額を選んでください。(最近3ヶ月の実績から、平均1ヶ月の収支額を、該当しない場合は「0円」を選んでください。)

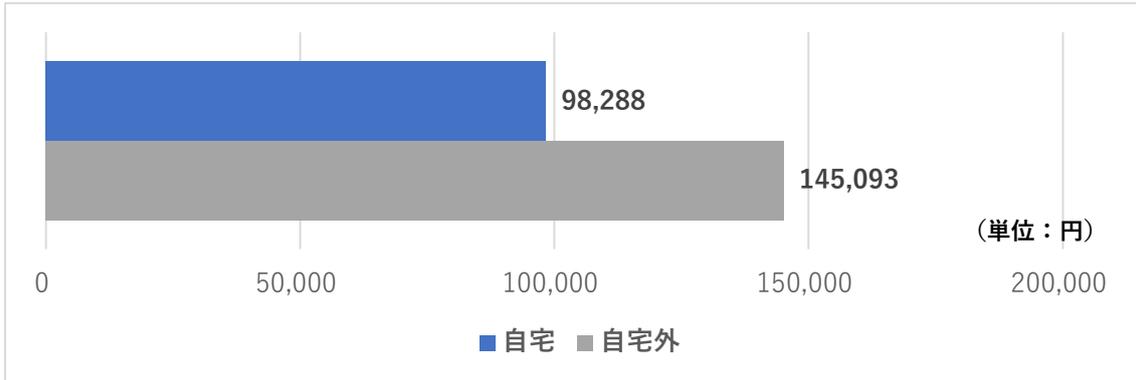


1ヶ月収入合計は平均 138,484 円(前回 180,290 円)で、支出合計は平均 123,646 円(前回 110,125 円)となり、収支差額は 14,838 円(前回 70,165 円)であった。前回調査と比較して収入が減少し、支出が増加したことに伴って、収支差額は大幅に縮小した。

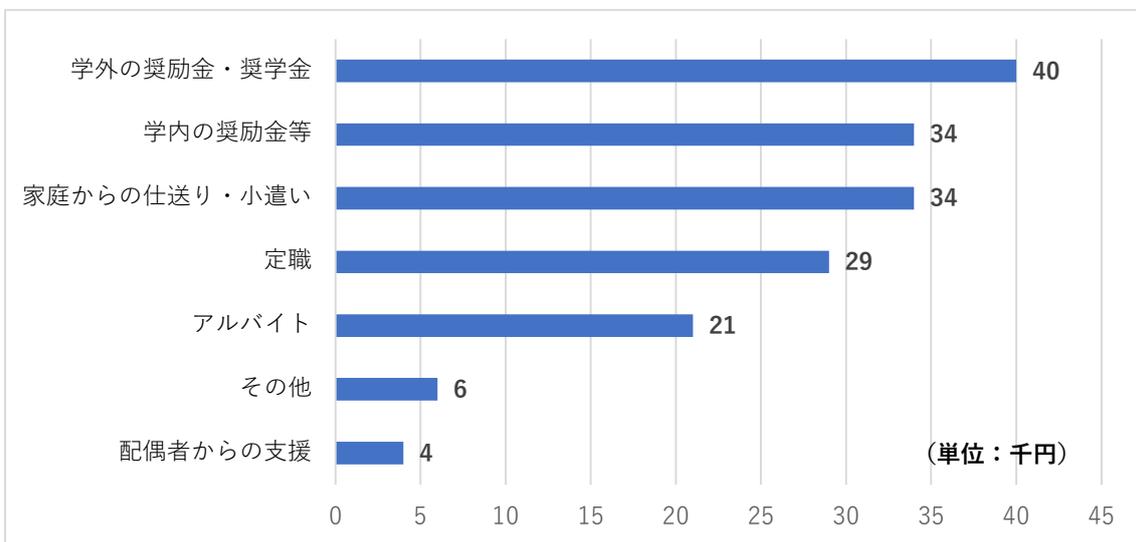
なお、前回調査では収入合計について尋ねておらず、主な収入項目のそれぞれの平均額を合計して算出しているため、前回調査との単純比較はできないことに留意する必要がある。

## 【大学院学生】

### 収入合計（自宅生・自宅外生）



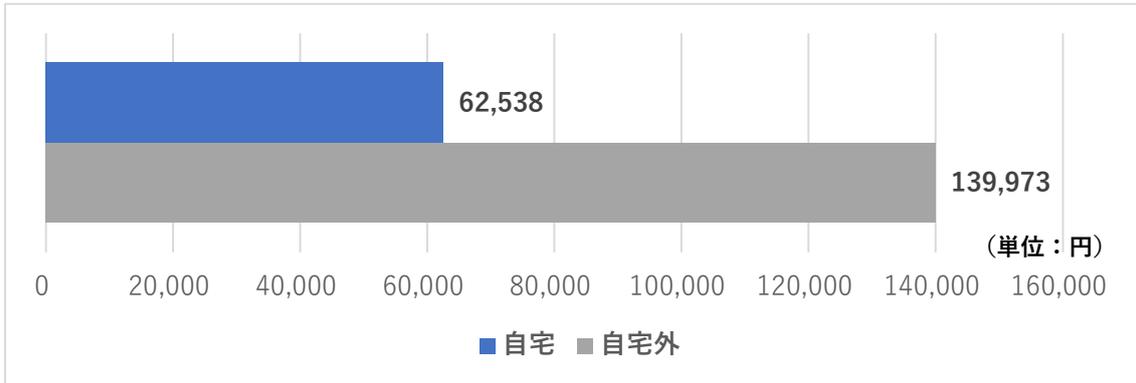
### 主な収入項目



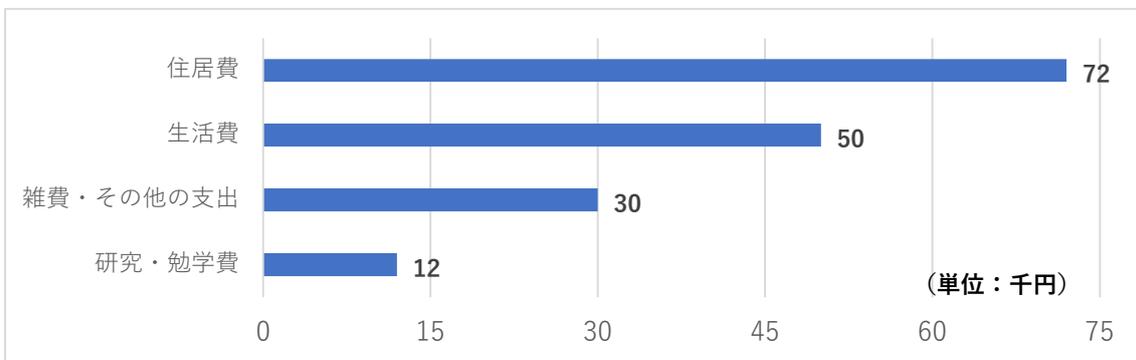
自宅生・自宅外生それぞれ収入額は、98,288円（前回113,010円）と145,093円（197,897円）となり、前回調査よりも減少していた。また主な収入項目では、学外の奨励金・奨学金、学内の奨励金等においては前回調査よりも減少しており、家庭からの仕送り・小遣い、アルバイトにおいては増加していた。

## 【大学院学生】

### 支出合計（自宅生・自宅外生）



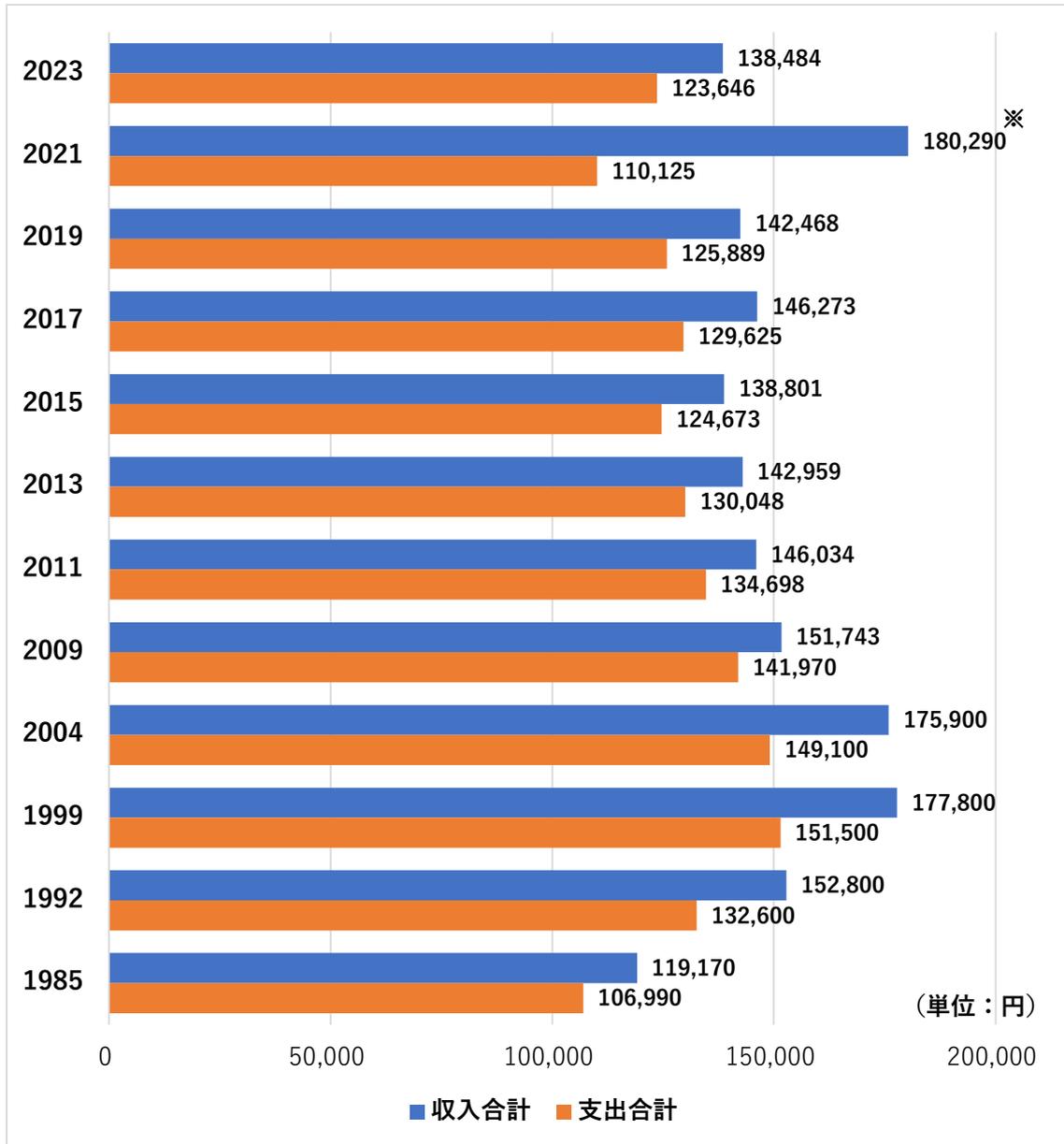
### 主な支出項目



自宅生・自宅外生それぞれ支出額は、62,538円（前回 61,120円）と 139,973円（144,552円）となった。支出項目別にみると、住居費において前回調査よりも 12,000円増加しており、生活費、研究・勉学費においては前回調査と概ね同様の結果となった。

## 【大学院学生】

収支の経年変化



(※2021年の収入合計は、収入内訳の平均額の積み上げにより算出しているため参考扱い)

収支の経年変化をみると、収入合計の算出方法が異なる2021年調査を除いて大きな変化は見られないが、収入合計が1992年以降の最低額となった。2021年の支出合計が比較的少ないのはコロナ禍の影響が考えられる。

## 【大学院学生】

### 「IX.生活費の状況」の分析（まとめ）

今回調査では、1ヶ月の平均収入合計額が前回調査より41,806円減少し、1992年以降の最低額となっている。一方で支出合計は前回より13,521円増加している。活動制限緩和後で外出機会が増加したこと、物価上昇などの要因で前回調査よりも支出金額が増加しており、収入においては学内外の奨学金・奨励金等の収入が減少していた。学内外の研究費支援の受給状況等については、次のX.研究奨励金及び奨学金にて言及するが、生活にゆとりがあるとは言い難い状況にあることが推察される。

なお、収入・支出平均の算出の仕方の相違等から、留学生の家計状況については、国内生と比較を行わず、別途留学生版報告書で結果を示す。

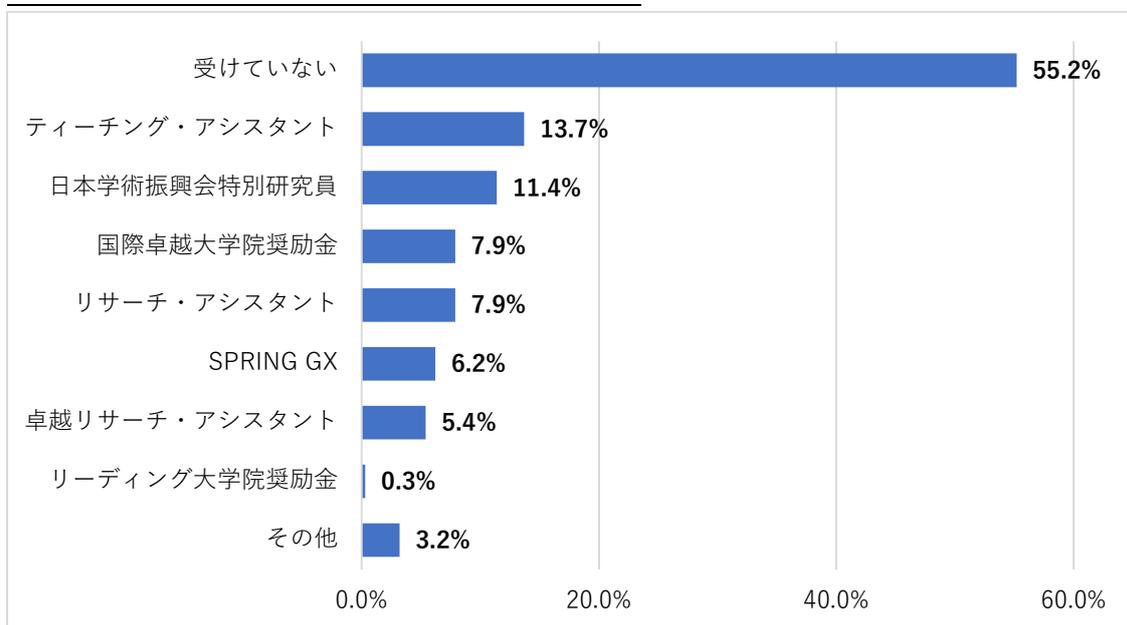
## 【大学院学生】

### X.研究奨励金及び奨学金

#### 43. 学内外研究費等支援の受給状況

- 過半数は学内外の研究費等の経済的支援を何も受給していない
- 学内外の研究費等の経済的支援を受けている研究費の上位3項目は「ティーチング・アシスタント」「日本学術振興会特別研究員」「国際卓越大学院奨励金」

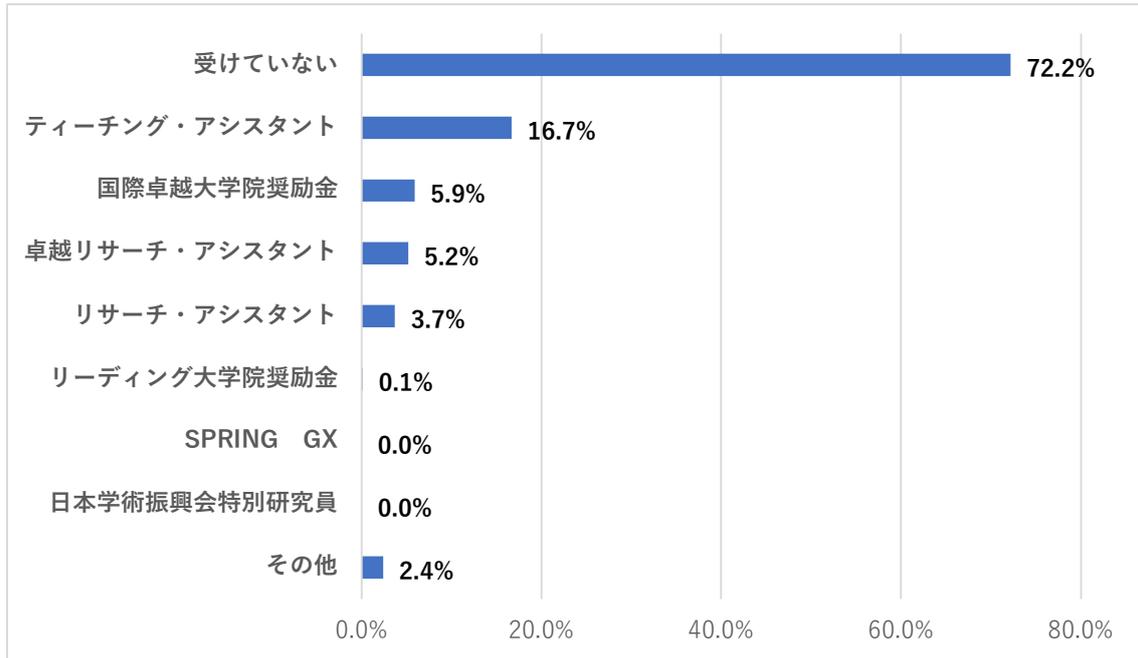
43. 現在、学内外の研究費等の経済的支援を受けていますか。(いくつでも選んでください。) 当てはまるものをすべて選択してください。



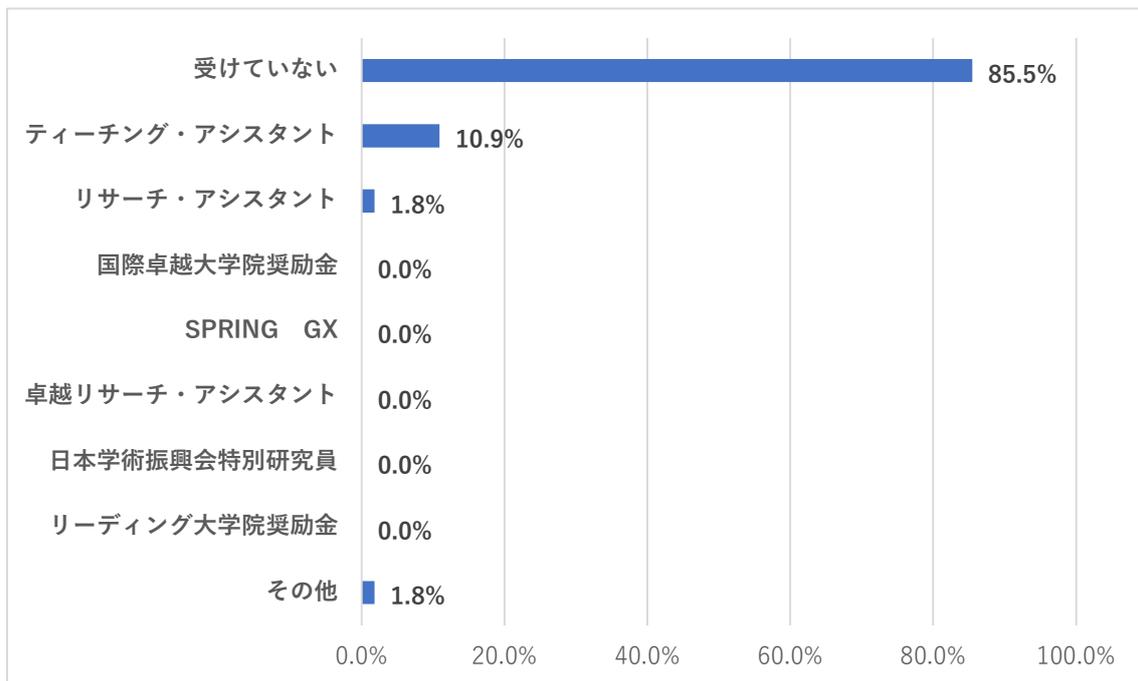
学内外の研究費等の経済的支援の受給状況について、55.2%の回答者が「受けていない」(前回 52.3%)と回答した。受給している支援金の上位3項目は、「ティーチング・アシスタント」13.7%(前回 15.6%)が最も多く、「日本学術振興会特別研究員」11.4%(前回 10.8%)、「国際卓越大学院奨励金」7.9%(前回 6.3%)と続く。前回調査で上位3項目に入っていた「リサーチ・アシスタント」は7.9%(前回 10.2%)となり、順位が下落した。

## 【大学院学生】

### 修士課程



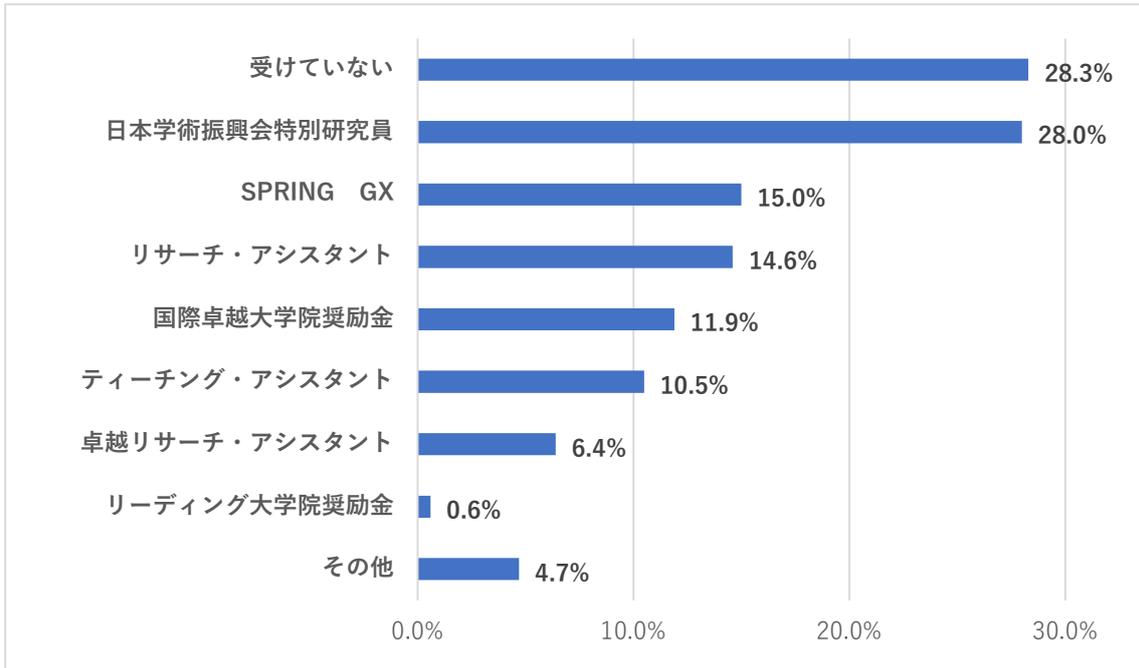
### 専門職学位課程



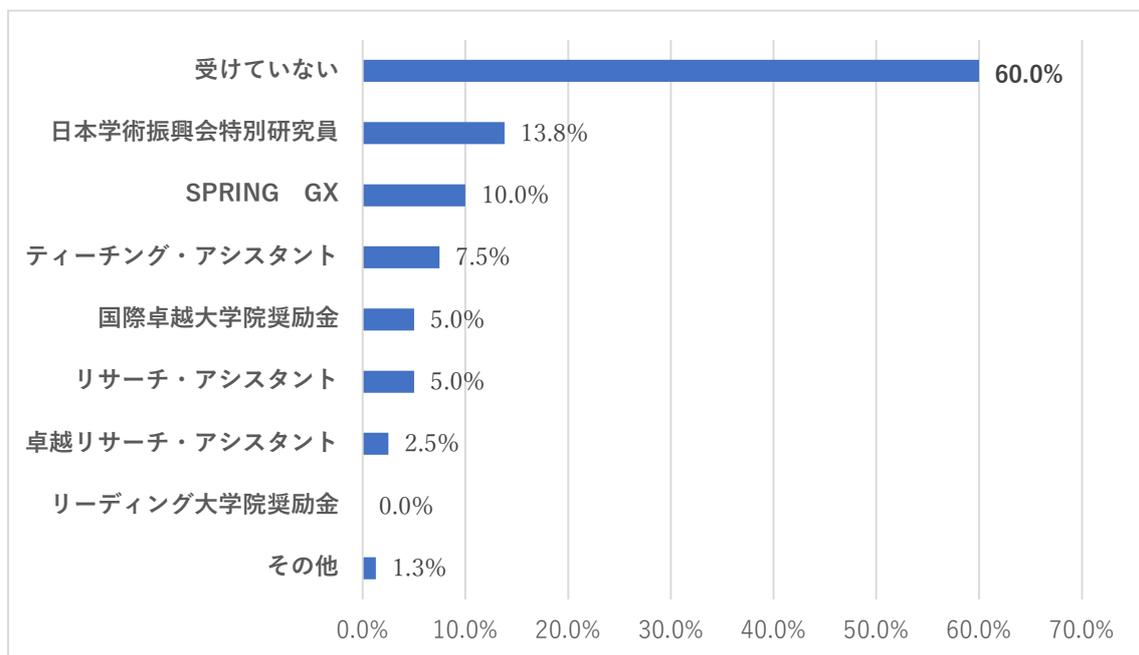
修士課程（専門職学位課程含む）の学生は、SPRING GX 及び日本学術振興会特別研究員の制度対象ではないため、0%となっている。受給している支援金のトップはティーチング・アシスタント（修士課程 16.7%、専門職学位課程 10.9%）であった。

## 【大学院学生】

博士課程（獣医学・医学・薬学除く）



博士課程（獣医学・医学・薬学履修）



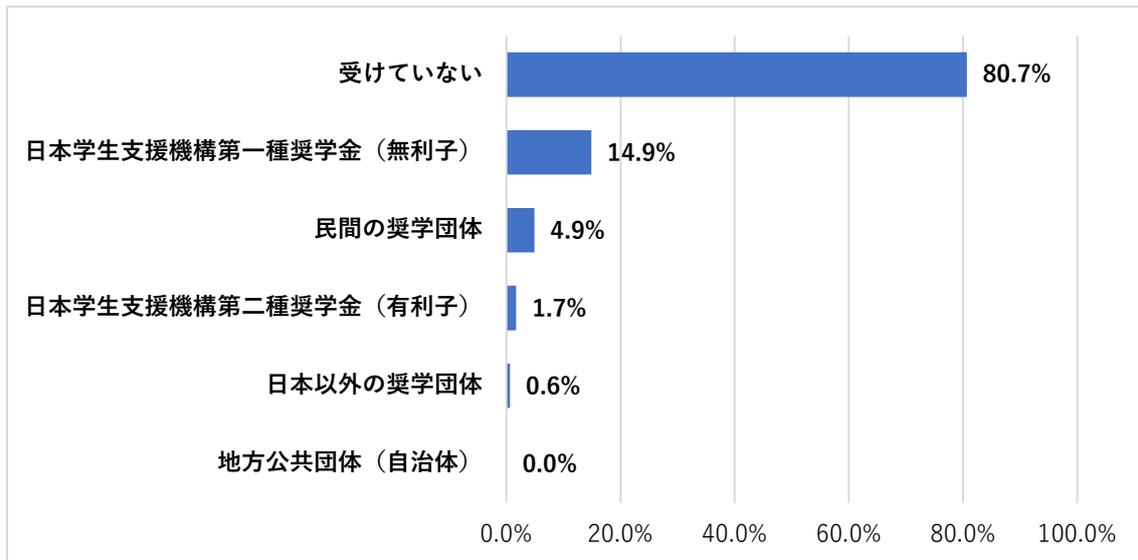
博士課程（獣医学・医学・薬学除く）の回答者で支援金を受けていない割合は28.3%となっており、回答者の約7割は何らかの経済的支援を受けていることが見て取れる。受給している支援金のトップは博士課程（獣医学・医学・薬学除く）が日本学術振興会特別研究員（28.0%）、博士課程（獣医学・医学・薬学履修）も日本学術振興会特別研究員（13.8%）であった。

## 【大学院学生】

### 44. 奨学的資金（学外）の受給状況

- 80.7%が奨学的資金を「受けていない」、前回調査より 3.8%ポイント増加

44. 現在、定期的に奨学的な資金を受けていますか。（いくつでも選んでください。）



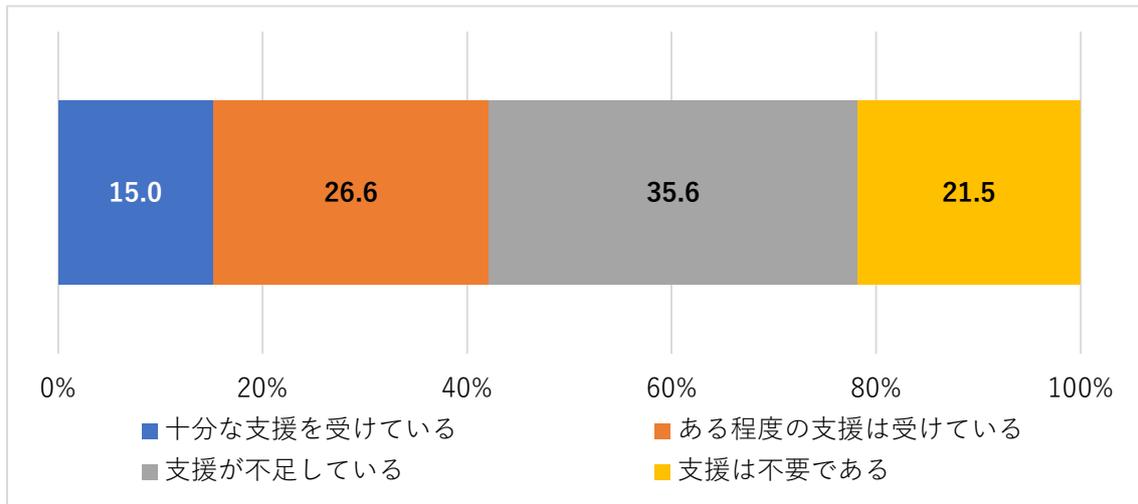
複数回答可として奨学的資金の受給状況について尋ねたところ、「受けていない」が最も多く 80.7%であった。前回調査の 76.9%と比較して 3.8%ポイント受けていない者が増加した。次いで「日本学生支援機構第一種奨学金（無利子）」14.9%（前回 18.3%）、「民間の奨学団体」4.9%（前回 5.4%）と続く。

## 【大学院学生】

### 45. 経済的支援の状況

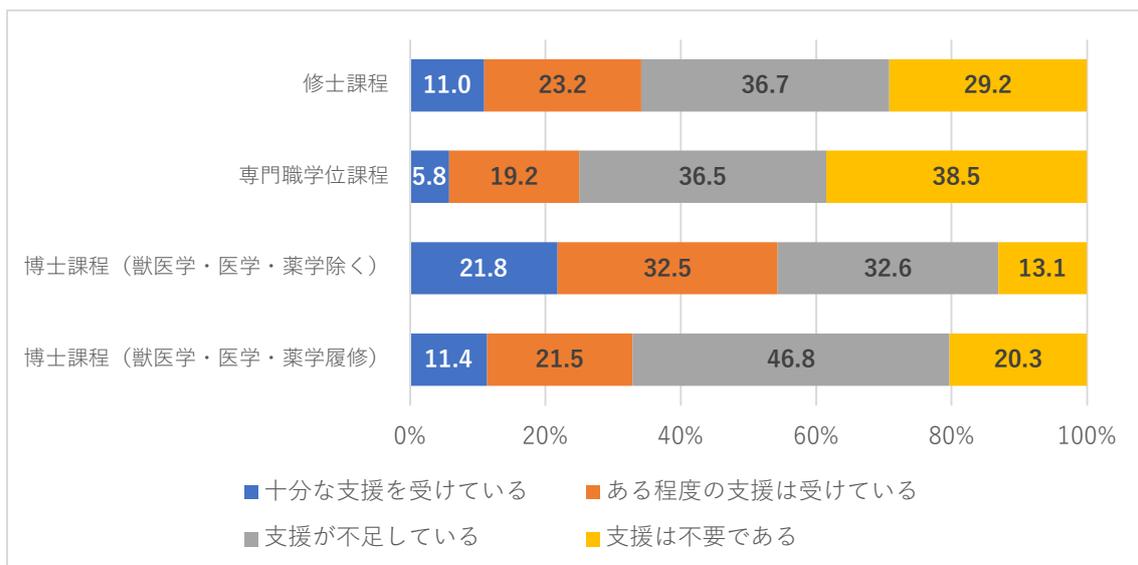
- 支援を受けている回答者は41.6%、前回調査より5.7%ポイント減少
- 3割強が支援が不足と回答

45. 現在、教育研究に専念できる国や大学等からの経済的支援の状況はいかがですか。

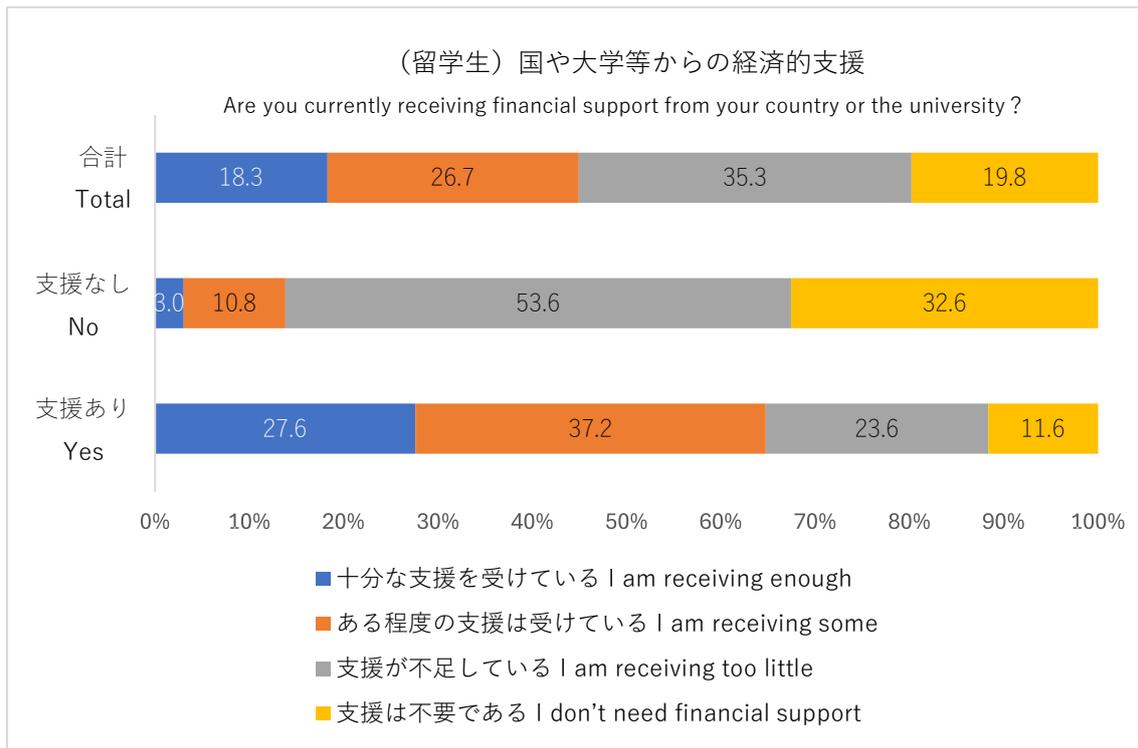


前回調査と比較して、「十分な支援を受けている」「ある程度の支援を受けている」と回答した者は41.6%（前回47.3%）となり、5.7%ポイント減少した。また、3割強が「支援が不足」、2割強が「支援が不要」と回答している。

#### 経済的支援の状況（課程別）



## 【大学院学生】



大学院留学生の中で、学内外の研究費・奨学金等の経済的支援を受けていない学生は全体では 34.6%であった。経済的支援を受けていると回答した学生で、もっとも多かったのは国費奨学金 17.4%であり、TA・RA の 16.8%、Wings、SPRING GX 等の大学からの研究奨励費が 16.1%と続く。

経済的支援に関しては「十分な支援を受けている」18.3%、「ある程度の支援を受けている」26.7%であり、「十分な支援を受けている」と感じている学生の割合が、日本人学生よりも高い。ただし、現在奨励費や奨学金を受給していない学生は、53.6%が、「支援が不足している」と回答している。

## 【大学院学生】

### 「X.研究奨励金及び奨学金」の分析（まとめ）

学内外研究費等支援の受給状況をみると、半数以上の大学院生は何も受けていなかった。また経済的支援を受けている者の割合は前回調査よりも減少しており、中でも博士課程（獣医学・医学・薬学履修）の半数近くが支援不足と回答していた。活動制限緩和後の外出・通学機会の増加、物価上昇等により支出額が増加している中で、多くの大学院生が経済的な困難を感じている可能性が高い。さらに課程間での格差も否定できず、課程を分断することなく大学院生に対する経済的支援の拡充が引き続き求められている。

大学院留学生の中で、学内外の研究費・奨学金等の経済的支援を受けていると回答した学生の割合は65.4%であった。19.8%が支援は不要と回答しているが、大学への要望の設問においては、経済的支援の強化が要望の最上位となっており、また、留学生全体の35.3%が「支援が不足」と回答していることから、日本人学生と同様に経済的支援の拡充が求められる。

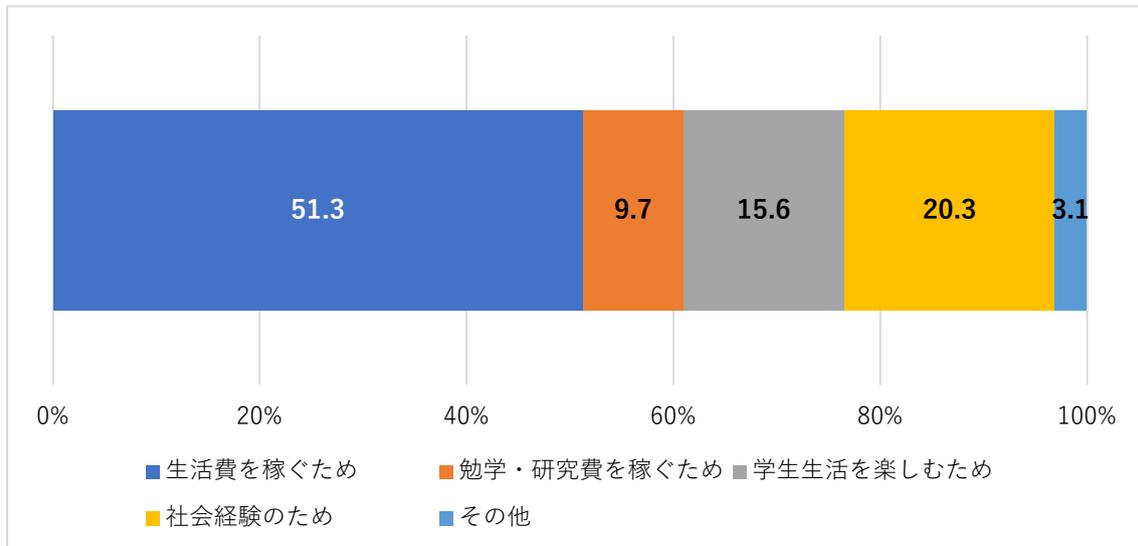
## 【大学院学生】

### XI. アルバイト・暮らし向き

#### 46. アルバイトの目的

- アルバイトの目的は「生活費を稼ぐため」がほぼ半数

46. アルバイトをした目的はどれにあたりますか。(どれか1つ選んでください。)



41.4%の回答者がアルバイトをしていなかったが、従事者にアルバイトの目的を尋ねたところ、「生活費を稼ぐため」が51.3%(前回49.7%)と最も多く、「社会経験のため」20.3%(前回21.4%)、「学生生活を楽しむため」15.6%(前回14.9%)の順となった。

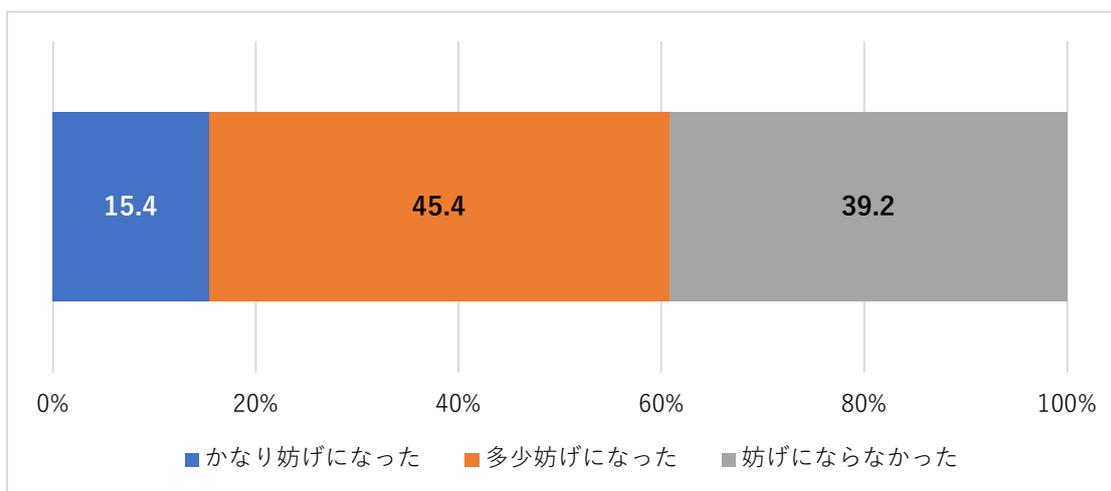
大学院留学生のうち、アルバイトの従事経験のない学生は63.0%であり、日本人学生に比べると多い。従事したことのある大学院留学生の従事目的は、「生活費を稼ぐため」68.6%(前回64.3%)、「社会経験のため」14.1%(16.9%)、「授業料・その他勉学費を稼ぐため」5.0%(9.8%)、「学生生活を楽しむため」8.6%(5.9%)であった。日本人学生等と比較すると、生活費を補填するためにアルバイトを行う学生が多い。

## 【大学院学生】

### 47. アルバイトと勉学の関係

- 「アルバイトが勉学の妨げになった」割合は 60.8%
- 妨げになった回答割合の多い研究科は「人文社会系研究科」、「医学系研究科」、「教育学研究科」
- 妨げにならなかった回答の多い研究科は「数理科学研究科」

47. アルバイトは勉学・研究の妨げになりませんでしたか。どれか1つ選んでください。)

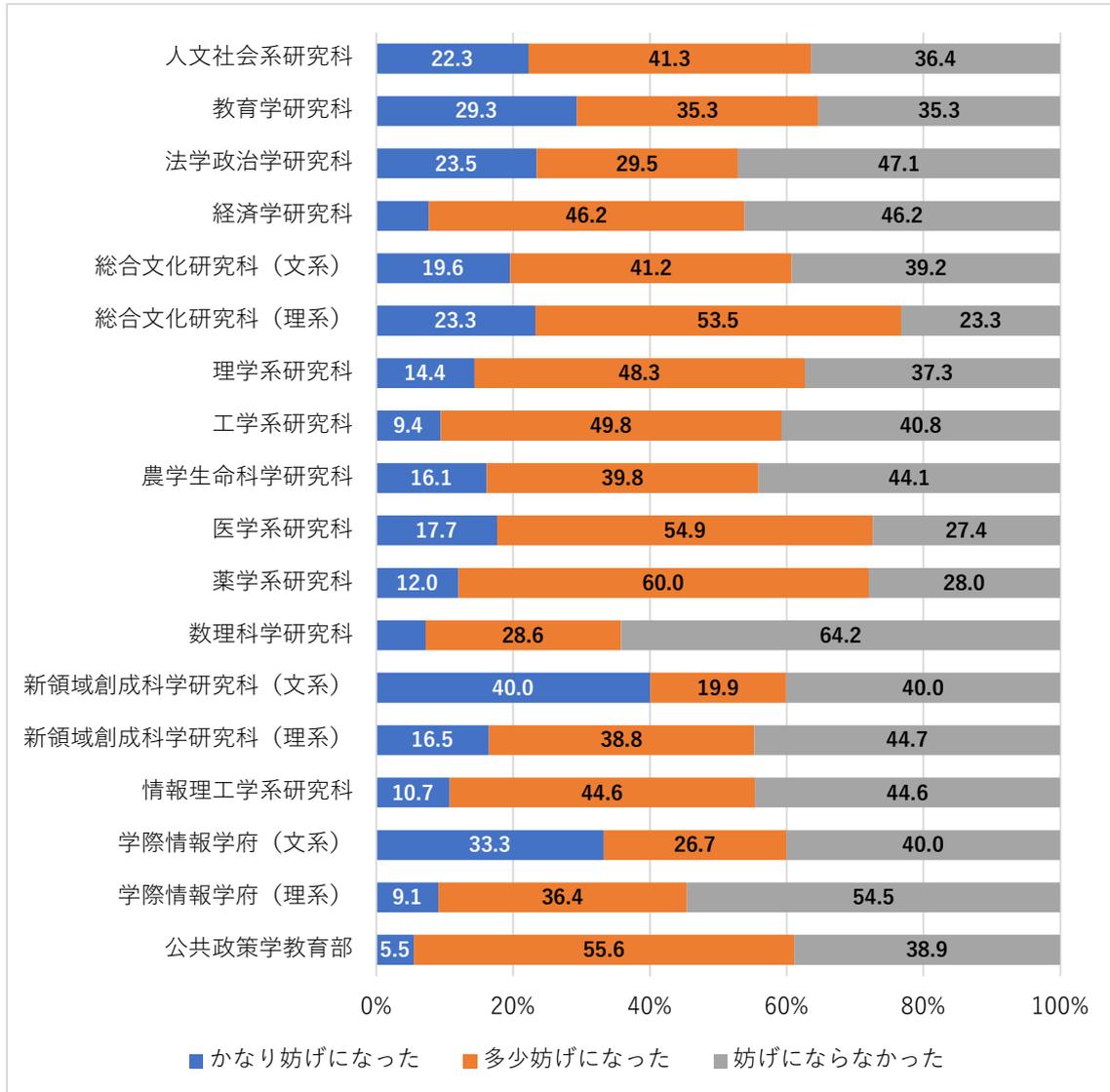


従事したことのある大学院生の中では、60.8%が「かなり妨げになった」「多少妨げになった」と回答しており、前回調査 (56.2%) より 4.6%ポイント増加した。

従事経験のある大学院留学生のうち、アルバイトが勉強の「かなり妨げになった」と考える学生は 8.8% (前回 12.6%)、「多少妨げになった」41.2% (43.0%)、「妨げにならなかった」50.0% (44.4%) であり、前回、前々回調査と比較すると「妨げにならなかった」と回答した留学生は増加傾向である。

## 【大学院学生】

### アルバイトと勉学の関係（研究科別）



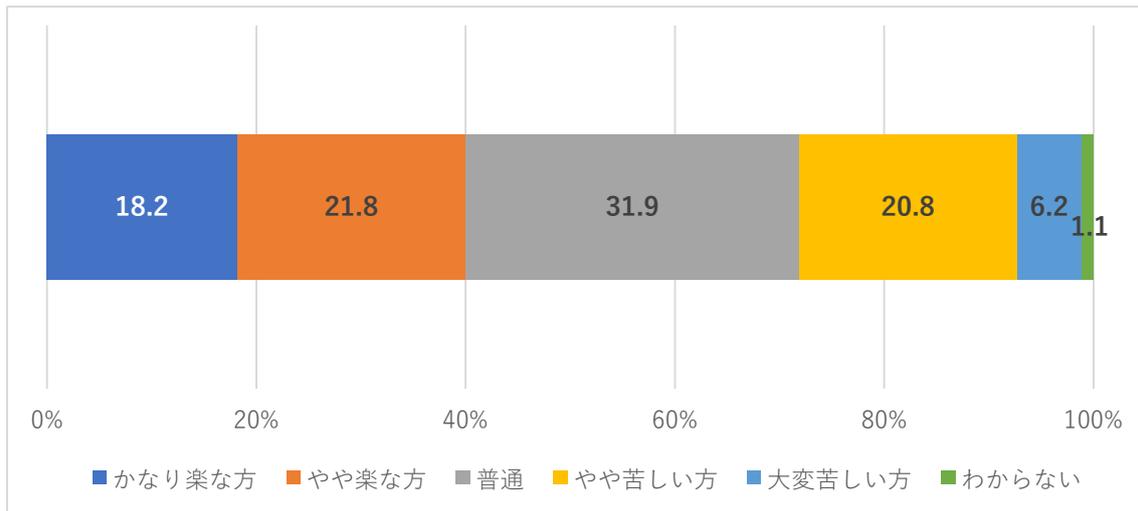
アルバイトが勉学の「かなり妨げになった」「多少妨げになった」の合算値が最も多い研究科は「総合文化研究科（理系）」で76.8%、「医学系研究科」72.6%、「薬学系研究科」72.0%と続く。「妨げにならなかった」の割合が最も高い研究科は、前回調査同様の「数理科学研究科」の64.2%であった。

## 【大学院学生】

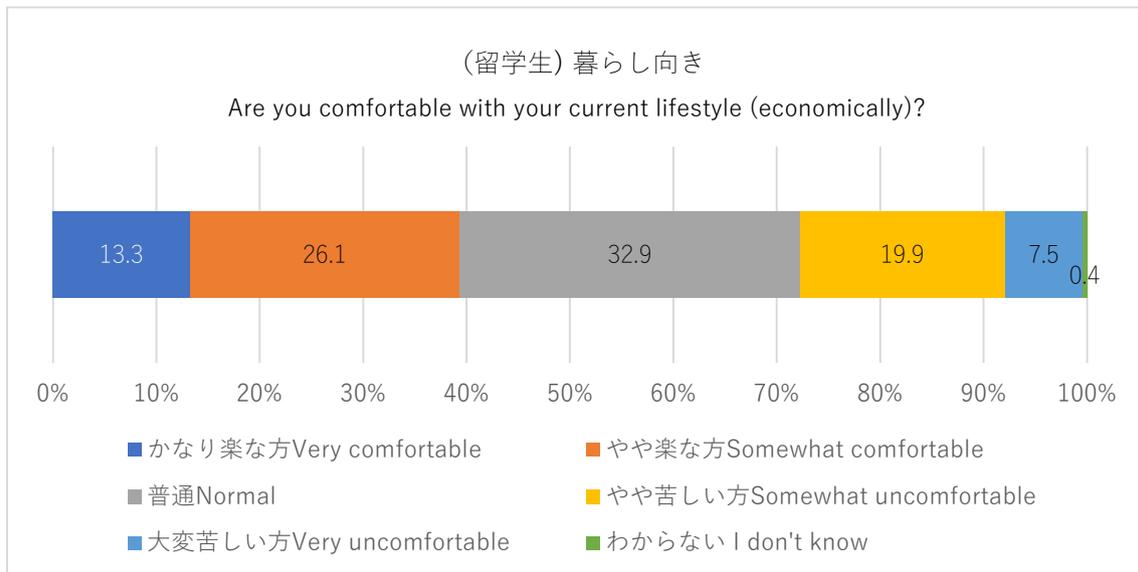
### 48. 現在の暮らし向き

- 暮らし向き「楽な方」「普通」「苦しい方」はそれぞれ40.0%、31.9%、27.0%

48. 現在の暮らし向きについてどうお考えですか。次の中からどれか1つ選んでください。



現在の暮らし向きは「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値で40.0%（前回42.5%）、「普通」で31.9%（前回33.3%）、「やや苦しい方」「大変苦しい方」の合算値で27.0%（前回23.3%）となり、前回調査よりも苦しい方の割合が増加した。



大学院留学生の暮らし向きの評価は、「かなり楽な方」(13.3%)、「やや楽な方」(26.1%)、「普通」(32.9%)、「やや苦しい」(19.9%)「大変苦しい」(7.5%)であった。日本人学生よりも、「楽な方」と回答した学生の割合は少ない。

## 【大学院学生】

### 「XI.アルバイト・暮らし向き」の分析（まとめ）

アルバイトが勉学の妨げになったと回答した者は 60.8%である。経済支援が十分でないがゆえに生活費や勉学費を稼ぐためアルバイトをする反面、アルバイトをすることで研究時間の減少に繋がり勉学の妨げになるというジレンマが大学院生を悩ますことになる。特に今回調査では、理科系研究科の大学院生の多くがアルバイトをすることが勉学の妨げになると回答した。暮らし向きについては、前回調査よりも苦しいと回答した割合が増加しており、収入額の減少・支出額の増加の結果と相関している。

大学院留学生の生計は、奨学金によって支えられている部分が多く、学業に集中できる経済的支援があると感じている学生が日本人学生よりも多い。またアルバイト時間の制限もあることから、勉学の時間を取れないほどの極端な長時間のアルバイトは生じにくい。暮らし向きについては、日本人学生と大きな相違は見られず、経済と勉学のバランスを取りながら生活を維持している状況がみられる。

## 総合分析

### 学生生活実態調査における社会・経済的背景指標

#### 学生生活実態調査における家庭背景に関する変数

東京大学の学生生活実態調査は1950年の開始以来、東京大学の学生の生活実態を継続的に把握してきた。当初の経済状況把握という目的から、現在は学生の多様な背景や課題を包括的に理解する取り組みへと発展している。特に今回の調査では、親の学歴という新たな変数を加え、家庭背景と学生生活の関連を詳細に検討することが可能となった。

東京大学には様々な背景を持つ学生が存在する。平均的には豊かな家庭出身の学生が多いことに注目が集まりがちだが当然経済的な事情に悩みを抱えている学生もいる。またそれだけではなくファースト・ジェネレーション<sup>1</sup>と呼ばれる家族の中で初めて大学に進学する学生も一定数存在し海外の研究ではファースト・ジェネレーションが大学生活特有の課題に対して不利を抱えていることが明らかにされている。

様々な社会・経済的背景の違いをとらえる際に学生生活実態調査で用いられてきたのは主たる家計支持者の年収<sup>2</sup>や親の職業の情報である。しかし今回の調査の結果を見ると学部生1428名<sup>3</sup>のうち親の年収についてわからないと回答したのは342名(24.0%)であり無回答は132名(9.2%)であった。つまり474名(33.2%)の情報が得られていない。これまでの調査も同様である。東京大学の学部生の家計支持者の年収が高い傾向にあることは注目を集めているが不明や無回答が多いことやたとえ回答していてもそれが正確ではない可能性が高いことについては注意が必要である。そのため学生が回答がしやすくより正確な回答が期待できる職業の情報も得られている。職業は「専門・技術・教育的職業」「管理的職業」「事務・販売・サービス・保安等」「農林・生産・輸送・建設・採掘・運搬・清掃等」「無職」「不在」「その他(自由回答)」でたずねており父親については無回答が37名(2.6%)分からない・分類不能が4名(0.3%)母親については無回答が43名(3.0%)分からない・分類不能は15名(0.1%)であった。このように職業は無回答や分からない・分類不能の割合は小さいものの各カテゴリ内での異質性が大きいという問題もある。

---

<sup>1</sup> 一般には両親ともに高校までの教育歴の家庭出身の学生を指す(Pascarella et al. 2004)。そのため、いずれかの親が専門学校や短大などの高等教育機関に進学していた場合はファースト・ジェネレーションではない。

<sup>2</sup> 「あなたの現在の生計を支えている方の昨年(2022年1月～12月)の年間税込み収入はどれくらいですか。おおよその金額を選択してください。」という質問文でたずねている。

<sup>3</sup> 親の学歴の情報がない大学院生のデータは本報告では用いていない。

一般的な社会調査研究では出身家庭の状況を知るために収入ではなく親の職業や学歴をたずねることが多い。収入をたずねないのは幅広い年齢を対象としているという点だけではなく今回の調査と同様に不明や無回答が多いことや正しい回答が得られず信頼できる分析ができないことが影響しているだろう。

今年度の学生生活実態調査では新たに父親と母親の学歴についての項目が追加された。これは社会・経済的背景を収入や職業だけではなく学歴も含めて多元的にとらえることが可能となるだけでなく先に述べたファースト・ジェネレーション特有の課題をデータから示すことにも役立つ。なお質問文は「あなたの父親が最後に通った（または現在通っている）学校は次のどれにあたりますか。わかる範囲でお答えください。」「あなたの母親が最後に通った（または現在通っている）学校は次のどれにあたりますか。わかる範囲でお答えください。」であり実際に卒業してない場合も最終学歴として扱う<sup>4</sup>。

親の学歴に関する情報を提供することについて学生からの回答忌避の可能性が懸念されたが、実際には父親については無回答が21名（1.5%）分からないが27名（1.9%）母親については無回答が26名（1.8%）分からないが31名（2.2%）に留まった。これらの割合は職業のものよりもわずかに高いものの収入と比較すると顕著に低い値を示している。学生生活実態調査を通じた課題検討において学生たちのこのような調査意義への理解と協力によりセンシティブな情報についても十分な回答を得られたことは特筆すべき点である。本調査に対する意見の自由回答でも特に親学歴をたずねることに対する言及はなかった。もちろん家庭の事情についてたずねることで調査を途中で中断した可能性はある。

### 現在の暮らし向きとの関連

ではこれら学生の家庭背景に関する変数を用いて現在の暮らし向きがどのように異なるのかを明らかにする。学生の家庭背景と生活実態の関係を明らかにすることは、支援を必要とする学生層の把握と効果的な支援制度の設計に不可欠である。そのため、収入・職業・学歴といった複数の変数から、現在の暮らし向きを多角的に分析する。なお欠損があるケースを除いて分析を行うことによってサンプルサイズは1428から903と大きく減少してしまう。欠損のないケースに限定することはバイアスを生じる可能性があるため以下の分析では多重代入法によって欠損値を補完した分析を行った。

質問は「現在の暮らし向きについてどうお考えですか。あてはまるものを1つ選んでください。」を用いた。回答選択肢は「かなり楽な方」（37.3%）「やや楽な方」（25.9%）「普通」（24.1%）「やや苦しい方」（10.4%）「大変苦しい方」（2.3%）の5カテゴリである。「大変

---

<sup>4</sup> 例えば日本版総合的社会調査（Japanese General Social Survey）では、「なお、中退も卒業と同じ扱いでお答えください。」、2015年の社会階層と社会移動全国調査（Social Stratification and Social Mobility Survey）でも「また中退も卒業と同じ扱いでお答えください。」として、最後に通った学校の中退や卒業についてはたずねていない。

苦しい方」から「かなり楽な方」まで順に 1 点から 5 点の得点を与えた。平均値は 3.853 (95%信頼区間：3.796, 3.911) であった。全体としては生活水準がかなり豊かだがこれは大学進学特に東京の大学への進学自体が一定の生活水準を前提としていることを考慮する必要がある。そのため他の東京の大学の学生との比較を通じて相対的な位置づけを検討することが重要である。

図 1 の A (左側) には各変数別に現在の暮らし向きの平均値を求めた。点は点推定値バーは 95%信頼区間を示す。また縦に引かれている破線は平均値 (3.853) である。現在の暮らし向きの平均値は、年収が高いほど一貫して上昇する傾向を示した。父親職業では専門 (4.006) や管理 (4.015) で高くなっている。母親職業では専門 (3.967) で高い。その他 (3.948) には専業主婦が含まれているため平均的に暮らし向きがよい。学歴は父母ともに大卒 (父親 3.856、母親 3.969) や大学院卒 (父親 4.084、母親 4.193) で高い。

図 1 の B (右側) は現在の暮らし向きをこれら家庭背景に関する変数に回帰させた結果である。これによって他の変数の関連を統制したうえでの、各変数の独自の関連を示している。例えば、父親の職業の係数は、年収や学歴、母親の職業などの暮らし向きとの関連を取り除いた上での職業の関連を表している。

他の変数を統制したうえでも年収は一貫した正の関連を示すが父母の職業・学歴の関連が弱まる。しかし年収の関連を考慮してもなお、父親が専門や管理職であると事務・販売に比べ暮らし向きが良い傾向がある。また父親が大卒や院卒の場合も暮らし向きがよい傾向があるが 5%水準で統計的に有意な関連ではない。一方母親の学歴では大卒と院卒で正の関連が見られ統計的に有意である。このことは、学生の生活水準を考える際に、収入だけではなく職業や学歴のような他の家庭要因も考慮する必要があることを示している。このような結果は、親の年収だけでなく、職業や学歴に付随する経済的安定性や、祖父母を含めた世帯全体の豊かさ・資産が学生の暮らし向きと関係している可能性を示唆している。

## 今後の課題

全体としては豊かな家庭出身の学生が多いことがデータから明らかになったが、同時に経済的に不利な学生が一定数存在し、またそれら学生は実際に暮らし向きも良くない傾向があることもデータから示された。平均的な豊かさを過度に強調することは、支援を必要とする学生の存在を見えにくくする恐れがある。また、経済状況は年収だけでなく、職業や学歴といった複数の要因が複雑に関連していることも本分析から明らかとなった。

本分析で用いた手法は、学生の学習時間、課外活動、就職意識、大学生生活の満足度など、他の様々な項目についても応用できる。これにより、家庭背景が学生生活の多様な側面を与える影響を包括的に理解し、より効果的な学生支援の在り方を検討することが可能となる。

なお親の学歴については大学院生についてはたずねられていない。大学院生にも収入や親の職業だけではなく親の学歴についてたずねていくことも大学院生の社会経済的地位を多角的に捉えそれに基づく問題の提示や解決を探るうえで重要だろう。

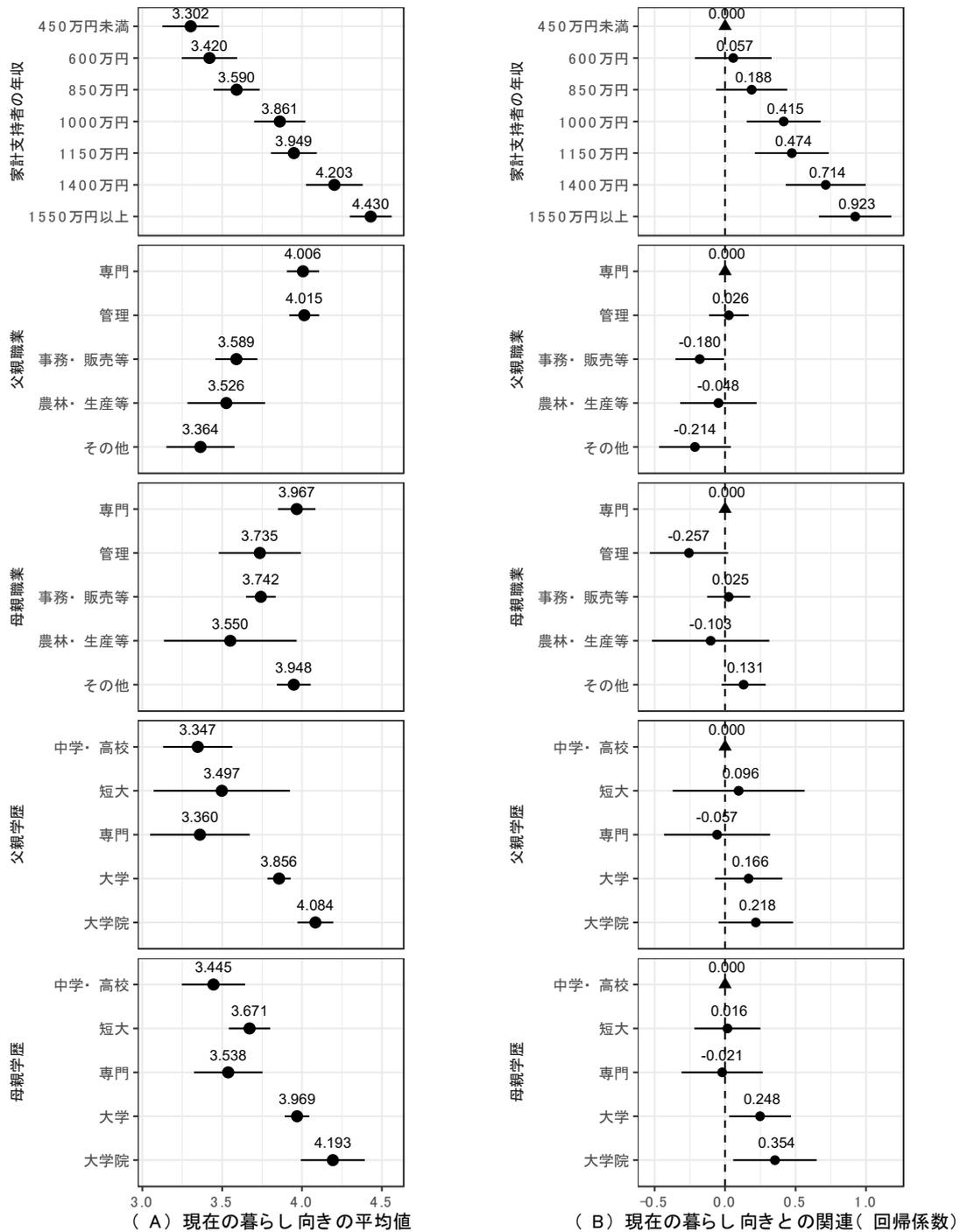


図1 学生の家庭背景と現在の暮らし向きの関連

注：欠損値は多重代入法によって対応した(20回の代入)。(A)の破線は平均値を示す。(B)は回帰分析の結果(回帰係数)であり、各変数のカテゴリの1つが基準(ゼロ)となっている。(A)の破線は基準となるカテゴリの値(つまりゼロ)を示し、他のカテゴリの信頼区間がこの破線をまたがっていなければ5%水準で統計的に有意な差があるといえる。

## 学生委員会学生生活調査WG

2025年1月現在

|    |       |                   |
|----|-------|-------------------|
| 座長 | 澤田康幸  | (大学院経済学研究科・経済学部)  |
|    | 片山浩之  | (大学院工学系研究科・工学部)   |
|    | 鈴木将久  | (大学院人文社会系研究科・文学部) |
|    | 多賀厳太郎 | (大学院教育学研究科・教育学部)  |
|    | 北川大樹  | (大学院薬学系研究科・薬学部)   |
|    | 上西幸司  | (大学院新領域創成科学研究科)   |
|    | 山川雄司  | (大学院学際情報学府)       |
|    | 小椋康裕  | (大学院公共政策学教育部)     |
|    | 田中東子  | (大学院学際情報学府)       |
|    | 藤原翔   | (社会科学研究所)         |
|    | 大西晶子  | (相談支援研究開発センター)    |
|    | 高野明   | (相談支援研究開発センター)    |
|    | 八島崇   | (本部部長 (教育・学生支援部)) |
|    | 山田健   | (本部課長 (教育・学生支援部)) |

事務担当 本部学務課総務・企画チーム (教育・学生支援部)

協力 小林万宙 (大学院公共政策学教育部1年)  
鈴木元 (大学院公共政策学教育部1年)